明治三十七年八月十五日定期増刊（毎月一回五日発行）明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可



女學世界夏季増刊

第四巻第八號

婦人壯烈譚

博文館發行


東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候樣希上候

女學世界定期增刊 婦人壯烈譚目次

六月十五日發行

口繪

表紙

刺繡術專門

磯村大次郎君著

實用刺繡術

著者は從來斯術に於て經營慘憺幾多の經驗を積み現に百餘名の子弟を教導しつゝあるが故に初學者の短所何處に在るやに於て發明する所鮮なからず、されば本書によりて刺繡術を修得せんとする人は其入門容易なるを請合なり、江湖の女子諸君是非購讀あれ。

全壹冊

正價貳拾五錢

郵稅四錢

博文館發兌

小岩井規太郎君

鹽田貞三君

合著

實用裁縫全書

本書は飯田呉服店專屬員たる小岩井鹽田兩君の協力編纂に成れるものにして尚斯道達人の助力を得たる著述なり、故に本書の主とする所は普通の衣服は素より之に附屬する諸種のものに就て普ねく裁ち方積り方等を網羅し專ら實用に供せしむるにあり、故に女子諸學校の參考書となると同時に家庭の好伴侶たるべきなり、本書前編に於ては裁縫に關する諸般の要件を掲げ、後編に於ては裁ち方積り方を圖解し附錄には織物染物の產地を記して參考に供し尚解說の六ヶ敷所は挿圖を添へて直に了解し得べき樣に注意せり請ふ愛讀あらんことを

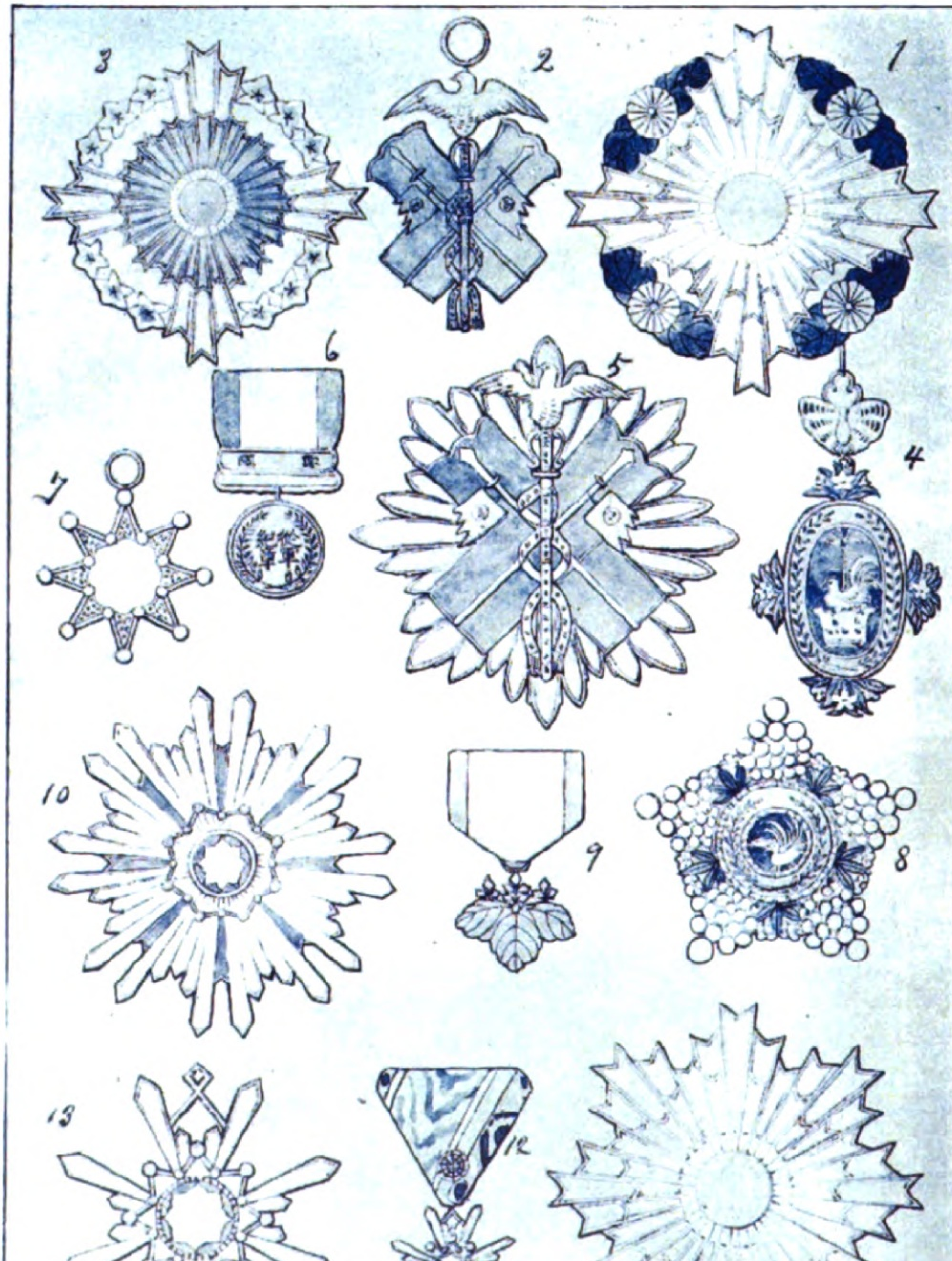
全壹冊

正價五拾錢

郵稅八錢

博文館發兌

帝國勳章の種類



（1）大勳位菊花章
（5）金鵄勳章功二級
（2）金鵄勳章功七級（白色）
（6）從軍記章
（3）勳一等旭日桐花章
（7）勳八等瑞寶章
（4）勳三等寶冠章
（8）勳一等寶冠章
（12）勳四等瑞寶章
（9）勳八等白色桐葉章
（13）勳五等瑞寶章
（10）勳二等瑞寶章
（11）勳二等旭日重光章

（博進社工場印行）

國威發揚



（田內千秋氏筆）

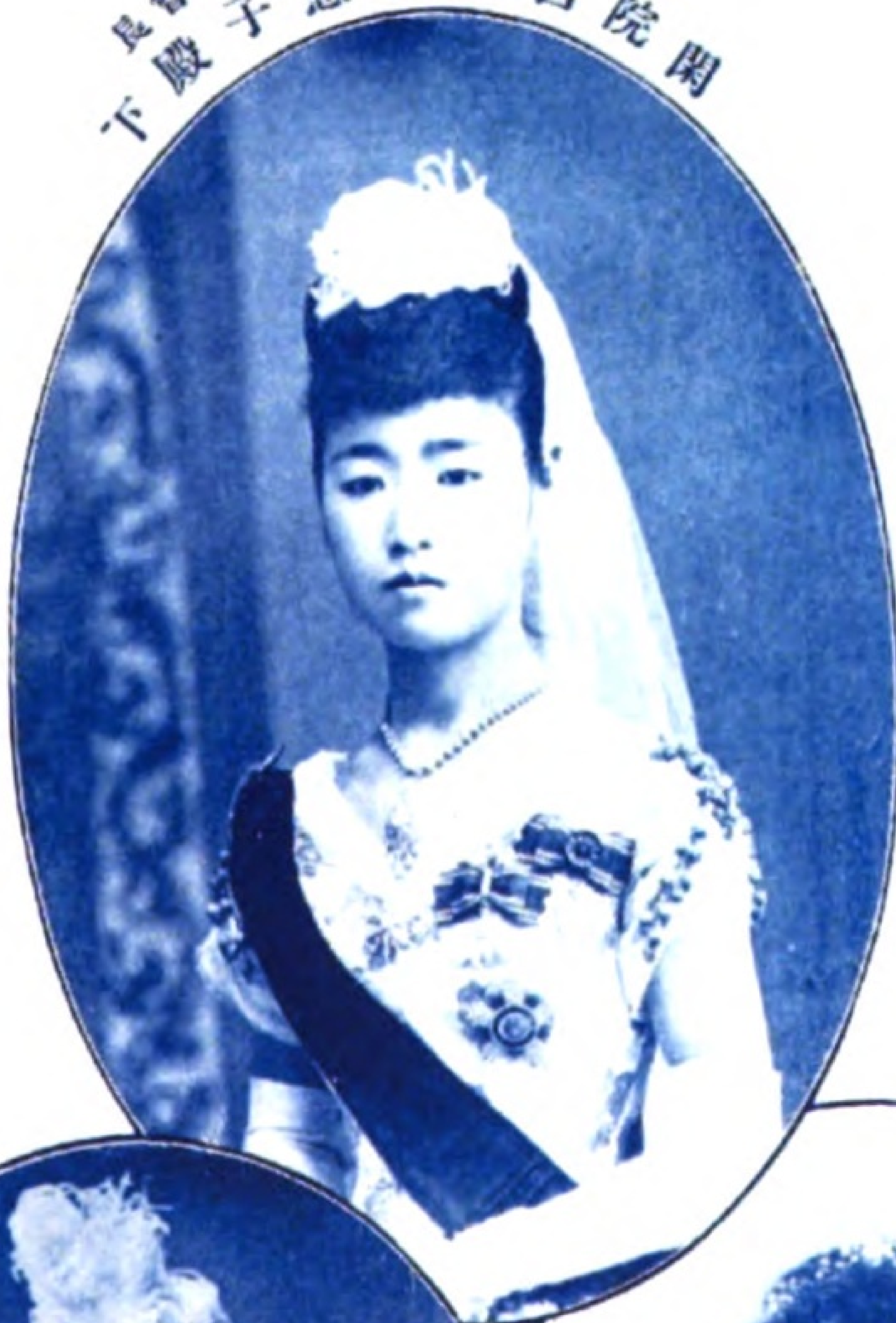
王昭君胡地に入る



（田内千秋氏筆）

軍國の三妃殿下

赤十字社篤志看護婦人會長
閑院宮妃智惠子殿下





山階宮妃範子殿下



華頂宮妃經子殿下

文學士大町桂月君著

軍國訓

全壹冊洋裝袖珍
正價貳拾八錢
郵稅四錢

一隻の烱眼、時勢の表裏を洞察し、日露戰爭の由來を明にするのみならず、日本の國是を說き、特長を說き、日本人の進路を說き、覺悟を說く、其說く所警拔にして痛切、行るに縱横靈活の筆を以てす、苟も國家の憂を解して、今後日本國の爲めに盡さんとするの士は、必ず一讀せざるべからざる好著述なり

學生訓

正價二拾錢
郵稅四錢

桂月先生曩に道德實踐法の著ありて道德の大綱を說かれ今又此著ありて青年學生の學問と躬行とに資せらる說く所奇警にして着實而も趣味ありて乾燥なる小言の比にあらず文章は精勁にして流麗普通文の好模範たり學生諸君一本を備へて坐右の銘とせざるべからず教育家又參考の好資料なり

續學生訓

正價二拾五錢
郵稅四錢

青年學生諸君の友となりて學藝上、實行上、教導し、忠告し訓戒するもの、學生訓是也。續學生訓出でゝ、更に一の益友增したり、言ふ所氣が利きて穩當、文趣味ありて雅馴、一讀たゞ卷の終るを忘る、苟も志あるものゝ机上此書を缺くべからず。

女學生訓

正價二拾五錢
郵稅四錢

本書は家庭以外學校以外の女子教育家桂月先生が獨特の才筆奇警なる觀察を寓し趣味津々として讀て面白きが上にも女子百般の事に關して適切なる訓戒を垂る眞に女子教育上の鐵案といふべく又女學生の指針たるへきものなり

(甲の一)

發兌元 東京日本區本町三丁目 博文館

帝國百科

第百八編

現代露西亞

法學士 須崎芳三郎君著

（製本既成）

上製五十五錢 郵税十二錢
並製四十錢 郵税十錢

- 第一章 緒論
  - 第一 表面の露國
  - 第二 自然的露國
  - 第三 政治的露國
- 第二章 露國の人種
- 第三章 露國の宗教
- 第四章 社會の組識
- 第五章 政治
- 第六章 革命の氣運
- 第七章 革命黨
- 第八章 中央政界
- 第九章 國際に於ける露國
- 第十章 侵畧の國是
- 第十一章 露國の外交
- 第十二章 露國の財政
- 第十三章 露國の陸軍
- 第十四章 露國の海軍
- 第十五章 結論

第百九編

金融論

大藏省理財局勤務 法學士 佐々木雄二郎君著

（製本既成）

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

第一編…金融の原理
- 第一章 總論
- 第二章 國庫金の收支
- 第三章 國際貸借關係
- 第四章 經濟諸機關、資金の需給
- 第五章 貨物の生産及び聚散上に要する資金
- 第六章 支拂期
- 第七章 通貨の增減
- 第八章 物價及有證價券相場の騰落

第二編…金融に附隨の現象
- 第一章 金利
- 第二章 正貨の出入
- 第三章 有價證券相場の騰落
- 第四章 恐慌
- 第五章 銀行の破綻

第三編…金融の機關
- 第一章 銀行
- 第二章 手形仲買人及ヂスカウント、ハウス
- 第三章 信託會社
- 第四章 手形交換所
- 第五章 金融救濟連盟

第四編…金融の手段
- 第一章 貨幣
- 第二章 手形
- 第三章 小切手

第五編…明治三十年以後我國に於ける金融の概況

（甲の二）

發兌元 東京市日本橋

全書新刊

第百十編

農學博士　横井時敬君著

稻作改良論

（製本既成）

上製五十五錢　郵税十錢
並製四十錢　郵税八錢

第百十一編

法學士　窪田隆次郎君著

工業政策

（近刊）

石炭に富み、勞力に富み、而して人は即ち敏捷練熟、しかも其賃金代價の廉なるは我邦の將來、工業國として興起すべきことを事實に徵ふるものにあらずや、我國民は農業を以て立國の基礎となせる舊夢より覺めさるべからさるなり、然るに其指導保護を爲すべき著書の乏しきは、豈に之を缺點にあらずとせんや、此書各種の自衛團体、督促制度、保護機關、補助的設備等に涉りて、工業政策を說くと、丁寧親切なり、經世愛國、國家に盡さんとするは素より生存競爭の活舞臺に於て、優勝者たるの地位を占めんとする士は、一讀を忘るべからざるなり。

上製五十五錢　郵税十錢
並製四十錢　郵税八錢

區本町三丁目　博文館

（甲の三）

英學新報社出版書類

巖谷小波君原著新訂

和英對譯 日本昔噺

洋裝大判美本　紙數八十餘頁
正價壹册金拾三錢郵税四錢

英國リッデル女史
米國グリーン女史
英國コルビー女史
英國ソントン女史
英譯

全部目次

- 桃太郎（既刊）リッデル女史英譯　富岡永洗君畫
- 玉の井（同）グリーン女史英譯　小林永興君畫
- 猿蟹合戰（同）リッデル女史英譯　村田丹陵君畫
- 松山鏡（同）リッデル女史英譯　武内桂舟君畫
- 花咲爺（同）グリーン女史英譯　水野年方君畫
- 舌切雀（同）コルビー女史英譯　三嶋蕉窓君畫

- 勝々山（既刊）ソントン女史英譯　寺崎廣業君畫
- 大江山（同）グリーン女史英譯　歌川國松君畫
- 俵藤太（同）リッデル女史英譯　藤嶋華僊君畫
- 瘤とり（同）コルビー女史英譯　山田敬中君畫
- 物臭太郎（近刊）リッデル女史英譯　梶田半古君畫
- 文福茶釜（同）グリーン女史英譯　鈴木華村君畫

◉ 村井弦齋君原著　高柳龍吉君英譯
和英對譯 **近江聖人**
正價三拾五錢　郵税六錢

◉ 東京高等商業學校教授　高嶋捨太君著
增補訂正 **和文英譯集**
正價三拾五錢　郵税六錢

◉ 英學新報社編纂
英文書簡
正價四拾五錢　郵税八錢

◉ ベーコン女史校閲　齋藤理學士著
英和禮式會話
實價金拾五錢　郵税二錢

◉ 英學新報社編纂
英文大家 **英國演説集**
正價三拾五錢　郵税六錢

◉ 村山敏雄君編著
和漢名家 **英譯詩歌集**
正價金三拾錢　郵税四錢

發兌元　東京日本橋區本町　**博文館**　東京神田表神保町　**東京堂**

（甲の四）

本誌には獨特新案奬學賞與法あり就て見よ

編輯 文學士中内蝶二君●菅緑陰君●佐々木信綱君●小笠原嵐舟君●大内露泊君●其他
文學士久保天隨君●長谷川天溪君●雪中庵雀志君●西村天骨君●矢部白雨君●數名

毎月一回一日發行

秀才文壇

定價 一冊（大判百頁餘）金拾錢○六冊前金郵税共六拾三錢○十二冊前金同壹圓廿錢●郵劵代用壹割增爲替驅込

毎號寫眞口繪は當撰者肖像と時局必要の諸報數葉挿入

内容●社說●名家文壇●史傳●地理●講義●文藝●成功（以上諸名家寄稿）●特別文壇●青年文壇（論文、美文、書簡文、小說、新体詩、漢詩、和歌、俳句皆投稿に係る者）●青年議會●編輯便●新刊批評●學海時報●雜報等益材料豐富なり

見本一冊郵税共金拾壹錢

▲第四巻六號 戰爭 臨時增刊 文學 大和魂 五月十五日發行 定價郵税拾壹錢

▲第四巻第三號には日露戰局要圖（石版着色刷大判）を附載す、品切の處增刷出來せり

▲四巻第七號 六月一日發行す

發兌元 東京市小石川區指ヶ谷町百卅三 文光堂

大賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 外書店

▲專賣特許 磐井燈

柱掛燈、釣燈共大中小數種あり

本燈器は原料に石油を使用すと雖も空氣の作用に依り其燃燒を完全ならしむるか故に燭力强く且火光、下に向て發射するが故に陰影を生せず持運びの出來ざる電燈、瓦斯燈に比するに其優るや萬々なり而して石油を要すること少量なれば經濟上亦得益なり郵劵貳錢封入して申込あれば明細書を送る

東京市京橋區八丁堀仲町十二番地

發明兼發賣元 磐井商會

專賣 安全剃刀 特許



最新發明ノ特許品柄ノ先ニ車トネジアリ自在ニ回轉ス耳鼻穴ノ他ハ思適ニ剃レ小兒ノ頭ヲ剃ルニハ至極妙陸海軍人海員海外移住者並ニ旅行ニハ是非必要品ナリ

定價
甲 壹圓五拾錢 替刃付箱納
乙 壹圓 紙函納
丙 五拾錢

發賣元 東京日本橋本石町四丁目十番地 三劍商店

（甲の六）

(甲の七)

世界年鑑

列國の關係日に密にして世界各國の事情を知るの必要益す痛切なり而かも最も精確に各國最近の形勢を明かにする書甚だ稀なり會ま之あるも編纂方法に遺憾多く明瞭精確にして且つ趣味多きものは殆んど絕無なり統計學者伊東祐穀氏は專門に斯學を修め久しく職を內閣統計局に奉じ後に辭て海外に渡航し專ら歐米各國の統計書編纂方を研究すること二年有餘歸朝の後全身を世界年鑑の編述に委ね苦心經營三年にして成れるもの乃此書なり實に著者は我國に於て唯一なる最新式統計學者なり而して本書は氏が海外渡航により て研究したる所を實地に應用する最も苦心の著作なり其我國に於ける無比の世界年鑑たるや固より論なし

伊藤侯、松方伯、桂伯題辭、大隈伯序

伊東祐穀君編著

(甲の八)

日本の部 帝室、國體、政治、面積、人口、宗教、教育、裁判及犯罪、政黨、財政、國防、產業、商業、船舶及水運、內國交通、外交等に分ち努めて明治初年より最近に至る事實を探求し我國の進運を表章する累年比較の統計表を主として明斷簡潔なる記事說明を加ふ

各國の部 海外各國を一國每に日本の部と同一の科目に分ち五大洲別人口多寡の順序に依り排列す且つ輓近數年間の事實を連接し以て各國現時の趨勢を詳かにす

世界の部 世界の水陸面積人口を始めとし概略前揭の科目に依り一表每に各國を比較對照し以て世界の何れの國が何れの點に於て優り且つ劣れるかを知るの便に供す

實用の部 度量衡、和漢洋年代對照、利子計算早見等其他實用に供すべき種々の事項を掲載す

前揭登載したる種目の外に**世界全圖**は世界各國人口の疎密を表はすのみならず鐵道線路、船舶航路より海底電信線に至るまで頗る詳密なるもの及び**日本全圖**は世界全圖と同じく各府縣人口の疎密、鐵道線路、政府命令航路海底電信線路等を表章するものと**各國旗章及紋章**旗章七十五種紋章五十種を精選し着色美麗を極むるもの通して五葉に分載せるのみならず**挿畫圖**は世界の水陸面積、本國及領地別面積人口、各國百年間人口增加、大都會人口、各國陸軍、軍艦、財政、貿易、鐵道及電信、郵便、船舶等合せて十六葉の圖解は皆な悉く著者が意匠を凝らしたる結果各國を比較對照するに方り一目瞭然たるものを掲載す

正價五圓 小包目方九百匁 料金貳拾錢

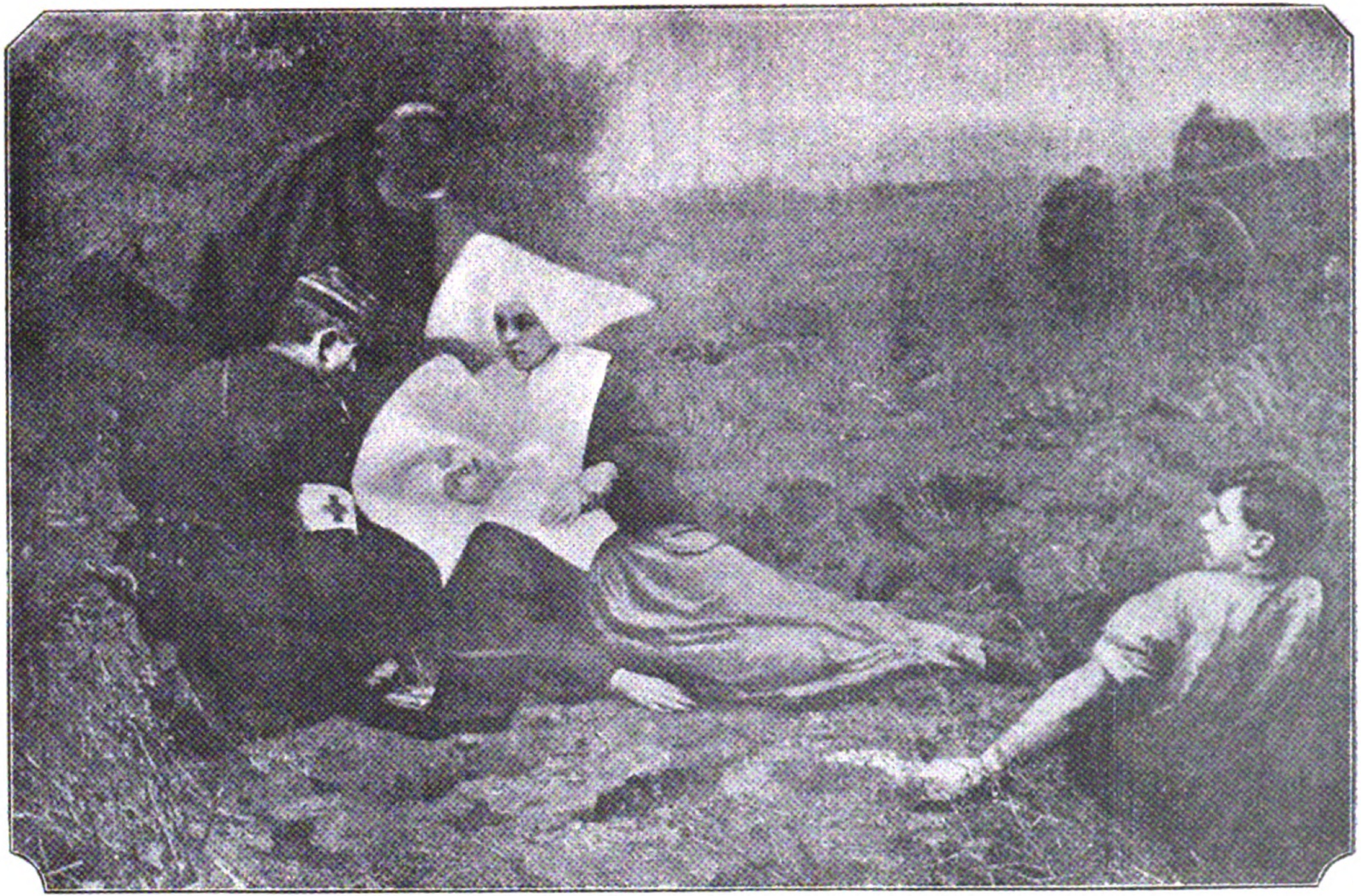
七月十五日までの御注文に限り**特價三圓五拾錢**にて御需に應じ申すべく其以後は正價に復す

――《六月十五日發行》――

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

犠牲

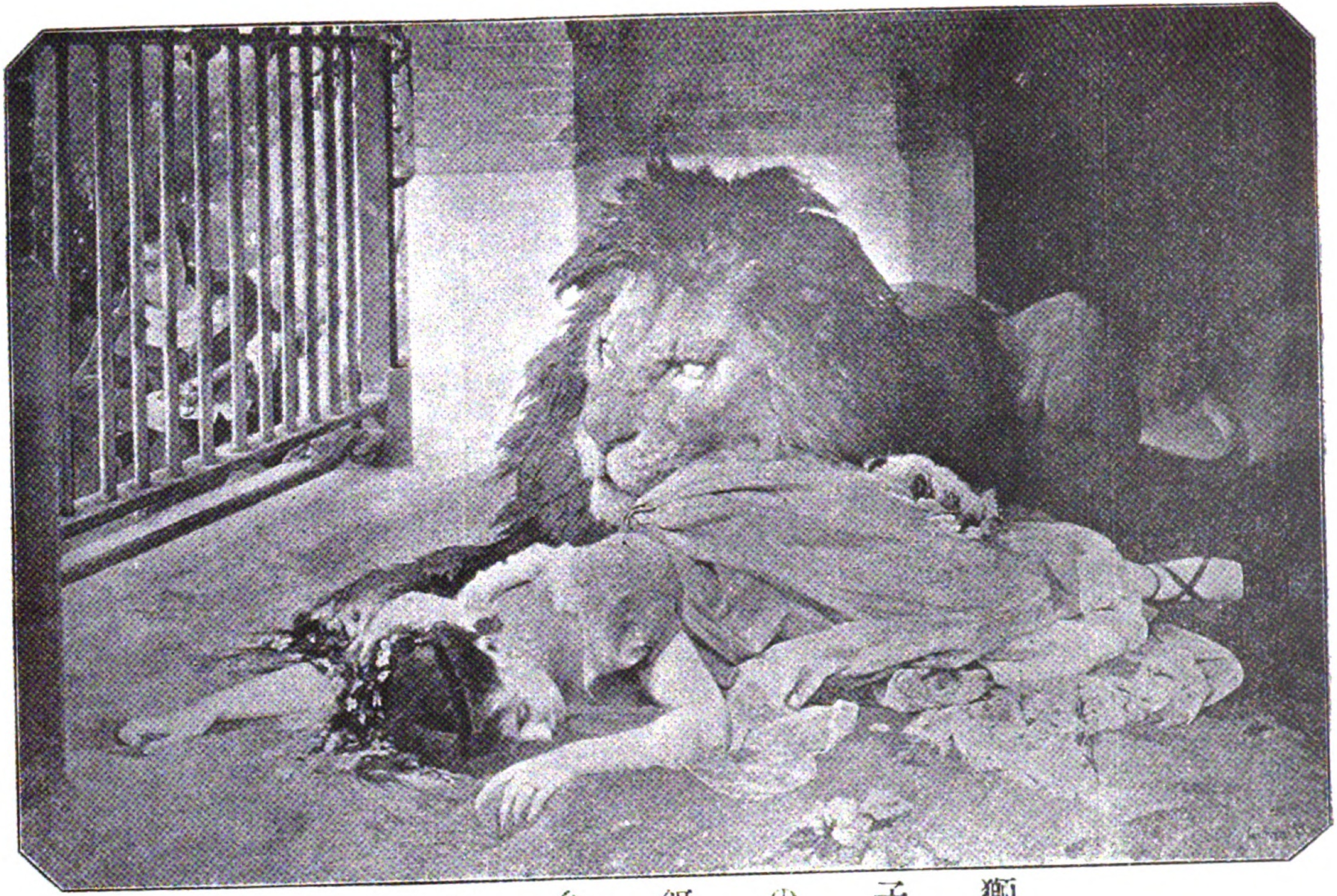
（羅馬教の一比丘尼負傷兵看護の際敵の流丸に斃る　泰西名畫）



軍人家庭（其一）



栃内海軍大佐の家庭



獅子の餌食（泰西名畫）

軍人家庭（其二）



八島艦長關野中佐の家庭



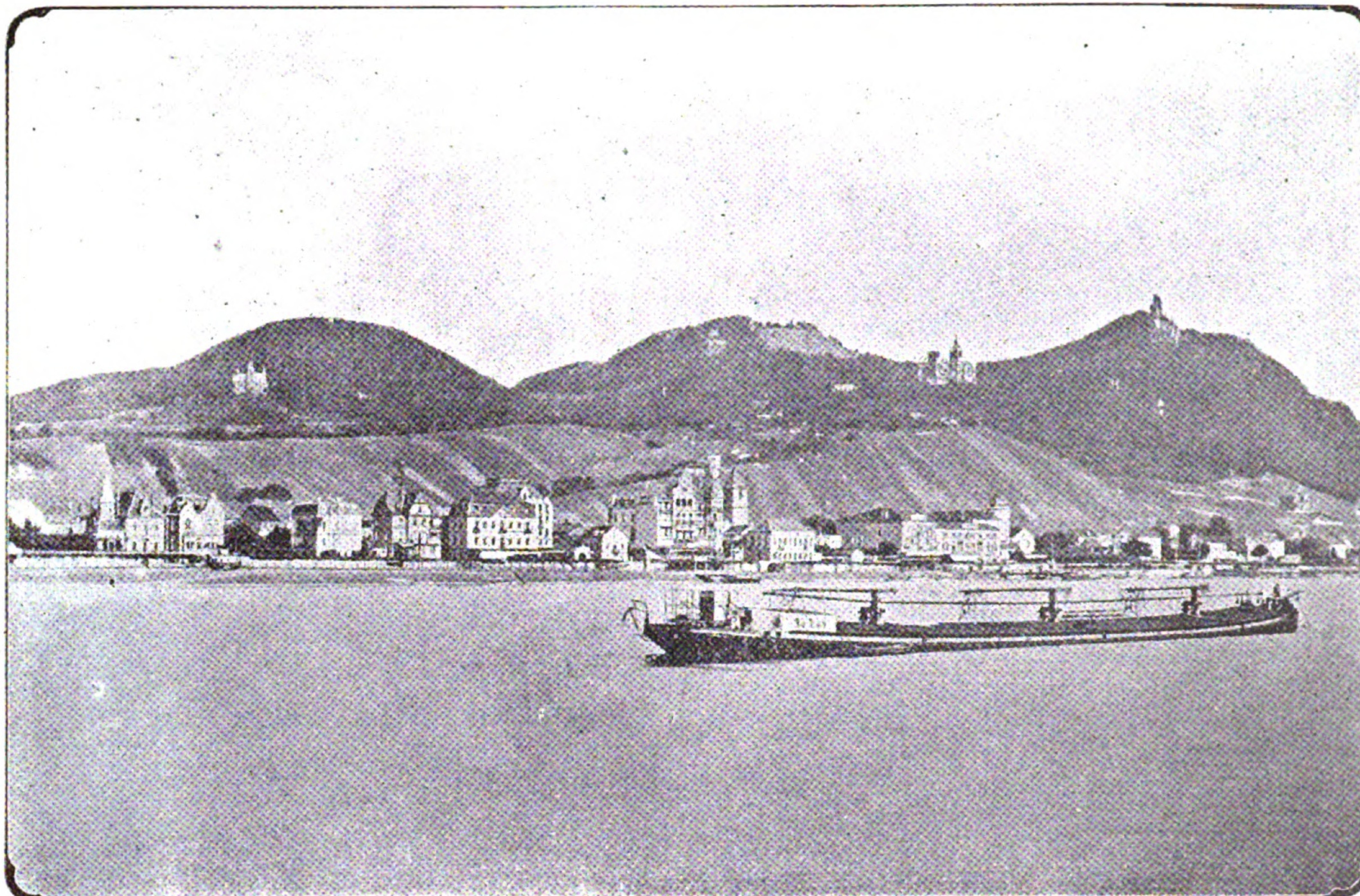
宮古艦長本野中佐の家庭

米國義勇看護婦

マギー夫人一行



南部露西亜の風景



露西亞の花嫁



戦場だより



音信

博文館創業第拾七週年紀念

▲口繪　十六頁
韓國、滿洲、及西比利亞の風景、風俗建築等

▲地圖　二頁
韓國、滿洲、及西比利亞の詳密地圖（最近踏査精圖）

太陽臨時增刊　滿韓大觀

日露國勢比較圖表　着色刷
竪八寸五寸橫一尺二寸
是れ伊東祐穀氏最近の統計によりて調製せる圖表にして兩國の國勢は本表によりて一目瞭然たり

▲本文挿入寫眞
數十面の寫眞は記事を補ふて興趣津々たり

我が政治上、經濟上に於て、重大なる關係を有するは是れ滿韓及西比利亞地方にあらずや、我同胞が活動すべき舞臺は是れ滿韓及西比利亞地方にあらずや、我百萬の精鋭劍光を閃かし砲聲を轟かすは、是れ滿韓及西比利亞地方にあらずや、然れども其地未だ開けず其民未だ化せずして此等の地方に對するの研究久しく世人の注意を拂はれず、從て好個の諸書あるを見ざりしのみならず、滿韓及西比利亞なる大體の觀念を與ふるに足るものすらなかりしは、現下の一缺點となす所なりき

本書は滿韓及西比利亞の歷史、風俗、人情より商工、政治等の關係に至るまで盡く之を網羅して簡明に敍述し、一讀該地方の我政治經濟に及ぼす由來と現狀とを了知せしむるに足るもの、今や時運は急轉して、該地方に於ける經營舉けて我國民の雙肩にあり、本書は啻に滿韓及西比利亞地方に志あるものゝ指針たるのみならず、又我同胞の將さに活動せんとする舞臺の大觀、砲聲山河を震動し、風雲原野を捲くの地、利源滾々、長く我帝國の富を增さしむるに足るの地、將さに本書によりて、闡發せられんとす

六月十五日發行

正價卅錢

郵稅三錢

（乙の一）

工學士 増田知藏先生著

軍艦詳説

（近刊）

全壹冊

洋装菊判上製
紙數
正價
郵税

本書内容

第一編

第壹章 軍艦の發達及沿革の概要
第貳章 軍艦の任務
第三章 軍艦の種類及階級

第二編

第壹章 軍艦製造の材料
第貳章 造船所
第三章 艦體の構造
第四章 船用機關
第五章 艤装

第三編

第壹章 軍艦の防禦方法
第貳章 装甲板
第三章 砲熕
第四章 水雷

第四編

第一章 無線電信
第二章 軍艦塗色
第三章 水雷の効果
附録 帝國海軍艦艇表―世界七大海軍團艦艇表―内外度量衡比較表

上野義八郎君著 ● **海軍兵器説明**
全壹冊洋装紙數百五十頁 寫眞銅版口繪數葉挿入
正價金十八錢 郵税金四錢

遠藤甬作君譯述 ● **蒸滊機關使用法**
全壹冊洋装紙數百五十頁
正價金三十錢 郵税金六錢

増田工學士著 ● 工業叢書 **船用機關學**
全壹冊洋装總クロース製 金文字入紙數三百有餘頁
正價金六十錢 郵税金八錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の二）

法學士 武田千代三郎君著（六月十五日發行）

理論實驗 競技運動

全壹冊

洋裝上製總クロース製

正價

郵稅

第壹編 總論
第壹章 運動の眞價
第貳章 運動の類別
第貳編 運動生理
第壹章 運動の機關
第貳章 疲勞
第參章 休養
第四章 運動の效果
第五章 運動の生理的區別
第三編 體勢訓練
第壹章 運動機關活力の增進
第貳章 疲勞の輕減
第參章 訓練中の攝生法
第四章 競技に臨む時の注意
第五章 結論
第四編 技術訓練
緒論
第壹章 競技運動の性質
第貳章 競技運動の種類
第參章 端艇競漕
第四章 競走
第五章 競走
第六章 飛躍技
第七章 投擲技
第八章 應用競技
第五編 運動會
第壹章 運動總論
第貳章 競技運動會
第六編 競技道
附錄 第一 審判用帳簿樣式
第二 運動術語解

武田法學士著 ● 心身鍛練 少年競技運動（全壹冊洋裝 挿圖六十個）正價金十八錢 郵稅金四錢

本書は室外教育の理法に通曉せる武田先生が我帝國少年の爲みに何如にせば能く其心身を訓練して大國民たる實力を養ひへきやの問題を極めて簡明平易に解說せられたる空前の良書にして戰時少年の好讀み物なり

發兌元 東京本町 博文館

（乙の三）

大日本地誌

第壹卷　關東

總論　地文

第一編　地形

第一章　地形

◎概說◎相模◎武藏◎安房◎上總◎下總◎常陸◎上野◎下野

第二章　海洋並に海岸線

(一)相模灣(二)東京灣(三)大平洋沿岸(四)海流並に潮

第三章　地質

(一)汎論(二)三波川系(三)古生大統(四)中生大統(五)新生大統(六)噴出岩(七)溫泉

第四章　氣候

第二編　人文

第一章　沿革

(一)先史時代(二)太古より寧樂朝時代に至る(三)平安朝時代(四)鎌倉幕府時代(五)南北朝時代(六)後鎌倉の時代(七)諸侯割據攻伐の時代(八)織田豐臣氏の時代(九)江戸幕府時代(十)維新以後

第二章　政治、宗教

(一)行政(二)司法(三)軍事(四)教育(五)宗教(六)交通

第三章　產業

(一)農業(二)林業(三)水產(四)工業(五)鑛業(六)商業

第三編　地方誌

東京府伊豆七島小笠原島、神奈川縣、埼玉縣、群馬縣、千葉縣、茨城縣、栃木縣、

都市彩色地圖十葉　寫眞銅版貳百餘圖　總紙數九百三十頁

正價貳圓五拾錢　小包送料拾五錢

理學士　山崎直方先生
理學士　佐藤傳藏先生
共編

齋藤文學士、大日方理學士、大塚文學士、田山錄彌君、前田勵君、遠藤重男君　補輯

第貳卷　奥羽

總說　地文

第一編　地形

第一章　地形

◎概論◎磐城◎岩代◎陸前◎陸中◎陸奥◎羽前◎羽後

第二章　海洋並に海岸線

(一)太平洋沿岸(二)津輕海峽及陸奥灣(三)日本海沿岸(四)海流(五)近時に於ける重要なる地變—庄內地震、陸羽地震、三陸海嘯

第三章　地質

(一)汎論(二)始原大統(三)古生大統(四)中生大統(五)新生大統(六)噴出岩(七)溫泉

第四章　氣候

第二編　人文

第一章　沿革

(一)石器時代(二)佩玉時代(三)上古拓植彩氏時代(四)中古豪族勃興の時代(五)鎌倉時代(六)南北朝時代(七)戰國時代(八)豐臣時代(九)德川時代(十)明治時代

第二章　政治宗教

(一)行政(二)司法(三)軍事(四)教育(五)宗教(六)交通

第三章　產業

(一)農業(二)林業(三)水產(四)工業(五)鑛業(六)商業

第三編　地方誌

福島縣、宮城縣、岩手縣、青森縣、山形縣、秋田縣、

石版彩色地圖八葉　寫眞銅版百七十圖　總紙數九百六十頁

正價貳圓五拾錢　小包送料拾五錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(乙の四)

最新農業書出版

農學博士 南鷹次郎先生校閲
農學士 今村猛雄先生新著

最新 蔬菜栽培書

全壹冊洋裝大判上製頗美本　口畫コロタイプ版三葉
紙數四百餘頁　緻密精巧木版百三十六圖插入
正價金貳圓　小包料拾錢

蔬菜栽培は園藝の一科なり、集約的農業なり、之が栽培は穀菽に比して頗る注意と熟練とを要す、而して種類の多き、莖葉根果需むる部分の異なるに從つて性質を異にす、加ふるに近時洋種蔬菜の舶載漸く多く、特殊の栽培法を施すべきもの等ゐるに關らず、之が解説を下したる書に乏しき時に當りて、此著あり、農界に貢献する蓋し大なり、本書は編を分ちて、通論及各論とし、通論には蔬菜栽培一般の要素を説き、各論には記載する蔬菜七十餘種を詳細に解説して栽培の方法を示し、疾病の徵候、害蟲の習性を叙して、豫防驅除の法を説き、尙善良なる品種をも指示せるを以て、園藝家は左に書を携へ、右に鍬を提げて、實地の友となすべく、農學を修むるの士は、坐右に備へて參考の資に供すべく、復正に農業學校の敎科書に必適せり、而して説明の親切丁寧、挿圖の緻密明晰なるは、此種の著書中比類少き一大良書なれば、速に購讀の榮を賜へ。

◉近刊農業書類◉

農學博士 佐藤昌介先生校閲
農學士 佐藤昌先生新著
最新農業經濟論

農學士 梁田斌先生新著
最新作物害蟲篇

農學博士 佐藤昌介先生序文
農學士 增田貞吉先生新著
實驗肥料學大意

農學士 大町信先生新著
最新稻作改良篇

發兌書肆　東京日本橋區本町　博文館
發兌書肆　東京神田表神保町　東京堂書店

(乙の五)

(乙の六)

阪本隆哉君著

衛生食物調理法

（口繪）調理の圖……小峯大羽君筆

全壹冊

和裝菊判　紙数二百頁

正價金
郵税金

本書内容

（一）調理に就ての心得（二）金と時間の經濟（三）器具（四）色素類（五）飲料水（六）中毒（七）魚、鳥、米、野菜の鑑別（八）調理の方法（九）香味料と嗜好品（十）庖刀の切り方（十一）食物調理の便宜方法（十二）出し汁（十三）注け酢、注け醬油、注け酒、附味噌、混味噌の製法（十四）刺肉及膾類（十五）汁類（十六）羹物及蒸物類（十七）煮物類（十八）炙物類（十九）和物類（二十）浸物拵樣（二十一）揚物の仕方（二十二）鮨の製法（二十三）寄せ物類及蒲鉾、はんぺん、しんじょ（二十四）調理雜集（二十五）人休營養の事（二十六）食物の消化吸收の事（二十七）小兒營養の事……

本書は從來の料理法より其衛生に叶ひたるものを撰擇し其調理法を最も平易に述べたり故に日常の膳椀に上るべき食物も此書によりて調理すれば滋味多くして人体を加養すべし例へば章魚は皮を去り奴豆腐は沸湯を注ぐなど其外野菜の洗方切り方煑又は炙り方食物の着色中毒物又は飲料水の選び方器具の清潔小兒の食物など逐一說き示したり家庭衛生として日用料理の師冊として各家是非一本を備へらるゝの必要あることを知るべし。

類書

藤本藤蔭君著　**實用料理法**（全壹冊洋裝）　正價金二十五錢　郵税金六錢

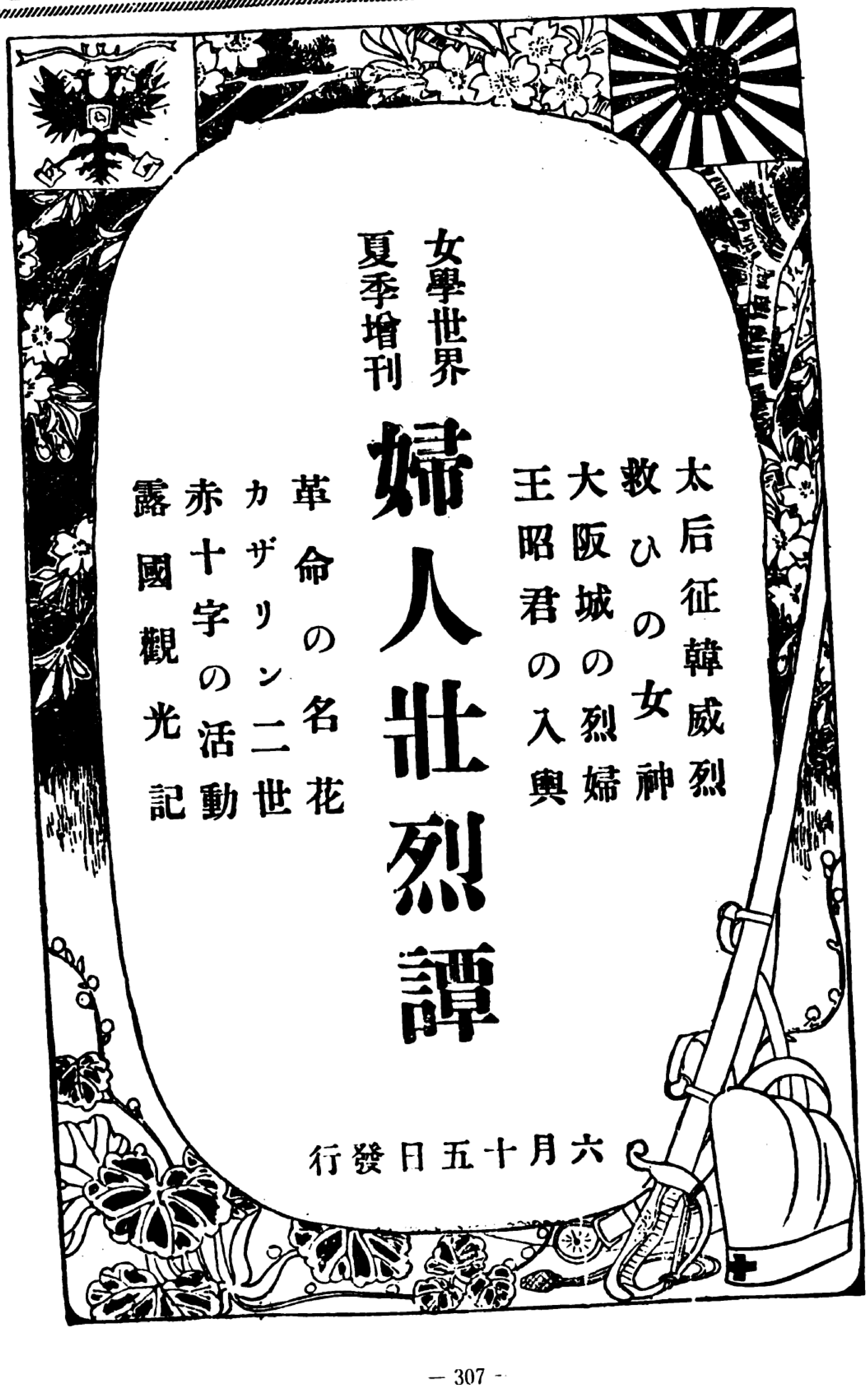
佐々木孝君著　**西洋料理法**（全壹冊洋裝）　正價金二十五錢　郵税金六錢

下田歌子君著　**料理手引草**（全壹冊和裝）　正價金三十五錢　郵税金八錢

（乙の七）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(乙の八)



女學世界
夏季增刊

婦人壯烈譚

太后征韓威烈
救ひの女神
大阪城の烈婦
王昭君の入輿
革命の名花
カザリン二世
赤十字の活動
露國觀光記

六月十五日發行

日露戰爭未來記

夢の翁

▲七月上旬　日本軍遼陽を占領す、露帝ニコラス第二世彼得堡發輦戰地に向ふ。隨從者は國務大臣七名、元老五名、侍從將官十二名、近衛コサック二個師團。

▲七月中旬　日本軍奉天府を陷る、此日日本軍海陸合同して浦鹽斯德を攻擊す。露の巡洋艦一隻沈沒す。

▲七月下旬　浦鹽斯德陷落す、戰利品戰鬪艦三艘、巡洋艦四隻兵器無數捕虜二千人、此日露帝哈爾賓に入輦、日軍鐵嶺に入る。

▲八月上旬　日本軍長春を占領す同日又浦鹽の支隊吉林を占領す。

▲八月中旬　寧古塔劇戰敵將レイチンカンプ將軍戰死す。

▲八月下旬　浦鹽支隊ニコライスクを占領す、敵の主將レチウイッチ大將捕虜となる。

▲九月中旬　日本軍哈爾賓を包圍す、兵數約七個師團。アレキシーフ大將流丸に斃る。明日哈爾賓大劇戰敵の死傷約二萬人超て三日陷落捕虜侍從大將二名、將官二十七名、士官七百二十名、兵卒二萬人、馬匹七千頭、大砲六百門、小銃三萬七千挺外に軍旗無數、ゲオルギー勳章一千個（筐入の儘）金貨三千五百萬ルーブルこの日露帝國を衛て脫走一部隊に護衛せられ僅々哈爾へ遁れ給ふ黑鳩公將軍行衛不明、滿州露軍の首力全く解體す。

▲九月下旬　露國留守元老大會議、皇帝の歸還を促がす。

▲十月下旬　露國に內亂起るニコラス第二世彼督堡へ回鑾波蘭土獨立の旗を擧ぐ、日露媾和の談判遷延。日本軍の急先鋒長驅してバイカル附近に進擊す。

▲一月上旬　媾和條約成立。

條約の內容左の如し

一賠償金　三十億ルーブル、これを十ヶ年償却として國有鐵道の收入を擔保とする事（露國の歲入は十六億七千萬ルーブルにして國有鐵道收入は三億九千六百萬ルーブル也）

一領土割讓　沿海州、（烏蘇里地方よりカムサツカを含む）黑龍江州、後貝加爾州の外、薩哈連、

一兵備撤退　烏剌爾山以東へ露兵を駐屯せしむる事を禁ず

一滿洲領土保全　東淸鐵道を日本國有とする事

一國體變革　向ふ三ヶ年を期して憲法を制定し、世襲專制君主制を革め立憲君主政治となす事

▲二月上旬　露國に內亂起る、ニコラス第二世彼督堡へ回鑾。

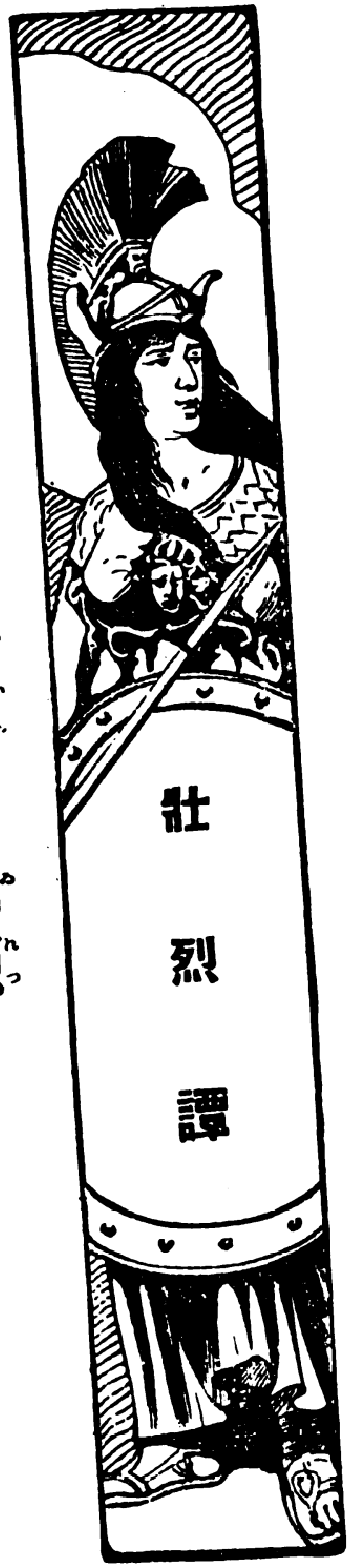
▲三月上旬　波蘭土獨立して共和國となる。この頃軍隊續々歸國す、歡迎會盛に行はる。

▲五月上旬　旅順口にて鹵獲せる一等戰鬪艦ペレスウヰツト橫須賀に入る、見物人黑山のごとし。この頃諸方に軍神の紀念碑建つ。

▲五月下旬　露國の捕虜三萬人本國へ歸る。

▲六月上旬　出征將士の論功行賞あり、新たに侯爵となる者五名、伯爵十二名、子爵三十七名、男爵百六十九名、東京日比谷公園に大凱旋門建つ。

▲六月下旬　歐米の五大强國日本へ大使を派遣す。



攝政太后征韓の威烈

大町桂月

神功皇后の三韓征伐は、啻に日本女子の爲めに氣を吐くに足るのみならず、實に日本國民の爲めに氣を吐くに足る。女主の征戰古今其例稀也。たゞ古にしては、セミラミスあり。近くはジャンダークあり。之を我國に求むれば、神功皇后一人也。この三人を稱して女子征戰の最も偉大なる三幅對となさむ乎。

元來、日本國民は、男子も、女子も、遠征進取の氣象に富みたりき。神代のとは、言はず。神武天皇、西海の一隅より起りて、京畿附近を平定し、ほゞ日本を統一し給へり。日本武尊にいたりて、西、熊襲をうち、東、蝦夷を征し、皇威の及ぶ所、益ひろまれり。神功皇后にいたりては、更に三韓までも征伐して日本の版圖、大陸の小半島に及べり。これ日本歷史上の一大光明也。

今は韓國と云ひ、數年前までは朝鮮と云ひ上古は三韓と云へり。三韓とは、馬韓、辰韓、辨韓の三國を合併したる名也。然るに、馬辰辨の三韓の名は、日本の歷史には、多くは知られずして、任那先づ日本に知られ、

新羅、百濟、高麗の名ついで知らる。今三韓の由來を畧說せむに、はじめ馬韓、この韓地を統一せしが、秦人の難をさけて來れるもの東界の地を與へたり。之を辰韓と稱す。其南方の韓種も別になりて辨韓と稱す。馬韓は西方にありて五十餘部落を有し、三韓中、最も大也。辰韓は其東にありて十二部落を有し、辨韓はまたその辰韓の南にありて、これも十二部落を有す。新羅は、もと辨韓の中の一部にて、東南に海をうけて、最も日本に近し。百濟は馬韓の中にありて、西南に海をうけたり。高麗は古朝鮮の北方にありて、これは三韓以外なり。任那は、新羅の西南にありて、これも三韓の外也。されば、三韓と云へば、馬、辰、辨の三國のヿなれど、新羅、百濟、高麗が我國と關係ありしを以て、これらを指して、三韓ともいふ也。要するに、日本上古史に三韓とあるは、今の韓國のヿなりと知るべし。

この鷄林半島は、最も我國に近き外國にして、神功皇后以前より、我國と關係ありき。神代の時、月讀尊の往いて經營し給ひしはこの地なるが如し。素盞嗚尊も、この地を經營し給へり。大巳貴命の時に、新羅の王子天日槍、我國に歸化せり。一說には、これ垂仁天皇の世の事なりともあり。その說に從ふも、なほ神功皇后より以前の事なるが、余は前說を信ずるもの也。崇神天皇の世には、韓國の一小國なる任那、我に入貢せり。その時の使者は、蘇那曷叱知といふ人なりき。神武天皇以後、開化天皇まで、九代の間は、歷史かけしものか、はた無事、否、內部の經營に全力をそゝがれしものか、表だちて、外國と關係せしヿなし。されど、九州地方の豪族は思ひ〳〵に、支那及び韓國と交通せしヿは、前漢書の地理志に、『樂浪海中に倭人あり、分つて百餘國となす。歲時を以て來りて献見す』とあるにても推知するを得べし。崇神垂仁二天皇の際に至りては、國威の振ふと共に、外國との關係も、密になりぬ。崇神紀十一年の條に、『この歲、異俗來り歸す』とあるは、朝鮮人が多く歸化したるヿなるべし。任那が蘇那曷叱知をして入貢せしめたるは、それより

も五十四年もあとの事也。この際、朝鮮は群雄割據して、小弱なる任那は、自衛上、日本の助をからむとて、入貢せしめて、鎭將を乞ひたる也。間もなく、天皇崩御し給ひて、垂仁天皇立ち給ひて、その乞に應じて、鹽垂津彦をやりて任那に日本府をひらきて、之を鎭し給へり。欽明紀の條に、『任那は安羅國を以て、兄となし、たゞ其意に從ふ。安羅人は日本府を以て父となし、唯其意に從ふ』とあるを以て、日本國が任那に於ける權力のほどを知るべし。次の景行成務天皇の頃は、西蠻東夷こも〴〵起りて、内治にいそがしく、全力を朝鮮に用ゐ給ふこと能はずして、仲哀天皇の御世となれり。

仲哀天皇は、日本武尊の第二の皇子也。容姿端正、身の長、十尺。御父の氣象をうけて勇邁におはしけれども、位におはしけると、わづかに九年にして、御事業の中途に崩御し給ひて、赫々たる功績の殘らぬは、ふかく惜むべき也。

成務天皇の四十八年に、太子となり給ひ、その六十年に、位に卽き給へり。卽位の前、彦人大兄の娘、大中姫をめとりて、妃となし給ひて、麛坂、忍熊の二皇子を生み給へり。その後、大酒主の娘、弟姫をめとりて、譽屋別皇子を生み給へり。卽位の翌年、氣長足姫尊を立てゝ、皇后とし給へり。これ即ち神功皇后也。

我國は古來天皇かはる毎に、都をうつし給ひけるが、この時までも、都はすべて大和にありき。仲哀天皇は、卽位の翌年、立后の翌月、都を越前の敦賀にうつし給へり。これ皇威ひろまるにつれて、大和に蟄居し給ふに由ればなるべし。その國、今は越前なれど、もと越の國といひて、大和附近よりは、非常に遠く、且つ不便におもはれし處也。今日にて言へば、なほ千島、もしくは臺灣などに比すべき乎。かゝる處に都をうつし給ひしは、非常なる英斷と云はざるべからず。敦賀とは、今の地名也。當時は、角鹿と云へり。皇居をば、笥飯の宮と云へり。敦賀町の一端に、氣比神宮ありて、今もなほ當時のなごりを止む。一年ばかり茲におはしけるに、

銳意、治をはかり給ふのあまり、南國を巡狩し給はむとて、敦賀には、皇居及び百官をとゞめ、自からは、二三の卿大夫、及び官人數百をつれて、ごく手輕にいでたち給へり。さて、紀伊にいたりて、德勒津の宮におはしけるが、熊襲そむきたりとの報至りければ、直に往て之を征し給へり。されど、その時ひきゐ



日露戰爭未來の夢（一）

[illegible]

給ひし將卒のみにては征伐しがたきを以て、使を皇后にやりて百官をつれて、長門の國に會せよと勅し給り。天皇は、三年六月、長門の豐浦に着き給ひけるが、皇后は、一月おくれて、七月そこに着き給へり。敦賀は、今は空しくなりて、兩陛下をはじめ、百官みな長門にあつまり

も五十四年もあとの事也。この際、朝鮮は群雄割據して、小弱なる任那は、自衛上、日本の助をからむとて、入貢せしめて、鎭將を乞ひたる也。間もなく、天皇崩御し給ひて、垂仁天皇立ち給ひて、その乞に應じて、鹽垂津彦をやりて任那に日本府をひらきて、之を鎭し給へり。欽明紀の條に「任那は安羅國を以て、兄となし、たゞ其意に從ふ。安羅人は日本府を以て父となし、唯其意に從ふ」とあるを以て、日本國が任那に於ける權力のほどを知るべし。次の景行成務天皇の頃は、西蠻東夷こも〴〵起りて、内治にいそがしく、全力を朝鮮に用ゐ給ふこと能はずして、仲哀天皇の御世とはなれり。

仲哀天皇は、日本武尊の第二の皇子也。容姿端正、身の長、十尺。御父の氣象をうけて勇邁におはしけれども、位におはしけること、わづかに九年にして、御事業の中途に崩御し給ひて、赫々たる功績の殘らぬは、ふかく惜むべき也。

成務天皇の四十八年に、太子となり給ひ、その六十年に、位に即き給へり。即位の前、彦人大兄の娘、大中姫をめとりて、妃となし給ひて、麛坂、忍熊の二皇子を生み給へり。その後、大酒主の娘、弟姫をめとりて、譽屋別皇子を生み給へり。即位の翌年、氣長足姫尊を立てゝ、皇后とし給へり。これ即れ神功皇后也。

我國は古來天皇かはる毎に、都をうつし給ひけるが、この時までも、都はすべて大和にありき。仲哀天皇は、即位の翌年、立后の翌月、都を越前の敦賀にうつし給へり。これ皇威ひろまるにつれて、大和に蟄居し給ふに由ればなるべし。その國、今は越前なれど、もと越の國といひて、大和附近よりは、非常に遠く、且つ不便におもはれし處也。今日にて言へば、なほ千島、もしくは臺灣などに比すべき乎。かゝる處に都をうつし給ひしは、非常なる英斷と云はざるべからず。敦賀とは、今の地名也。當時は、角鹿と云へり。皇居をば、笥飯の宮と云へり。敦賀町の一端に、氣比神宮ありて、今もなほ當時のなごりを止む。一年ばかり茲におはしけるに、

鋭意、治をはかり給ふのあまり、南國を巡狩し給はむとて、敦賀には、皇居及び百官をとゞめ、自からは、二三の卿大夫、及び官人數百をつれて、ごく手輕にいでたち給へり。さて、紀伊にいたりて、德勒津の宮におはしけるが、熊襲そむきたりとの報至りければ、直に往て之を征し給へり。されど、その時ひきゐ

日露戰爭未來の夢（一）



岸田劉生

給ひし將卒のみにては征伐しがたきを以て、使を皇后にやりて百官をつれて、長門の國に會せよと勅し給り。天皇は、三年六月、長門の豐浦に着き給ひけるが、皇后は、一月おくれて、七月そこに着き給へり。敦賀は、今は空しくなりて、兩陛下をはじめ、百官みな長門にあつまり

て、こゝは、今や帝都となりぬ。その皇居を穴門の豐浦の宮といへり。時勢の必要上、北陲にありし都、今は西陲にうつりける也。

豐浦の宮におはしけること六年、輕々しく九州に向ひたまはざりしは、十分に軍備をとゝのへ給へる也。八年正月にいたりて、はじめて、皇后と共に九州にいでたち給ふ。時に、筑前の崗の縣主の祖なる熊鰐といふ人あり。その名は、あら／＼しけれど、心は忠勤あつき人也。此事をきゝて、十尋艦の舳に、大なる榊をたて、その上部に、白銅の鏡をかけ、中部に、十握の劍をかけ、八尺瓊をかけて、わざ／＼來り迎ふ。天皇喜びたまひて、路案内となして、崗の浦にいたり給ひしに、不思議や、その港口にて、御船動かずなりぬ。汝、赤心をあらはして、來り迎へたるに、今、船うだかざるは何故ぞと問はせ給へば、御船の動かざるは、臣の罪にあらず。この港口に、男女の二神あり。男神を大倉主と云ひ、女神を菟夫羅媛といふ。必ずこの二神の心より出でたるものならむと答ふ。さらば、御心をなだめむとて、その神を祀り給ひしに、船はやす／＼と動きて、港に入り給へり。皇后は、別の船におはしけるが、熊鰐更にひきかへしてその船を洞の海に迎へて、これも無事に崗の津に導きまつれり。熊鰐の外、なほ忠勤のものあり。即ち伊覩の縣主の祖、五十迹手也。この人も、熊鰐と同じく、船に榊を立て、鏡劍玉をかけて來りむかへたり。かくて、儺の縣にいたりて、橿日の宮に居給へり。さて、これより愈熊襲を討ち給はむとす。群臣をあつめて、軍議をこらし給ひけるが、その說、二つにわかれたり。一は、皇后之を代表し給へり。その說に曰く、熊襲は、小敵にして末也、三韓は本也。先づ三韓を討たば、熊襲は、自から平らがむと。天皇は之に反して、内亂を放棄して外に向ふは不可也。先づ熊襲をうたざるべからずとの說をとり給へり。天皇とても、日本武尊の氣象をうけ給ひたることなれば、兵を海外に出し給ふことを憚り給ふにはあらざるべけれど、内亂鎭定をさきにし、外國征伐をあとにせむとし給へるものなるべ

し。とにかくに、當時兵を海外に出すことは、ゆゝしき大事也。皇后が外征を企て給ふには、如何ばかりか苦心し給ひけむ。神託のこと、歴史に殘りぬ。現に今の皇后陛下も、日露戰爭起らむとする際、阪本龍馬あらはれて、必ず皇國が勝利を得るやうに、助力しまゐらすべしと云へりとの夢を見給へりとの事なれば、皇后



日露戰爭未來の夢（二）

軍神紀念碑

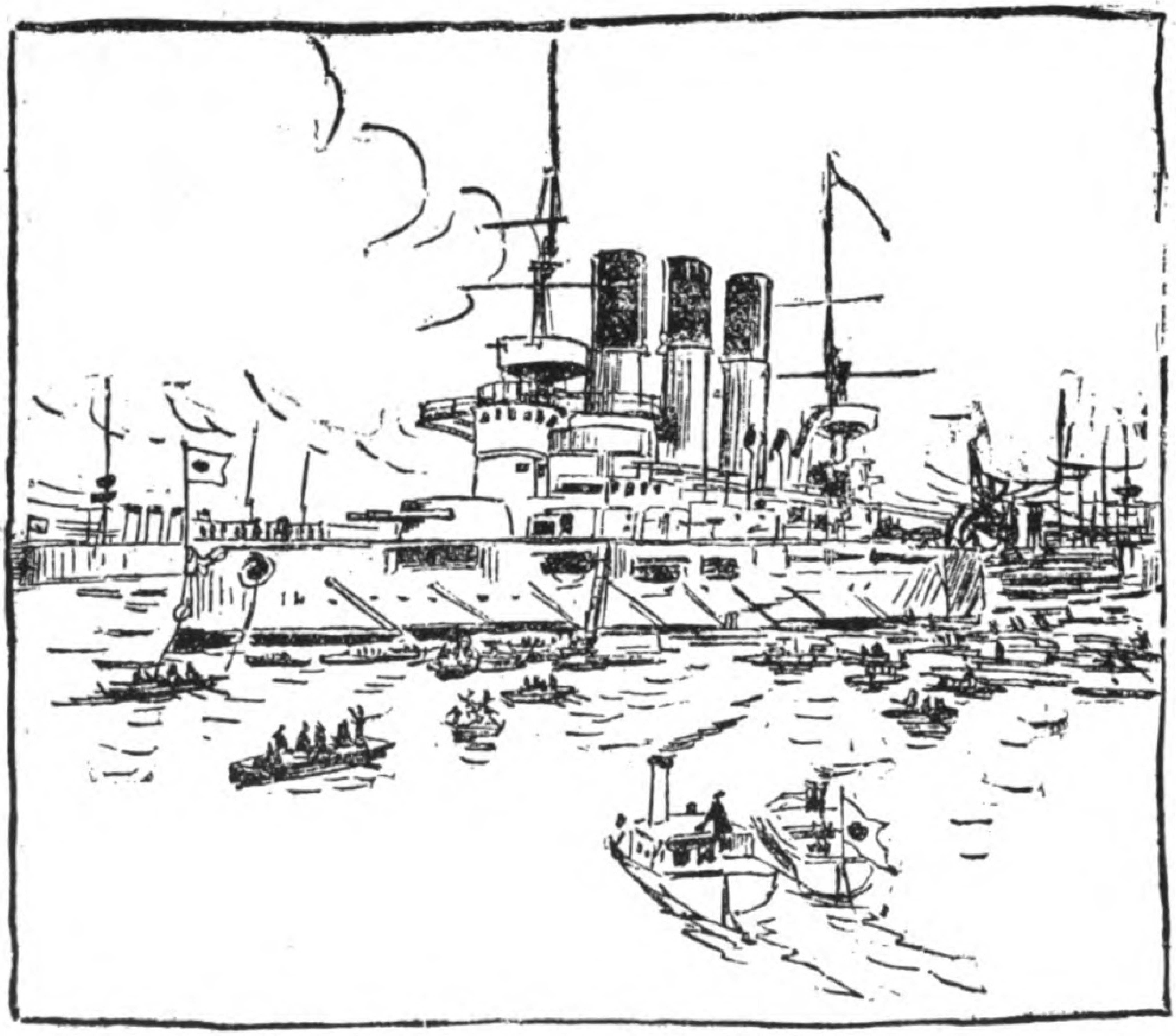
も、或は實際に之ありしことにや。神あり、皇后にをしへて曰く、天皇、熊襲のまつろはぬを憂ひたまふこと莫れ。熊襲は、脊の空國なり。わざ〳〵兵をあげて征伐し給ふまでもなし。これよりは遙にまされる寶の國あり。新羅の國といふ。もしよく我を祀らば、刃に血ぬらさずし

て、その國、必ず自から服せむ。熊襲も隨つて自から服せむ。さて、その祭りには、天皇の御船と穴門の直踐立のたてまつれる水田とを幣とし給へと。歷史また傳ふらく、天皇之を信じ給はず。高山にのぼりて、望み見給ふに、たゞ蒼海漫々として、國は見えず。天皇、神に向ひて、西方を見るに、國なし。必ず我をあざむくものならむとのたまへば、神また皇后にかゝりて、つゆ欺くに非ず。我を信せずば、その國を得ざるまでの事也。今皇后はらめり、その子、之を得給ふべしといひたれど、天皇なほ之を信じ給はざりきと。然れどもみこの歷史の傳へたるとは、頗うたがはし。天皇より前に、三韓との交通ありたれば、天皇が西方に國あるを信じ給はざる筈なし。故に皇后が外征を先にせむとし給ひしも、一理あれども、天皇が内亂鎭定をさきにせむとし給ひしも、亦尤もなると也。天皇終に神託をきかずして、熊襲を討ち給ひしが、敗れてかへり給へり。間もなく、俄に崩じ給へり。神罰によりて、急病にかゝり給へりとも傳へ、熊襲征伐の際、矢があたりたる爲めなりとも傳へたり。すべて、この天皇の事に關しては、歷史の傳ふる所、太だ曖昧也。天皇が西方に新羅あるを知り給はざりしと云ひ、崩御の原因について一定の説なきことゝ云ひ、人をして雲中に山岳を望むの想あらしむ。御壽命についても、百十歲との説もあれば、五十二歲との説もあり。日本武尊の第二子におはせば、百歲内外が事實なるべし。日本書記の如きは、正しき官撰の歷史なるも、なほ天皇を日本武尊の第二子としながら、御壽命を五十二歲とせるは、受取れぬ話し也。

皇后、神託に從ひ給はむとせば、新羅を征伐し給はざるべからず。天皇の不時の崩御は、實にゆゝしき大事也。三韓征伐は、たゞさへゆゝしき大事なるに、天皇崩後の三韓征伐は、一層ゆゝしき大事也。之を皇后の御一身上より云ふも、西海の旅の空に、天皇に死別れ給ひたる、人生悲哀の極也。この悲哀の極に遭遇し給ひながら、神託に從つて、外國を征伐し給はざるべからず。殊にはらみて、殆んど將に產し給はむとする場合也。

普通の女性ならば、精神も殆んど錯亂すべきに、皇后は、よくこの難局に處して、振古未曾有の外征を遂げ給へり。をしや、歷史は、精しく皇后の御性行を傳へず。されど、必ずしも歷史の傳ふるを待つて知るべきに非ず。かゝる場合の三韓征伐の一事、既に以て皇后が如何ばかり智ありて、如何ばかり勇ある女丈夫なりしかを說明して餘ある也。

皇后は、先づ天皇の喪を秘し給ひぬ。これ



日露戰爭未來の夢（三）鹵獲軍艦橫須賀入港

士氣の沮喪、人心の擾亂を妨がむとするには止むを得ざると也。ひそかに天皇の屍を收め、武內宿禰をして、之を奉して、海路、穴門に赴き、豐浦の宮に置きまつらしめ給へり。これ殯宮におきたるまでの事にて、この年、外國を征伐し給ふによりて葬むるを得ざる也。武內復命す。是に於て、いよ／＼外征の師を發したまはむとす。それにつけても、なほ神意をたしかめ給はざるべからず。

小山田の邑に、齋宮を作りて、先きの日、天皇に敎へ給ひし神は、何の神にや、知らせ給へとて、祈願をこめ給ふこと、七日七夜に及びて、神託あり、曰く、五十鈴の宮にいます向津媛の命也と。なほ神ありやと問へば、曰く、我あり。即ち尾田の吾田節の淡郡に居る稚日女命なりと。なほ有りやと問へば、事代主の命也と答ふ。なほ有りやと問へば、日向の橘の小門の水底に居ます表筒男、中筒男、底筒男の神なりと答ふ。なほ有りやと問へど、答なし。要するに、こゝに列擧せる諸神が外征をすゝめ給へる也。

祭の事、既に終りぬ。皇后、鴨別命をして熊襲を征せしめ給ひしに、直に服從せり。神は熊襲を征するを要せずと敎へ給ひ、皇后の一派は、之に從はむとし給ひしに、天皇の崩後、天皇の遺志をつぎて、熊襲を征し給ひしは、太だ矛盾せる事也。とにかくに、この際の事に關する歷史は、不正確也。されど、余は茲に神功皇后の武烈を說くを主として、考證を主とせざれば、別に餘計なる詮索せざるべし。

なほ不逞の徒あり。羽白熊鷲といふもの也。歷史傳ふらく、その人强健、身に翼ありて、よく飛びて、高く翔ると。皇后進んで之を擊ち給ふ。かゝる猛勇なる賊徒も、皇后の鋒先には敵する能はずして、忽ちに滅されたり。今一人、田油津媛といふ賊あり、進んで之を討滅し給ひぬ。是に於て、日本國內は、先つ安全也。されど、外征は、ゆゝしき大事なれば、士氣を皷舞するが爲めに、皇后は如何ばかり苦心し給ひけむ。

先づ、皇后は、松浦におはしけるが、縫針を曲げて釣針となし、飯粒を餌となし、御裳の糸をぬきて釣糸となし、聲言してのたまはく、外征の事成功せむには、魚みな我針にかゝれとて、釣り給ひしに、鮎忽ちその針にかゝれり。一軍の士氣、之が爲めにいかばかりか皷舞せられたりけむ。

次に皇后は、橿日の宮に歸り、海邊に出でゝ、自から御髮をときて、また聲言してのたまはく、われ今、髮をときて、海にしたさむに、外征の事成功せむには、その髮自から兩方にわかれよと。これも御言葉の如く、

果して驗ありき。士氣益振ひたりしや知るべし。

髮自から兩方にわかれしまゝに、之を頭の左右に束ねて、髻となし給ひぬ。髻は、當時の男子の髮の風也。かく、皇后は、外征の爲めに、男裝し給へる也。群臣を集めて宣言し給はく、師を興し、衆を動かすは、國の大事也。安危成敗、必ず斯に在り。今征伐するに方

日露戰爭未來の夢(四)



天盃頂戴

り、汝等に一任して、もし事成らざらむに、罪を汝等に歸せむは、朕の忍びざる所也。われは、かよわき女の身なれど、假りに男裝して、上は神佑を仰ぎ、下は汝等の力によりて、軍を出し、財土を求めむとする也。もし事成らば、これ汝等の功なり。もし事成らずんば、朕ひとり罪を負はむと。あゝ、何ぞこの詔の堂

堂として、且つ大仁なるや、群臣みな曰く、陛下のこの擧は、宗廟社稷を安んじ給ふ所以也。されど、なほ罪を臣下に及ぼし給はず。臣等たゞ頓首して詔を奉せむと。諸國に令して、船舶士卒を集め給ひしかど、思ひ通りには集らず。皇后の御苦心、察しまつるに餘りあり。これ神の心ならむとて、大三輪の社をたてゝ、刀劍を奉りたまひしに、果して兵多くあつまれり。なほ皇后は鳥摩呂といふ海人をして西海に出でゝ、海外に國ありや否をたしかめしめ給ひしに、還り報じて、國なしといへり。また名草といふ漁人をして見せしめ給ひたるに、こたびは、遙に山見えたりと還り報せり。この報告によりて、一軍の志氣更に振ひしや知るべし。

是に於て、吉日を卜して、將に發したまはむとす。皇后自から斧鉞を執りて、三軍に令してのたまはく、金皷、節なく、旌旗錯亂せば、則ち士卒とゝのはざらむ。財を貪りて多欲に、私心を懷いて内顧せば、必ず敵の爲めに虜にせられむ。敵少なくとも、輕んずるな、敵强くとも、屈するな。奸暴なる者は許すな、服從する者は殺すな。戰ひ勝ちたらば、必ず賞せむ。にげ走らば、罰せむと。まことに要を得たる軍令也。

されど、猶一つ、困難なる事殘れり。そは皇后の御妊身の事也。石をとりて、腰にはさみ、神にいのりてのたまはく、事成つて歸らむ日に生れさせ給へと。幸にも、これもその驗ありて、御產の氣もしづまれり。

實に天皇の崩御より、わづかに八九箇月經る程の事也。木枯すさぶ十月の空、いよ〳〵軍をとゝのへ、旗皷堂々として進發したまへり。

嗚呼、天も皇后の英武に感じたりけむ、神風を起し、海神浪をあげ、海中の大魚悉く浮いて船を挾み、且つ風順なりければ、白帆大風を孕みて、毫もかぢを勞せずして、忽ち新羅に到りたまへり。思ふに、海嘯起りしならむ乎、皇后の舟を送りし浪は、滔々として、新羅の國までおしよせ、深く陸地に入りたり。これ未曾有の天災なれば、新羅人は上下こぞつて驚きわなゝけり。新羅王も、いたく驚きて、せん術を知らず。群臣をあ

つめて曰く、海水、國を浸すことは、新羅の建國以來、未だ曾て無き所也。あゝ、天運つきて國こゝに海とならむとする乎と、泣言を吐きて、その言未だ終らざるに、艨艟海を蔽うて來り、旌旗日に輝き、鼓聲盛に起りて、山川震動す。げに、新羅王に取りては、泣面に蜂どころのはなしに非ず。あゝ、天兵下りて、わが國を亡ぼさむとする乎とて、氣絶せるこそあはれなれ。やうやくにして正氣つきて曰く、われ聞く東方に神國あり。日本といふ。聖王あり。天皇といふ。これ必ずその神兵の來り攻めたるならむ。あゝ何とせむ、われ豈に兵を以て之を拒ぐべけむやと。自から白繩にて、手を後にくゝらせて、圖籍をさゝげて、皇后の御船の前に來りて降る。平身低頭して曰く、今より後、天地のあらむ限りは、飼部となりて、船柁はす間もなく、朝貢して、春秋必ず馬梳及び馬鞭をたてまつるは言ふまでもなく、年毎に、男女の調をたてまつらむと。又重ねて曰く、東より出づる日の西より出づるやうにならば知らず、阿利那禮河の逆さに流るゝ世とならば知らず、河の石のぼりて天の星となる世とならば知らず。もし春秋の朝貢を闕ぎ、梳鞭を上ることをやめば、天地神明、必ず譴罰したまはむと。かく、臣下といふよりも、更に下りて、我皇の馬卒とまでもならむといふことを口實にせるを以て、その如何に新羅王の慴伏したりしかを知るべし。我軍の中には、之を殺さむといふものあり。されど、賢明なる皇后は、かゝる野獸的行爲をなしたまふべくもあらず。神は、金銀の國をさづけむとのたまへり。國王を殺すは、神意にもそむける也。又出陣の際、三軍に令したるとの中に、服從するものは殺すなと云ひ置きたり。今既に財の國を得たり。國王も服從せり。之を殺すは、不祥なりとて、自からその縛の繩を解き、その言の如く、飼部となして、その國に入り、寶の庫をすべて封じ、圖籍文書を收め、杖つき給ひし鉾を、國王の門につきたて、後の紀念としたまへり。新羅王は、人質を出し、金銀彩色及び綾羅縑絹を獻じ、八十艘の船にのせて、皇師に從はしめたり。これより後も、八十艘の貢船は、毎年我國に來れり。げに、案ずるより產むが易

く、神の詞通りに、刄に血ぬらさずしてたやすく新羅を征服し給へり。天災の助もありたれど、皇后の英武によらずんば、奚んぞよくこゝに至るを得んや。皇后もとより、新羅王の後にそむかむを、豫知し給はざるにあらざれど、窮鳥懷に入れば、獵夫之を殺さず。皇后が新羅王の降伏を許したまひたるは、武勇にして仁をかねたる英主の所置なりといふべし。高麗も百濟も、戰はずして來り降れり。その年の十二月には、早や日本に凱旋し給へり。凱旋し給ふと共に、皇子を生み給へり。これ即ち應神天皇也。

爾來二千年、韓國は我と唇齒の國也。近き頃、皇威、露國を壓して、日韓條約成り、韓國、また我に服從しぬ。皇后の地下の英靈必ずやほゝゑみ給はむ。

（完）

貧しき軍人の家族

みどり子

にはかに下る召集令
　やれし仕事着ぬぎすてゝ
まても雄々しき武者姿
　見送る妻は目に涙
ぬぐひかくしてほゝゑみつ
　さらば我夫國の爲
手柄功名立て給へ。
傾く軒に雨もりて
　濡けさまさる袖たもと
右に左に取りすがる
　まだいとけなき幼子の

父はいづこと問ふ度に
　オヽツレ敵の首とりて
金鵄勳章家づとに。
いとゞ重れるいたつきに
　かろき命も今日あすの
たつきとたのむ糸車
　とまりはてたる綱けぶり
親子いだきてむせび泣く
　冷めたき床に暖かき
人の情のうれしさよ。

オルレアン城救ひの女神

荒木嘯羽

孱弱き一少女の身を以て一國の悲運を挽回したとの事は頗る奇態のやうであるが、其の實決して奇怪ではありません彼の自信のない即ち腸の腐つた千百の有髯男兒よりも一個自信堅固の婦人の方が、優に大事を成功するの運命を荷て居るので、言はゞ佛國の百年戰爭は佛國の人民一般に腸が腐つて居つたのである、其所へジアンヌ、ダルクといふ最も自信に富んだ一少女が立つて國民の觀念を刺衝鼓舞した爲に國民全体の自信を生じ此自信遂に佛國の悲運を挽回したに外ならぬのである、今や軍國多事の節から救ひの女神と題してこゝにジアンヌ、ダルクを紹介する所以のものは、國家の事必しも男子の手にのみ依るべきでなく、自信に厚き婦人の聲援なるものが如何に男子を刺戟して報國の大事を成功せしむるかの一例を示さんか爲である、敢て本篇の主人公が鎧を着馬に乘つた、其眞似を仕て戴きたいと言ふのではありません。

▲乙女の義烈

今より四百七十年餘り前、佛蘭西はシャール七世王の御代であつたが、國内に幾多の謀反人が出來て、外敵たる英吉利人を手引し、之によつて銘々の野心を逞しう仕やうといふ大それた魂膽、國王シャール七世は有れども無が如く國内亂れに亂れて到る所血の川骨の山をなし、萬民一日として安らかな暇なく、あはれ佛蘭西の運

命は風前の燈火の如く今日か明日かと見へたる場合に一婦人の身を以て目に餘る敵軍を掃蕩し、王位を安じ奉り、一國の運命を危く取り止めたのが此に紹介せんとするジアンヌ、ダルク孃其人であつた。

孃は時非なりと見るや我を忘れて猛然蹶起し孱弱き雙手を揮してあはや粉末微塵、累卵に等しき國運を危機一髮の間に抱き止め 志 遂げし間もなく永き浮世を十九の夢と見納め、身はむごたらしき猛火の中に投せられて天に歸つたのであるから佛蘭西人が今に至る迄神の權化と言ひ囃すのも眞個無理ならぬのである。

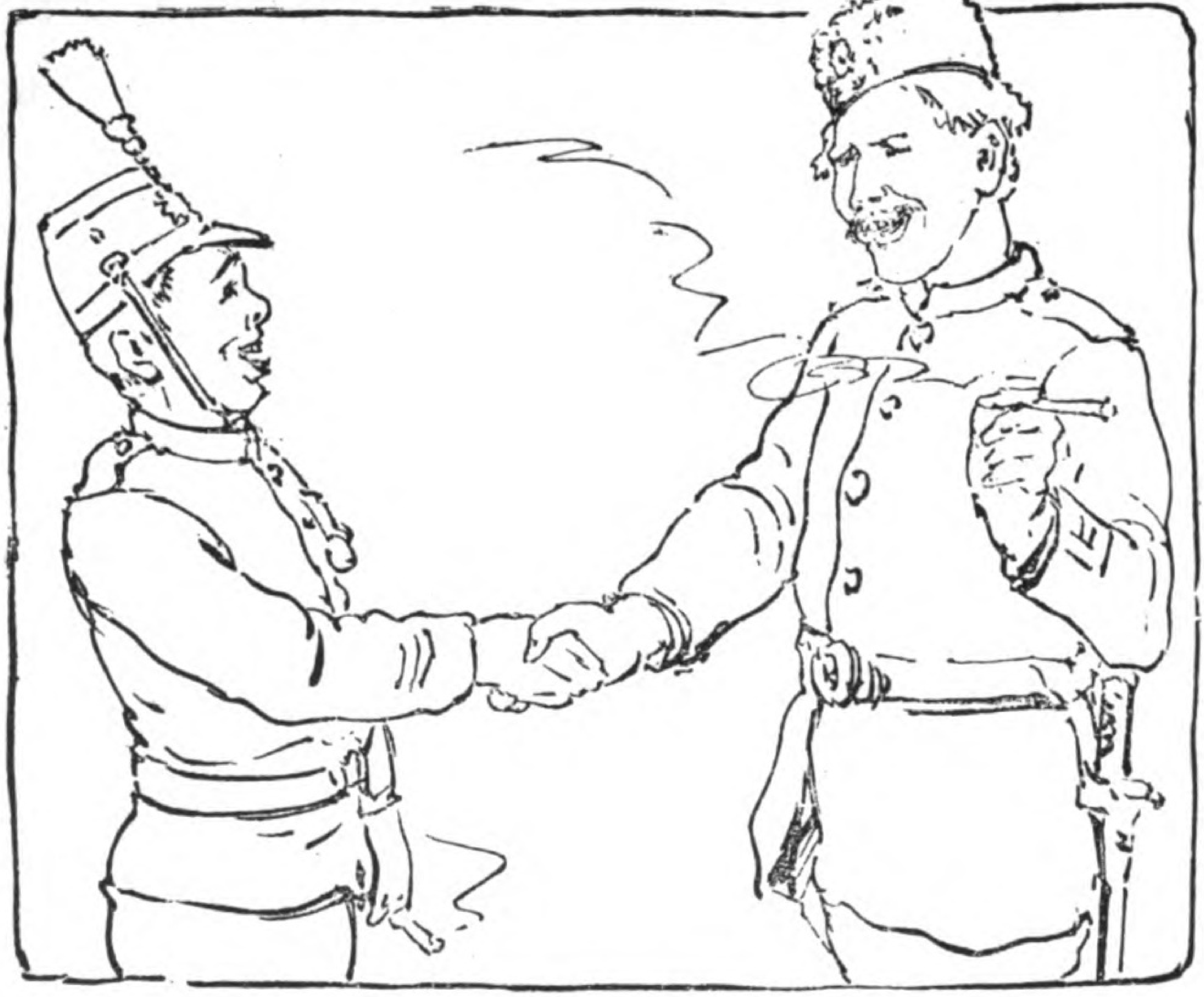
孃の生立を聞くと、かゝる偉勳を果すべき大運命を荷つて、產れたかの如く思はるゝ、佛國のシャムパーギユとローレーヌとの間にドムレミーといふ一小村があつて、此所にジャツク、ダルクと呼べる百姓があつた、其妻をイザベル、ロメーと呼び二人の間に四人の兒があつたが其三番目の娘こそ誰あらう本篇の主人公たるジアンヌ、ダルクなので有つた、で、此ドムレミーの一小村も國運の悲むべき影響を受けて村民は眼に劍戟の光りを視、耳に砲聲馬蹄の響を聞く度に、驚破と計り山林に逃げ隱れ、軍馬の去る時分怖々村へ戾つて來るといふ始末で、到底落付いて田畠の世話をする杯の暇はなかつた。

ジアンヌ、ダルクは此混亂の中に生れ出たので、是亦眼に觸るゝものは戰爭の慘况のみ、家に在り母の傍にて糸を繰り襤褸を綴す間にも聞き取る話といへば戰爭の事のみであつた。

元より生れ附て女の身であるから、戰爭は怖いものとより外の考とては無つたが、來る年も〳〵打續く戰爭の間に生ひ立ちて漸々物心附たジアンヌは、偖も己が生れた佛蘭西と云ふ國は、何たる不幸な國であらう、此不幸なる國の元首たるシャール七世は何たる薄命の君であらうと、不斗考へた以來、母と共に度々冥福を祈りに出掛た其の村の寺院で聽き取る說教、偖は誰言ふとなき話の端にシャール七世が其母后の權力に壓せられ、御母后との血統の關係を利用して佛蘭西の國權を窺ひつゝある英吉利國王の爲に、常に慘しい境遇に立たれて

居ることを合點すると共に偖も御氣の毒なと思ふ念が萠じて、何時となく不運にして哀れなる年の若いシャール七世王の顏形から風采は斯うもあらふか、彼もあらうかと自分で畫て見たが、遂には眼を瞑ると共に自分で畫き上たシャール七世の物悲し氣の悄然たる姿が、朦朧として彼の前に立ち現はれるやうになりました。

かくてジャンヌは十四の年を迎へた、性來素直で穩和しく、而も信仰厚き娘で一にも寺院二にも說



日露戰爭未來の夢（五）兵士の握手

敎と、夫は〳〵神の敎を聽くのを此上もない樂と仕て居つたが、時運は不思議なもので、信者に安神立命を與ふべき筈の此寺院の說敎が、時が時とて一から十迄佛蘭西の危い運命を如何かして救ひたいものだと言つた調子で說かれたので、兼て國家の悲運を情なく思ふて居つたジャンヌの心は說敎を聽く度に刺戟せられ、爲めに日一日と彼の心が雄々しくなり、其結果が彼の態度の上に隱見る樣になつて來ました。千四百二十三年の夏の或

日の正午頃、己が家の後の庭へ飄然と立出で何といふ意味もなく大空を仰ぎ見る途端、一道の光氣が燦乎と靆くと見えたが、光氣の中から、

『ジアンヌ、和女は穩和で善良兒じや、御寺へ參るのを怠つては不可いよ。

との聲が鋭くジアンヌの耳へ響た、ハツと驚きながら、彼は已が氣の迷に過ないと自身で極ては見たが、程經て或日のこと又も同じ光氣を見たのみでなく光氣の裡に、背に兩翼を負ふたる何とも言へぬ氣高く神々しい姿の人が表はれて、

『ジアンヌ、早く佛蘭西の王樣を御救ひ申し、御位を捧げるが良からう、

と言ひ渡されたので、ジアンヌはブル／＼ツと戰慄し、矢庭に地上へ跪き、兩手を緊乎胸の上にて組み合せ打仰ぎながら、

『アヽー神樣ツ、飛でもない……妾は御覽の通り貧乏人の娘で、到底／＼兵隊を指圖するやうなことは出來ませぬ、

聲顫はせて斷ると、其人は高く右手を擧て虛空を指しながら、

『神聖なるカトリヌ、や、マルギエリツトは必ず和女を助て下さるよ。

言ひ畢つて姿は忽ち見えなくなつて了つた、引續てジアンヌは屢此神々しひ人の姿のみならず、カトリヌやマルギエリツトの姿を見、其度每に前と同樣の詫宣を聞くことが、前後四年に及んだので、彼女は非常に感奮したのである、是に於て婉麗花の如きジアンヌは男子も及ばざる忠君愛國の英雄に化して了つた。

そこでジアンヌは父のジヤックの止むるのを振り切り、ヴオークールユールに住で居る叔父のアンドレイ、ラクザールに已の志を告ると、

叔父は非常に同情を表し、ジアンヌの爲に、自らヴオークルール駐在武官のボードリクールの許へ出掛け、國家のためジアンヌに一臂の力を與へて貰ひたき旨を依頼した、するとボードリクールは散々不興の體で、女の身として大外れた兵器を取るなどゝは狂氣の沙汰である、鐵拳を喰はしで父の許へ逐ひ復へせと嚴命した、因て叔父は此事をジアンヌに話した、併し彼女は來るミカレーム祭日の前に是非國王シャール七世に拜謁を乞ひ例へば脛が膝になるまでも、願を遂げやうと決心して居るので、いつかな動かない、で、自身で駐在武官の許へ出掛け熱心に談判したが、武官却々承知しない、されど運命の大勢は一武官の威力などで防止することが出來るものでない、ヴオークルールの市民一般はジアンヌに同情を寄せて、若し駐在武官が彼是言ふならそんな奴は頼むに及ばぬと息巻き、ジアンヌの武裝を請負ふて駿馬一頭、堅甲一領並に帶劍一口を調製し、添ふるに衞卒六人を以てした、そこでジアンヌは出陣と決し婦人の生命とも言ふべき栗色の頭髮の長く〳〵波打てるを惜氣もなく斷り拂ひ、鎧を取つて擲げかけ、鏘々たる劍鎗の響勇しく、鞍壺豐かに跨つて、家族の再三引留むる情を後にヴオークルールを打立ち、行方定めぬ運命の渦中に突進した、時は千四百二十九年二月の初で波立ち騷ぐムーズ河、濁りて流るロアール河、何れも共に亂れに亂れし世の樣を表はさゝるはない。ジヤアヌは其聲を聞き其色を觀、兩河の沿岸を旅行すること幾日、時に盜賊にも遭ひ、又敵兵にも遇ふたが、石の如く凝り固まつた信念は決して威嚇されもせず侵害されもせず、却て彼は常に衞卒等を勵して言つた。

「決して恐るゝに及ばない妾は神の指示して下さる途を旅行するのだから、此位安全な事はない、妾が此世に生れて來たのは佛蘭西の爲に盡さねばならぬからである、天國に生れ出た妾等の同胞は常に妾に此事を告げ知らせて下さつた。

此信念を甲冑として驀進したジアンヌは、旅行の途中に於る樣々の憂き辛さに打勝つて、二月廿四日シャー

ル七世の行宮のあるシノンに到着した、そこでシャール陛下へ拜謁を乞ふと一少女の拜謁は先例の無いこと、如何にも不審だといふので之が可否を決する爲に二日間内閣會議を開いたが、遂に拜謁を許すことに決した、といふのは、何分にもオルレアンが重圍の中に陷ひつて居つて、形勢日に惡く、之を救はんが爲には如何なる手段でも研究せねばならぬ場合で在たからである。

▲從軍志願

愈〻拜謁といふ日になつて、ジアンヌは、未だ曾て見た事のない立派な儀式を以て召し出された、而も彼は此儀式の眞中に立つて別に臆するでもなく、又別に大膽を裝ふでもなく、極めて平氣に又極めて靜かに進みながら、ズーツと前を見渡すと、金光燦爛たる軍服を着た大官が星の如く居流れて居つて普通なれば何れが王だか分らぬ筈ながら、ジアンヌは一目見るより其中の一人が已の多年想像して居つたシャール七世に何となく似通ふて居る心地が爲たので、ツカ〳〵と進み其前に膝を着て恭しく言上に及んだ。

「皇太子殿下……殿下には妾を御信用下さいませ!!神樣は殿下と、殿下の王國と、殿下の人民とを憐んで居られます、之は御祖先なるルイ陛下やシャールマーギユ陛下が殿下の爲に神樣に熱心に御願なされたからのことで……殿下若し妾に兵隊を御授け下さるれば、妾は屹度オルレアンの圍を解き、レイムの大寺院へ御供申上げます、さすれば英吉利人は皆英吉利へ退散し、佛蘭西の國家は安泰に、殿下の御代と成ります、此事は必ず成就すると神樣から妾へ御告が御在ました。

ジアンヌの言ふ所如何にも尊いが、又如何にも不思議なので、朝廷の群臣流石に惑ふて其席に在つた大僧正、博士、偖はポアチエー大學の教授などいふ顯官は何れも交る〴〵ジアンヌに質問を試た、其中の一人が曰く

「ジアンヌ！和女は神が佛蘭西の人民を助けやうとの御思召だと言たが若し其實ならば別に兵隊の力を要せない譯じやがツ。

ジアンヌは慌る景色もなく答へた。

『飛でもないこと仰せられます……兵隊が戰へば神樣が此兵隊の勝つやうに御護りになるので…………。

他の一人が叫んだ。

『和女は夫程迄に神を信じて居るのは結構じや……が……何か夫に附て確かな證據を見せんければ誰も和女の言ふことを信じまい、神も信じないのを無理とは思ふまい。

ジアンヌは猶豫なく、

『妾は別に奇しいことを申上るのでありませんから。別に證據と言て御目に掛るものは……強つてとの仰せならオルレアンの圍を

日露戰爭未來の夢　（六）　捕虜の歸化人



解いて之を證據に致しましやう。

思切つたる調子で、

「何卒兵隊を貸して戴きたう御座います。多くても少くとも構ひません妾はすぐ出立致します。

朝廷では尙疑ふて兎角評議に日を送る間に、人民の聲が高くなつて來て、何でもジャンヌに行らせた方が可からうとの輿論が沸騰したところから、廟議一決して、大命ジャンヌに降つたので、彼は思ひ通りオルレアンに向つて出陣することに成りました。

此時オルレアンは包圍攻擊を受けて、其の運命旦夕に逼つて居つた、而も、敵軍たる英兵も戰爭に於て多くの兵を損じたる上冬期を通ふして詰め切つたため全軍の士氣甚だ振はず爲に逃走する者少からず、加之四五萬の軍隊は十二ヶ所の堡塞に散在して互に連絡を欠て居る有樣、それで、オルレアンの城兵はといふと何れも不規律極まつたもので、國家の爲に戰はうなどいふ量見の者は一人もなく、皆何か戰爭で一儲仕たいなどいふ了見で立籠つた輩計りで、寔に賴もしく無いものゝみであつたが、ジアンヌが此等の城兵に向つて國家の危急、神の存意を熱心に說てから、全軍の生氣遽に煥發して非常に眞面目で且つ非常に勇敢の軍隊と成り了ふせた。

▲乙女の出陣

千四百廿九年、ジアンヌは薄弱なる一隊の衛兵と一隊の輜重車列を率ゐてオルレアンに入城し、五月四日大膽にも敵軍の前を通りてブロアに在りし軍隊を迎に行き、更に此軍隊を引連れ、再び敵前を通過して城內に入つた、此間敵軍は毫もジアンヌに向つて手出を仕なかつた、それは、啻に敵軍が弱かつたのみでなく、從容として眼中敵なき一少女の態度が如何にも不思議に堪へないので殆ど愕と恐とに打たれ、茫然自失して了つたの

である、即ちジアンヌはオルレアンの城砦中にては天使として信頼され、英軍の中には魔術者として畏怖されたのである。

自ら疑ひ自ら怖れた英軍は遂にオーギユスタン及トウルチールの兩堡砦に精兵若干を殘し自餘の城砦を引拂つて全軍ロアール河の南に退却した、併しオーギユスタンとトウルチールの堡砦は共にオルレアンとベーリーの連絡を遮斷して居るので如何しても之を陷落させぬければならぬ都合になつて居つた。五月六日ジアンヌはロアール河を渡つてオーギユスタンの堡砦を攻擊したが、敵も此所を先途と防いだので味方の死傷もなか〳〵尠くなかつた、而もジアンヌは百合の花の軍旗を濠岸へ突立て、味方を麾て突進し、難なく之を攻め落し、火を放て堡砦を燒て了つた、オーギユスタンの堅砦もジアンヌの信念に向つては僅かに一日の運命しか保てなかつたのである、明て七日トウルチールの堡砦に向つてジアンヌは攻擊を初めた、例に依り百合の花の軍旗を颯と計り右手に翳し、先頭に立つて自ら堡砦を攀ち登つた節から、雨霰と降り來る矢石にジアンヌは深手を負ふて倒れたが、ジアンヌの此負傷は却て味方の士氣を奮勵せしむる原因となり、天使を傷けた敵軍は即ち神の敵であるといふので愈が上に猛烈なる包圍攻擊を續け、遂に有名なる敵將ウイリヤムグラスダルは河に落て溺死し其手兵五百は盡く刄の銹となり、トウルチールの堡砦は陷落して了ひ敵は總敗軍となつて退却したので、味方の軍の隙さず之を追擊せんとしたとき、ジアンヌは之を遮つて言ひました。

『逃る敵を追擊して殺すのは止めやう、今日は神聖な日曜だから。

五月十三日ジアンヌはオルレアンを出發し、シャール七世へ拜謁のためツールに行き、己が腕にシャール七世の膝を抱きながら申上げた。

『殿下至急レイムに御越あつて御即位の大禮を行はせられませ、一刻も御猶豫なさる場合で御坐いませぬ、

レイムが御即位の大禮を行はせらるゝに最も適して居ることは既に神から御告で御在ました。ジアンヌの云ふ如くシャール七世の一日も早く即位の大禮を行はせらるゝは、佛國王位の競爭者たるアンリー六世に對する政略上最も必要であつた、加之從來の例に徴するにジアンヌの言ふ所常に何事も成功するのを見て、最早シャール七世を初め何人もジアンヌを信じないものはない、そこでレイムの即位式も亦ジャンヌの言ふ如く極めて無事に成功するであらうと言ふので、愈レイムに向ふことになつた、果して其沿道の市府たるパテイ、トロアー、シャーロン等皆齊く城門を開いて王師を迎へ、遂に七月十七日レイムに入り其大寺院に於て莊重森嚴なる即位の大禮を行ひ、こゝに初めて名實共に眞正の佛蘭西國王となり、ジアンヌの勳功は國民の驩呼の大にして高きだけ夫だけ大にして高きことを表彰された。

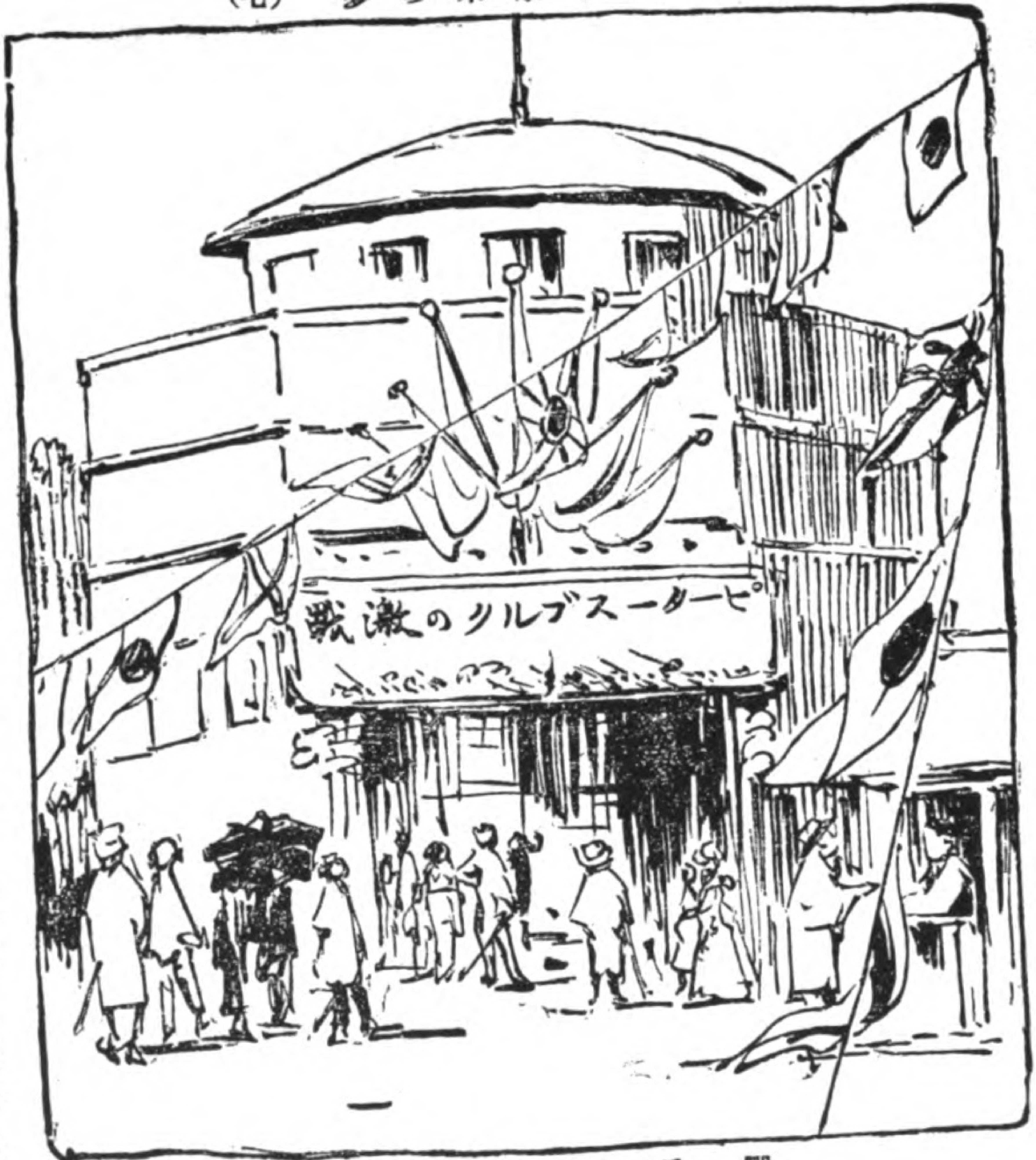
△法廷の少女

世に信念程恐ろしくも亦頼母しいものはない、己は神の受命者である、神は己を保護する、己の進む所水火も犯すことが出來ない、矢石も傷けることが出來ないと堅く自ら信じたればこそ少しも兵を用ふるの術を知らぬ一少女のジャンヌが、孤軍奮闘、常に軍旗を手にし、先頭に進んで見事オルレアンの圍を解き、シャール七世をしてレイムの大寺院に於て神聖莊嚴なる即位式を執行せしめ彼をして初めて名實相副ふ所の眞正の佛蘭西國王とならしめ奉つた。

兼ての理想通りオルレアンの包圍解除と、レイムの即位式とに成功したるジャンヌはこゝに甲冑を解き劍を抛ち、再び可憐なる一少女としてドムレミーの小村に老たる父母、無邪氣なる同胞等と共に、平和の家庭を樂み朝に夕に神聖なる寺院の説教を聽き安らかに生涯を過し得たなら、如何に幸福であつたらう、否敢てジャン

ヌのみの幸福でなく、果して斯の如くであつたなら當時の佛國々民は大恩人を見殺にしたとの識誹を後世に貽さんで濟むだらうし、又敵たる英國人も千載拭ふべからざる殘虐の名をとらんで止むだであらうに、運命は之を顧みることなく、ジアンヌを驅つて、シャール七世を奉じ、更に巴黎に向つて進擊の態度を取らしめた爲め遂に佛蘭西の歷史に慘憺たる血濺の痕を止むるに至つた。

日露戰爭未來の夢（七）



戰爭パノラマ

豫て英人の力を藉り己の野心を遂げんと企て居つたブールゴーギュ公に反抗して、シャール七世の爲にコムピエージュの市府を防衛して居つたジアンヌは、千四百三十年五月廿四日一度突進して敵の圍を衝て見たが、戰利あらずして城内に取つて返さうとすると、案外にも城門は閉じられて入ることが出來ない、無殘にも單騎敵の大軍の裡に取り殘されて、遂

に馬より引墜され、ヴァンドームといふ者の手に捕虜となり、ジアン、ド、リユクザムブールといふ者の手に引渡されたが、此ジアンと言ふ奴は豫てブールゴーギユ公の庇蔭に頼つて己の野心を遂げやうと考へて居つたので、ジアンヌを公に引渡した、すると豫て英人と氣脈を通じて居る公は猶豫なく一萬法の金貨と引換に之を英人に賣渡した、佛蘭西の國家の爲には生命として國民の爲には大恩人として日月と輝き渡つたジアンヌの身体もあはれ僅に一萬法の金に換へられ而も同胞たる國民の手から外敵の手に投せられて了つた、ジアンヌは深く神を信じ居つたにも關はらず、神は彼を哀しむべき末路に驅り入れて了つた、あゝ神は果して存在するや否やと、流石の彼も疑はさるを得なかつたであらう。

敵は愈ジアンヌの罪科を定めるといふので、之が裁判長となつたのはピエール、コーションといふ僧侶で是亦豫てルーアンの法領を英人の力に依て獲んことを希望して居るので、常に英國人の鼻息を窺ふ曲者であつた故、ジアンヌの爲めには重ね〴〵の不幸であつた、のみならず、ジアンヌは魔術を行ひ、兩親の意思に背て兵器を採り、男裝を爲し、尙宗敎機關に於て許されなかつた宣言を唱へ庶民を誑かしたといふ四ヶ條を以て、宗旨違反の罪に問はれ、右のピエール、コーションといふ不正なる裁判長の下に、一人の辨護人も一人の無罪證明人をも許されず、裁判を受ねばならぬことゝなりました。

風姿颯爽手に軍旗を翳し、千兵の眞先に立つて敵軍に突入したジアンヌと、今法廷に立つて悄然として居るジアンヌとは、全く別人の如く彼時のジアンヌは鬼神も避くべきジアンヌであつたが、此時のジアンヌは小鳥も狎れて肩に止まらん計りのジアンヌである、されど裁判長が威嚇氣味に浴せ掛けた審問に對し、從容として應ふる辭の中には嘗て此可憐の小女をして、鬼神をも凌がんずならしめた其信念が隱見るのであつた。

裁判長ピエール、コーションは、高き席から鷹揚にジアンヌを見降ろしながら、

『ジアンヌ、貴樣は今ま自身を幸福であると思つて居るか、
ジアンヌは靜に、
『ハイ妾が幸福でなかつたら神樣は乾度妾を幸福に仕て遣らうと思つて下さるのです、妾が幸福であれば神樣は永時も此幸福を妾に與へて置かうと思つて下さるのです。
『貴樣は手に持つた軍旗を衆人に示し、此旗の下に働けば幸福は思のまゝだと公言した覺があらう。
『否へ!!決して开んな事は申しません、妾は唯毫も恐るゝことなく英吉利軍の中へ飛込めと叫んで自分が眞先に飛込だばかり……。
ジアンヌはいとゞ自信の色の滿ち〳〵たる顏色にて、
『敵の眞中へ飛込は仕ましたが後にも先にも妾は一人の敵も殺したことはありません、
『レイムの即位式はなぜ外々の大將達の軍旗を措て、貴樣の軍旗のみを樹てたか、
『此軍旗の御蔭で妾は王樣を御救ひ申したので、言はゞ此軍旗は王樣の爲の大恩人ですから、晴の儀式に之を樹てゝ、此軍旗の名譽を表はした迄のことです。
『多勢の奴が爭つて貴樣の手や足或は着衣に取附て接吻したといふが、彼等は如何いふ思慮で开んな仕業を爲たのか。
ジアンヌが答は實に天眞爛熳であつた。
『妾は一ツも彼等の厭がることを爲なかつたから、彼等も妾を厭がらないで接吻を仕たのでせう。接吻を仕て迄私を慕つて來るのですもの、とても振切ることは出來ません、ですから妾は自分の出來る限り彼等を保護しました。

『貴様は父や母の許容なく家出を仕たのを惡いことゝ思はぬか。

『父さんや母さんは寛大に見て與れました。

『寛大に見て與れたと言ふからには、多少自分に好くない所が有ると思つて居るのだらう、

『否決して惡いと思ひません、妾は神様の仰せに從つて家出を仕たのですから……假令父や母が百人あらうとも妾は神様の仰言があればサツ〳〵と家出を仕ます。

『貴様は國王がブールゴーギユ公を殺したのを惡いことゝ思はぬか。

『王様とブールゴーギユ公との間に如何な譯柄があつたか存知ませぬが、妾は公は兎に角佛蘭西の王様の御位に仇をする人であつて、神様は此王位を安らかにするために、妾を王様の方へ御遣になつたものと今でも思つて居ります。

『神聖なるカトリーヌやマルギエリツトは英吉利人を憎んで居らるゝだらうの。

『耶蘇の愛して在つしやる人間は、カトリーヌやマルギエリツトも矢張愛して在つしやるで仕やう。

『耶蘇は英吉利人を憎んで御坐るかなツ。

裁判長は透さず切り込んだ。

此時ジアンヌが落着拂つて答へた辭は極て簡單であるが、其實千萬言にも立優つて天地を貫くべき大斷案であつた。

『耶蘇が英吉利人を愛して在つしやるか憎んで在つしやるか妾は知りませぬ――が……妾は堅く信じて居ります、死んで了つた者は仕方がないがまだ存命て居る英吉利人は佛蘭西國の内に居るべき筈のものでないと堅く信じて居ります。

此斷案は裁判長に止を刺して了つた、裁判長は最早此上彼是無用の辯を弄するを得なかつた、のみならず實はジアンヌの刑罰は豫め定まつて居つて唯審問の答辯中或はシャール七世の落度となるべき辭でもありはせぬかといふ希望から、此審問が開かれたので、ジアンヌの爲には全く無用の取調に過ぎなかつた。

ジアンヌに對する豫審は斯の如くにして終結し、ジアンヌは再び獄に投＊せられて在る間に、彼が一度殊死して守つたコムピエーギュの城砦の圍が解け、引續て英國同盟派の軍隊が到る所敗軍の狀況に陷つて、ジアンヌが一度鼓吹した憂國の觀念が着々效を奏するやうに成つて來た、そこで、當時ルーアンに駐在して居つた英將のロード、ワルウイックは斷然ジアンヌを火刑に處して、佛國々民軍の氣勢を挫くことに定めた。



日露戰爭未來の夢（八）鎌倉山神社

▲刑場に於ける乙女

或る日曜日の朝兼てジアンヌを警護せる獄丁の一人が、シアンヌの持つて居つた婦人用の衣服を盡く奪上げ、一枚の男子用の衣服をジアンヌに殘した。斯て法廷に引出されたるジアンヌは宗旨に背ける不埒者として遂に生ながら火に燒かれねばならぬとの宣告を受けた。

火刑の宣告を聽いたジアンヌは、意外の威に打れたと見え忽ち身を打俯せ、我と我が頭髪を引掻り、潸々と涙を流しながら、

『何故开んな慘虐情ない咎を受るのですか、妾の身体は潔白でまだ汚され辱められたことがないのに、何然〳〵燒て濟めねばならぬのですか……寸裂〳〵に斬り刻まれても可いどうぞ火でやくだけは許して……。

聲を限りに泣て〳〵號泣んだが頓て、

『ア、何も彼も唯神様に御任せする外はない。

覺悟を極めたジアンヌは九時を合圖に馬車に乘せられ刑塲へと導かれた。

ジアンヌは敵の手に渡され審問を受し間も、牢獄の裡に在りし間も、頓て國民軍が英國軍及其同盟軍を打攘ふて、無殘なる敵の手から、已を救ひ出して與れるであらう、と待つて居つたが國王及國民が一向其義務を果しそうにも見へない、されどジアンヌは毫も落胆しないで、此上は神が必ず救ふて與れるものと堅く信じて疑はなかつた、だから愈火刑の宣告を受た時には實に意外の又意外であつたのであるが、一度覺悟を極めた彼の心は恰も雲行き水流るといつた工合で最早シャール七世に向つても神に向つても一點怨みがましい考を有たす、劍影刀光閃き渡る八百の衞兵に取圍まれ、ルーアンの市街に動搖く群衆の聲に迎へられ、車を驅らせた

時に。

『アヽ!!ルーアン、ルーアン、妾は今ま此所で死なねばならぬのかね。

些に此辭を洩したのみであつた

頓て刑場に着て馬車から引出され熟々場内の樣子を見渡すと、三ッの高壇が築かれてある、其一ッは英吉利の大僧正の席で、多くの僧侶が詰掛て居る、今一ッは裁判長及陪審官の席で、他の一ッはジアンヌが引上らるべき刑台であつて、一段高く中空に聳へて搆へられ、其根方から薪が山の如く積み上られてある、かく殊更に刑台が高く築かれたのは死屍を引出し之に火を懸るといふ從來有りふれたる儀式的の火刑でなく、刑台の根方より火を懸け生ながら燬かれる有樣を、萬人の眼に晒さしめようとの用意からであつた。

愈恐るべき刑の執行に取り掛り、巴里大學名譽敎授の一人なるニコラス、ミルデイは嚴格にジアンヌに最後の宣告を爲した。

『敎徒一人の病氣は取も直さず敎會全体の病氣に外ならぬ、敎會全体の病氣を癒さんには病氣に罹れる一人の敎徒を犠牲に供せんければならぬ……

一寸辭を途切つて、

『ジアンヌ、覺悟を極ろ、敎會は最早貴樣を庇ふことが出來ない。

最早助からうと思つて居らぬジャンヌは、素直に跪き空を仰いで神に謝したる後、やをら周圍の群衆に向ひ聲高らかに、

『どうぞ妾の爲に一遍の御祈禱を……

流石に聲曇らせて、更に打并びたる僧侶に向ひ、讃美歌の一節を乞ふた時は、滿場水を打つたる如く誰とて顔

を揚げ居る者なく、僧侶も俗人も齊く同情の涙を絞り、嚴刑の主張者たる英國人すら、憐れの涙を催ふさぬ者は一人もなかつた、ジアンヌは更に後生の爲め一箇の十字架を與へられんことを乞ふたので、一人の英人が木製の粗末な十字架を與へるとジアンヌは心から嬉しそうに押し戴き暫時頬に當てた後之に接吻を爲し更に被服の下へ入れピッタリと之を肌に附た。

彼是する中、最早三時間計を經過して正午近くになつたので、英兵の間に切りに罵聲を聞くやうになり、中には

『如何したんだ愚圖〳〵して……、我々に此所で晝飯を御馳走する積りかなッ。

一生の名殘なる哀れな境遇を、眼の前に仕ながら憎々しい毒口を利く者もあつた、忽ち二人の雜卒ツカ〳〵と進んで引奪るやうに手荒くジアンヌを僧侶の手から引放し、其兩手を左右に強く引立てながら、叫びました。

『ヤイツ神妙にしろ。

雜卒の處置が荒々しく無慈悲なだけ夫だけジアンヌの哀れさが目に立つて、正面に見詰て居る者は一人もない、頓てジアンヌが惡びれずに高き刑臺の上なる、●●●●背教の大罪人と掲示された標柱の下に、緊り附られた時、今迄明るかつた大空いつの間にか裏悲氣に掻き曇り、風落て萬籟聲なく、天も地も哀れに寂しき景色の裡に打包まれ、眼に映つる總ての現象唯是死といふ一字を以て形容するの外なかつた、ジアンヌは刑臺の上からルーアンの市街と、肩唾を呑で押し掛けたる雲の如き群衆とを靜に見降しながら、坐ろに感慨に堪へないかの如く嘆息の聲を洩した。

『ルーアン、ルーアン汝にはとても妾の心は分るまいね。

他人の爲に善事を爲し而も悲むべき應報を受るといふことは、不幸中の不幸であつて、如何に悟を開いた人と

雖も、口に愚痴を言はぬ迄も心に情ないと思はぬ者はあるまい、ジアンヌが最終の際に身の捨所なるルーアンの市街を瞰下し、嘆息の聲を洩したのは寧しろ人間の眞相を發揮したもので、物の哀は茲に極つてゐる、されど無殘なる刑吏の手に依つて置かれたる無情の焔炎は、物の哀の何たるを知らず顔に、早や刑臺の下より凄き音をたて、渦卷く黒煙の中より紅の舌を吐くと均しく、煥乎と飛散る火の粉は、濃灰色の大空を一帯金色に染めて其が反射を受くる地上の萬物恰も錦と輝く中に大空を摩して築ける高き刑臺に、一點雪の如く淨らに光るは、ジアンヌの白衣の姿、皓々として濁り汚れた浮世の闇を照すが如く、滿目の風光殘酷と言はんより寧しろ莊嚴で恰も基督昇天の繪畫を擴げた如くであつた。

今を最期と見受たる裁判長コーション僧正は、流石に良心に驅られてか刑臺の下から

『何か言ひ殘すことがあるなら……。

聲を掛けると、ジアンヌは靜に見降しながら答へた。

『僧正樣 妾は貴下の御蔭でこゝに死ます、若し……教會の手に渡して下さつたなら。

皆迄聴かず、僧正はブル／＼と身を慄はせ逐に得堪へずワナ／＼と其場へ倒れた。

唸れる炎は風を生じ、風は怒つて炎を煽り、見る／＼ジアンヌの身を包み了ると見る途端、

『耶蘇ッ!!!

との一聲、高く鋭く空を劈いて四百餘年後の今日に至る迄、猶其響を傳へて止まぬのであつた。

（畢）

大阪城中の烈婦

岫雲小史

史上に顯はれたる日本婦人の事蹟に就ては見るべきもの尠からず、就中貞烈、勇武、才藝の部類に於て甚だ多し、紫式部、清少納言は才藝を以て顯はれたり、神功皇后、巴御前は勇武を以て顯はれたり、細川忠興の妻、山内一豊の妻は貞烈を以て顯はれたり、而して爰に貞烈にもあらず勇武にもあらず、又才藝にもあらずして世に顯はれたるもの甚だ多し、尼將軍政子の如き、北條時頼の母の如き、楠公正成の妻の如き、瓜生判官の母の如き、春日の局の如き、和氣清麿の姉の如き、光明皇后の如き即ち是なり。或は簾中政治家として、或は慈善博愛の人として、或は良妻賢母として或は勤王家として、或は保姆として或は婦人事業家としての如し。

婦人に尊ぶ處ろは品性の高潔なるにあり、道德の堅固なるにあり、志操の正しきにあり、婦人は其の天性如何に豪邁なるも若し道德にして堅固ならざれば其人を取らず、たとへ其の事業は如何に花々しきも若し其品性にして疑はしきものあれば斥けて齒せしめず、是れ婦人の男子と異なる處ろなり、是を以て貞烈は才藝よりも勇武よりも世に尊まれて萬人の龜鑑となること多し、彼の袈裟御前と稱する一婦人が身を殺して貞操を全ふしたるが如きその一例として見るべし。爾來袈裟と稱する一少女の行爲は日本婦人の龜鑑とし典型として數百千年の間婦人の德操を維持せし處ろ少からざりし。是の點に於ては才藝千古に卓絶する紫式部の文章も、豪邁一世を蓋へる尼將軍の事業も復顏色なきがごとし。

源平のむかし常磐と稱する婦人あり、源義朝の妾にして三子を生み、時運利ならずして敵の爲めに捕はれ大な

る醜辱に遭へり。而かして世人は此の婦人を以て貞烈の龜鑑となすもの〻如し。其の理由とする處ろに曰く、常磐は源氏の血統を活さん爲めに甘んじて敵の醜辱を受け、甘んじてその操を破りたるものなり、彼れは小なる操を破りて大なる操を立てたるものなりと、是れ謬見の甚だしきものといふべし、抑も婦人の操は婦人の生命にして唯一つの外にあるべき理なし、一個の操は一個の生命なり、その生命に二つなきが如く操に大小のあるべき理は斷じてあるべからざるなり。常磐にして一たび敵に操を賣れば常盤その人の操は既に破れたり、婦人としての生命はそれ限りのものなり。三子の死活源氏の血統の斷續は元より問ふ處ろにあらざるなり、彼れは實に一個の多情なる淫賣婦として見るべきものなり。淸和天皇の後胤にして日本武將の棟梁歷世の名族たる源氏の閨門より此の如き醜婦を出したるは千古の缺點萬代の汚辱にして實に其家の大瑕瑾大汚點といふべし。常磐にして眞に貞操を重んずるの心ありたらば何故にその三子を殺して其の身を潔ふせざりしぞ、敵の恩惠によッて三子を活かし、而してその身は辱しめらる、日本武人の志氣を如何せん。後年鐵拐嶽に勇を振ひし九郎義經の成長を見て世人は常磐の破倫必らずしも徒爾ならざりしを喜ぶと雖も彼れや既に淸盛の恩惠によッて一命を支へしものなり、源氏の成功にあらずして寧ろ淸盛の成功と稱すべきのみ、名は義經と雖も義は平家の被恩たり平家の被恩にして成功す、これ斷じて源氏の成功といふべからず日本人の士氣は決して此の如き薄弱なるものにあらず。士は戰ふて死すとも捕虜たるを恥づ、婦人は難に臨んで一死あるのみ、是れ士人の消極的成功なり、是れ婦人の消極的成功なり、若し常磐にして捕虜たるを恥ぢ、三子を殺して身を潔ふせば其の壯烈や眞に千古の偉觀として見るべきものありしならんに惜むべし。

袈裟を賞めたる國民は復た常磐を賞めたり。身を殺して貞操を全ふしたる婦人は元より尊むべしと雖も一家の安全を冀ふて操を破りたる婦人を尊むべき所以何處にかある、況んや彼れを後世婦女子の龜鑑とするに於てを

や、予輩は斷じて是れを非とするものなり。

日本歷史の上に於て貞操にもあらず、勇武にもあらざる一婦人にして境遇の誠に悲しむべきものあり而も世人は是れにあまり多くの同情を注がざるがことし。豐太閤の妾にして秀頼の生母たる淀君即ち是れなり。彼れは常磐の如き弱き婦人にもあらず、袈裟の如き壯烈の婦人にもあらず、さりとて又尼將軍の如き英邁剛毅の傑物にもあらず、彼れ天性巧慧にして婦女子の弱點たる榮華を欲ふ事甚だしく爲めに其の悲運を速きたるも、其の意氣の豪なる抱負の大なる自家の滅亡を賭して猶よく大敵に拮抗したるの槪ある流石に豐家の後閨といふべし。世に淀君を稱して多淫といふ、或は然らん、然れども多淫は不貞操にあらず、淀君瑕瑾多しと雖も敵の恩惠に依つて家門の安全を冀ふが如き不貞操の婦人にあらず、家を



日露戰爭未來の夢（九）

亡ぼし、身を殺して以て豐家の面目を全ふしたるは偏に淀君の情操の潔美なるに依らずんばあらざるなり。

其一

淀君名を茶々といふ、父は戰國の名門にして元龜天正の際に當ツて京畿の重鎭なりし淺井長政なり、而して其母は織田信長の妹なりしを以て淀君は生れながらにして右大臣家の令姪たり。此の如き名門の出たる淀君が如何にして信長の家人より起りし秀吉の妾となりしかに就ては爰に須く武家盛衰の跡を尋ねざるべからず。抑も淺井長政は江川小谷の城主として久しく近畿に威を振へり、當時信長天下に志を成さんと欲するに就ては勢ひ一時淺井と和せざるべからず、爰に於てか例の政略結婚は營まれたり。信長の令妹お市の方妙齡にして美なり、即ち長政の正室として小谷城に入輿す、世に之を小谷の方といふ、既にして信長京畿に志を得、積年の希望を遂すると同時に淺井氏との



歸休兵

和再び破れ、長政英勇の資を以て遂に信長の爲めに滅されたり、淺井氏滅亡するやお市の方は織田家へ歸りしが當時その腹に三女を儲けたり、淀君は即ちその長女なりし。

斯くて一旦寡婦となりしお市の方は織田家に歸るや間もなく三女を伴ひて柴田勝家に再嫁せしが、勝家も又武運拙くして信長薨去の後程なく秀吉に亡ぼされ天正十年四月越前北の庄に於て夫妻共に潔く自盡を遂げたり。

父なる長政は叔父信長に亡ぼされ、母なるお市の方は臣秀吉に亡ぼされて亡命の身となりし茶々御前の運命又數奇の極といふべし。而かも寛仁大度の秀吉この憐れむべき遺孤を殺すに忍びず、三女を收容して我が大坂城中に引取り保姆に托して養育するに至れり、時に茶々歳僅かに十三歳。

抑も秀吉匹夫より起ッて天下を掌握し海内の群雄を馭してその臣妾となし、度量の海濶なる意氣の豪邁なる眞に今古獨歩の傑にしてその行爲は一般繩墨を以て論ずべからず、彼れ茶々信長の姪にして又其の養女たり、信長世に在らん限りは秀吉も又茶々に臣從せざるべからざるものなり。而かも秀吉之を採ッて後閨に容る。彼れが四海に君臨するの度量以て見るべく、又茶々が婦人として榮華の絶巓を望みたるの志見るべきなり。

秀吉に正室あり杉原氏といふ淺野長政の姉あり、秀吉が微賤の時迎へし所謂糟糠の妻にして淑德高く内助の功甚だ多し、されば秀吉天下を掌握して威權海内を壓するや杉原氏は北の政廳と尊敬され恩顧諸將の人望を博せり、されど不幸にして子なし、茶々が秀吉の寵を得るに及びて自から權勢の地位を避け以て消極的婦人の美德を完ふしたり。

其二

天正十七年秀吉近畿の工を督して淀城を築くや別殿の壯觀美麗天下に比なし、即ち茶々を是に移して以て寵を

加ふ、茶々が淀君と稱せしは即ち是に由る、程なく秀頼は生れたり、豊臣家の嗣是に定まつて淀君の權勢も、又頗る群雄の間に顯はれたり。

豪氣四海を吞み、餘勢大明に震ふと稱せし濶達なる秀吉殿下の側室としてその寵を一身に集めたる淀君、彼れ是れを以て列侯、群雄の間に臨む、加ふるに伶悧慧巧意氣亦頗る高し、その一顰一笑に至大の價値を生ずる元よりにして依て以て人物駕馭の術となすに足るべし、豊臣氏の執權にして稀世の才人石田三成は、夙に淀君の眼中に落ちたる英雄にして相結ぶ事尤も深く、爾來自から淀君腹心の謀士を以て任じ、隱然淀君黨の首領たりき。

淀君は豊公の副閨にして亦嫡子秀頼の生母たり、而して北廳は正閨にして、子なし、この間の關係を考ふる又一段の興味なしとせず、日本從來の家庭の風習よりいへば上は宮廷の奥向より下庶民の閨門に至るまで正室は主人にして側室は婢妾なり。否是れ日本のみならず正側主從の關係は亞細亞大陸一般に通ぜる閨閤の狀態なり、故に此點よりいへば北廳は主人にして淀君は婢なり、是れを世俗流にいへば北廳は奥樣にして淀君は召使なり。されど双方の血姻を正す時は主從の關係は双方地を代ふるに至るこそ奇怪なれ、即ち主人たる北廳は信長の臣下たる足輕大將の娘にして、婢妾たる淀君は北廳の主公たる信長の姫君なり、タトヱ戰國爭亂の際とは雖も主從立どころに地を代ゆるは奇なる現象といはざるべからず、爰に於てか北廳は太閤微賤の際より刻苦艱難し數十年一日の如く辛酸相分ちて稍くにして今日の地位に至りしも淀君側室に擧げらるゝに至りては遉がに主公從前の恩誼忘れ難く、我が家に取つては一の婢妾に過ぎずと雖も元を糺せば正しく我が主公の養女にして血を分けし姪君に渡らせらるゝものから是れに對して主の權威を以て臨むはあまりに唐突の嫌あらんを察し、彼れが天性賢明貞淑の德こゝに顯はれ、遂に自から權勢の地位を去ッて世を忍ぶに至れり。

去りながら北廳は秀吉が糟糠の妻なりしを以て其立身に就ては內助の功多く、豐臣恩顧の諸將にして北廳の惠被を蒙らざるものなし、されば一個人としての北廳は退隱を欲するも多年恩顧の諸將は是を以て豐家の不利となし血氣の勇士は爲めに躍起となりて北廳を立てんとせり是に於てか正側兩室勢力の爭を生ずるに至れり、人情の方面より說き及ばせる史家の言に事新らしくいふまでもなく正室は主人にして側室は召使なり、されど召使も權力を得れば正室と爭を起す場合もあらん、この爭は附く人の多少によつて勢力に大小の出來るわけならんが、何をいふにも淀君は妾とは言ひながら血筋



を尋ねれば右大臣家の養女なり正室は元と臣下にして微祿な家より出しものなり、併し太閤は濶達宏度の英傑なるが、その英傑が天下の主となりしものは畢竟この正妻の內助の効の莫大なりしに由る一方は妾ながらも素性よりいへば

大に遠慮すべき人、一方は微賤の出ながらも正室なり、彼是して太閤の奥向はこの二大勢力の爭となりたり。一方は淀君の黨派、一方は北廳の黨派、北廳は元より貞淑の方榮耀なる太閤の奥向に於て他人と勢力を爭ふなどは好まれざりしも、以前北廳が微力の折柄

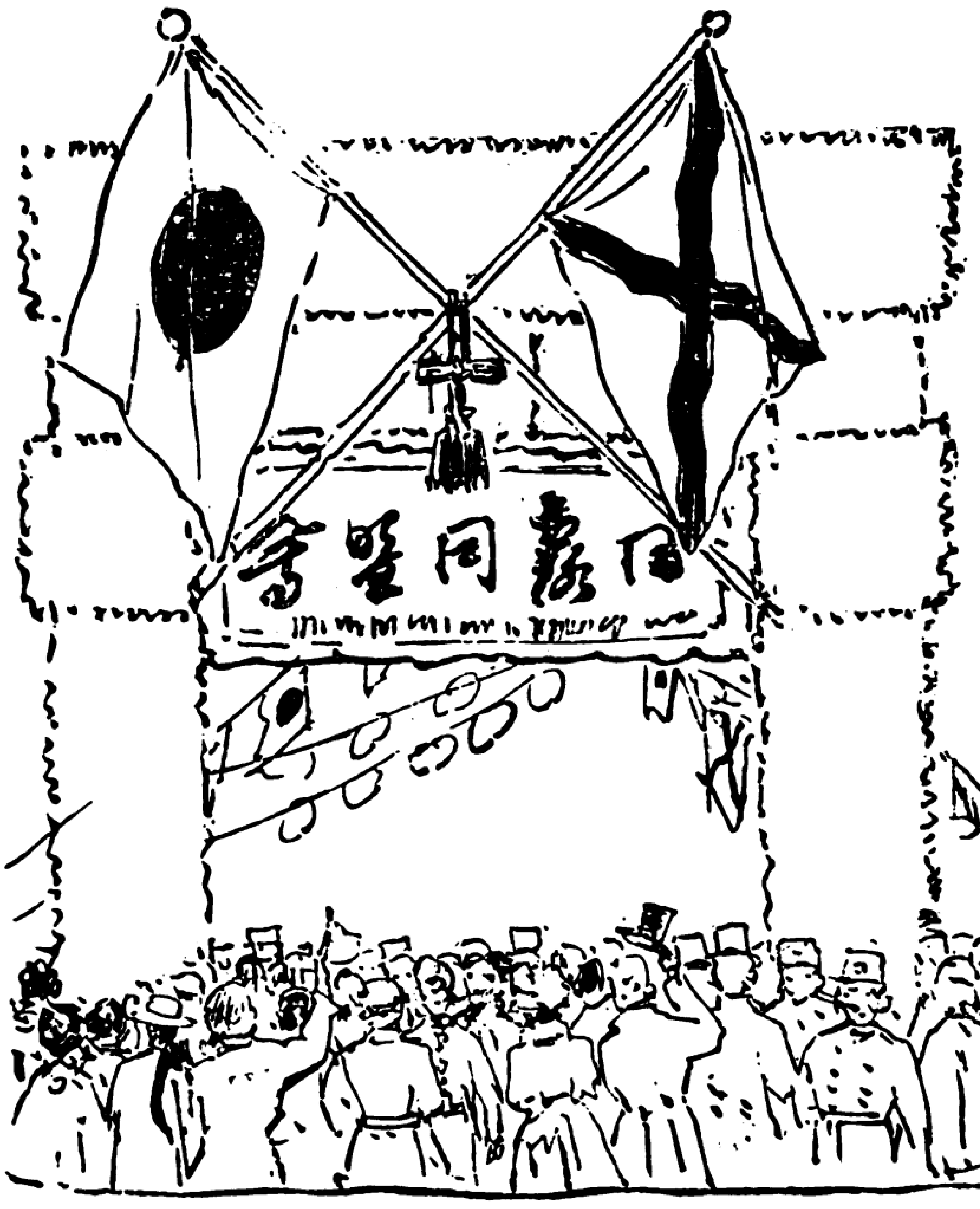


數限りなく手馴づけ置きし家來共今日に至つていづれも堂々たる大武將、大諸候となれり。其の人口は加藤主計頭清正・福島左衛門大夫正則を始めとして淺野幸長、黑田長政、池田輝政、加藤嘉明、細川忠興、其外武功の勇將は數ふるに遑なし中には隨分歷々の人の種もあらん又草莽の間に鋤鍬を把つて働らき居たる農民の子もあらん、それ等を一々撰拔して武術を教へ、甲冑を着せて一人前の武士に仕立てるまでの面倒と丹精とを見しものはこの北廳なり、故に北廳は是等の諸侯に取つて大なる恩人なり、故に是等恩顧の諸將が北廳の衰ふるを見るに忍

びず。太閤の奥向には新參なる淀君、又榮華を欲して家の爲に不利なる淀君に勢力を占めさせつゝ、默視し能はざりしも又自然の情ならん。次に今一つは北廳と淀君との間に於ける恩愛的關係なり。單に主從、單に正室、側室の關係は一遍皮想の事柄にして又双方の人情を盡したるものにあらず、寧ろこの恩愛的關係を見ること尤も双方の事情を說明する適切の材料にして又尤も人情の奧秘を穿ちたるものなるべし。然らばその恩愛的關係とは抑も何ぞ、淀君は十二歲の折養父柴田勝家北の庄に沒落して寄る邊なき孤兒となれり。其時淀君を始め同胞の妹二人を豊臣家に引取りて養育せしは全くこの正妻北廳の慈悲心より出たるものなり、北廳は智德圓滿の賢婦人にして其の眼中には敵も味方もなし、殊に戰國紛亂の世の常として一時の敵味方は論ずるに足らず、まして柴田勝家は織田家の宿老にして秀吉も永く其の下風に立ちたるものなり。その養女たる淀君以下の小妹は皆舊主信長公の姪なり。斯る因緣の深き姬達の亡命して途方に暮るゝは實に憫然の至りにして婦人の情として忍ぶ能はず、依て三人の姬を自家の膝元へ引き取り朝夕慈愛を加へて守り育てられたり、殊に子のなき北廳の事故その慈愛も又一倍にして或る日の事北廳手づから淀君の髮を結びてやり、美くしく飾らせて秀吉の前へ伴ひ行き、「茶々も成人遊ばしてこの通り、母君に似て美はしう見へ玉ふ」とあれば秀吉其の髮の風を見て大に笑ひ、「おやゝ(北廳の名)は田舍に育ちたれば髮の結び振も田舍めきて見ぐるし、茶々には京都の髮こそ似合ふべけれ、京女の手にかけてよとて興じ玉ふ。」

北廳の恩愛の著るしかりしはこれを見ても知らるゝなり、されば北廳の心には年長じなば、然るべき名家へ入輿させて恩義を全ふすべしと期したり淀君も又北廳を見ること實母のごとく、隔心なく馴れ親しみて何與となく我儘を言はれしなり北廳と淀君內實の關係誠にこの如し。然るに奇想天外より落つるが如き秀吉の行動こそ驚ろくべし、彼れ北廳の恩愛たるこの一少女をいつしか自家の側室として閨中に容れ、正妻の面

前を憚からず振舞ひたるは奇怪至極とや言はん。遉がの北廳もこれには呆れ果てられしなり。英雄の行事端倪すべからずとは言へ豊臣の家に禍の生ずる前兆と見しものから折に觸れて忠言を加へられたるその言葉の中に「茅の蕭に缺盃の昔時を忘れさんしたかあまり奢らさんすと罰が當りんこと」と言はれたる事あり。北廳の此の苦言。これ必らずしも淀君に對する嫉妬心にあらず。秀吉が、いまだ木下藤吉郎たりしむかし、茅の蕭に缺盃にて婚禮せしはこの北廳なり、その秀吉今關白となつて金幣を見ること土芥の如く、天下の珍寶を一身に集めて驕奢王公を凌ぐの有樣となりしを諷したるものならん。されど北廳は淀君の事を深くは爭そはざりし。二人恩愛の關係實にこの如し。當時北廳は五十餘歳の老



日露戰爭未來の夢（十）　同　國　會

婦人。淀君は芳紀まさに十六歲、以てその間の事情を知るべし。爾後正側兩妻權勢の爭ひは暫時にして、太閤薨去の後は墨染の法衣に水晶の念珠、譽れは高き高臺院となり澄されたり。

其三

慶長二年太閤薨ず、諸將皆泣けり、その泣くは太閤の恩誼を懷へばなり、而して德川家康の勢望獨り熾んなり、諸將皆家康を嫉む、その嫉むは天下の權の德川氏に歸せんとするを以てなり。淀君の腹心たる石田三成は就中その最も家康を嫉みたるものなり、抑も三成は太閤在世の時豐臣氏の執權として久しく天下の群雄を繩取したるものなり、此の人元と秀吉の豎童なりしが、才氣絕倫にして機智湧くが如く彼れが日常の行爲は、彼の英邁闊達なる秀吉の意表に出で丶巧みにその胸臆を解しその奧秘を穿ちしかば、秀吉其の奇才に感じて屢々之を登用し、汗馬の功なくして遂に之を帷幄に參畫せしむるに至れり、秀吉群雄を征服して太閤となり、天下の政權其の手に歸するや、三成は即ち其の執權として海內の政令を沙汰し威權赫々六十餘州の候伯悉く其の命に服從し又一人の背くものなし、是に於て三成の得意其の絕頂に達す、謂へらく天下の事易々たるのみと、されど得意全盛の境は久しく保つべからず、秀吉薨じて後天下の群雄各々自立の志あつて豐臣氏の威望前日の如くならず、表面豐臣氏の遺命に背くものなしと雖もその裏面に入ては群豪各々割據の志ありて是を馭せんこと容易にあらず、而して其の巨魁と目すべきは彼の德川家康なり、家康は百錬千磨の名將にして武强天下第一の人、太閤全盛の時と雖も其の武强の點に就ては一步を讓りし程なれば、家康の眼中三成を見ること未熟なる靑年に過ぎず、之を以て秀吉薨去の後豐臣氏の制度を縱まゝに改革して憚かる處ろなし、加ふるに三成の手足を箝束することと甚だしかりしかば三成憤慨措く能はず、謂へらく彼れ豐臣氏の患害を成す大敵なり、倒さずんばある

べからずと而して家康の勢望は秀吉薨去の後朝日の昇るが如く天下諸侯の間に高まり來ると同時に豊臣氏執權の威は俄然として地に墜ちしかば、三成いよ〳〵以て欝憤禁ずる能はず、遂に家康排斥の策を立て、是を内にしては平素意氣相投ずるの淀君に謀り、是を外にしては肝膽相照すの上杉景勝に牒じ、毛利、浮田、小西、長束、増田の諸將と相結びて一大軍を組織し以て家康を討たんとせり、然れども家康は三成の反對者たる豊臣恩顧の諸將と姻戚相結びて一大軍を組織し以て之と對抗し、之を關ヶ原に破り遂に大權を其の手に收めたり。西軍の關ヶ原に破るゝや、西軍の根據地たりし大阪は事實の上に於て敗軍者の待遇を受くるに至れり、されば外藩の諸大侯は元より豊臣恩顧の諸將も又德川氏の天下に朝覲して、大阪は自然孤立するに至れるも亦止むを得ざるの勢といふべし。

その意氣豊公を凌ぎ其の才幹群雄を駁し、加ふるに美貌絶倫、六十餘州の侯伯を其の膝下に致して以て之を臣從せしめたる淀君、奚でか之の形勢を坐視するに忍びんや。關東何者ぞ、彼れ太閤の好誼によつてその地位を全ふしたるものなり、家康何者ぞ、彼れ我が伯父の庇陰によつて僅かにその覆滅を免かれたるものなり、然るに今關ヶ原に捷ちて天下將軍の位に居り傲然として大阪を藐視す是れ人間獨立の体面より見て大阪の忍ぶ能はざる處ろなるべし大阪の勢衰へたりと雖も、太閤恩顧の將海内に普ねし、よろしく此の金城に據つて以て戰を宣せば關東亦恐るゝに足るものなしと。大阪城割據の計畫はこの如くして畫かれたり、是れ元より一家の私戰に過ぎずと雖も人の獨立心はよろしく此の如くあらざるべからず淀君の意氣又壯なりといふべし。

其　四

慶長十六年豊臣家の繼嗣秀頼長じて二十二歳となる、大阪方は此の年を以て關東に對し宣戰の檄を發せり、當

時秀頼の敎書によつて大阪へ集りたる者諸國の浪士九千人に及ぶ、是れ皆一方武功の士なり、この外雜兵を合せて十萬と號す、然れども關ヶ原の役を去ること既に十年に及び、海内の形勢既に定まりし曉なれば郡國有土の侯伯にして大阪に欵を容るゝもの一人もなかりしは時勢の然らしむる處ろにして復如何ともすべからざりしなり、其の浪士中にて一方の大將たりし者數名、後藤基次、眞田幸村、長曾我部盛親、毛利勝永、塙直高、仙石宗也等其の錚々たるものなりし、就中眞田、長曾我部は門閥の人なり、後藤、塙は驍勇絶倫の士、彼れ等にして若し戰國爭奪の際に出でしならんには一國一城の大守となるは勿論、以て五六十萬石の大諸侯とならんと難きにあらざるべし。當時家康眞田を招くに五十萬石の提封を以てす、幸村應せずして曰く我が父昌幸既に關東に歸服して軍勢を致す、父子の情として關東に歸すべきは當然なれども既に右大臣(秀頼)の敎書によつて今大阪に入るを約す、大阪亦我れに授くるに一方の指揮權を以てす、縱へ戰利あらずして身死すとも誼は背くべからず、我れに於て亦遺憾なしと。幸村の此の一言、元より太閤の恩誼によると雖も一は淀君並に秀頼が、諸侯の後援なきこの城に據つて以て關東大將軍の威と、六十餘州の侯伯を列ねたる大軍に拮抗したるの意氣を壯としたるによらずんばあらず。

其五

慶長十五年冬十一月戰はいよ〱開かれたり、寄手は三十萬、東國、北國、西國の諸侯の兵悉くこの一城の下に集まる、誠に前代未聞の壯觀といふべし。前將軍家康は茶臼山に、當將軍秀忠は岡山に各その本營を置いて以て全軍を指揮す、前衛司令官上杉景勝最もよく戰へり、我が軍は眞田、毛利、後藤、長曾我部、何れもその要塞に據つて以て敵を防ぐ、彼我各々勝敗あり、眞田の奇計屢々その効を奏して東軍苦戰多く避易して

容易に近づくと能はず、時偶々極寒に會す、野營の將士凍傷に罹り、指を墮すもの多し。家康依て媾和の策を立て、計謀を以て敵を屈せんと試みたりしが、我が軍戰士ありて策士なく、是を以て敵の致す處ろとなり、遂に落城とはなりしなり。稗史子の曰く

寄手は三十萬、大軍なりと雖も眞田、後藤の面々おの〳〵その持口を堅めて敵に駈け合ひしかば、軍は常に互角の勢にて勝敗の數は容易に知れざりける、然るに時恰も烈寒の時なりしかば、敵の野陣凍へ苦しむこと甚だしく、久しく對陣せば逆寄に遭はんとて大御所の深き謀事より一時の和睦を申し込まれける、折しも大阪方は城の天王閣へ大石火矢を向けられ、棟瓦を打碎かれしため、奥御殿に侍らひし女中ども只管に懼ろきあはて、早く和睦のあれがしと祈るものさへ多かりける、されど氣性勝れし上樣は元より覺悟の前の事とて和睦など中々に思ひ寄らぬ事なりと仰せられける。さりながら婦女にも劣る臆病武士奥殿に侍らひて、頻りに和睦をすゝめ奉りしこそうたてけり中には關東の間諜入り込み内々志を通はするものさへありて軍の評定の邪魔となりける。

家康が我が軍に寄せたる媾和は一時の策略に過ぎざりしなり、而してその媾和條件は曰く浪士を解散すべし曰く城の外廓を毀つべしと、我が軍即ち之を容れ、浪士を逐ひ、城廓を毀たしめたり、斯くして此の名城は遂に陥れられたり。容顔花の如き淀君は潔よく刄に伏しぬ。

* * * * * * * * * *

古來婦女子にして有髯男子を驅使せしもの尠からずと雖も淀君の如きは儔罕なり、彼れ秀頼の母にして又信長の姪なり。其地位姻戚元より優なりと雖も。又その天賦の豪邁にして意氣群雄の上に駕するにあらずんは奚ぞよくこの如き大事を企るつを得ん、謹直にして婦德を全ふしたる正室杉原氏の如きは元より賢婦の撰にして婦

女の好摸範なりと雖も、才情優越、群雄を驅馭して以て自家の面目と主張を全ふしたる淀君の如き亦以て婦女の好範となすに足るべし。淀君元より缺點多し、然れども缺點の多きは事業家の本色なり、深く問ふを要せざるなり、淀君又遺算多し然れども遺算多きは英雄の本色、又深く是れを究むるに及ばざるなり。淀君にして若し尋常一樣の家婦なりとせば彼れ太閤の祀りの絶なん事を憂ひて必らずや夙とに家康に屈從したらん、然らば豐臣の家は大和若しくは信濃に於て二三十萬石の大名となりて、淺野、細川、池田、蜂須賀の諸侯と共に後世の武鑑に其家名を遺したらん、然れどもこの如きは是れ德川氏の下風に立つものにして豐家の獨立、豐家の躰面を如何せん、況んや氣宇八荒を吞み、餘勢大明に震ひし鴻世の英傑豐太閤の家名に於てをや、豐公の社稷がこの如き憐れなる狀態に繼續せんこと寧ろこの大英雄を侮辱するものといふべし。

然れども淀君は益々に豐太閤の寵姬なり、彼れ慷慨激烈の婦人、奚ぞ斯る愚策を取らん、彼女は氣慨あり、抱負あり、又主張ありき彼女は婦人としての氣節を重んじ、又家の躰面をも尊びたりき、

關ヶ原の戰畢つて豐臣、德川二家の交捗面倒となるや、豐家の忠臣片桐且元は家の萬全を謀つて關東屈從の策を立て、淀君をして密かに家康の側室たらしめんと謀れり、事淀君に聞ゆ、淀君烈火の如く怒ッて曰く、我れ苟くも太閤の妾たりと雖も織田右府の姪にして秀賴の母たり、今にして家の安全を希ひ恥を關東に曝す、何の面目あッてか地下の太閤に見へんやと。この如くして彼の女は關東と斷ち以て自家の氣節を彰はしたり。此の如くして彼女は家康と戰ひ以て自家の抱負を貫きたり、士は躰面を重んず、士の貴き所以是に在り、婦は貞烈を尊ぶ、婦の尊き所以又實にこゝに在り、人間の性格は玉となッて碎くるを尊び、瓦となッて全きを卑しむ。彼の女は豐公が千難萬苦を以て築き成しだる豐臣の家を賭して以て其の主張を爭ひしなり、彼女は實に瓦全を恥ぢて玉碎したるものなり、嗚呼彼女の運命や悲し、然れども彼の女の志烈は千古に耀くべし大阪の落城慘は

即ち慘なりと雖も、彼の女が掉尾の大業ありてこそ豐家の面目は全ふせられたり、淀君の末路の悲慘は豐太閤の偉業と對照して千載の下人をして其の英風を想望せしむるに足るべし、彼れの如きは遉がに鴻世の大英雄が妻たるに恥ぢざる一大烈婦といふべし。

（了）

佛國革命の名花

紅陵　葉山茂子

（一）朗蘭夫妻

大皷の音響鐘の響、卒然として大都府の各所に起り、數万の暴民潮の如く押し寄せて、議會を襲ひ王宮を襲ひ、國王を幽囚して後終に其首を刎ねたるを始めとして、斷頭臺に引かるゝ者日に斷ゆることなく、鮮血巷に溢れて吹く風も爲めに腥く、乾坤暗澹として天日も光なきに至りしもの、是千七百九十二三年に於ける、佛國革命の亂にして、國民が自由の渴望は激發して一種の狂暴と變じ、眞の自由は却つて惡魔に蹂躪せられて、徒に慘毒を社會に流しぬ。此騷亂の犧牲となりし名士偉人擧げて數ふべからざるが中にも万綠叢中一點の紅とも見るべき異彩を發ちたるは、則ち朗蘭夫人にして、其志操の高潔行爲の壯烈男子をして後に瞠若たらしむるものあり。女流の偉人古今東西に少からざるも、才學己に一代に冠絕したる上、非凡なる豪毅沈勇を備へたる夫人の如きは恐らくは古今に匹儔希なるべし。玆に聊か此女偉人の生涯を叙するもの、亦以て軍國婦人の志氣を皷舞するの資とならんを思へばなり。

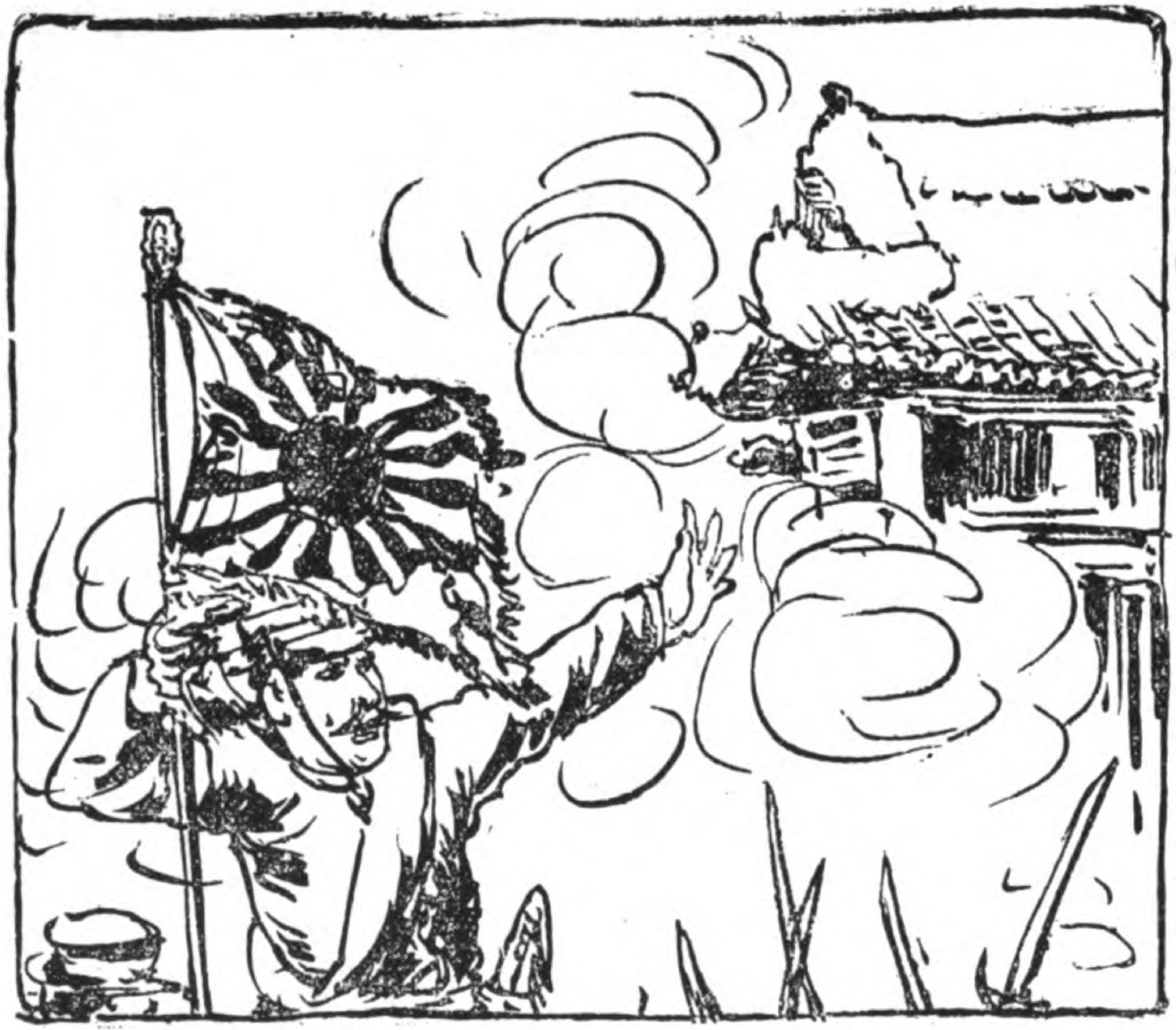
朗蘭夫人は名をジャンヌ、マノン、フィリポンと呼び、千七百五十四年巴里に生る。父は彫工にて勤勉なる人物、母は心ばへ優に、いとも温情に富みたる婦人なりき。マノンは極めて幼き時より心慧敏く温和しき性質を示し、殊に讀書に熱心なることは人に優れ居たりき。その書物を讀み習ひ始めたるは、まだ四歳にも足らぬ折にて、それより後兩親の注意とては、唯彼女が讀むに足るだけの書物を與へだにすれば足りにき。實にマノンは手に觸れし書物は何にても讀まぬはなく、一たび書物に向ひては更に他を顧みず、若し心を他に轉せしめんとせば、其嗜める花を眼前に捧ぐるの外に策なかりき。嗟書物と花、是マノンがいとも嗜めるものにて、此二つを歡ぶ心はその一生を通じて渝らず、後極めて悲慘の境遇に沈みし時さへ、これによりて無上の慰藉を得たるなりき。

兩親は其生計の許すだけは充分に敎育を受けしめたるが、マノンが學問に對する熱心は尋常ならず、朝は五時に起き出で、寢衣すら着換もあへず机に向ひしこと屢々なりしと。以て其進歩の著るかりしは察すべく、深く敎師達の愛を受けたるは云ふまでもなかるべし。此初期の敎育を畢りて後二ケ年を尼院と祖母の家にて過し、それより父母の家に歸りたるが、此時よりは讀書の旁家事を管理することゝなりぬ。殊に愛讀したるは、タッソ。トムソン。プルターク等の人々の著書にて。中にもプルタークのは八歳の時より愛讀せし由にて、後にマノンが抱懷したる感想と主義とは、實に此著者の書き記したる古代人民の愛國節義の史談の爲めに受けたる感化なりしこと疑ひなし。又マノンは古今の歷史、天文、數學、哲學等にも暗からざりしが、謙遜温和の氣質は其才學と共に亦人に卓れたれば、深く人々の尊重を受けぬ。姿は閑雅にして身長高く、眉目艶麗と言はんよりは寧ろ清秀坐ろに人を動かすものありき。

マノンは平和の裏に數年を過し、其間過半は屋内に在りて、外出することは極めて希なりき。結婚の申込は身

分卑しからぬ人々より屢受けたれど、一として承諾かず、虚弱なる母の身の上のみ彼女が唯一つの不安の種なりしが、或日母はゆくりなくも身体麻痺を起して程もなく此世を去りしかば、マノンが悲しみは一方ならず、それが爲め烈しき熱病に罹り、快氣後も憂ひの爲めに數ヶ月の間身躰いたく衰弱し居たり。されど此間も讀書は廢せず哲學上の論文をさへ書きしと云ふ。

其後家計上の事情より



日露戰爭未來の夢（十一）

遼陽占領

父の家を出で丶、幼時曾て遣られ居たることある尼院に移り捿むこと丶なりしが、此時豫てマノンに結婚を申し込み其後確かなる答を得ずに過ぎたる、時の名士朗蘭と云る人重ねて結婚を求め來りぬ。彼れは門閥も卑しからぬ人にて、マノンよりは二十歳年長（マノン此時二十五歳）なりしかど、主義節操の極めて堅固なる人物故、マノンは常日頃深く尊重し居たりしかば、終に其求めを容れて、程も

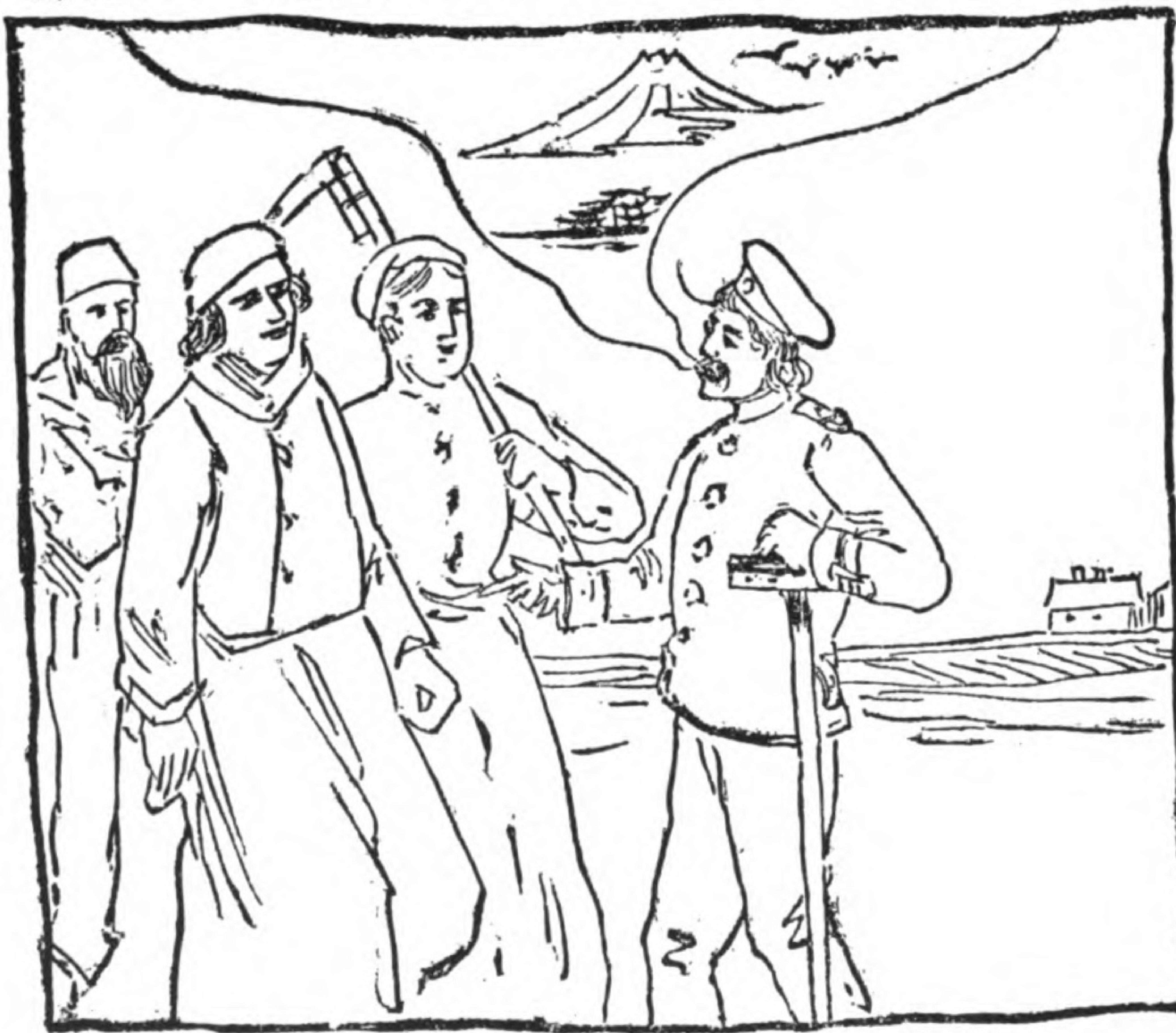
なくマノンは朗蘭夫人とはなりにき。

斯くて此夫婦はいと幸福に、琴瑟の交らひ淺からず。朗蘭は其時佛國の重だちたる數多の製造所の監査役なりしが、婚後一ヶ年は商業上に關する數種の著作に從事しつゝ巴里にて過しぬ。此時朗蘭夫人は夫が著述の文作を扶けしを始めとして、それよりは終始文筆にて夫に少からぬ幇助を爲せり。アミエンにて四年を過し、其間に一女子を擧げたるが、夫人は時の風習に從うて里子に遣るを嫌ひ、手づから養育の勞を採りぬ、後セジーと云へる里に移り、茲に一家三人にていとも幸福なる月日を過したるが、此和氣靄々たる樂園は、不幸にして久しく續くこと能はざりき。それより一兩年を出でざるに、端なくも革命騷動は起り、夫人は忽ち其渦中に引き入れられて、いとも悲慘なる運命に出逢ふことゝはなりぬ。

當時佛國は人民漸やく歷代の虐政を厭ひ、さなきだに革命の氣運盛ならんとしつゝありし場合、米國の獨立戰爭に刺戟せられて、自由の叫びは一時に國內に勃發し居たるが、時の國王は路易十六世にて、慈仁の心には富みたれども、惜むらくは優柔に流れ、其驕奢を節するの豪毅を缺き、爲めに國民の恨を買ひ、愈革命の氣勢を高めしむることゝなりぬ。此時國民の代表者よりなれる立法議會は其議員三派に分れて、ジロンド黨、山岳黨、平原黨と呼ばれ、此內平原黨は勢力微々として云ふに足らず、議會は主に他の二黨によりて勢力を占められたり。而して此二黨は共に革命の主義を抱けるものなれども、ジロンド黨は溫和主義にて、只管博愛慈仁の心より自由を熱望し、多くは少壯の人物にて、何れも英邁にして敢爲の氣象には富みたれど、おしなべて稍柔弱にして世故には長けず、圓滿なる眞の自由鄕を理想し、又山岳黨は純然なる共和主義にて、些しにても拘束を加ふるは人民を奴隸視するものなりとの說を持する過激なる革命黨なりき。

朗蘭夫妻とも始めより熱心なる自由主義者なれども、上記の溫和黨の方に屬し、朗蘭は里昂の新市區より選ば

れたる温和黨（ジロンド黨）議員の一人なりき。此當時夫人が其友に寄せたる手信に、自由の曙光は今や漸く佛國に來らんとするを述べ、假令我生涯の中には未だその光輝に浴するに至らずとも、後の世の爲に喜ぶべきことなりとの意をほのめかせしが、千七百九十一年の春、夫人は夫に伴はれて巴里に趣き、立法會議を傍聽し、往々過激なる言論の出づるを聞くに及んで、其喜びは忽ち一種の恐怖心



日露戰爭未來の夢（十二）

露兵の歸國日本の土産話

とは變りぬ。

翌年の春に至り、主に温和黨員の中より新内閣組織のこと起り、朗蘭は内務大臣に推されぬ。彼れは大臣となりてよりは殊に愼重公平に身を處したるが、此時才能夫に遜らざる朗蘭夫人が、政府内に夫と一樣の勢力ありしは事實にて、夫人は當時夫の寓居たる大客舍の内にて、我が居間として小さき室を選び居たるが、國事を談せんとて朗蘭を訪ふ諸名士は朗蘭の書齋よりは、寧

ろ此小室に於て、夫人の面前にて語らんことを願ひし程なりしかば、夫人は悉く時事を知り得たるのみならず、深く時代人物と親しむの機會を得たるなりき。此當時温和黨員等は、天下の大勢より路易王の身に來らんとする危險を豫知し、將來採るべき政策に就き建議せんと欲し、朗蘭は其地位上自然委員に推され、彼れより一書を認めて王に呈すること丶なりたるが、其書の起草者は内實夫人にて、忌憚なき堂々たる筆鋒にて認められぬ。此時若し王にして此建白を採用するの明ありしならば、あはれ、多くの慘禍は避け得られしならんも、惜しむべし事是に出です、却つて朗蘭は即日に其職を免ぜられぬ。

これより數週を出でざる八月十日に於て、無政府行爲の第一着は忽然として擧行せられ、昨日まで一天万乘の尊位を持せし國王は廢黜せられて其一族と共に忽ち幽囚の身となり、佛國には最早王國なるものなく、共和國となりしことは天下に宣言せられ、立法議會は依然舊員より成ると雖、國民議會と改稱せられ、温和黨内閣は再び起され、朗蘭は舊位置に復り、玆に温和黨と過激黨とは主義行動に於て一たび聯合すること丶なりぬ。然るに温和黨の面々は朗蘭夫人と共に國民自由の夢想に耽りつ丶ある間に、過激黨は密々會合して人民を煽動し、永く世界の人道を瀆したる恐るべき一大陰謀を企だて居たり。即ち同年九月に於て現はれたる大慘殺にて當時巴里の各所に入獄せしめ在りたる王黨は盡く頭を刎ね、翌年一月に至り終に國王をさへ殺害し了りぬ。温和黨の人々はいたく其暴擧に驚き、國民の輿論に訴へて王の身上を救はんと努めたれど、今は已に狂憤して理性を失なへる國民等のこと故、彼等が盡力も無効なりき。是に於て兩黨は全く分離し、温和黨は斯かる殘虐の行爲を敢てするが如き人物と一日も協同する能はざる旨を宣言し、朗蘭は直に其職を去りぬ。之より兩黨の軋轢は次第に激甚となり行き、而も天下の大勢は寧ろ過激黨の方に向ふに、朗蘭夫人は只長大息して理想の自由は蹂躙せられたるを歎きぬ。

野心勃々たる過激黨は飽く迄も勢力を獨占せん爲めに、反對者を悉く亡き者にせんとし、國王殺害の後は第一に温和黨に眼を注ぎ、其年三月に至りて温和黨が議會に集合したる場合に、盡く之を殺害せんとの計畫をなせしも、密告者ありて事を果さず、當時議會に優勢なりし温和黨の爲めに却つて謀反罪に當るべきよしの議決を與へられたれば、過激黨の怒りは極度に達し、終に六月二日に於て狂亂せる暴民二万餘人を煽動し、武裝して議會に押し寄せ、列席せる温和黨員に向ひ四面より罵詈讒謗を逞しうし、彼等一同を捕縛せでは已まじと犇きぬ。温和黨は若し茲に降服せば今は万事休むべきを知り、飽く迄強硬の態度を執らんとせしも、狂亂せる大衆の暴力には敵しがたく、悲しい哉議會の尊嚴も終に蹂躪せられ、此不法の暴力に依りて、温和黨二十二人に對する逮捕の命令は發せられ、出席したる同黨員は悉く其場にて捕縛せられぬ。

(二)　獄内生活

誠に自由は惡魔の爲めに蹂躪せられたり。久しく壓政の下に屈したる民心の一時に破裂したる勢は宛ながら大瀑布の落下するが如く、狂激せる彼等は已に理性を失へることゝて、温和てふ意義は解する能はず、只管過激黨の主義に讃して、却つて温和黨を仇敵視し、斯の如き暴動を起すに至りしこそ是非なけれ。朗蘭夫妻は數ヶ月以前より他の温和黨員とゝもに危險の身の上に切迫せるを知り、斷えず刺殺に逢はんことを恐れて過しぬ。朗蘭の辭職は一月のことにて、それより五月迄夫妻は或處に潜伏して身の安全を圖りたるが、天下の形勢日に非にして、温和黨の破滅は避くべからさる有樣となりゆくに、今はと兩人も覺悟を極め居たる場合、彼の議會亂入の兩日前即ち五月三十一日の夕に於て、六人の武裝せる人物、革命黨委員の命を以て朗蘭を捕縛せんとて來りぬ。朗蘭飽くまでも抗辨し、未だ法律の準許を得ざる團体の權力を承認する能はざる旨を主張せしかば、

彼等は躊躇して一先づ其儘に引揚げぬ。此時夫人は輕からぬ病態なりしに拘はらず、いたく夫の身の上を案じて、取敢えず議會に馳けつけ、過激黨の無法なる處置を訴へ、夫の寃を雪がれんことを願はんと思ひ定めぬ。とは正しく危險なる擧動なれども、今は他に詮術なければ、夫人は服を換ふる間ももどかしく、寢衣の上に肩掛を投げかけたる儘倉皇家を驅け出で、武器を携へたる群集の圍める中を潜りて議會へと馳せつけしも、妨げられて入ることかなはず、已むなく家に引返せば、夫は裏口より忍び出で丶或知人の家に隱れ居たり。夫人は夫と評議の上再たび議會へ趣きしが、其頃は會は已に終りを告げ、今は施すべき術とてなかりき。夫人が家に歸りしは夜半にて、病中の劇しき働らきに体はいたく疲れながらも、翌朝早く夫へ送るべき手紙を認めんと坐に着く間もなく、過激黨の委員等訪づれ來り、頻りに朗蘭の所在を糺問す。夫人が飽くまでも知らずと答へて動かざるに、委員等も詮術なく、室の戸口に番兵を附して去りぬ。跡に夫人は慌たゞしく手紙を認め了り、こを腹心の下婢に托み置き、急ぎ食事を濟ませて床に入りしが、一時間ばかりも眠りし頃下婢に搖り起され、數人の訪問者ありとの報せに、起き出で丶出迎ふるや、眼前に差出されしは、夫人を捕縛すべき由の不法なる逮捕狀なりき。夫人は其緣由なき不法の所爲とは知るものゝ、所詮抵抗したりとて今は甲斐なきを見て、云ふが儘に服從し、唯僅かに我が着るべき衣服を取出し、又跡にて娘の着るべき服を取揃へ置くだけの猶豫を願ひしのみ。此時門口は開け放ちたる儘なりしかば、噂を聞きたる近隣の者共犇々と室内に詰めかけて見物するにぞ夫人は心苦しさ耐へ難きも、我捕はれし跡の娘の上を氣遣ひて、又も机に凭りながら、或知人へ宛て丶娘の上を托みの手紙を認め始むるや、委員等は早くも側より其宛名を問ふに、夫人は其名を明すに忍びず、書きかけし手紙を忽ち寸斷に引破りぬ。

翌朝の七時となりて万端の準備整ひたれば、これより獄室に曳くべしとの報せ。夫人は從容として娘と下婢等

に別れを告げ、取り縋りて泣き叫ぶ彼等を穏やかに賺し勵まし、たゞ心長く憂ひを忍ぶべきよしくれ〴〵言ひふくめぬ。軈て室を出づれば、街上には一輛の傭馬車扣へ居て、夫人は武裝せる人の兩側に立列べる間を通りて此馬車に移り、斯くて人々に警護せられつゝ、便りなき娘の泣き入る聲を跡に獄屋へとは趣きぬ。見送る群集も靜まり返りて、中に唯二三婦人の聲にて『斷頭臺へ行かるゝことか！』と低語くが聞かれしのみ。



軍神銅像

軈てアバエなる獄屋に着けば、夫人は一先づ門番の室に追込まれ、委員等は夫人の待遇方につき嚴しき命令を門番に傳へて去りぬ。されど幸には門番夫婦は親切なる者にて、又二三の友と竊かに夫人に便宜を與へしかば、夫人は不法の逮捕に逢ひたることを議會に訴ふる手紙を認め、

會見することを得たり。其夜の十時に至りて、夫人の獄房は構へられ、早速其れに入ること丶なりしが、そは廣くはあれど見すぼらしき室にて、四方は汚はしき壁にて圍み、小さき烟突と、光りの入りかぬる程なる二重格子の窓一ヶ所あり、寢床とては粗末なる一枚の蓐のみ。暴民等を呼び集ふる悽まじき警鐘は終宵鳴り響きたれど、夫人は疲れ果て居たること丶て、翌日の十二時まで眠りぬ。

昨日までは綺羅の蓐に起臥せし貴婦人の身の、忌はしき敵の嫉みに逢ひて、打つて變りし獄屋の棲居、まして氣が丶りなる夫や娘を跡に殘しては、大方の婦人ならば頓に氣も狂ふべきを、さすがに朗蘭夫人は男子も及ばぬ覺悟を示し、露も見苦しき擧動なきのみか、自若として平生と異なることなかりき。されども夫人が猶此後に於ける壯烈なる行爲に比べ見ば、かばかりのことは素より驚くにも足らず、夫人は此時先づ第一に房內を出來得る限り好く整理せんとし、小さき食卓には白布をかけ、窓口に置きて我書机とし、汚る丶を厭ひて食事はストーブの上にて濟せ、二本の髮針を棚の戶口に挿して衣服を懸くる懸釘の代りとせり。此準備の整ふや、豫て携へ來りしトムソンの詩集の外にプルタークの人物傳、ヒュームの英國史、シェリダンの辭書などを乞ひ受け、これを讀みては我が感想を書きつ丶獄屋棲居の憂さを遣らんとせり。

街々に於ける喧囂の聲は絕えず獄內まで聞え來て、暴民の勢力は漸次に增しつ丶あるを報ずるにぞ、夫人は必定由々しき大事件の起りしを察し、只管溫和黨の上を氣遣ひ、翌日の新聞を取る手遲しと開き見れば、溫和黨員二十二人に對する捕縛命令の事記されあるに、憂憤胸に溢れて、覺えずも新聞を取落し、自由の礎は最早永劫覆へされしを歎きぬ。我身上は餘所にして國事を憂ふる夫人なれど、我子が將來の養育を托むべき先きも定め置かで捨て丶來し上に、今又夫が地方に逃れて隱れ家もなき落人となり居らんと想ひやりては、さすがに國の大事さへ忘れられんとしたるか、夫人は猶自から勵まし、斯かる歎きを消さんと努めぬ。

當時獄則は極めて嚴しく、四人の待遇頗ぶる苛酷に、政府より各四人へ日々下る費用にては迚も充分なる食物は買ひ得べくもあらねど、自費を以てならば、各自好めるものを求むることは許されありき。婦人は猶金錢には事缺がざりしも、飽く迄も其受くる獄費のみにて日々を過さんと覺悟し、食事は只麪麭と水とを用ひしが、是決して自身の爲めの儉約にはあらで、斯くして節し得たる金は貧困なる四人等に分ち與へぬ。獄中にて夫人が耽りし唯一つの道樂と云ひては、少時よりいたく嗜み今猶其無上の慰籍たる書物と花とにてありしなり。

議會其他數ヶ所へ出せし夫人が歎訴狀は其後程經るも何の答へもなく、今は出獄の望斷えなんとしたる入獄後二十四日目に於て、意外にも卒然赦免の沙汰ありしが、是實は敵が或方便の爲めに行ひし計略にて、夫人は家に歸りつくや否、無慘にも再たび捕らへられて、此度はサンペレギーの獄屋に送られ、前に倍したる酷遇を受くることゝなりたるが、夫人は猶も泰然として天運に甘んじ、讀書を慰籍として味氣なき月日を送りぬ。

此間世は如何なる狀態なりしか、過激黨は反對黨なる溫和黨員大半を捕縛してより今は天下に憚るものなく、愈狂暴を逞うせしかば、溫和黨は極めて悲慘なる境遇に陷り、囚はれし二十二人の者は數ヶ月入獄の後革命裁判處に引出されて一同斷首の刑を宣告せられ、十月三十一日狂民歡呼の聲の中に引續きて斷頭臺の露と消えしこそ憐れなれ。始め刑の宣告を受けたる時溫和黨の一人は敵に向ひ「我等は國民が辨別を失ひし時に死することとなるが、汝等は彼等が正氣に復りし時に殺さるべし」と叫びたるが、此言は果して後日の讖を爲しぬ。

(三) 斷頭臺の鮮血

二十二人の溫和黨員が處刑せられし其日に於て、夫人は今しも其交友等が斷頭臺へと引出されし跡に代りてコンシェヂェリーの獄屋に移され、翌日は判事ダビドの前に出でゝ溫和黨との關係に就き嚴しき詮議を受けたる

が、夫人は已に世上に知られたる此事實を今更強いて隠さんとはせずして、我身にかゝりし災厄を遁れんと努めたるが、判官は答へも待たず畳みかけて様々の難問を發し夫人を苦しめぬ。此日の糺問は三時間に渉り、猶此後も幾度となく法庭に引出されて吟味を受けしが、夫人は飽く迄も其平然自若たる態度を失はざりき。實に夫人は其生涯を通じて、此時程に精神の平静を示せしことなく、常にも増して凛然たる意氣は、其容姿の端麗と奇異なる對映を顯はしぬ夫人は素より疾く花の盛りを過ぎたる身なれども嬌態猶人を動かすものありて優雅なる態容は更に其尊嚴を失ふことなく、眼には掬すべき温情溢れ居たり。夫人の獄房と其隣りなる數多の男囚の獄房との間は鐵格子にて仕切られありて、夫人は屢此格子より談話を試みたるが、其壯烈の心に感じ、殊に又其優しき聲音に惹かされて男囚等皆側に集りて何時も熱心に聴き入りぬ。されど夫人が何時にかはらぬ從容たる態度も、折には又頽るゝこと無きにあらず。來訪者ありし時こそ極めて心強げに見ゆれ、無人き折は窓口に倚りかゝりて數時間涙にくれ居たる時ありしとは、獄内にて夫人に侍し居たる女の語りし所にて、他の囚徒等も夫人の顔に隠しかねたる涙の跡を見しことありしと云ふ。如何に鐵腸の男子にても斯かる境遇に沈みては憂憤胸を破ることなき能はじ、況して情にも厚き夫人が此時の心情察するに餘あるべし。夫人が此獄に在りしは僅かに一週間なりしが、其間にも周圍の人々をして深く愛敬の念を起さしめぬ。公判の前日夫人の辯護士なるラカルドは、最後の命を受けんとて夫人を訪問したるが、其時夫人は指輪を抜き取りて彼れに與へ「明日は妾は最早現世の人にあらず、妾の運命は知れ居れり、卿が親切に辯護し給ふとも、斯くなりては何の益もなかるべく、妾の命は助かりもせで、却つて唯卿に累を及ぼすばかりなれば、必らず〳〵明日は裁判所に來給ふな、唯妾が今はの遺物として此品を受けさせ給へ」とて、強ひて辯護を辭りぬ。

斯くて其翌日いよ〳〵公判の法廷に出でし時は、夫人は其身の潔白の表章として白衣を着け、いとも壯嚴なる

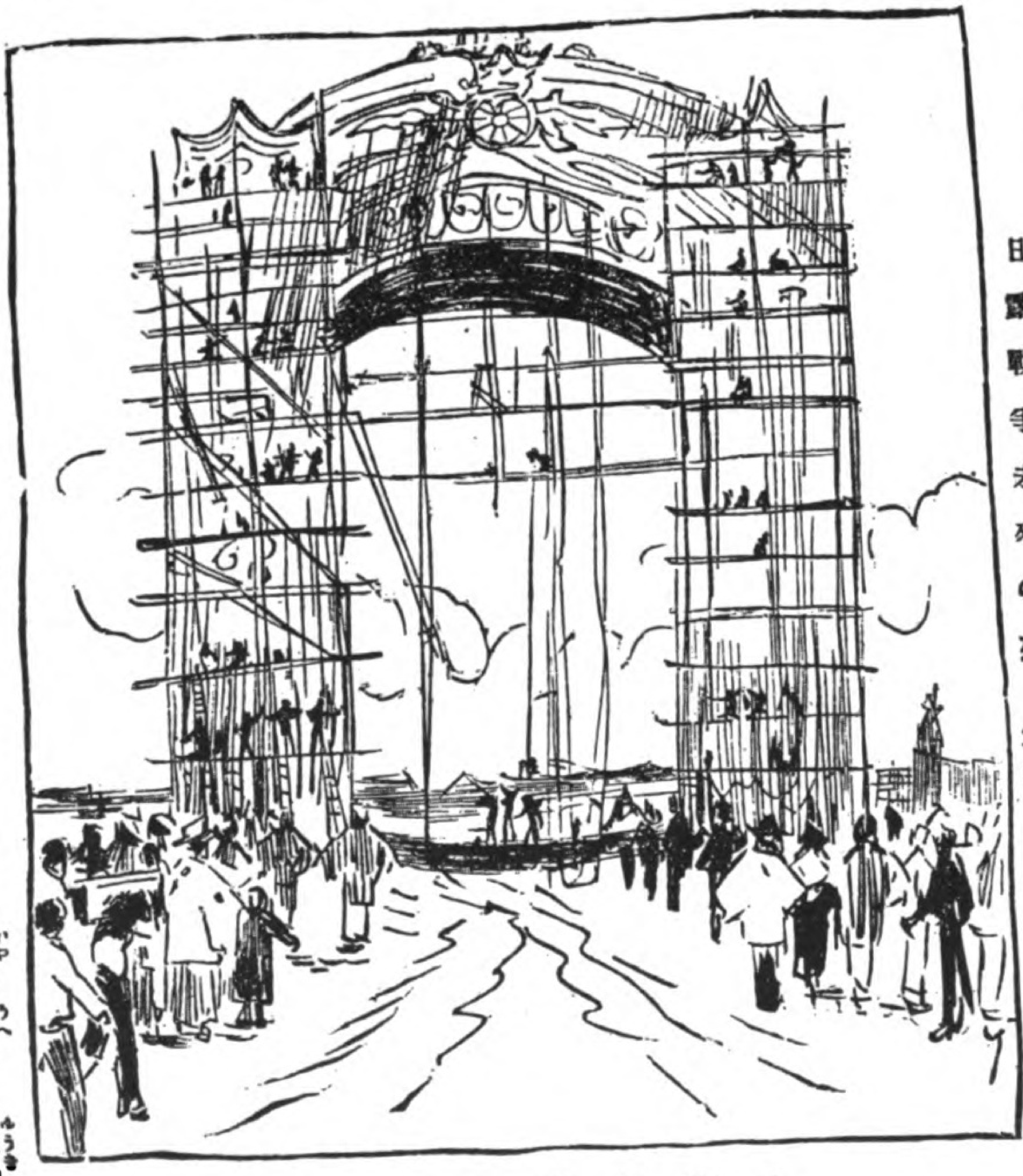
扮裝にて、髮は結ふことを許されざりしかば、ふさ〳〵と頸より肩に垂れかゝりて、容姿却つて一入の婉を添へぬ。態度は素より沈着靜肅にして毫も威嚴を類すことなかりき。夫人に不利益なる數多の證人呼び出されし中に、夫人が愛孃の保姆ありしが、彼女は身に災難のかゝるを恐るゝあまり、これまで多年の深き恩義を餘所にし、主人に對し不利益なる證言を吐くことを諾ひて來りしなり。されど只管夫人を罪に落さんと努めこそすれ、その語る所は邈然として更に要領を得ざりき。此義理知らずの保姆に引かへ、いとも殊勝に見えしは今一人の下婢にて、彼女は如何に威し賺しても、主人に累を及ぼすべき詞は終に一言も吐かで巳みき。此日夫人が法廷にて自からなしたる辨護は、實に佛國革命史中に於て最も人心を動かすべきものにて、夫人は端然として判官に向ひ、辨舌淀みなり語り出でぬ。『此度妾の囚はれたるは、陰謀者と呼ばるゝ人々の連累なりとの疑ひより起れることなるが、私情は玆に語ること能はねど、妾はあらゆる我身の行爲と齊しく、此事に就ても誇る所にて、世間に憚るべきこと一つもなし……妾は或人より脫獄のことを勸められ、何處にても望みの場所に伴れ遣らんとさへ云はれしも、妾は義務と名譽を思ひて此勸誘に應せざりき。義務とは何、そは妾の身を預りし人に累を遺すを好まぬ故。名譽とは何、そは妾が心にもなき脫獄して、實際罪ある者のやうに人に見られんよりは、寧ろ如何なる艱苦に逢ふも厭はぬ覺悟なりし故。……兼て知りたる此詮義を逃るゝこと妾に取りてはいと易きことなりしも、そを爲さゞりしは心中屑しとせざればなりき。妾にして若し罪なはれしならは、或才能……自身一己の利益には殆んど用ひしことなき或才能と、人間の利益を慮る熱心と、不運なる友人等に飽く迄も同情し、且身の危險を冐しても眞理に服從するの勇氣との外に何の罪咎もなき一婦人を犧牲に供せりてふ惡名を長く迫害者に遺すならんと思ひたればなり。眞に心の偉なる人は利己の念は露も有たで、遠き未來に報酬を待つ……若し眞に罪過なき者が、錯誤にてか又は奸計にかゝりて斷頭臺に上せらるゝことあらば、

そは即て勝利の門に達せるものといはん、善を破壞して正義の血を啜りつゝある此不幸なる世を去ることは妾が本望とするところ……嗟上帝よ！　願はくば此不幸なる人民を開發き給はんことを、妾は此人民の自由の爲めに飽く迄も熱誠を竭す。嗟自由！　自由は實に死を輕んじ自若として之に向ふ精神偉いなる人に屬くべきものにて、謹慎てふ名の下に利己と卑怯の心事を隱す旁罪惡と親しむ如き卑しき者等の爲めに造られたるものならず、卑劣の汚瀆より這ひ出で、斷頭臺より流るゝ血の中に浴びんとする邪曲なる人間等の爲めに造られたるにあらず、自由は唯正義を行ひ、佞人を卑しみ、誠實ある友を識り、且つ眞理を崇拜する賢良慈仁なる人間の保護者なり。云々」

公明壯烈天地をも感動せしむべき堂々たる此辯明もさしたる效果はあらざりき。勿論是にて夫人の潔白は證せられぬ、夫人に歸せらるべき唯一つの罪條は、溫和黨と親密なりしとの事のみとなりたるが、無道の法官等は心更に和らかず、他に夫人を連累に陷るべき術なきと見て、夫朗蘭の隱れ家を問ひぬ。夫人は縱しそを知れりとも語らじと答へ、法庭にて人間の最も強き感情を破らるべき法律を知らずと雄々しくも言ひ放ち、これにて夫人は終に斷首の宣告を受くることゝなりぬ。其宣告書を讀み聞かされし時、婦人はすつくと立ち上りながら「卿等は自から殺したる數多の英雄達と一樣の運命に逢はすべき價値あるものと妾を判斷せり、よしさらば妾も斷頭臺にては努めて英雄達の勇ましき態度に傚はん」と呼び、更に驚き怯るゝ樣子は無かりき。

其日夫人が獄屋に歸り來りし時は、寧ろ吉事のありしが如くいそ〳〵と狹き小門を潛り、我が罪なはれしことを他の囚人等に手眞似にて知らせ、それより其日は極めて平穩靜肅に過しぬ。夫人は豫ねて阿片を所持し居りしかば、之れを用ひなば斷頭臺の無殘なる最後は避け得られしも、夫人は氣高くも自殺を卑しみ、縱令如何程慘烈なりとも、泰然として斷頭の利に逢はんと覺悟を定めぬ。其最後に感想を記述したる書は全篇唯壯嚴に感

信を以て充たされあり。外に猶數通の手紙を認めたるが、其一通は、身の危險を冒して飽く迄も主人に忠實なりし彼の下婢に與へたるものにて、温情の溢るゝものあり、又我娘に與へたる一通は、短かくはあれど深き慈愛の情の籠り居りて、末に『爾親に恥ぢざるやう心掛けらるべく、卿の兩親は優れたる模範を卿に遺せるものにて、これによりて身を益することを知らば、卿は無用の人とはならざるべし』と記せり。最後に臨んで更に亂れず、綽々として餘裕ある夫人の心事を見るべきなり。此娘は終に過激黨の目を逃れて、後さる方に婚嫁したり。刑の執行の日は終に來りぬ。いよ〱断頭臺に曳かるゝに臨みても朗蘭夫人の沈毅は依然として失せやらざるのみか、彌か上にも勇氣と慈仁とに富みたるこ



大凱旋門の建築

とを示しぬ。夫人は一樣の處刑を受くべく定まりたる一個の男子と共に刑場に導かれしが其男子は早くも出逢ふべき無慘なる死を想ひて、魄も身に添はず、恐怖の情は面に表はれ居たるを夫人は途々始終側より勵ましぬ。凡そ斷頭臺にて一人以上刑せらるゝ場合には、最先きに殺さるゝ者は他者が殘死の狀を眼前に見るの苦痛だけは免かるゝ道理にて、第一に刑せらるゝは一の寛典の如く見做されあり、朗蘭夫人は其女子たるに免じて此寛典を與へられぬ。されど夫人は同伴せる男子の怖れ戰げる樣を見ては氣の毒に堪へず『卿先づ上り給へ、妾が鮮血の迸るを眼前に見るの苦痛を救ひたし』と云ひ、刑吏を顧みて此恩典を同伴者に與へられんことを願ひたるも、刑吏は夫人の首を最初に刎ぬべき命を受けたりとて躊躇しぬ。夫人は此時笑を含みながら『されど卿は婦人が最後の願ひをばよも辭み給はじ』と云ひ、其願ひは終に叶ふことゝなりぬ。斯くて其男の首は最初に兩斷せられ、續いて夫人は斷頭臺に上るや、側に近く建てられたる巨大なる自由の塑像を望み、恭しく頭を低れたる後いとも壯嚴なる最後の詞を述べぬ。『嗟自由よ、君が名にて如何に夥しき罪惡は行はるゝよ。』其瞬間刑具の刄は閃めき、あはれ此才德智勇悉く兼ね備はれる奇世の女偉人の頭は落ちぬ。時は千七百九十三年十一月九日、夫人齡方に三十九歲。

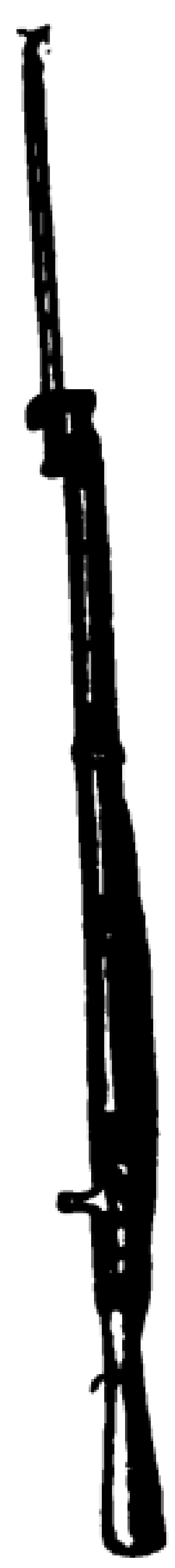
其處刑の報巡邏に傳るや、夫人を知れる者慟哭せざるなく、彼の忠實なる下婢の如きは、直ちに裁判所に驅けつけ、夫人が死したる同じ斷頭臺にて其身も首を刎ねられんことを願ひ出でしかど許されざりき。

夫人は生前に、夫朗蘭は我死ぬる時猶現世に在るべき由を語りたるが、果して其言の如く、夫人の死したる時、朗蘭はローエンに近き一友人の家に潛伏し居たりしが、妻の無殘なる最後を聞き、いたく落膽して直ちに死を決し、友人等が切なる願ひも到底其心を翻さしむること能はざりき。始めは取敢えず巴里に急ぎ議會に出でて、妻の虐殺に對し嚴しく過激黨を詰責したる後、其場に果つるかさなくば斷頭臺に上るの決心なりしも、猶

倩々考ふれば罪せられて果つる時は、遺產は政府に沒收せられ、我孤兒は路頭に彷徨ふに至るべきを思ひ、意を決して自殺と覺悟し、友人等に最後の告別を爲したる後、ローエンより巴里に至る路傍の只ある樹陰にて自刄して妻の跡を追ひぬ。嗟有爲轉變の世とは云ひながら、昨日まで顯榮の地位に在りて天下の名望を擔ひし身の、國民の爲めにせる心盡しは却つて仇となりて、終に其身を殺すに至れる朗蘭夫妻の最後こそ悲しけれ。

斯くて溫和黨の殘黨數名の人士は巴里を落ち延びて暫らく地方に潜匿せしも、如何せん世は已に過激黨の世となりて、探鑿殊の外に嚴しく、今は身を容るべき地無きに至り、或は自殺し或は斷頭臺に曳かれ、一として終を全うするものはなかりき。斯くの如くにして溫和黨滅亡の後、之れに次ぎて比較的溫和主義なるダントン黨は沸湧せる天下の人心を鎭めんと試みしが、是亦最初の溫和黨と同一の運命に逢ひて黨員悉く斷頭臺に上り一時過激黨獨り無限の勢力を占めしも、天何ぞ長く斯かる暴戾無殘なる徒黨の存在を許すべき、狂亂せし天下の民心漸く本性に復ると共に、數週を出でずして、過激黨も其首領ロベピスアを始め全員擧つて斷頭臺の露と消えたる後、玆に始めて天下の平和は恢復せられぬ。而して佛國が今日の如き共和政治となりて、眞に自由の恩澤に浴するに至りしまでには此後猶幾多の變遷と久しき歲月とを經たるものなり。以上は所謂佛國の戰慄時代なるものにして、其悽愴慘絕世界の歷史に比類希なる所、さるにても女性の身にして此狂亂なる時勢に處し、艱苦に怯まず暴力に屈せず、凛然として眞理に殉したる朗蘭夫人の芳烈は千古消ゆる時なかるべく、自由の女神として長しへに世界の尊崇を受くるならん。

（完）



露西亞の女傑
カザリン二世

西村早苗子

一　カザリンの性情

玉顔雪膚、婦人の身を以て政界の中樞に立ち、一國の勢威を高からしめたるもの、古來その人少なからずとは云へ、南面して天下に君臨し、ロシヤの國をして光輝を添へしめたるカザリン第二世の如きは、まことに稀世の傑女にはあらざるか。

或る歷史家は彼の女を評論ひて云はく、『女帝カザリン二世陛下は、げに露西亞の大黑柱にてありき。露西亞の國運の隆盛なりしこと、彼の女の君臨せし時より過ぎたるはなく、その國境の膨張せしこと、また彼の女の笏を執りたる時に及ぶはあらず』と。われは今かゝる傑女の簡單なる傳記をものして、その半生の面目をうかゞはんと欲す。

カザリンの幼時は、如何なる歷史をや持ちたりけん、後年、慧敏聰達なりしより見れば、恐らく栴檀の二葉より馨はしきがごとく、彼の女もまた群童にすぐれて賢しき性をこそ備へたりけめ。

妙齡に達したりし頃、彼の女はホルスタイン侯の許に嫁けり、侯はピートル第三世として、迎へられて國都に入り、エリザベス、ペトロヴヰナの後を嗣ぎ、露西亞皇帝の位に陞るに到りき。この時帝の年は三十四歲にてありけるが、それまでホルスタインの侯國に在りて、驕傲不遜なる生活をつゞけ、教育さへ深くは受けざりければ、威もなく、信もなく、『北方の大鷲』露西亞を統御せんには、その力の足らざる慨ありたりき。

されど幼時より不撿束なる家庭に育ちて、荒々しき野生の發達したりし彼は、いとゞ軍事上のことを好みて、雨の日も風の日も、日として軍隊の撿閱を怠りたることなく、そは寧ろ彼の唯一の課業と見らるゝ程にてありき。

かゝる嗜好は彼をしていたく普魯西陸軍の精鋭なるに感じ、その創設者たるフレデリッキ第二世を崇拜せしめ、延いて從來の國是たりし排普政策を捨てゝ、普魯西と同盟を結ぶに到らしめければ、國民は皆彼の政策を批難して、早くその玉座を下り給はんことを祈れ

るものすらありたりき。

而かも帝は尚ほ心付き給はず、露西亞人を擯けて朝廷の外に逐ひ、おのが人となりしホルスタインの人々を優遇し、帝一己の感情を以て罪人を宥免し、そが法律に抵觸することなどは顧み給はざりければ、日耳曼人や、ホルスタイン人やは、最といたく力を得て、跋扈跳梁を擅にしければ、日に日に衰へゆきし露西亞人は、『かくてはわが國は滅びなん。今の皇帝ピートル第三陛下は、畏こけれどもピートル第一世陛下の旨に背き給へれば、われ等は陛下に同情し奉ると能はず。げに陛下は露西亞の爲めの陛下にあらずして、日耳曼や、ホルスタインの爲めの君主に在す。』と云ひて、反抗の氣は到る處に充ち〳〵ぬ。

かゝれば皇后カザリンは、いたく露西亞の前途を憂ひ、『かくては國民の信頼、御身より逃れ去らん、願はくばわが願を容れて宗祖ピートル大帝の御心を繼ぎ、九五の位に上られたる甲斐には、せめては露西亞の爲



日露戰爭未來の夢（十五）戰功談

めに一利をなりとも圖り給へ。』と、帝を諫めまゐらせしこともありしが、帝はそれには耳さへ傾け給はざりき。

二　帝座の乘取

ピートル第三世の政策に反抗し奉る聲は、ます〳〵その度を高うし來りぬ、今は閃めく或る物が、陛下の御頭の上に振はれんかと思はるゝ程にてありき。あはれ、懶惰、驕傲に日を消したりしピートル第三世は、それ等に、露心をとゞめ給はず、隙あれば己れを苦諫せんとする皇后カザリンを、些かの罪もあらずして離婚し、はた又捕へてそれがしの寺院へ押し籠めんとし給ひき。

カザリン皇后は、今は堪へ難う思し給へり。「離婚」の忌はしきみ聲を聞きしさへあるに、搗てゝ加へて「幽閉」の勅を受けんとは、彼の女が思ひもかけざりしところ、今は反抗せざらんとするも、せずしては已む能はざる狀態に陷りければ、一は露西亞の爲め、二は身の爲めに、彼の女は遂に廢位の事を企て奉つり、且つ帝の御壽命をさへ縮めまゐらせたりき。

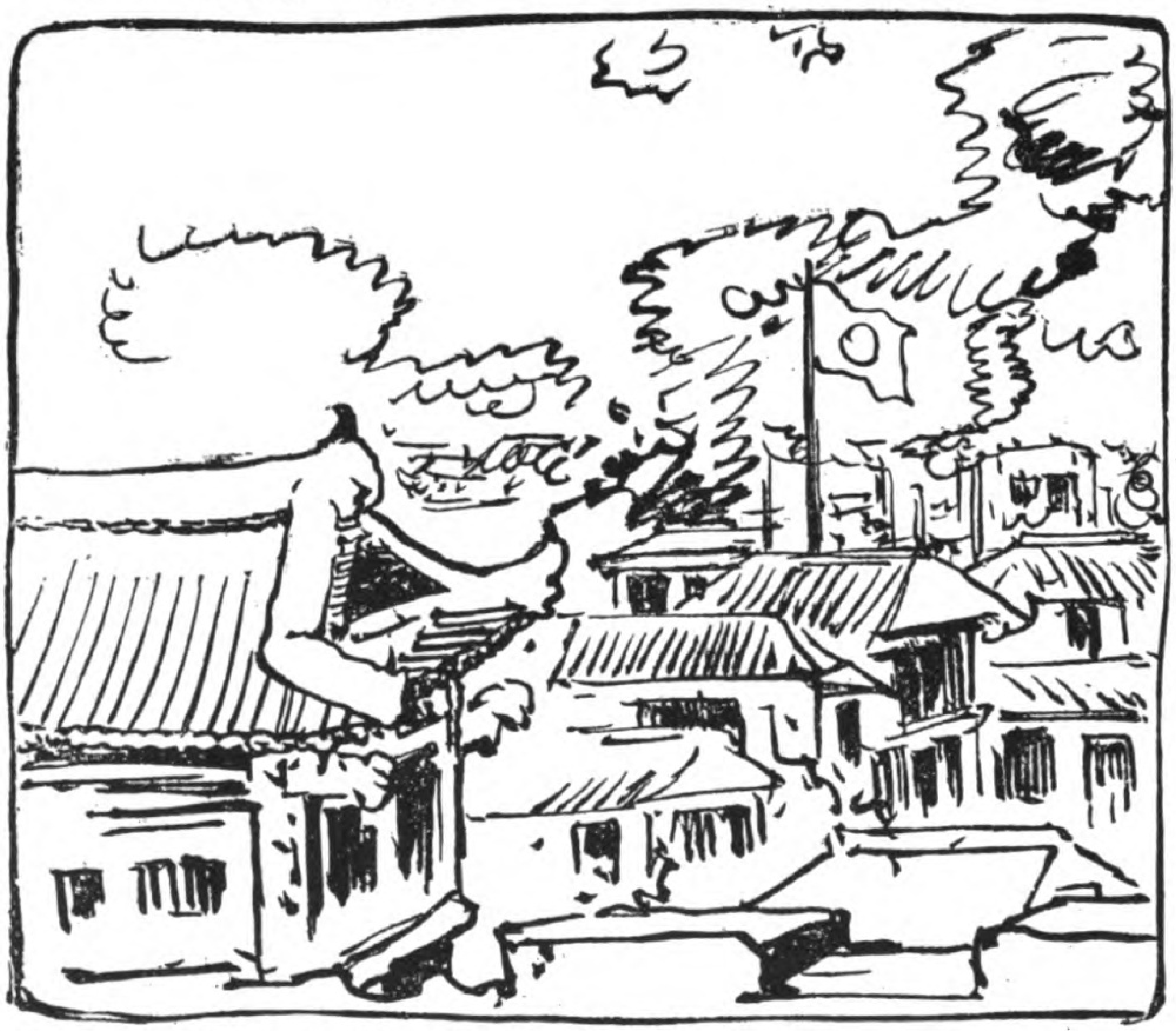
「君は君たらずとも、臣は臣たるべく、夫は夫たらずとも、婦は飽くまでも婦たるべし。」とは、婦人の上に加へられたる金科玉條なれば、假しやピートル第三世陛下にして、皇后の上に迫害を加へ給ふとも、道の上より云へば、カザリン皇后はその命の儘に痛々しき生を送りたらんこそ正しかりつれと、人は或は評し云ふらん。さはれ罪なくして身に危害を加へらるゝ程、苦しきことは世にまたと有り得べき乎。皇后が敢て陛下に反抗し奉りしは、寧ろ故あることにてありつらめ。されど無謀にもその位を廢し奉り、剩へ玉體を犯し奉るに到りては、これ到底悖逆無道の譏を受くることを辭み給ふべからず。ヴォルテーアの如きは、カザリンがピートル第三世陛下を犯したるは、もとより批難すべきことなりしも、こは寧ろ小やけき家庭的出來事なれば、われはこゝに是非の判斷を下さゞるべし。されど彼の女がロシヤ帝國をして、盛大なる國運を荷はしめたる功は、思ふにその天地も容れざる大罪をつぐのひ得て餘りあるべし。』と云へりしかど、こは餘りに偏したる論評にてはあらざるなきか。われは皇后の帝に對して執り奉りたる行動が、あまりに過激なりしことを惜まずんばあらず。

さはれ佛國の偉人ヴォールテーアが、稱して「盛大

なる國運を荷はしめたる功」とは何ぞや。われは今その跡について瞥見を試んとす。

三　外交的手腕

カザリン皇后は、わが神功皇后の如く躬親から兵を率ゐ給ふことなく、將たまた佛蘭西の傑女ジヨアンダアクの如く、手に刄を揮うて軍陣に臨みたることもあらざりき。彼の女の功業は、その外交的手腕に懸れり政治的策略の上に現はれたり。かのポーランド分割の如きは、まことに皇后の名をして、不朽に垂れしめたる所以の一つにてあるべきなり。



日露戰爭未來の夢（十六）　奉天占領

波蘭土は強き列國の間挾まりて、日に月にその迫害を蒙りつゝありしが、佛、普、墺の諸國はみなこれに垂涎し、ことに魯西亞は多年の間秋波をそゝぎて、機會あらば收めて手に容れんと企て居たりき。

然るに波蘭王オーガスタス第三世病みて、寶算今は旦夕に迫り給ひければ、重臣は皆なその後繼者のことについて心を痛め國務大臣ブルール等はサキソニーの皇子を推戴せんとし、チヤルトルイスキは、その甥なるスタニステス、ポニアスウスキを擁立せんとし、兩派は互に鎬を削りてありしが

チャルトルイスキは露西亞の軍隊を借りて敵黨の勢力を削ぎ、遂にその保護によりてスタニスラス、ポニアスウスキを立て、南面して波蘭土を治めしめぬ。

始めカザリン二世陛下の、先帝を斥けてその位を簒ひ給ふや、國論の指導に從ひて排普の方針を取り、プロシヤを罵りて「惡むべき露西亞の仇敵」なりと呼び、また「平和を害ふもの」なりとも云ひしが、已が宿志たるポーランドを分割せん爲めには、勢ひ普魯西と結合せざるべからざる狀態に陷りければ、術數料り難き彼の女は、直ちにフレデリッキ王と握手し、且つ英國や丁抹やを、その背後の同盟者となせり。かくて魯西亞は佛國および墺國に對して反抗の方針を取りしかば、佛國も亦魯國に向ひて抗爭せんと欲し、殊に今のポーランド王が、魯國の後押によりて皇位に上りたるを快からぬことに思ひ、事あらば「北方の大鷲」に報ふるに一矢を以てせんと心懸けたりき。

當時波蘭土はその國勢太だ振はず、國王は妄りに空位の高きを占め給ひて、一切の成を貴族に仰がせられ貴族は皆な人民を奴隸の如くに驅使し、國民の殆んど總ては耕耘の業に從ひ、權利の觀念、經濟の思想、はた又政治的智識を持つことなく、徒らに貴族等の暴威を振ふに任せたりければ、國は次第に衰へゆきて、戰ふに兵なく、守るに砦なく、僅かに貴族の騎兵が、較上劍を佩ぶるを見るに止まりき。

而してその國敎はローマ加特立敎にして、諸種の壓迫を希臘敎その他異敎徒の上に加へ、己れ等の宗敎を信ぜざるものには、政治上の權力をさへ與へざりければ、怨望の聲いたる所に起り、人心恟々として靜まるともあらざりければ、コニスキと云ふ一僧侶は、遂に書を國王に致して、異敎徒を迫害より救はんことを請へり。その事を聞き及びたるカザリン陛下は、『機會は鳥の如し、一度逸すれば捕ふべからず、乘ずべき機會は、いま波蘭土の上に現はれぬ。』とて、その有司をして宗敎徒保護の名の下に、波蘭土王スタニスラスを強迫して、羅馬加特立敎以外の宗敎徒にも、彼れ等と均しく權利を與ふることとなさしめしが、王は露西亞の後押によりて擁立されたるなれば、その恩に辜負することもなり難く、一も二もなく露國の要求を容れぬ。

千七百六十六年、波蘭土の國會はいたく此の擧に關して反抗を試みしが、ワルソー駐箚露西亞公使レプニンは、陰に陽に希臘敎徒等を扶け、風雲一たび起らば劍を擁して立ち、兵力に訴へても自國の要求を容れし

めんとの意氣込なりければ、それも泣寢入りの姿となり果てたりき。

然るに性偏狹にして、他教徒を蛇蝎視せし、羅馬加特立教徒は、希臘教徒等が露國の後援によりて政治上の權力を得しを嫉み、果ては頻りに自己等には特權のあることを主張し、所在蜂起して異教徒を迫害し、あまつさへ佛墺諸國の援助により、干戈に訴へてもその目的を遂げんとしぬ。

かゝれば王は、これ等の暴徒を鎭壓せんとし、その兵數を取り調べしに、戰鬪力に堪ふるものは僅かに九千人許りに過ぎざりければ、止むを得ず、露西亞より兵を借り入ることゝなしぬ。



日露戰爭未來の夢（十七）

芽出度き凱旋

然るにかゝる事は寧ろ露國の待ち設けし所なれば、カザリン第二世は喜びて兵を派し、入り亂れて戰ふことゝ成りしかば、佛國は今更ローマカトリック教徒を助けし甲斐なかりしを悔ひ、君士坦丁堡駐剳公使ヴエルゼンヌをして、土耳古政府に勸めて、露西亞に對して戰を宣せしめしが、土耳古はその頃兵力既に微弱に赴き、陸戰に於いて露國の破るところと成りしのみならず、その海軍も亦、バルチック艦隊の爲めに殆んど全滅の狀態に陷れられ、首府コンスタンチノープルさへ、

攻撃を被りぬべき有樣と成りければ、土耳古は國を擧つて戰備し、また露西亞に對して反抗を試みんとするの勇氣なかりき。

此の時墺地利は、露西亞が國勢日に月に強くなり優るを見て、かくては歐洲の平和は保たるべくもあらずとて、故障を唱へんと思ひ居りしが、時しも普魯西王フレデリッキ第二世は、墺國皇帝ジョセフ第二世に會見して、露西亞を恐るゝよりも先づ波蘭土を分割して各自の領土を擴大にすべきことを勸めたりければ、敢て之を容れて一時の平和を保たんと思ひ給へり。普王はまた使をカザリン第二世の下に遣はし、「露西亞若し東歐に於いてその志を得んとするときは、均衡上佛國と墺國とは之に對して反抗を試むべく、さりとて露國の同盟たるわが普魯西は、兩國を引き受くるだけの力もあらざれば、宜しく墺、普二國と波蘭土の地を分割すべきなり」と、說き勸めければ、流石に飽くを知らざるカザリン第二世も、無益の戰爭に國力を疲弊せしむることの益なきを知り、千七百七十一年二月十七日を以て、普露條約を締結し、遂に墺、普二國と共に波蘭土の地を分割しぬ。こゝに於いて露西亞は、ボロトスク、ネテブスキ、オルシヤ、モヒレフ、ミスチラウル、ゴメルなど、百六十萬の人口を有する白露一帶の地を得て、大にその領土を擴大しぬ。

四　カザリンの內行

カザリン第二世は、その國力の日とともに優勢になりゆくを見て、女の身の燃ゆるが如き功名心に驅られ「希臘帝國再建」の名の下に、墺太利と共謀して土耳古の分割を企てたりしが、その後墺國王ジョセフ第二世崩じ給ひて、レオポルト第二世國權を執るにおよび土耳古と戰を交ふるは自國の爲めにあらずとて、千七百九十一年を以て土耳古と媾和條約を締結するに至りぬ。されば胸の中には鬱勃の勇氣と、不測の謀略とを藏せしカザリン第二世陛下も、「かくては詮あるまじければ、一たび刄を土耳古よりをさめて、專ら心を波蘭土の分割に注ぎ、以て他日の壯圖に資すべし。」とて、虎視耽々として波蘭土の方を覘ひぬ。

その後機會は屢々來れり。千七百九十三年と、千七百九十六年とに、カザリン第二世は普墺兩國と謀り、波蘭土の地を分割せしが、前後合はせて三回の分割にあはれ波蘭土はカザリンの餌となりて、遂に全く露西亞の腹中に葬られ了んぬ。

智謀勇畧かくの如く優れてありければ、カザリン第二世は、その後起りし内亂をも難なく鎮定して、モスコー宮廷の中に、絶世の女王として、尊ばれ給ひき。されどその御行状に至りては、これを記すだに心の清々しからぬを覺ゆる節なきにあらず。

ピートル第三世身歿り給ひし後、カザリン第二世の内行ます〱惡しく、平生十二人の寵臣を召し抱えさせ給ひて、これ等に年々一千八百八十二萬ルーヴルの手當を與へ、花の旦、月の夕べ、九重とざす紫のみ雲の中に、宴樂を開きてこれ等の寵臣と共に遊び暮らし給ひしとぞ。

かくの如くカザリン第二世は、世にある限りの贅澤を盡し、傲奢を極め、心ある者には「宮中の怪物」とも呼ばれたりけむも、英才大畧はるかに頭を擢んで、普王が能文の君に在はしまししことを聞き、『朕とても趣味を知らざらめやは、朕は、遙かにフレデリツキ王と匹敵せんと欲す。』とて、時には鉛筆を揮ひ給ふともありし程なりき。

されば露西亞の國民は、皆彼女の「萬歳」を祝し、悖逆の行ありしにも拘はらず、ヴォルテーアをして、『彼女が非行は、實に將來の鴻圖を畫策するに必要なる誓約にてありたりき。』と云ひて、その魯西亞に貢献する處の甚だ大なりしを稱へしむ、あゝカザリン稀世の傑女！「露國史」のあらん限りは、彼の女の名は永久に抹殺せられざるべし。（完）

戰國名婦の面影

大鷲子

世にありとある人、男女の區別こそあれ、誰れか天職なきものあらむ。皆おの〱定まる天職のあるなれば、常にそが天職をまもりて、岐路に走るが如きことあるべからず。さはれ、世は遷り變りて止むべくもあらねば、時として如何なる事變に遭遇するやも知るべからず。されば、變に應じ期に望み、其よろしきに處するの心なかるべからず。ともすれば些々たる事變に遭遇し、おのが天職を忘れ、あらぬ方樣に踏みまよひ、世のもの笑ひとなるものあり、心すべきことにこそ。

今や日露の平和破れて、忠勇武烈の吾軍は遠征の途にあり、海に陸に、人道の破壞者スラブの討伐につと

めつゝあり。内にあるもの、おのが天職を知らば、專心一意そが天職を盡し、世の笑ひを招くが如きことあるべからず。こゝに諸嬢のたよりにもと、吾國に於ける婦人の、よくおのが天職を全ふしたる事どもをものせむ。されど、今昔時を異にし、處世の方も自ら異れば、强てさあれかくあれとにもあらず。たゞ其心をくみて、天晴れ軍國の婦人たらむことを望むのみ。

吾國古來賢母節婦に乏しからず、或は戰國に生れ、或は昌平の御代に生れ、よく其天職を盡し、今に其名を傳ふるもの、一々數へ盡すべくもあらず、されど上代の才女賢婦の事蹟は皆人の知る處なれば、こゝには戰國時代に於ける一二婦人の事どもをものせん。

▲眞田信幸夫人の膽勇

亂れに亂れて寧き日もなき戰國も、豐太閤の起りてより、吹き荒む嵐のなごりもなく和ぎたらむがごと、四海波治まりて、世は太閤のまゝとなりしも、太閤病みて世を去りては、またもとにかへりて、亂れに亂れ、德川(家康)方、石田(三成)方の二つに分れ、遂に關ケ原の戰とはなりぬ。

時に眞田信幸は德川方に味方し、父昌幸は石田方に味方し、父子分れて敵味方とはなりぬ。始め此役の前、信幸上州沼田にありけるが。德川家康本多忠勝の息女を吾が養女として妻せんと、勸めたれば、信幸父昌幸に申しけるは、

「このたび、德川より斯の媒あれど、いまだ去就も定まらぬ此頃、此婚儀結ばゝ、事起りたらむには、德川方に味方せねば義理たゝず候ふ。父上の御意伺ひ上げ候」

と。父昌幸も吾子の思慮ある言葉を納れて、

「去就はともあれ、婚儀結び候へし」

かくて婚儀は結ばれ。本多の息女は、德川の養女となりて信幸に嫁し、上州沼田にあり、沼田様とたゝへられしが、間もなく關ケ原の役は起り、信幸は義に赴きて德川方に味方し、夫人本多氏を沼田に殘して出陣したれど、父昌幸、舍弟幸村、共に心變りて石田方に味方し、西上の途沼田に過ぎり、沼田の城に宿らむとし、使を遣はしければ、沼田の城にありし夫人本多氏、さすがは武將の息女、門を鎖して入れず。人をして申させけるは、

「仰せにはあれど、夫信幸は德川方となりてすでに出馬し、御兩人には石田方に味方して西への御立ち。

父子敵味方となるも軍國のならひ、かくなる上は、女ながらも一城を預り居れば、夫か差圖あらむそれまでは、如何に仰せあるとも、なか〱に入れ申さず候、押して御入り候はんには、一戰に及ぶべく候。」と、憶する色もなく、留守居の士卒を勵まし、自らも長大刀取つて小脇に引き付け、樣子如何にと待ち構へたれば、昌幸父子も城へは入らで、信州上田をさして立ちたりとぞ。

嗚呼天晴れの戰國夫人。夫人もし昌幸の軍に怯ぢておのがつとめを忘れ、城を開けんには、或は人質の辱を受くるの不運に陷りしやも知るべからず。女の身をもてよく一城を守り得たる、其膽勇には男子も及ばぬものあり。さすがは戰國の夫人なる哉。

▲富田信高夫人の沈勇

伊勢阿濃津の城主富田信高、敵の圍む處となり、防戰よくつとめたりしも、敵の力や強がりけん。武運拙く城まさに陷らむとしければ、城兵を二手に分ちて、一手を搦手に向はしめ、信高自ら屈強の士卒を牽て大手に出で、奮戰敵を敗りたれど、

「搦手の防戰危ければ、君には本丸に御入りありて、後の事ども計り給へ」と、搦手よりの注進に、一先づ本丸に引き揚げんと、殘る寄せ手の寄せくるを、打ち斬り打ち斬り、城門に近きけるが、折しもあれ、容貌美はしき若武者一人、緋威の具足付け、半月打ったる兜の緒をしめ、手鎗提げ、城の中より進み出で、信高に助力して、勇ましくも立ち働きつゝ、城の方にと入りければ、信高

「健氣なる若武者哉、さるにても見馴れぬいでたち、誰ならむ、小性にやあらむ」

と近よれば、小性にはあらで、容貌美しく化裝して、鐵漿黒々とつけたる女武者なり。信高驚きこはそも如何にと怪む所に、女武者走り寄り

「さても嬉しや、君にも御無事に御座せしか、妾がこゝまで參りしは、御討死と、味方のものに告げられて、悲さやるかたなく、其場に自刄と覺悟はしたれど、女の身とはいひながら、空しく死せんも口惜しく、せめては寄手の一人なりとも斬り拂ひ、君と同じ枕に討死せんと思ひ侍りて、かくは裝ひ參り候を今こゝに御目にかゝりし嬉しさ」と悦ぶは、吾妻なり。信高又驚き、

「さては御身にてありしか、さるにても危かりしこ

と哉、」と、共に悦び本丸に入りたりとぞ。(夫人は宇喜多安心の息女なり) 夫人もし夫信高の討死と聞き、悲しみのあまりおのがつとめを忘れ、前后の考へもなく、自刄したらむには、夫の生死も知らで、空しく自刄したりと、世の笑ひともなりたらむを、雄々しくも勇ましき此振舞、天晴れ戰國の夫人なる哉。

▲有馬豐氏夫人

有馬玄蕃守豐氏は稀代の勇士なりしが、徳川家康の上杉征伐の途に上るや、豐氏も父則頼と共にこれに加はりて關東に上り、夫人松平氏は大阪の屋敷に殘り、留守することゝはなりぬ。時に石田三成兵を起し、西國の諸將をときて味方とし、猶徳川に隨從して關東にあるものをも我が味方にせんとし、家に殘れる妻子を人質に取らむとはしたり。彼の細川忠興夫人が、石田方の使に接し、

「夫忠興の留守中を、人質などとは思ひもよらず」

と追へ返し、終に石田より軍兵出して迫り來るや、夫人は雄々しくも邀へ戰ひ、力盡きて自ら城に火をかけて自刄し、人質の辱めを免れたるも此時のことなり。

されば、有馬夫人を護らむため、大阪の屋敷に殘り居たる家從の面々、これを聞きては安き心もなし、殊に有馬夫人は徳川と姻戚なれば、(夫人は松平源七郎康直の息女、母は徳川家康の妹なり) 必定人質の事あらむと、猶更に憂慮し、如何にもして事なく護り申さむ、さるにても味方は僅に留守居の衆のみ。敵は大軍。如何はせんと評議とり〲なりしが、徳川家康より、有馬夫人に附け置かれたる古川新八といふもの、聲勵し

「如何に申し來るとも、夫人を敵に渡さんこと、思ひもよらず、押しても取らむとならば、潔く決戰し、力盡きたらむには、城を枕に討死せんのみ」

と、こゝに評議は一決したれど、家從の者どもは、かゝる危き場合、せめては夫人一人なりとも落しまゐらせむと、思慮をめぐらしたる末、出入りの肴屋の小舟に乘せまゐらせ、便ある處に御連れ申すこと、定め其より夫人へ申し上げけるに。夫人は婚ありてより僅に數月、いまだ二十にもなり給はず、いとも優しき方なりけれど、さすがは武士の息女、臆する氣色もなく、

「留守居の者の謀りし事なれば、つゆ粗忽はあるまじけれど、玄蕃殿(夫豐氏をいふ)の御城下横須賀(遠江)までは遙々の道程、なか〲下りがたし。養

父則頼殿の御領地は程近けれど、これは敵の中なれば、身を置く處にあらず。何れもかゝたき事なれば、憖に大阪を出で、、間もなく敵手に渡り、見苦しき目に逢はゞ末代までの恥辱なり。たゞこゝに籠りて、如何に申し來るとも、決して門外へは出でじ、もし強いて連れんとならば、其時は自害せんのみ」と申しければ、留守居の面々、何れも道理に伏し、返す言葉もなかりしが、、敵方にても、細川夫人自害の事ありてより、人質の事止めたれば、有馬夫人も事なきを得たりとぞ。これ留守居の士は留守居のつとめを盡し、夫人は夫人のつとめを盡し、何れも其つとめを全ふしたるものといふべし。



日露戰爭未來の夢（十八）
戰捷世界大博覽會

▲家康の母の深慮

水野忠政の息女、徳川廣忠に嫁し、天文十一年十二月二十六日、竹千代君（家康）を生みて後、故あつて離別となり、三才の竹千代君を殘して、故郷苅屋に送らる、時に廣忠の家從、金田某、岡崎某の二人、主命によりて從士十四五人を引き運れ、これを送りたるが、岡崎と苅屋の境に至りける程に、夫人

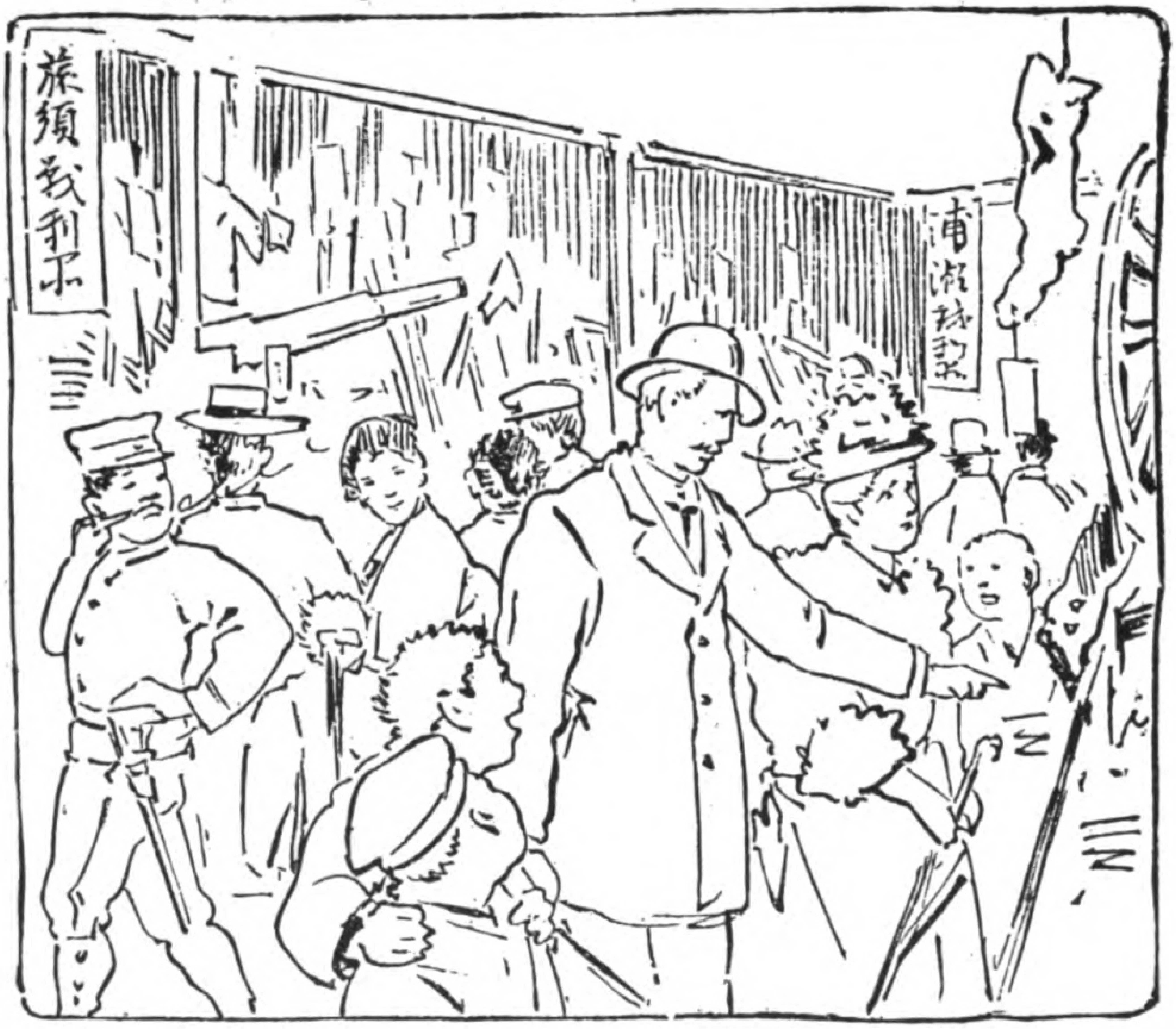
輿を止めさせ、金田岡崎兩人を御側近く召され、
「二人共に、皆の衆を引き連れ、こゝより早く引き返へせよ」と申されければ、兩人
「仰せにはあれど、苅屋まで御送り申すべき旨、主の命なれば、苅屋までは是非に御供仕りたし」と申し上げしに、夫人重ねて仰せられけるは、
「皆の者にこゝより歸れといふも故あること。兄上下野殿(信元)は、只ならぬ短氣の方なれば、こたびのことも如何に思したまふやも知れず、もし苅屋迄參りたらむには、打ち殺さるゝか、髮を剃りて追ひ放たるゝか、二つに一つは免かれまじ。今自らは去らるゝとも、竹千代(家康)は岡崎に殘り居れば、もしさることのあらむには、竹千代成長の後ち、伯父野州殿(夫人の兄)をも恨み申さむ。今自らを送らんより、早く歸りて竹千代を守れよ。竹千代が後の事ども思へばこそ。かくはいふなれ。早々歸れよ。」
と、思慮あり情ある御言葉に、兩人も返す言葉もなく、さらばとて、小川領の百姓を喚び出し、御輿を舁せて御送りし、兩人は士從を連れて歸りたり。かくて夫人は苅屋に入りしが、水野氏の從士水野左近、高木清秀、三百の騎士を率ゐて出迎ひ、夫人が御輿に近づくや、一散に走りより、
「主の命なり。岡崎より御供の從士殘らず討ち取るべし。一人も遁がすな」と、羽織を脫げば、下には用意の具足つけたり。夫人は固より期したる事なれば、更に驚く氣色もなく、
「皆々の迎ひは嬉れしけれど、其有樣は何事ぞ、さても仰山なる振舞よ」と詰れば、迎ひの從士水野左近進みより、
「岡崎より送りの從士殘らず召取るべし、一人も逃がすなとは主の命なり、岡崎の士は如何せられし、何處にありや」と。息せき申せば、夫人申されけるは
「兄上の御氣象。かくやあらむと思ひたれば、岡崎の士はすでに歸し遣りたり。兄上には如何樣にも申すべければ。皆々もこゝより引き返せよ。無謀の振舞あるなよ」と。こゝに從士の面々返す言葉もなく、手を空うして歸りけるとぞ。

去られては亦たよりなきものを、兄上がこと、吾子のこと、後の後までも思ひ定め、去らるゝ吾が身は神の運命とあきらめての此行ひ。さすがは戰國の夫人なるかな。

▲津田八彌の妻

織田勘十郎信行（織田信長の弟）が家臣に津田八彌といふものあり。才幹優れて信行の寵眷斜めならざりき。こゝに又信行の侍女に勝女といへる乙女あり、容貌美はしく氣質も怜悧なりければ、君の寵愛深かりき。信行此二人こそ一對の好夫婦と思ひ、もとより共に愛する侍臣侍女、二人を召して夫婦の契結ばしめんと、ある日酒宴の折柄、側近く八彌を召して、「いまだ定まる妻もなき其身、吾れ好き妻を媒ちせん」とて、やがて、勝

日露戰爭未來の夢（十九）



女をも召し出で、其よし語り聞かせ、「いざ親ら媒介して取らせん。今より兩人妹脊の縁定めよ」と、固めの盃三々九度、假の婚儀は結ばれ。やがて吉日選びて正しき儀式行はんと。其日は二人君の仰せの辱なきを拜謝し、耻しくも嬉しくも其場を下りたれど、月に叢雲、花に風、八彌非業に死して、此良縁も圓なる能はざりき。始め八彌君の親任厚く、家中の譽れ高かりければ、そを妬む輩も數ありけるが、中にも

信行の老職佐久間七郎左衛門、老職を笠に倨傲の擧動多かりしが、八彌の權威己が上に出んとするを快からぬことに思ひ、如何にもして八彌を除かんとし、家從の勇士を語らひ、八彌を刺さんと計りけれども、八彌早くも覺りて、用心をさ〳〵怠りなければ、手を下さん術もなかりけるが、ある夜八彌が家に火を放ち、驚き出づるを偵ひより、終に八彌を刺殺したり。不意の事なれば家の者ども、周章狼狽、事のよしを主君信行に訴へしにぞ、信行急ぎ檢屍をなさしめけるに、八彌が屍骸の傍に短刀あり。正宗の銘に金の丸龍の目貫打たり。信行之れを見れば正しく七郎左衛門所持のものなりければ、さては七郎左衛門の仕業にてありしかと、直ちに同人を召したれど、七郎左衛門は事露はれしを知り、逃れて美濃の國稻葉の城主齋藤道三の許に隱れたり。勝女はいまだ正しき式は擧げねど、固く契りし八彌が、果敢なき最後と聞きては、悲しさやるかたなく、涙にむせびしが、もとより健氣の乙女なれば、かくてあるべきにあらずと氣を取り直し、心を決して、直に主君信行の許に參り、「今より御暇願ひ侍る」と暇をぞ乞ひける。信行ももとより情ある武士、おのが愛する八彌の非業の最後をかなしみ、打ち沈みて居たりけるが、此願ひ聞きては猶更に嘆きを增しながらも、聲はげまして、

「其願ひ理なれど、今暇とりて何とはするぞ」と申しければ、勝女、

「仰せにはあれど、八彌非業に死してより、ために仇を報いん者もなし、妾は女の身とはいひながら、契りかはし〻吾夫の仇、如何で討たずに居らるべき」と申し上げる。信行、

「そは望ましき事ながら、佐久間は名高き剛の者。其方は女の身。如何で叶ふべき。」

とかつ慰めかつ諫めて止めけれども、勝女の決心動かすべくもあらねば、八彌が斬られし正宗の刀を賜ひて、其請ひをぞ許しける。これより勝女は一人旅路の空、美濃の國へと赴き、岐阜に近き村なる叔父の家に身を寄せけるが、間もなく齋藤道三の一子義龍が許に仕へ、夫人の侍女として寵愛を受けたれば仇に近づくたより得たりと心に嬉び、時の至るを待ちけるが、天此至情を納れてか、時は來れり。頃は彌生の十五日、騎射の事あり、家中の面々、今日ぞ吾手並をあらはさんと、吾れも吾れもと集まりて、佐久間もこれに加はりける。勝女も夫人に侍して棧敷にあり、天の佐けと打嬉び、

今か〳〵と胸騒がるゝを姿には見はさず、心を鎮めてありけるが、騎射の壯丁打ち揃ひ名乘り上げ、佐久間七郎左衛門と名乘り上るや、君の賜ひし懷劍拔きもち跳り出でゝ、大音聲

「津田入彌が妻、只今仇を報るぞ」といふ聲諸共ぐざと刺したりける。不意の事に騎射の面々それよあれよと叫きつゝ、勝女を取つて押へ、道三の前にぞ押し出しける。勝女憶する色なく事の始終を申し上げゝれば、道三其心に感じけれども、さて許すべきにもあらねば、明日死罪に行ふべき旨命じ、獄に下しける。夫人これを憐み、貞烈の勝女の命めさんは不便なり、まげて一夜は妾に預けたまへ」と切に請ひければ道三も其請ひを納れ、其夜は夫人に預けゝる。夫人勝女を召し、

「夫道三今宵妾に其方を預けしは、心ありての事ならむ。何事も妾に任せ、其方は今より何れになりとも落ち延びよ」

と情ける言葉に、否みもならず、涙ながらに伏し拜み、岡崎にと落ち延び、事の次第を領主徳川家康に訴へければ、家康これを聞きて深く其心に感じ、万人の鑑として扶持することゝなされけるが。後ち七郎左衛門が兄玄蕃、勝女を得て弟の仇を復さんと、織田信長に請ひければ、信長人をして其よし岡崎へ請はしめたれど、家康、

「勝女は貞烈無双の女性、殊に吾れを賴みて來りしものを、如何なればとて、人手に渡すべき、强いてとあらば、一戰にも及ばん、」と申し送りければ、織田方にても其儘にはやまず、使者の來往數度に及び、風雲危く、將に天下の一大事ともならんずる程なりければ、もとより思慮ある勝女、かくては大恩を仇もて報ゆるものと思ひ定め、其旨細に書き遺し、自ら刄に伏して身まかりけるとぞ。其身戰國に生れ、よく其つとめを全ふしたるもの、勝女の如き、天晴れ戰國の婦人なるかな。（完）

王昭君胡國入輿記

綠眼公子

李白の詩に曰く

昭君拂玉鞍。上馬啼紅頰。今日漢宮人。
明朝胡地妾。

と、是れ昭君の匈奴に之くを詠じたるもの、離別斷魂の狀、千言萬語すと雖も、亦此外に出づる能はざるなり。昭君は國色無雙、生れて深閨に人と爲り、仕へて漢宮に入る。是れ豈に胡人に嫁するが爲めならんや、寶に選ばれて、君王の側に侍し、光彩の一門に生ぜんを思ひたればなり。而も一朝命を被むりて、胡人に配し、將さに黃沙萬里の途に上らんとす、縱令國信を辱しめざらんが爲め、深く自ら決せし所ありとするも、別に臨んで誰れか逡巡するなからんや。乃はち纖手を以て、玉鞍を拂ひ、馬に上らんとして、未だ上らず、上つて紅涙潛々たり。婚嫁は人生の盛典、女子の榮事、而も昭君の嫁、盛以て盛となすに足らず、榮以て榮となすに足らず、將た誰れの爲めに貌くり、誰れの爲めに粧はん、昭君の嫁、既に是れ千歲の悲劇、況んや其辭する所は長安の宮闕、未央の玉殿は、青空に入り、承露の金莖は、雲外に直く、水殿雲廊椒蘭香ばしき九重の門、其行く所は塞外の穹廬、白草原頭橐駝浮び、黃河源盡きんとして、春光長く度らざるの蠻地、後宮の佳麗三千人、而して昭君獨り此命に接するに於てをや。

入輿の地

葱嶺以東曠邈の野、四境殆んど際涯なく、黑龍江迂曲縈廻する一千里、枝流壤を潤すと雖も、其地沍寒にして、土着的生活に適せず、蠻民の此に生々するもの、こ群を爲して漂浪水草を逐ひ、次第に南下して支那の西邊を犯す、胡と云ひ、戎と云ひ、狄と云ひ、匈奴と云ひ、中國の民、之を禽獸視せり。而も此蠻民や、秦漢の時に及んで、其勢甚だ猖獗を極め、愈々接近して、愈々大に、浩々たる戈壁の沙漠を橫斷し、血に饑えて來り、肉に飽いて去り、邊疆歲として其禍を被らざるなし。秦之が爲めに長城を築き、漢之が爲めに邊戍を置き、百万の生靈を殺し、百戰の修羅を演じ、塞外夜々鬼哭の啾々を聞き、長安之より空閨の婦多く、而して尙ほ其侵入を攘ふ能はず、終に懷柔を講じて、暫く其禍を緩うせり。昭君の嫁亦實に此一手段に外なら

ざりしなり。嗚呼長城以て匈奴を防ぐに足らず、利鏃以て單于に抗するに足らず、而して纖弱一婦人の身を以て、漢室安危の命に當るとせば、昭君の嫁、又榮ならずとせず、壯ならずとせず、婦人の力を以て國家の安危を決する、何んぞ獨りカザリン女皇に限らんやクレオパトラ女王に限らんや。

丹青後宮を弄す

舟行蜀を出で、巫山の下を過ぎ、流に從ふ數十里香溪南より來つて合す。香溪の源、昭君村あり、連山重疊其四方を遶りて、別に一寰を爲せり。是れ即ち當年の佳人昭君の生地、昭君名は嬙、後世晉文帝の諱に觸るるを以て、明妃と記せり。良家に生る。雲鬢華顏、天成の麗質、國中の長者爭ふて之を娶らんしとて、皆應せず。十七歳の時、選ばれて漢元帝の後宮に仕ふ。元帝色を重んじて、後宮佳麗多く、一々召見するに遑あらず。乃はち畫工に命じて、其顏貌を畫かしめ、召し見て之を幸せり、後宮各爭ふて、賂を畫工に贈り、多きものは十萬金、少きも五万金を下らず、皆艶を衒ひ、妍を競ひ、麗を爭ひ、媚を呈し、醜も美と爲すべく、肥も瘦に化すべく、三千粉黛の美、萬乘天子の睫、一に畫人一枝の筆に懸り、賄賂の多寡に存せり。而も昭君の美、天成の麗、寧ろ薄命にして、一世を終ふるも、又何んぞ區々凡庸畫人の手を假つて、之を粉飾するを許さんや。昭君獨り一金を畫人に與へず、畫人乃はち昭君を貌するに、特に醜客を以てす、元帝是を以て未だ昭君の美を識らず。斯くして畫人は、後宮を穢弄し、君主を欺瞞して、野草山花は、玉階に移され、美蓉の名花、又人の一顧を與ふるなし。西宮の靜夜、昭陽の御宴、大液の春遊、孰れか是れ昭君悲惋の媒介たらざらん。而も後宮金鎖合して、月明かに花落ち空しく蛾眉の衰ふるを待たんすとす、昭君の不遇、誰れか一掬の同情なからんや。

匈奴の入朝

竟寧元年、呼韓邪單于漢に入覲し、後宮良家の子を

得て、以て漢に婿たらんことを請ふ。呼韓邪は匈奴の酋長、漢の纔かに之を懐柔して、依つて以て邊疆の安を圖りたるもの、而して今此請あり。漢之を拒まんか、匈奴の和親は、破れざるを得ず、鞏皷地を撼かし、胡軍陰山を度る、事知るべきのみ、長安の太平は、破られざるを得ず、倉廩空竭せざるを得ず、百萬の生靈枯骨たらざるを得ず、結婚は漢の爲め、匈奴の爲めにあらず。而も之に應せんか、後宮誰れを以て之に充つべき。色を重んずるの君王、何んぞ其嬖幸を以て、魑魅魍魎の地に投ずるに忍びんや。乃はち後宮三千其最も醜なるものを選んで、單于に嫁せんと欲し、圖書を引きて之を求むるに、皆是れ艶麗嬌娟、百花の妍を戰はすが如く、清楚なるあり、淡泊なるあり、濃抹、婀娜、羞づるもの、嫣むもの、元帝只恍として選ぶ所を知らず、獨り昭君醜、聊か以て惜しむなきに足る。是に於て、沙漠万里の嫁命は、忽ち昭君の頭上に下れり、夫れ匈奴の地、北風天山の草を吹き、雪片掌の如く、其俗獷、其人野、玉關を出で、平沙を渡り、一たび去れば、再び漢宮の日月を見るを得ず、長安太平の民の聞いて以て身毛を悚然たらしむるの地、若し尋常深閨の女子として、此命に接せしめば、必らず愕然として恐れ、慄然として震ひ、遂に遁れ匿れて、穴に入らんとせざるもの、幾何ぞ、而も昭君の命を受くる、自ら深く命を辱しめざるの意を決せしなり。

胡人の死

昭君臨別の謁、是れ元帝の昭君を見るの時にして、又其終りなりき。五歩に玉閣起り、十歩に雲樓聳え、離宮三十有六、天下の美を聚め、四方の珍を盡くし、紫房の複道は、未央に通じ、東に鳳閣、西に虎圈、烟祀豐かなる集靈殿、飛簾風に舞ふ桂館、是れ漢皇の城闕、七寶牀、雜寶案、寶屏繞ぐり、列寶帳垂れ、香烟廊を繞ぐる、是れ漢皇の宮、元帝呼韓邪の匈奴に歸へるに及んで、爲めに儀を盛んにして、宴を開き、百官を會し、將さに此時を以て、昭君を嫁せんとせり。百官帝の左右に侍し、後宮帝の後を擁し、呼韓邪帝の

前に在り、綺羅相映じ、歌臺幽かに響を送る。昭君乃はち盛裝して堂に上り。靜かに蓮步を移し、豐容靚飾光漢宮に明かなり、元帝之を見て、色動く、既にして昭君前んで謁を執り、舉止閑雅、從容として迫らず、こ帝見て愈々恍然たり。然れども國命既に下す、復た動かすべからず。遂に昭君を呼韓邪に嫁せり。

胡地の美人

昭君既に呼韓邪に嫁し、將さに長安を辭し、征路万里の途に上らんとす、其服する所は、胡地の氈服、其伴ふ所は、紫髯の胡人、即ち是れ今日漢宮の人、明日胡地の妾、僅かに一日を異にして、身を異にし、處を異にする、此の如きに至つて、誰か萬感湧出するなからんや、昭君是に於て涙下り自ら禁ずる能はず、顧みて故郷を憶ひ、俯して薄命を歎ず。而も命一たび下り、意一たび決して、此途に上る、何んぞ今に至つて逡巡するを得んや。乃ち鞍を挪つて、馬に上り、詩を作りて、悲惋の情を叙して曰く

秋木萋々、　其葉萎黃、　有鳥處山、
集于苞桑、　養育毛羽、　形容生光、
既得升雲、　上遊曲房、　離宮絕曠、
身体摧藏、　志念抑沈、　不得頡頏、
雖得委食、　心有徊徨、　我獨伊何、
來往變常、　翩々之燕、　遠集西羌、
高山峩々、　河水泱々、　父兮母兮、
道里悠長、　嗚呼哀哉、　憂心惻傷、

と、自ら翩々の燕に比し、以て其愁傷九廻の情を述ぶ。而も翩々の燕や、春去秋來、復た故巣に歸へるの時あり、昭君の此行、何れの時か父母を見るを得ん、思ふて是に至れば、更らに一段の斷腸を加へざるを得ず、是より先き江都王建の女、烏孫(露國人種)に嫁し、山河悠々の途に上るに當り、馬上琵琶を彈ぜしめて、以て其離愁を慰めしむ、呼韓邪亦之に倣ふて琵琶を昭君に與ふ。昭君乃はち行々琵琶を彈じて、歌に和し、感極まつて嗚咽し、之を送迎するもの、皆爲めに涙を流せりと云ふ。

思郷の涙

昭君既に單于に赴き、漢家後宮第一の美を以て、匈奴白髪の老爺に侍せり。呼韓邪昭君を以て閼氏（正妻の義）となし、寵一國を傾けたりと雖も、穹廬の室、蠻民の郡、何物か昭君思郷の念を慰むるに足らん、崑崙山南月斜なるの夕、胡笳秋風に悲しむの時、昭君の恨、綿々盡きざるものありき。乃ち一書を裁して、元帝に上りて曰く

臣妾幸得二禁掖一、謂三身依二日月一、死有二餘芳一、而失二意丹青一、遠竄二異域一、誠得二捨レ軀報一主、何敢自憐、獨惜國家黜陟、移二于賤工一、南望二漢闕一、徒増二愴結一耳、有レ父有レ弟、惟陛下幸少憐レ之

と、身の不遇を歎じ、情の悲惋を寫し、而して其實に丹青の細枝に誤らるゝを訴へ、蠻地に遠竄せらるゝと雖も、尚ほ漢宮の安を希ひたりき。元帝書を得て、悔恨の情に堪えず、人を遣はして畫家を捕へしめ、盡く之を罰したり。是より後宮亦賄賂の弊を改めたりき。

青塚

昭君匈奴に在る、數年にして、二女を生み、長を須卜居次と謂ひ、次を當于居次と云ふ。其後ち呼韓邪沒し、昭君寡居するに及んで、義子の姦する所となり、又一子を生み世違と云ひ。斯くして漸く匈奴の生活に年を經と雖も、尚ほ漢宮眷戀の情措く能はず、沒するに及んで、其塚今に至るまで、草を生せず、蓋し昭君怨恨の然らしむる所なりといふ。嗚呼一婦人の身を以て、天涯の客となり、父に離れ、母に別れ、弟妹に遠く、而して又君王に捨てられ、紅顏蛾眉、徒らに朔風に老ひ、芳魂長く沙塲に迷ふ。昭君の一生は、皆是れ薄命の歷史。而も此薄命や、當時滔々後宮腐敗の風を趁はざりしに因りたるもの、後世詩人、万斛の涙を以て、爭ふて其事を叙し、其不遇を賦する、洵とに其凛乎たる貞操ありしに因らずんばあらざるなり。（完）

宗助國侍女玉藻

堀内新泉

蒙古の艨艟海を壓して我が對島に殺到し、岸近く其等の船を着くるや否や我れ先にと上陸するは何れも獸の如き相貌した奴、おもひ〳〵の武器を手に取り、家毎に亂入して男と云はず女と云はず、老幼きの差別さへ無く手當次第に引捕へて、或ひは手を切り脚を斷ち或は鼻を削ぎ胸を裂き、甚だしきは姙婦の腹を割つて胎兒を引出すなど、亂暴狼籍殆んど到らぬ所無く、見る間に全島血腥さい臭ひを放つて、叫喚の聲人天に充滿した。

それと見るより守護代宗助國父子、悲しいかな多からぬ部下を率ひて塞地に馳向ひ、孤軍大敵の眞中に切入つて縦横に奮鬪し、數多の敵を討取つたが、討つても討つても敵は無量幾千萬、黑み渡つて島を埋め、我れには續く味方無き此處多勢に無勢の悲しさは軍の進退心に任せず、時刻移るに從つて味方は殘兵少く討たれ、殘るは僅に主從五騎、加之も助國首いづれも深手を負つて居た。

敵はこれを十重二十重に包んで擊つ。深手の助國屈せず猶も戰ふ中、我が子助親を始めとして殘る三騎も敵に討せた。助國いかに剛なりとも事は早その終焉に近附いた。

彼も既に今はと思ひ定めた景色で、一騎疾風の如く敵を衝き、一方の血路を開いて、濱邊傳ひ館の方に四五丁ばかり馳返し、その頂より豁然と海を見晴す望の岡の下まで今や來たると倶に此處よと飜然馬を下り、濶歩丘を上つて頂に達し、翠鬱たる一本松の根方に悠然座を占めて、右手に晃と青光七寸、胸の邊を寛げた。

これも亦既に幾多の敵にか當り、一歩おくれて館の方より此の丘の下に馳來り、端無くも主無き馬を一目見るより足を止め、「こはこれ正しく我が君の」と云ひも終らず右方の丘を凝然と見あげて何をか認め、「や、

やしとばかりに馳上る一人の女武者。芳紀はやう〳〵十七八。先づ見る容顏花の如きが、鮮血滴る白柄の薙刀小脇に掻込み、誰が女とも白妙の小袖に文爲す眞紅の襷、五尺の緑髪汐風に振亂し、松の根方に馳寄つたが、これに先立ち助國は腹十文字に掻切つて、最期の息を引いて居つた。

それと見るより氣も狂亂。前樣に突伏したのを抱起し、燃ゆるばかりの朱唇を耳に差寄せ無



念の涙「我が君さま」聲を限りに二度三度呼んでも呼んでも應へるものは岸うつ波の音ばかり。そもやこれを誰とか爲す。助國が妻、月小夜の侍女、名は玉藻。何を何うする暇も與へず、敵はまた此方へと潮の如く寄せて來る。玉藻はおくれず身を起し、「切ては君の御首を。――ゆるさせ玉へ我が君さま」無念と攫んだ助國の手から短刀取るより早く首掻落し、それもこれも一瞬時、松の根方を北へと廻り、薄の間を掻分けて同じ刄に掘ること尺餘、主君の首を窃に葬り、「いでこの上は女ながらも徒には死なじ、可惡外夷が所爲かな」

玉藻は再び松の南に取つて返し、更に襷を締直し、薙刀執つて、「いざ來よ外夷！」

折しもあれや一群の蒙古勢、丘の直下に進んで來た。虎軍に投ずる小羊のそれにも似たる美女玉藻、手早く薙刀取直し、星の眼の光凛々しく、人波打つて寄せ來る敵を今やおそしと待受けた。

眞先に進んで來た、髯蓬々たる二三の猛夫は凝然と仰ぎ、「ヤア散らすは可惜き可憐の花！手捕にせよ」と罵いて、近寄る一人の眞額に、電光一閃、玉藻は「えい！」見事二ッに割つたを手始め、凄いは人の一念力、前に後に右左、胡砂吹く風の荒武者を同じ枕に薙倒し、雪の腕に雄々しくも四邊の敵を拂つたが、身もまた同時に數ヶ所の痛手。眞紅の血汐に白妙の小袖を染めて薙刀を杖に身を支へ、吻と一息吐く景色、紅顔忽ち色褪せて、死はその眉宇に動いて來た。

風に亂れて散りかゝる髪を玉藻は緊乎と啣へ、又も此方へ寄せて來る敵を屹度睨んで喘いで居たが、片手に左の片袖を引伸し、右の小指を咬切つて、流るゝ血汐にさら〳〵と一首の辭世を書き終つて袖を斷ち、一本松の枝にかけ、終焉を松の根方に座り、蹶て用意の青光一閃！群る敵は双眼の前に押寄せた。

玉藻は礑と睨みつけ、「寄るな夷等！日本女子の最期を見よや」云ひも終らず吭を突き、姿勢も亂さず地に伏した。

時は何時、文永十一年。月は何時。神無月十日の、濱風寒きその夕！

帝國の勲章の種類（口繪解）

我日本に於て始めて勲章の制定ありしは文武天皇の御代大寶元年なりき、勲章は元來功勞を表するものなれば昔は男子のみに限らず或は婦人に賜ひし事もあり或は神社に献られしこともありしなり。勲章の尤も盛に行はれしは奈良朝時代なりしが此時代の勲章は唯勲位のみにて今日の如く章綬を佩用せしにはあらざりしなり。朝權衰へて後久く其事絶へたりしが明治維新の後八年四月に至り再び勲章の御制定あり此時は勲等賞牌と稱して八等に頒たれ即ち今の旭日章なり、翌九年更に勲章と稱し十年十二月に至り大勲位菊花大綬章及び大勲位菊花章を欽定せられ二十一年一月寶冠章及勲一等旭日桐花大綬章又二十三年金鵄勲章を増設せられたり。

▲大勲位菊花大綬章　同頸飾

是は國家に偉勲ある者に叙賜し章は旭日と菊花の形とを以て飾り綬は紅紫織なり大綬を以て右肩より左脇に垂れて之を佩ぶ、又大勲位菊花章は大綬章の副章にして製式は同じけれども綬なくして左肋に佩ぶ、大勲位の頸飾は本章と併せて是を賜ひ。又本章を有する者に特に賜ふことあるべしと雖も今日の處にては皇族の外未だ是を賜ひし者あらず恐れ多くも陛下の佩び玉ふ御頸飾は是れなり。

▲寶冠章

これは勲一等より八等に至る婦人の勲勞ある者に賜ふ章は寶冠と竹櫻の形とを以て飾り綬は地黄色雙線紅色なり勲一等は大綬を以て右肩より左脇に垂れ其副章を左肋に佩び勲二等以下は結蝶狀の綬を以て左肋に佩ぶ

▲勲一等旭日桐花大綬章

是は旭日大綬章の上級にして殊に勲功顯著なる者に賜ふ章は旭日と桐花の形とを以て飾り綬は紅色雙線は白

色なり大綬を以て右肩より左脇に垂れ其副章を左肋に佩ぶ。

▲旭日章

分て八等となす勳功顯著なる者に賜ふ勳一等より六等までは旭日と光線とを以て飾り勳七等は青色桐葉勳八等は白色桐葉なり勳一等は大綬を以て右肩より左脇に垂れ其副章を左肋に佩ぶ勳二等は右脇に佩び其副章を中綬を以て喉下に佩ぶ勳三等は中綬を以て喉下に帶び勳四等以下は小綬を以て左肋に帶ぶ以上の勳章には年金を加賜せらるゝ事あり。

▲瑞寶章

是も八等に分つ勳功又は積年勤勞ある者に賜ふ章は鏡珠の形を以て飾り綬は地淡藍色雙線に橙黄色なり勳一等は大綬を以て右肩より左脇に垂れ其副章を左肋に佩ぶ勳二等は右肋に佩び三等は中綬を以て喉下に佩ぶ四等以下は小綬を以て左肋に佩ぶ。

▲金鵄勳章は

功一級より七級に至る武功拔群の者に賜ふ章は金鵄と古代武器とを以て飾り、綬は地綠色雙線は白色なり功一級は大綬を以て左肩より右脇に垂れ其副章を左肋に佩ぶ功二級は右肋に佩ぶ其副章を中綬を以て喉下に佩ぶ功三級は中綬を以て喉下に佩び功四級以下瑞寶章の例に同じ、金鵄勳章には特に年金を下賜せらる即ち一級は千五百圓、二級千圓、三級七百圓、四級五百圓、五級三百圓、六級二百圓、七級百圓なり。

才媛詞藻 夏季百題

子規を聞く

大坂市、區清堀ウヰルミナ女學校　岡崎かつ子

匂ひし花もいつしか根に歸り緑なす木々の梢のやう〳〵茂り合ふ昨日今日降り續く五月雨のいといぶせくさらぬだにいと物淋しきを病ある身は一しほにて書さへ無聊に苦しむを夜に入りては話しかたきとてなきものから一人孤燈の下に平生愛讀の詩集など繙きて見ぬ世の君と交りて文の林の奥深く分け入る程にほと〳〵と落つる軒の玉水の音しめやかにして突然耳を驚かしゝは絹を裂く如き子規の一聲！今年も亦悲しかりし其往時の夢を繰り返せとか、あゝ思ふともなく思ひ出でらるゝは、彼時の光景かな、盛者必衰會者定離とは云ひながら何とてまがつみはかくも吾がためにつれなく在すらむ、指かゞなへば十とせの昔、妾のやう〳〵村の學舍に通ひ初めし頃なりしよ、時も睦月の末つ方わが懷かしの母君はかりそめのいたつきにて枕に親しみ給ひしが日を經れども頭わがらす名ある藥師を招きてはいろ〳〵に手を盡しゝが病愼みに癒ゆべくもあらず、其櫻花笑ひ鳥歌ひ世の人々は花見よ遊山よと皆とり〳〵に浮れありき、彼の花の咲く頃はいねなむと宣ひし庭の海棠さへ主待ち顔に優しくも笑うなだれて笑み傾けしが病は次第に重ろのみにて遂に花は青葉と立かわり鳥さへ故郷に殘しゝ子を慕ひて越路をさして歸り行く夏の初め わが母君はいとしき我子を振り捨てゝ唯一人遠き〳〵彼の世にとは旅立ましぬ、あゝ其時よ其臨終の斷末魔青ざめし頰をつたふ冷き涙を拂ふ力もなき迄やせ細りたる手に楓の如きわが手を握りしめ給ひし其時よ、澄み渡りし大空に一聲高く初音を洩せし子規の血を吐く如き聲に、眠りかけし眼を細くひらき色なき口唇を動かして一きわかたく此手をば握り給ひしよ、われは得堪ねじ其後の事叙べむとは思へどさらぬだに拙き筆の一しほにぶりて動かざれば、

あゝそれより後匂ふ春や錦の秋は九たびも行きかひて此年はもはや十たび目の春は行きて涙催す子規の名のり出づる頃とはなりぬれど我が待つ母君は永久に歸り來まさず、あゝ慕はしの母君よ、今は何所に居給ふぞ、疾く天國に上りて慈愛なる神のみ手にすがりパラダイスにや遊び給ふか下界には君をしたひ泣く者あるに、

思ひ去り思ひ來れば我胸は張り裂けむ計りに、せき來る涙止めもあへずハラ〳〵と書の上にはふり落ちぬ、あまりの胸苦しさに窓押して外面を眺むればいつの程にか雨はやみけむ雨後の月は拭ひし如く澄み渡りて青葉の露を玉と欺くに又も泣けとや中空に聲のみ殘して子規の姿は何所行きけむ影だにもなし

夜や更けぬらし四方は森として萬籟聲なく中天の月は不遠慮にも涙に汚れし我顔を照らし軒の花橘は古しへを語り顔になり〳〵やさしき香りを

踊ぶなり、

大宰府詣

博多　磯野いち子

ばら／＼と笹の葉に音あり、と見れば空は一面薄墨のまくの如く冷風さと吹き來て面をうつ雨二つ三つかくて はけふのちかひもあだならむいとむもとなきまゝてり／＼坊を庭の松の木につるしぬかづき／＼ふしどに入りぬ

たれやらの呼ぶ聲に夢やぶれぬ先つ氣にかゝる空模様いそぎ外面見渡せばきのふのけはひににもやらず青鈍をかゝげし如くはれ渡り東方よりさしくる日かげうら／＼と鷄の聲さへけふはわけてすが／＼しふと見ればよべのてり／＼坊さかしまになりてぬれ 鳳の様いとあはれなり

定めの時は來りぬはやたれかれの君も來給ひぬ先御天氣がとけふの愛拶の初端となりしもうれしや」 支度もそこ／＼さらばの一語をのこし停車場さしてひたいそぎぬ

三等待合は人充滿せりせむなくてかた角にたゝづみ居れば三等待合にいづこの式部にや袴つけたるが二三 人樂しげなる高わらひ心にいかなる興のひそみしかはしられどかゝる人中にさりとは心づき給ぬものかな

しばししてベルの音いさましふなりぬ乘客は我を先にと列車にうつりぬ野も山も人も牛も一散にかけ行きつゝいで來たる二日市驛それより馬車にうつり僅にして梅か香かほる宰府の宮へとはつきぬ

先神前にいたりあまたゝひぬかつぎつゝ禮拜をすまし公園の方にむこふとみ子の君一與に御身等 は何をか神にねむじ給ふといひ給へば我時局につきてと我も我もしかりしかりなど皆々いひ給ふはや梅は八分のさかりにて香 高くうぐひすさへ愛らしき聲ふり立てさへづりぬ客足も意外に多く紳士風の人町人風の人はては學生令孃奥樣らしき人などとり／＼に引もきれず

はや正午も過たりける頃たづさへし割子開かむと處擇べばこゝは人足多しかしこはけしき見處な しなど頓に處も一定せずやう／＼に小高き山と決しよぢのぼる其愉快なにものにたとふべき」 見渡すけしきのこるくまなく春の氣候をあびていと長閑にかすみの中より賤か家の三つ四つ五つ小さく牛引きていける男子のあゆみぶりなどさながらパノラマの如し此けしきをだいし連歌めきし事して後のかたみにせむときよ子の君い ひたまへばたつ子の君さるむづかしげなる事はと一目散にかけ下り給ふ皆あとを追て下り門前の方に歩をうつせば兩側なる茶店よりおはいりお寄とよぶ聲いつもながらをかし池のほとりに來れば海軍服きたる愛らしき人がなげやる麩をはれ上げはれ上げ食せる鯉の樣心行くばかりおもしろし

宰府に參りて梅が枝燒の土產なくてはとかたへの茶店うかがふおもひきや停車場にてあひし式部連車座となり なにやら聞き給ひければそとぬけ出かたへの茶店に入土產ものなど取そろへ四方山の話しに時うつしけるほど に觀世音寺のかねの音ボーンと陰にひゞきねぐらにいそぐ鳥のこゑいとあはれに又もおもひ出す西征の人々再び神前にいたりそが幸福をいのりぬ

首夏の朝

伊勢國宇治中之切町　花涯女史

山間の山吹も殘りなく散つて了つて今日は白妙の卯の花が眞盛り、眼には青葉の心地よい景色となつて春の夢路の跡もないが、何とはなしに氣分がかうのんびりして、ほく／＼微笑のせらるゝ程、活々した田圃の姿が嬉しう感じられるのである。

殊に、霧などが恰も薄絹の御戸張でも下がつて來るやうに、天上からしづ／＼と彼の高い嶺から嶺へ、夫れから段々峡を覆ふて遂には下界の谷底迄覆ふて了ふと、天地は暫し美しい紗に接するかのやうに、何とも言はぬ甘い薫りは其幹褄のゆるぎから洩れて來る、と思ふ内に、風と一陣、清い風が青葉の上をするら／＼と渡ると霧は徐かに動き初めて、名殘惜しさうにみ空へ歸つて行く、谷を放れて、峡を放れて、遂に高嶺を放れる間際の、其は何とも形容のしやうが無い。

霧が晴れると浮出したやうな山の姿、萬綠叢中に點々たる躑躅、杜鵑花、蜀紅の錦を綴り、流業の藤は雲模様と匂ふて奥床しいこと、氣高いこと、其美の神の懐に温かい息を得た小鳥が、囀りと自然の樂譜を繰返して讃美の歌を謡つて居る。

一段、二段、五段、十段、農家の屋根から農家の屋根へ、ぬるい勾配の小山畑には、麥、菜の花、夫れに紫雲英などが配合よく彩色されて居るのが、誰やらの水彩畫見るやうで。

雉子が一羽、茶の木畑を啼き起つて里川の彼方に落ちて行つた。

旭は今、戰勝國の一日を照す可く、嚴かに、且つ慈愛深き光を人の子の頭に頒たうとして、夏の錦を飾らした下界に、紫金の御車を進められるのであつた。

田うえ

岡山縣佐津郡一宮村　小山松枝

衣まで泥にまみれたれど、手のみ清めて稚子に乳をあたへ、まだやう／＼六歳になる小女に負ぶさせて、畔づたひに彼方へ行くのを見れば、何とはなしに涙がこぼれた、あゝ夫の君は今ころ如何なる艱難を犯しつゝ居ますか、するに われ女々しきふるまひなしては。………これしきのこと物かは、と籠に入れし早苗を運びて小田に至れば、馬鍬もてかきならし給へるお舅さんは、去年にもまして勇しく見ゆる。こゝかしこに苗をば投げちらし、やがて廣き田面に二人淋しく植へはじめました。ふとひな歌の聲をかしく聞ゆるにふりかへれば、程遠からぬ處に七八人打集ひて樂しげに植へて居るのです、既に畔つゞきの小田は大かた青く見ゆるではありませぬか、私もまけぬ氣になりてはげみました、所へどや／＼と四五人やつて來て、さぞお困りなさるでせうとて手傳つてくれるのです、そして忠勇壯烈なる戰爭の話をなすので、それになぐさめられて間もなく植付てしまひました。夕暮まではかゝると思つたものを、未だ太陽は西の山の端に殘つて居ます。ほんにどんなに嬉しかつたでせう。

それから家に歸つて夕食を調へて居ると、小兒ももどつて來ましたから一同お膳にむかひました。お舅さんが「お前がよく働いたので今年は大に樂だつた今日は少しも疲勞せん」と仰つたので、私もしん底からうれしかつた。小兒は小兒とて、今にお稲が大きくなつたら、お米が澤山出來るわ、それまでにはお父さんお歸りなさるの、と云ふのですもの。ほんに畫のお話では遠からず凱旋なさるでせう。あゝ今夜ほど氣が精々とうれしかつたことはない。

蕨折り

静岡縣富士郡芝富村　大中あい子

小やみなく降りつゞきし春雨の今日は名殘なく晴れ渡りて。やれ障子よりもれ來る朝日の影もいとうらゝかなり。朝まだきより文机に向ひたれど。百千鳥のさへずる聲も。妾を呼ぶ樣聞へて。日頃のお轉婆如何で讀書の身に入るべきや。やおら庭に出で見れば。昨日まで咲き匂ひし櫻もあはれ今日は青葉に。軒端の藤波も天つ豊けき日の御裏浴びて漸く紫雲なびかしそめつ。牡丹の之より。我天下と云はれて 野道に出ぬれば。御空は清く澄み渡り白布の富士の峰のいや高く雲に聳立ち。寳永山のあたり積雲のかゝりたるなど。一入氣高ふ見上げられぬ。袖吹く風も寒からず暑からず。路傍にはすみれたんぽゝ蓮花草などみちく〜て小禽の囀るゝなど見もて行けば。いつしか志ざす大久保山の麓にぞたどりぬ。いざ之よりと手拭をかぶり風呂敷をゆるく縛り左手腕にかけ。汗拭を帯にはさみ。やがて用意整いたれば。同行を二組に別ち東の方より登るを。日軍とし。西の方を雪軍と定め。頂上に早くつき。蕨き物多く取りしを勝利と約し。こゝにて。君子はる子末子の君に別れ妾は日軍に從ひぬ。日當蕨きところはたけたれど本藍かやの中などは。今取頃なり。競爭と思へば互いに。氣のみいらちて。少しも目につかず。たまく〜見付れば御方同士で取り合ひ。向ふに見ゆしよと走りよれば。彰だも。見せぬなど。滑稽にて 失止のきわみなれ。「プト」「イメラ」と歌



ぬ。ばかり誇り顔に。咲き出でたるなど餓に鑁りし景色に恍惚たる時しも。親しき友五人蕨折りに行き日頃のうさ晴さばやと誘ひ來ましぬ。あなうれしや。かゝる友は稍なるものよとなげきしに思ふ心の通いてか。此誘は如何で否むべき仕度もそこく〜立ち出でつ。あまりの嬉しさに。早や今日の遊びの勝想されて。妾は第一に取りて皆皆を驚かさん。妾を蕨折りの名人ゝなどゝ。爭そふ内早や家路はな

いても。手足に傷を。おいたるものは。然れて設けられしよ。赤十字社より「パンソーコー」を惠まれ。篤志看護婦人會製出の。それならで。手拭な裂きし繃帶もて。出血を止めなどせるに。風呂敷も重ふなりたれば。駈走にて頂きへ登り見れば。敵は遙か下にて。一生懸命あまり居るにぞ。やゝ高き岩の上に登り。双手を上げ。大日本帝國萬歳……帝國ノ勝利と呼びしに。其聲聞きてか。あはて。うろたへ。口惜さうな顔して登り來ませし。君達は。いざ見せ玉へ。妾の方多きよ。いな敵軍の方良き物取りしよ。と血眼にて騒ぎ給ふにぞ。さらば勘定せん。一本二本と夢中になりて。數へ始め。五十六本と云ふとき。遠笛かすかに十二時を報じければ。それも。中止となり。談判の末つひに。中なりと極り共に樂しく語ひつ。晝餉したゝめ。傍なる木陰に腰下せば。あたりは悉く緑淺き若葉もてうづめられ。其中に濃紅の躑躅。雪とまごふる卯の花。黄金色の山吹の配合よく。打まじりたる美しさ。友染の模様にでもなし。愛らしき乙女子に。着せなば定めし似合ならんなど。語りつゝ。見下せば。下は日本三急流と稱せらるゝ富士川。河の彼方には白鳥阿部の諸山聳びへ立ち。甲洲街道もかすかにして。往き來の人は一寸法師の如し。此方の小川に釣竿長ふたれ。鵬丸籠を無二の親友とし。浮世をよそに日を暮すは何方の隱居にや。獲物は。何。(ヤマメ)かはた小鮎か。折柄山影より。筏一ッ見る見る二ッ三ッ四ッ五ッさも愉快げに。オオーオーと下り來る勇ましさ。さながらボート競漕見る心地せられて。吾知らず「シッカリ」と呼びぬ。傍人は正しく氣狂と思ひしならん。それに引かへ白帆ふくやかに靜々と。上りゆく曳舟もゆかしく。水の面に帆影の長ふ寫りたるなど一しほの風情を增して眺め見あかぬ景色に恍惚たる時。突然。末子の君アレーと。叫ばるゝにぞ。何事にやと立ち上れば。恐ろしや。妾の足元に。黒き物がサ〳〵〳〵とはい行くに。皆々の驚き一通りならず。アレーキヤーなど。取る物も取り敢ゑず。道なきところを。中程まで下り恐ろ〳〵振り返りたれど別におい來し樣子もなかりしかば。やゝ安堵はしたるものゝ。繩切れ。枯木など見る度びに。それならずやと「ギヨッ」とすること幾度なりしぞ。あゝ一足の蛇の爲めに。彼の仙境とも譬ふべき。木陰をおい出され。今は山に望もつきて。一同山を下りとある畑の中に出づれば。一人の農男妾の姿を見てはカラ〳〵と打笑ふにぞ薄氣味惡く。そと我風采見れば。今朝結びし束髮。明日の天氣を伺ひ帶は央ば解けかけ風呂敷を背よりしよゐる樣。いかにしても此ほとりの茶摘に出で行く娘に似たり。此姿都の友の見給はゞ。何と評されんと思へばいと恥かしくなりて。家路へと急ぎけるに。彼方の立木にとまり居たる烏二羽一行の頭上に來り。さもあざけるが如く鳴きつゝ御空高く舞ひ上りぬ。

下婢に代りて奧樣に

女子商業學校　栗本いく

天下の下婢一同に代りて、恭しく一書を奧樣に呈す。下婢等もとより、無學無能の徒、襤衣をまとひ、粗食に甘んじ、辛うじて一年三百六十五日を、竈の前に送るもの、到底奧樣が、錦衣を着け、美食に飽き、出づるも入るも、數多の侍女にかしづかれ給ふなど、夢にも知らざる所なり。況や、漆塗馬車に身を乘せて、洋裝美々しく、令夫人を氣取りたまふことなどをや。

されど、下婢も人なり、また女なり。奧樣が、時々の流行物に身を飾りたまひ、今日は芝居、明日は演藝會と、うち興じらるゝを見ては、また

飲食の情なきにあらざるなり。

貴賤貧富尊卑、これ皆偏へに浮世の習ひとあきらめ、たゞ此狹き臺所を、己が天地と定め、奧大事と忠實に立ち働き、寒風肌を劈く冬の日も、たゆまず勉むる水仕業に、手足は胼胝のために傷けられて、苦痛やる方なく、また燬くが如き夏の日も、肥滿の身體を絶え間なく働かし、寸時も涼をいるゝ違もあらず。また或時は、男子も及ばぬ力業を命ぜらるゝなど、その形體を勞することと徒らに多くして、その酬ひらるゝこと甚だ鮮なし。下婢の境遇、また憐れむべきにあらずや。

然りと雖、世の文明に赴くに從ひて、人類平等主義は、いよ／＼鼓吹せられ、下婢等もこの奴隷的待遇には滿足すること能はず。既に泰西のさる國の一都市に於ては、さる社會黨の首領の、下婢に對するに家族同樣の待遇を以てせよとの説を鳴道せしより、その土地の下婢等團結して業を休み、各自の主人に向ひてこの説の如くせられんことを請求せりと聞く。この事や、あまりに極端に趨せたるが如しと雖、これ從來の壓制的使役に對する反動として、また當然の結果なりといふべく、我國の下婢等にして、また此事に效はんと欲せば、もとより、企て得ざる事にしもあらざるべし。しかも、なほ忍びて此に出でざるは、實に奧樣の迷惑を思へばなり。



下婢等が、家庭に在りて功勞多きことは、擧げて數ふべからず。一家の內務大臣たる奧樣にとりては、主要なる官吏なり。一家の生命をつなぐべき食物を調理する臺所知事なり。大にしては、その食料の第一たる米の焚きやうより、小にしては、香の物の漬けやう、さては、すゝぎ洗濯等に至るまで、實に下婢の手によらざるはなく、其技に至りては、深窓の內に人となりたまひたる奧樣、さては、當時の學校教科書的教育を受け給ひたる奧樣などの、遠く及ばざる處なり。われ等は、かくも尊敬すべき下婢が、何故に世人の爲めに冷遇せらるゝや、その理由を解するに苦しむものなり。

嗚呼、滿天下の奧樣達、幸に一考をめぐらして、下婢待遇を論ぜられんことを、切望の至りに堪へず。

花見寺にゆく

東京田端　田中千賀子

我が家の裏門より赤土にてなめらかなる坂を昇りつくせば道灌山なりこゝは秋の月虫の聲にいと名だゝるところなりそれより道を右に行くに眼下にはきり開きし滊車道のありて今しも滊笛一聲上野にむかふはるか田甫をへだてゝは日暮里三河島千住等見ゆ右手には少しばかり畑のありて麥の青々と生へたるかたへに咲きおくれしれんげ花たんぽゝなど配合いと面白しそこを過ぎて細き坂を下れば中ほどより滊車道に通づる石にてたゝみし古き坂を横に見つゝ登り盡せば、ちいさき宮あり鷲神社と云ふいつの世にか物しけんいとふるびて御屋根かたむき詣づる人かげだになし、少しばかりの竹藪ゆけばこたびは晝猶暗き坂道あり雨上りのことゝて道悪き事いふばかりなしよう〳〵通りぬけばさやかなる茶屋のありて行來の人のいこひ居る、八千代となんよぶ弓引塲もあり其の前より又一つの坂昇れば諏訪神社あり前と變りてやしろもいと大きく常にかしは手の音たゆるまなし後には年ふりし木々のしげりて何となく神々しこゝにもかけ茶屋の四五軒ありて田舍人の聲高に話聲を聞く拜殿に しばしいこひてのち。道をよこぎり黒き門やうのところを入ればやがて花見寺の裏につきぬ。この寺は櫻もながめ少なからねどそれにもましてつゝじこそいと〳〵ながめおほけれ今も丁度見頃とて白、紅、黄、かばなど入れみだれ咲き競ふさまは何にたとへんやうもなくさながら花の都に入る心地して神園とはかゝるをや云ふならめ、とみるかなたには花のかさなり〳〵て綿のしとれしきつめしようなるに愛らしき蝶の二つ三つ 花にたはむるさままたなく艶なりあまりの見事さにたゞ〳〵みとるゝのみにて。しばしは 人あるさへ忘れはてたり。いかなればかくも清く美しく咲きそろひしぞ。いかに心なき者とてみかへらずに行きすぐる事なからんあゝ幸あるはよろづの花よ長くかくあれかしと我はいのれど 天はそをゆるし給はずこの花とてもいつかはあとなく散りはてゝ ふりかへる人だになき、しもがれのあはれを思へばなか〳〵に便なしなど心にくりかへしつゝあかず眺むるに妹のかや母上のまち給へる程に歸りたまはずやと云ふ我れに返りて見ればもみぢの如き妹の手には 花の一枝。さらばと名殘惜しみつゝまたこん年を約してこたびは表通りより平なる道を歸途につきぬ。

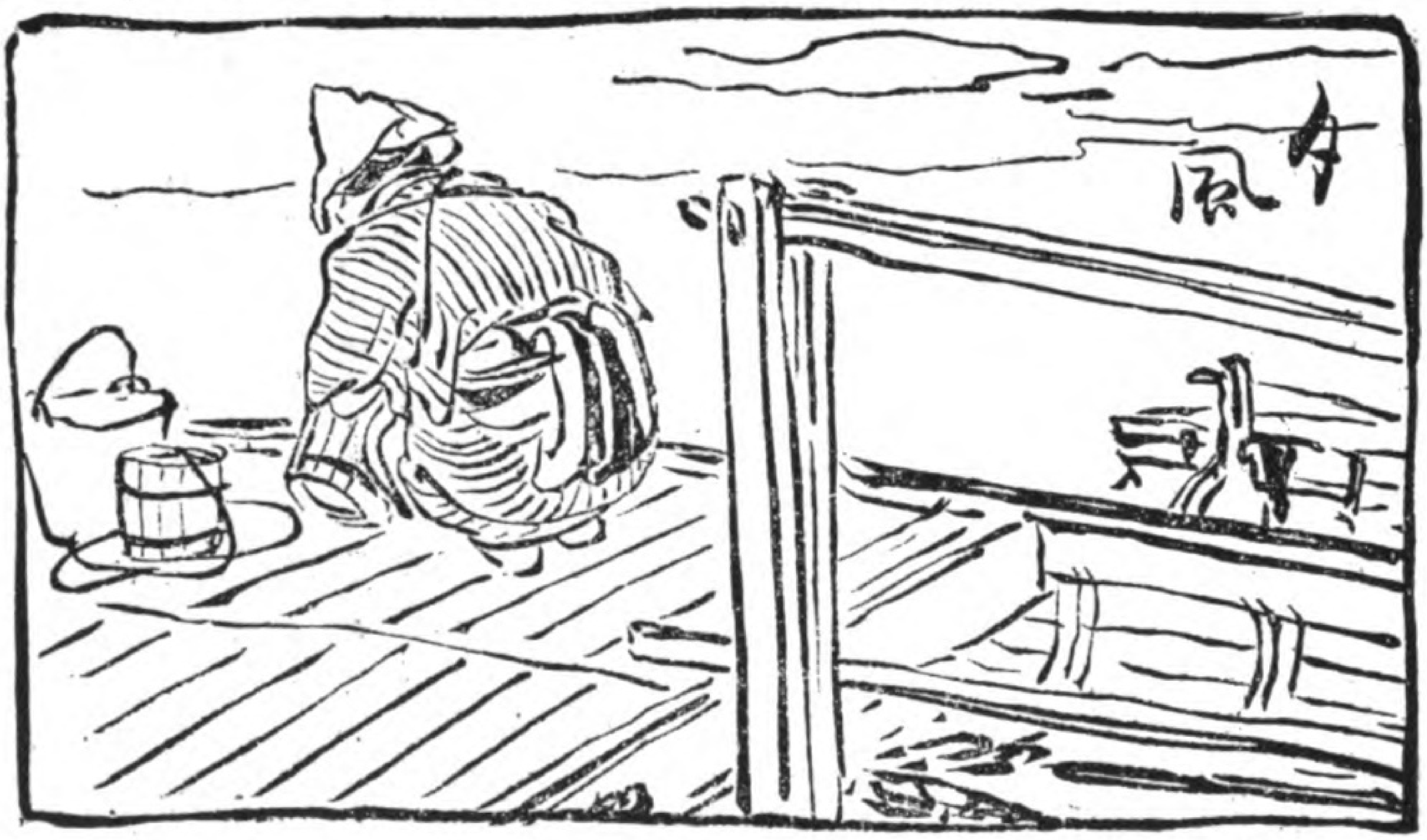
友をおとづれし記

相摸川口村片瀬にて　田中千賀子

山の端にかすみたなびくのどけき日したしき友がり音づれんとて朝まだきより家を出ぬ、そは友の兄君のこれぞ 旅順の海戰に見事名譽の戰死したまひしと聞き、わけて御中むつまじかりし友のみこゝろいかにやせめては行きてなぐさめ參らせんとてなり。

朝日の光りきら〳〵と草葉の露にてりはえて赤きには紅の玉と見へ青には眞珠とも 水晶とも見へいとこのもし木のまよりは春風のそよ〳〵身にしみて心地よさいはんかたなし誠と都の大路よりかゝる田舍道こそ樂しともたのしやがて 友の家につきぬ女中の案内もまたで早やかけいで迎へ給ひしはいつもながらやさしき友の君なり妾の暫らくと云ふもどかしげに早や上りたまへ噺しは妾が部屋にて部屋にてとみちびき 給ふいつも

綺麗にお掃除ゆきとゞきしよき御部屋にて床にはつゝじの咲きもそろはずちりもせぬ見頃なるが友の君の物し給ひしにやいと見事にかたはらには二人してよくかきならす御箏の行儀よく立てかけあり。中庭へだてかすかに見ゆるお座敷にはお客様あるにや、しめやかなる御聲のたへず。まアよく來て下すつてれと友の君、にこやかにお茶等入れ給ふ思ひざしにやどことなく淋しげなり妾はまづ御兄上のこたびの御戰死を聞き實はと打上げば有難う兄もと早や目に涙の露のやどるにむれせまれり。それは御國の爲め軍人の本分を盡したのですから兄は嘸ぞ滿足でしよう。私だつて覺悟してたのですもの却ていさましい、戰死の有様を聞て嬉しう思ひますの。けれど姉が可愛想で。さなり若き美しき姉君のありて妾にもいとやさしく物などとはせ給ひし事のありたり。丁度姉は妊身で兄の戰死五日前にそれは可愛い赤んぼがと。妾は涙の中より坊さまなのと聞けば、エヽ兄にそつくり其の顔見ると泣くまいと思てもいつのまにか涙がと、產後のもしや血の上りてはと母の注意で兄の事はかくしてあるのそれで何も知らずに兄の目出度凱旋の時は坊を伴ておむかひに參りましようつていつも私に仰るのよと友の君も泣き



給ひぬ友の君の心もさりながら日立ち給ひし後そと聞き玉ひしときのおこゝろはと察し上げ參らすさへいと悲しきに言葉はなくてさしうつむく。友の君つと立ち出で給ひしがやがて愛らしき坊さま抱て。あら可愛事私に抱かしてとかけより見ればバラの花其のまゝのほほゆたかに罪なき笑顔愛らしとも愛らしこの可愛ゆき赤様知らずにと今更妾の泣げはせめて一目なりと見せたかつたはと二人ひしと抱き合つゝ泣きに泣きぬ。いつまでもかくてはつべくもあらねば今しばしととゞむる友に、涙ながらまたの日をかたく約して夕暮のいと淋しき道をたどりて歸途につきぬ折しも雲ゆきにはかに變りてあだかも墨をながしたらん如くいと物すごし家路近きころには大つぶなる雨の二つ三つ傘にかゝりぬ。友をなぐさめ參らする我れに力のなかりしを悔ゆ。

嵐山に遊ぶの記

京都高倉通御池上ル　四辻清子

花は散り、螢はまだき頃にはあれど、新緑の色鮮やかなる嵐山の風景、いかで〳〵花に劣

らぬ眺めあらむなと誘ひ立たるまゝ、心合へる友三人ばかり誘ひつ、まだきより何くれと用意調のへ九時といふに、家を立出で二條停車場にと向ふ、初夏の風は心地よふ袂にそふぎていひ知ず清々し程なく到り着ば早友の君達はこゝにつどひてあり、暫しいこふ程に滊車は來りぬ、日曜とて流石に人もすくなからねど、幸に我等の箱は、さまで込合ひもせずやすらかに腰を下しつ、やがて鳴り響く滊笛の音と共に滊車は動きそむ、見る／＼移り變りゆく邊りの景色の面白きに、ふと眺むれば、麥田の青う續ける彼方、立並ぶ藁家の軒に、赤き日の御旗のひらめき見へぬ、さては此程よりの我が軍勝利の報を聞傳へて、そを祝さむ心にぞあらむ、げに赤誠ある大和心は都も鄙も變らざりけりと、すゞろに嬉しく田の面に囀づる、雀の聲、蛙のうたも、皆萬代をことほぐやうきこゆるも嬉しき極みなり、滊車は益々速力を增し、あたりを圍む山も森も走馬燈の如く走り行て、いつしか花園驛をも過ぎ心あての嵯峨にとつきぬ、此處より互に手に手取り交し、うち語りつゝ歩みゆくに、赤き襷かけたる茶店の少女彼方此方より馳出「お茶きこしめせ團子は如何」など、口々に呼はやしぬ、漸やく渡月橋のもとに出たれは、こゝにて舟をやとひ清き大堰の河流をさしのぼりぬ、仰げば山はさながら滴たらむ如き綠の衣に包まれ、所々、めばへ紅葉の梢のあたり、濃紅ふ彩りたるが打まじりて、一きは照りはへたるさま、友染の模様にもせまほしきばかり、邊りには人もなくて靜けさ云ふべくもあらず、かゝる折に時鳥の一聲、にても初音もらしなば如何に嬉しき事ならむなど語るうち、舟はいつしか堅木大瀨などをも過て、蓮花岩落合あたり近ふ迄さしのぼれば、山はいよ／＼青く、水は底の細石もかぞへむばかり、此處彼處の岩間に色深き躑躅の今を盛りと咲き匂ひ、そこともしれず河鹿の鳴音さへきこゑて、風景得もいはれず、さながら仙境に入りし心地、岩走る淸水の音は玉の小琴の音色かと疑かはれ暫しの程はよへるが如く我も人も有るを忘れぬ、やゝありて、心付ば流れはいとゞ嶮しくなりゆきて舟は岩と岩との間を縫ふが如くさか登りつゝあり、是よりかの屛風岩、曲ヶ淵、舟戸、なんど奇しき嶮數多あれどいと嶮しき場所なれば女の身の さる所には殊に空さへ浮雲のさまよひ出て雨にもならむさまなればさらばとてこゝより棹さし返すにこたびは下りとて舟は矢よりも早く再び橋のもとに漕よせられぬ、いざと許り飽ぬ眺めに心殘しつゝもとの道を急きおなじ滊車にて京にと著し各がじゝ家路にむかひぬ、あな樂しかりし今日の一日や。

夕景色

大阪西區江戸堀北通二ノ二〇九　藤尾千代

夕日西の山の端に沈まんとして餘波を雲に及ぼしやがて其茜色も薄れ行く頃三日月の影淡く浮び出ぬはや橋々の瓦斯燈は點ぜられ其火影川水に寫りて長く／＼火柱のやうに見ゆ今日の業をば爲し終へてか親子睦まし げに語らひつゝ舟かろ／＼と漕ぎ行く樣なか／＼にゆかしき心地す折しも今こそ巳が世界よと飛びまわる蝙蝠さては岸邊の柳夕風の吹がまゝに靡くなんと眺めて暫時興に入 る折から世は全く夜の女神が黑染の袖に蔽はれつみ空には星の花のまたゝき繁しあゝ今日も暮れぬと一人ごちつゝ雨戸鎖して座につく時しも何地ゆくらん雁の二聲三聲微かなり。

首夏

伊勢四日市濱田 丹羽たい

花は根に、鳥は古巣に立ちかへりて、青葉の梢、日に繁りそひ、葉末にむすぶ露の白玉、いとすゞしき頃とはなりぬ。花咲き匂ふ春の野邊、月清み渡る秋の夜中、いづれ樂しからぬはなけれども、夏の初の景色は、又一しほにて、面白くも又趣味あるなり。池のほとりの松に、かゝれる藤波、山吹も、いつしか池の水に、影をも止めずなりて、晩春夏の中垣つくらふ、卯の花の咲いでゝ、いまも殘れる雪かと、あやしまるゝ中にも、闇にも來む人のしるべとなるべく、杜鵑のたどり來る、しをりともなるぞ、いとも愛らしき。數日ふりつゞきし雨の、すゞ〳〵しふ晴れ渡りて、杜若、あやめなどの、濃く淡く紫に、池の汀に咲きいでたる、前栽の草木もつゆを帶びて、梢の翠滴らむばかり、幾多の瑠璃の玉をつられ、そを心ゆく計り晴渡りたる大空の月、斜に庭を射て萬顆の白玉、一時にイルミ子ーションの如き、美觀を表して、あたりまばゆげなるも、又他にながたきながめなり、一雨毎に綠深くまさり行けば、花橘の風につれ、匂ひ渡りぬならぬ香を、文窓に送り來り、くさ〴〵の夏花は、時を得顏に咲き初めたる、背戸の小川のせゝらぎは、さながら自然の琴をかなづるやう、まだこゑなれぬミン〳〵虫の啼くもあはれに、見るもの聞くもの皆をかしく樂しからぬはなし、あはれ四時のたのしみ、夏にしくはなしとぞおぼゆる。

故郷の夕暮

在東京 黒澤逸子

欝を晴らさんとにしありける、妹子の寄り來て背のあたりを、やさしき手もて打ゆらし綱糸をば袂にかいくりて、暫し此のわたり行きてん、栞を疊みてよといふがまゝに、苔むす庭をこゝかしこ見あるき、青柳の亂れたるをくしけづり、常盤の針に鬚を寄せて、しめやかに打語らひ、山吹がくれに柴の戸を明けるがまゝに打過ぎて、そこともなく手をば取られつ取りつして、久慈の河原にぞ出で行きける、小波近く立たずめば、そよ吹く風の髮を洗ひ袖のあたり音づれて心にくし、まして清き流れは一筋に遙か遠く消えうせたるこそあわれなれ、琵琶湖ならぬ鏡の、靡く滑かなるいとゆかし、山のつき出でたる島、若葉の梢すゞしげに かづ〳〵燃え出でゝ青葉がくれに白藤の、おぼつかなき樣したるいとおかし、下は千尋の深みと見ゆれども、苔むす岩に碎けて清く流るゝ水の景色こそめでたけれ峠路に通ふ板橋、馬洗ふ鄙人、霞を帶に矢祭山、なべての物倒瀬するこそまたなくおかしけれ、「やよ筏に棹さす人の見ゐて、欸乃の聲を聞かましなば、一と際めでつらめ」といへば早くも受けし妹子は「さこそ候はめ、爪音、笛の音を添へなんに」、はと答ふ、「げにこそ」、と打語ふ、やがてたそがれ、ひし〳〵と染め行きて、心地よげに、「奈良の都の其の昔」、と歌ひ初めば、妹も鶯ならむ聲を交へて、「みやびつくして宮人の」、と歌ふなる、折りしも共鳴にやあらん、かすかに歌ふ童べの聲すなり、妹子のいぶかるにぞ、鳴りをひそめば、聲はいよ〳〵近づきて、やがて手に取る如く「……本分を赤心を」、と聲高く草むす細路 に幼兒の見ゆるなる、いづこの誰れと知られども母の乳房を慕ふて歸るめり、入相の鐘暮れ行きあたりは靜まりかへりて、螢がふせやに稀萱生茂りて、蚊遣火 ふすぶる

頃、鶉鴫原に在りて見るなどいとおかしゝ。いつにまれ人遠く水草清き處に、さまよひありきたるばかり心慰むる事はあらじ、まして飛鳥川の淵瀬つれならぬ世に、雁行翼を折るの時にしあれば、桃李ものいはず、夕の嵐、むら雲の月、ならでは事問ふよすが無ければ、過ぎにし方の戀しきのみぞ思ひ出でらる。

春を惜しむ

伊勢四日市
市川原町　内山しげ

霞深う立ちこめたるひまより、木々の若葉の青みたるが、ほのかに見ゆる樣の、いと涼しげになりぬ、昨日まで、櫻の花をめでゝ、菜し國、くれかしの塲などに、同じ心の友と、手を携へて物せしを、たつこと易き花のかげとはいひながら、眺めもあかぬ、花ははかなく散りはてゝ、辞の名殘のおそ櫻ら、青葉がくれに、色香もうすく咲きいでたるは、なかなかにうたてし。そを空しく、風にまかせ雨にゆだねんも、いと惜しきものから、むつひの友、三人四人つどひて、くれゆく春の、なごりの花を見送りぬ。あはれ、春は來ん年毎に、めぐり來て、花は咲きつれども、一度老いたる人は、再び若がへる期はあらじ。流れゆく川べの柳の糸は、ながかれど、春をつなぎとむるよしもなく、鶯は別れを惜しみて、ひたすらに、鳴く聲もかれ老いぬめり。アゝあだにすぎ行く、月日多しといへども、花に、月に暮す日は、殊に短かき心地ぞせらる、など語りあふ中に、日かげは早や、山の端にしづみぬ。あはれをしき春も、今日に暮るゝかとおもふ折柄、三ひら四ひらの花、夕風にさそはれて、袖におちかゝりぬ。人の若き時は、長閑けき春にしあれば、徒にすぎゆきて、老いての後、くやむも其のかひなきこそ心憂けれ、樂みて迎へし春も、今ははかなくなりぬるぞ悲しき。



和歌

夏季
混題

金子薫園君選

（天）　芝區高輪南町三十一、橋方　眞野たみ子

廣庭に尾をひろげつゝ歩みいでし
　　孔雀に春のひかり滿ちたる

評、きらびやかなる彩羽の光、見るもまばゆき心地す。

（地）　岡山　小山まつ枝

書に倦みて眠る少女の夢や誘ふ
　　青葉のかげを流れゆく水

評、人と自然と、相融和して、そこに美くしきあめつちあり。

（人）　本郷區湯島新花町九九、小林方　淺山花子

觀音の御像をきざむ膝の上に
　　鉢の牡丹のまたくづれたり

評、菩薩の靈、牡丹に入るか、牡丹の靈、菩薩に入るか。

秀逸十五首

○　定子

小百合さく夕の園に佇みてきらめく星を仰ぎ見しかな

評、手なる詩卷はハイ子か、はたキーツか。

○　津高等小學校生徒　式井たけ子

牛飼が花野を歸る笛の音に春の夕日のうすれうすれぬ

評、清麗きはまりなきところ、油畫を見るが如し。

○　東京　土川文枝

すゞろ倚りて鬢のほつれを掻揚つ柳しづるゝ黄昏の窓

評、まさにこれ廣業寺崎氏畫中の佳人。

○　島根　岸澤濤子

さめる子の寢顔やつれし枕べに籠の螢の光淋しき

評、螢の光、見るに堪へず。

○　鳥取市　天野清子

白鳩のとびかふ見えて山寺の鐘樓のあたり朝の風涼し

評、詩趣あり、音調あり。

○　愛媛　高橋茂子

ことほぎの言葉の下の慰めに嬉し悲しの何れこたへむ

評、情緒みだれみだれむ。

○　愛媛　杉田文子

武夫の父と祖父の子ぞ孫ぞ君にさゝげし命惜しむな

評、何等の好教訓。この母にして、やがてこの子あるべし。

○　東京　みさほ

君がみ手の藤寫さむと紫の繪の具とく日の朝朧らけき

評、すゞろに藤花を手にせる君の清姿をおもふ。

○　滋賀　田中とみ子

榮おほき君が門出と知りつゝもなどか別れの斯は淋しき

評、など、かくはつらき。

○　和歌山　森繁尾

銃とりて夷討ちにと行かましを思へは悲し手弱女の身や

評、この意氣、優柔男兒を愧死せしむ。

○　長崎　古川辰子

小羊の群はかへりて夕暮の野面さびしく鐘なりわたる

評、清響、つひにきゝがたからむ。

○　長門　杉山きくの子

いとし子のね顏眺てさきくあれと針の手止て獨ごつ哉

評、あゝ母の慈愛、一にこゝに至るか。

○　下谷　太田らく子

賤の男が鍬洗ひゐる里川のみぎはにさけり花あやめ草

評、あやめ草、いかに美しからむ。

○　愛知　平田御年

ほそながれ垣をめぐりておのづから趣多きうの花の宿

評、仙境、羨むべし。

○　大阪　淸野よし子

事成ば神に祈りてこん世には益荒武夫と生れてしがな

評、語氣何ぞ沈痛なるや。

佳調

○●　美濃　山田愛子

雨はれて蛇の目傘ほす村長のまがきのあたり牡丹花咲く

○●　山形　香澄靈子

琴の音はしばしとだえておばしまに遠の月見る人美しき

○●　東京　土川文枝

歌になやむはかなき身なぱまどによせて聞くもうれしき葉櫻の雨

○●　横濱　石上きく

國の爲め骸となりて還りませの言葉の裏は涙なるらむ

○●　愛知　森井せき子

血に染みし君の肌着はとゞきたり病みます母に何と語らむ

、、、、●　横濱　難波正子

かすかにもたかむらごしに影見えて行手うれしき里のともし火
、、、●　伊勢　岡島綠子

この月に矛横へて高らかに歌詠しまさむウラヲホの海
、、、●　福岡　萩尾かしく

花畑に今朝さきそめし緋芍藥苔むす友の墓にさゝげむ
、、、●　石見　宮内登美子

池水に流して見たる笹舟の行方涼しき夏の夕風
、、、●　駿河　菊池武子

桑かげのむぎ畑つゞき家見えて晝しづかなり牛のなくこゑ
、、、●　近江　青山せい子

刀してけづれるごとき岩角に釣にやうみし鷗れむれる
、、、●　新潟　内藤ゆき子

牛ひきて賤の男入りし柴の戸に蚊遣りの煙ひくうたなびく
、、、●　長崎　古川たつ子

兄君のいくさがたりを母君ときかむその夜の待たれぬるかな
、、、●　東京　内田八千枝

めでましゝ牡丹そなへてをろがみぬ苔ひやゝけき母のおくつき
、、、●　京都　三の宮つゆ子

矢さけびの聲もとだえて武者一人わたし舟やる雨のゆふぐれ
、、、●　山城　古川よね子

この夕思ひは遠きいくさ野の銃とる君のすゞろ戀しき
、、、●　石見　ゆり子

渡守の歌ふ聲うたかすかなり小雨そぼふる川ぞひの路
、、、●　名古屋　清水みさ尾

きゝし人きかぬ人さへほとゝぎすその一聲にあゆみとゞむる
、、、●　深川　遠藤たみ子

雨ふればさびしかりけり春いぬと思へばさらにさびしかりけり
、、、●　伊賀　服部かつ子

學びやは青葉若葉につゝまれてけふはきこえず書をよむこゑ
、、、●　香川　諸川ふさ子

國の爲捨てし命を長らへてとはにほまれの花咲かしませ
、、、●　神田　佐藤千代能子

ひもあかき菅の小笠のみゆるかな五月雨はれし木がくれの畑
、、、●　河内　岡市岸子

針の手を暫しとゞめて御軍に召されし子らを憶ふ夜半かな
、、、●　京都　葉山みさを

わが家のまがきの跡ときくからに摘みもわづらふ花すみれ哉
、、、●　赤阪　山村くら子

人もねむり牛もねむれる春の野に虻とぶ見えて日影のどけき
、、、●　神田　佐藤千代能子

ほとゝぎすこよひはもらせ都なる歌よむ君のとひておはせり
、、、●　津市　永田重子

麥畑に畫板手にせる人二人指して語らふ小つくばのやま
、、、●　山梨　岡久代子

草笛は聞えずなりて燕とぶ柳の堤雨になりゆく
、、、●　石見　千代延瑛子

雨晴れて若葉涼しき谷道を温泉の村させばなくほとゝぎす
、、、●　石見　青柳芳子

手負ひ馬なきて靜まる滿洲の雨の夕をなくほとゝぎす
、、、●　石見　宮内登美子

歸り來むわが兄君を待ちかてらゆふべ門田に螢追ひ見る

、、●　横濱　寺田光子

淋しうも窓によりつゝこの文をかきしとおぼせ風寒き夕べ

、、●　京都　三の宮つゆ子

きぬ張の蕾川傘ふたつゆく見ゐて麥のはた道日はのどかなり

、、●　佐倉　千鳥子

新綠の赤きたすきをあやとりて田うゑの歌のふしおもしろき

、、●　川崎　石橋たつ

わが夫の露營の夢そしのばるゝはしゐふけゆく夏の夜の月

、、●　筑後　たけ子

ゐみしらも神の使と思ふらむなさけこもれる君がみとりよ

、、●　石見　宮内登美子

立ならぶ草屋の軒の數見ゐて螢とぶなり川つらの里

、、●　富山　清子

あさまだき讀經の聲の靜かなるみ寺の池に蓮の花さく

、、●　神田　佐藤千代能子

人傳にきゝけむ如きこゝちしてあまりはるけきほとゝぎすかな

、、●　大阪　田中つれ子

笛の音はゝやをさまりしひろ野原けぶりにくもる月を見るかな

、、●　京都　福島たづ子

須磨寺の鐘の音ひゞく夕まぐれ沖よりかへる海士がつりぶれ

、、●　大阪　森戸初子

召集に出づる人にわかれし村はづれ一こゑたかくなくほとゝぎす

、、●　和歌山　郭政子

をとめ子のちゞに心を砕くともかひなきけふのたより悲しも

、、●　伊勢　尾崎ゆき子

雨はれてゆふべすゞしき里川の一本柳三日月の影

、、●　石見　宮内登美子

麥畑に雲雀は落ちて賤の女の見ゐずなり行く春の夕暮

、、●　牛込　田上小きん

悲しみに堪へぬ子こゝに來てもきけ聲おもしろき深山鶯

、、●　備後　古西梅子

召集にいづる背子を送りて淋しくも歸る山路になくほとゝぎす

、、●　信州　錦織幸子

眠る子をかつながめつゝ遠征の夫のふみよむ雨くらき夜

、、●　兵庫　渡邊さつき

住みあれし野寺にさける卯の花のかれにこぼるゝ夕さびしき

、、●　河內　櫻井蕊子

背の上にもろ手合せてなき父の御影をおがむ稚子の憐れさ

、、●　京都　四澤まつ子

はら〳〵と眞紅の雫こぼれけり園の牡丹の風にゆらぎて

、、●　備中　大西操子

病やゝ癒ゐし許りを我背子はいくさに行くと銃執り立つも

、、●　神戸　まさ子

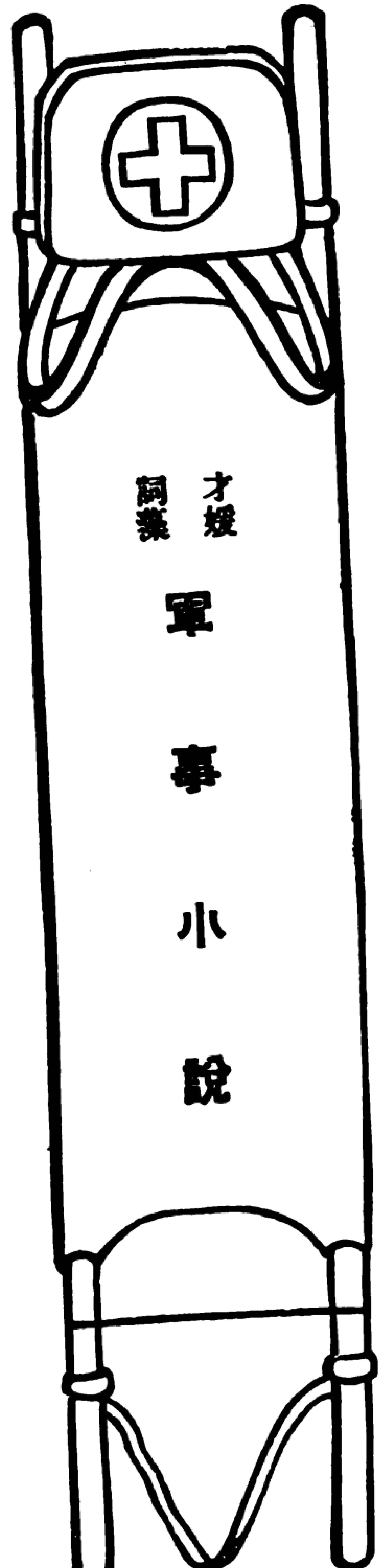
妹の愛でにし百合の花さきて思ひ出多き夏の夕ぐれ

、、●　越路　小林靜枝

夕立のはれたるあとをいものはの風のそよぎのさてもすゞしき

、、●　京都　華女

いくさ人いかにと偲ぶ月の夜を一こゑたかくなくほとゝぎす



九連城

大阪　渡邊たみ子

一

西胡洞なる我哨兵は今射擊準備を命ぜられぬ。これ我軍偵察の任務を帶び扁舟に乘じて密に第一江を渡りくる敵あるを小隊長の目ざとくも見認めたればなり。

見渡せばやがては修羅の巷たらむ九連城は茫として夢の如く。威化、黔定の島々は近く前に横はれども霧納深くして汀も知らず。河邊の柳は烟りて裾長く地を引き。漫々たる鴨綠の水は 長 に綠を流す。吹きおろす朝風は銃とる袖の露を拂ひ。凛たる朝の正氣、今や此靜なる北韓の天地に滿てり。

我哨兵は片唾を飲ぬ。敵は靜に流を切り。水草に避け、波に隱れ、棹の雫の滴りをだにしのびつゝ河務の間を覘ひ早くも間近によせ來りぬ。幾度か逸る兵士を靜めてありし小隊長中尉沖野夫、此時猛然衆を顧み一聲高く。

「立射の構へ銃。四百米突狙へ、打て。」

中尉は雙眼鏡をとりて屹立しぬ。

敵偵察隊の狼狽の狀は手にとるが如く中尉がレンズに現れ來る。眞先きに血しほを浴びて水中に沒し去りたるは舵とりたる一卒と覺しく舟は忽ち寄邊を失ひて前後左右にただよへば兵員は引返さんと焦りにあせる。舟は思ふに任せず見る中に重ねて二人、三人倒れつ。

中尉は再び凛然ふりかへり。

「立射の構へ。連發。四百五十米突。打て。」

敵は漸うこし方の岸に漕ぎ付けて今や岸に上らむとせり。只見る一彈。ねらひ違ず最後迄舟に有りたる指揮官と覺しき一將校に見事命中し丈け高き其體は忽ち白砂の上に倒れたるが見るより危急を忘れて其場に走りよりたる一兵卒あり。

中尉は凝視せり。

從卒にやあらむ其手士官の體にふれしと覺ゆる刹那、的確なる我彈丸は又けなげなる彼が身體をも粉碎せり。

敵の後方援護兵は漸く此時姿を現し戰友の仇と猛烈に射擊を始む。中尉は血走る眼に。

「打方止め―。前面に現はれたる横隊。膝射の構へ銃。五百米突連發打か丶れ―。打か丶れ―。」

と計り聲を限りに號令す。

入り亂れたる雙方の銃火。銃聲、壯烈、悲絕。何の言か之を形し得ん。霧は漸ふ晴れぬ今は敵の狀勢名殘なく見ゆ。其引ける散兵線の右の方より見る／＼くづれ行て我勝ちに後方に向ひ敗走し行く。我步兵は今一息と猶も猛烈なる一齊射擊を續けたり。聲あり。

『打方止めー。元へー。』

各兵はのび上り一齊に『萬歳ー』。

冲中尉は傍に立てる伍長に向ひ『小杉愉快だつたね。味方に負傷者は無かつたな』『ハイ一名も御座いません。』

『敵には戰死許りでも確に十以上ある今の一戰で敵は殘らず右岸に去たか、それとも未た中洲に潜伏して居るか。是は是非逆に偵察と出掛けなければならん。』『小隊長殿偵察の命令をお受けになりましたらどうか其偵察隊の一人に自分を御選拔願ます』

『よし。どうせ六七人は選拔しなければならん。ちや兎も角報告に行つてくる。玆を頼むよ。』

暫くして冲小隊長は逆偵察の命を帶てかへり來りぬ。偵察隊として中尉は小杉伍長以下八名を選拔しつ。

日本歴世の武裝（一）



二

勇敢なる八名の偵察隊は何の顧慮する處もなく端舟に乘じて矢を射るが如く第一江を横切れり。

後方援護兵として岸に殘りし各兵員は遮蔽物に身を隱し銃をとりつゝ不平滿々。

『オイ菊地、クソ忌々しいぢやないか己は元來射擊が下手で援護兵なぞは性に合はん。中洲へ渡つてロスが居やがつたら一番銃を捨てゝ組打と出かけ樣と思つたのに、あゝ水心を知らんではねられたのは是非も無いわい。ヤア最う彼樣に行た。仕合せな奴め己の分も働いて來て呉れ賴むよー』『コラ小西の馬鹿奴大きな聲をするな、演習とは違ふぞ。小隊長殿は身體を露出してもいかんぞと云れたぢやないか。貴樣なぞ水の上では石地藏同樣の癖に何が忌々しい。己なぞは是でも國ではボートレースの選手だ。夫れでもはねられたぢやないか。忌々しいと云ふのは己の事で貴樣なぞは當然だ。』胸の中のムシャクシャを小西一等卒の小言に爆發させる若田上等兵。

こなたには射擊天狗の一連同じく遮蔽物を小立てとし銃を見合ひながらお互の自慢話し。『ねえ君、小隊長殿は戰死を十内外だと云はれるけれど、己れはそうは思はないね己の銃丈けでも十發位ゐ、確に手應へが有たものなあ。』『君はたつた十發かね。彼れ丈けの發射の中で。僕なぞは殘らずと云ひたいが先づ廿發は確に役に立てるね。』『コラ法螺を吹くな、何、廿發命中した。河の中へたらう、それなら僕は三十發命中したよ。』一人の上等兵後より首を出し『すると僕なぞは差づめ滿點だね。ハヽヽ。』『コラ茶化すな何と云ても己は二十發は確だ不斷の射擊には眞似事計りして實彈演習にまごつく君等の殆、企て及ばざる處だよ。』と鼻高々。『白井の高慢チキ奴止せ。廿發位何だ鼠とる猫爪隱すてね默て居られるお方の中には眞實の名人が居らせられるせハヽヽ。』『自分の事を云てやがる。何とでも云へ。時にもうロスが出そうなものだが一向銃の音が仕ない樣だ。ハヽア組打かな。オイ無手勝流の小西先生遺憾に堪えんと云ふ顏してるな。

一曹長は雙眼鏡をとり傍目もふらず對岸を眺め入りしが此時靜に其手を下ろし『コラ〱最少し靜にせんか。口計り働かして。日下も少し右へ。コラト部貴樣身體が丸切り露出しとるぢやないか。何を夢中にしやべつと

る。夫んな事で今と云ふ時小隊長殿の危急が救へるか。銃の一聲一隊、忽、長廣古を收めて凜然姿勢を正す。冲中尉や如何にせし。前岸寂として曇れる空に只風荒るゝのみ。

三

勇敢なる冲中尉が偵察の一隊は苦もなく第一江の水をこえて今や中洲に上陸せり。中尉は七名の卒を殘し小杉伍長を伴ひて丘にそひ。木の間を傳ひて敵や殘れると偵察す。

日本歴世の武裝（二）



『ねえ小杉餘り靜だな』『ハイどうも敵は居りません樣子で御座りますな。住民はありましやうか。』『有る少計り、漁夫計りだが。』二人は猶も油斷なく心をしめて歩を進めとある丘を廻れば眼界は頓に開けて冷なる河風は面を拂ふ。本江を隔てゝ右岸の風物歴々として望むを得べし。大膽なる冲中尉雙眼鏡を取出す。小杉は何げなくうつむきたるが、あわたゞしく『小隊長殿、此邊の草は此樣に血しほに浸で居ります、ヤ彼處に死體がありますと云も敢えず走り出づ。中尉は身を翻へして後の丘に馳け上り洲

の中限なく見渡したるが忽ち右の隱袋より小笛取り出し一聲高く吹きぬ。殘せし七名の兵卒は時を移さず丘の下に集れり。「小杉伍長、島内には敵を認めない。一同を率ゐて死屍其他敵の遺品の搜索を命ずる。」

一度集りし兵は又各所に散じぬ。中尉は單身丘を下り兵の足跡未だ至らぬ丘の中程に歩み入れり。見れば茲にも一條の生々しき血しほの跡を引けり。傳ひ行けば果せる哉、一個の死體横りぬ。着衣を見れば我と同じき陸軍中尉、正しく敵の偵察隊長ぞと中尉は進みよつてつく〴〵其容貌を打ち眺むるに。即死と覺しく青白なる其面には苦痛の色も止めず。傷口を溢れ出でたる血しほは軍服を染め芝生を傳ひ、一種の腥氣人を襲ふ。

上官を思ふ事輕き其部下は茲迄はこび來しもの丶巳が身の危きを思ひて遂に捨て置きたるものならん。

中尉は近くひざまづきて其隱袋を搜り手に當りし一束の書類を取り出しぬ。所屬隊長の命令書と覺しきを先づ開き見て「ウラヂミル。ウラヂミル。果てなウラヂミル。」

中尉は眉を顰めて死顏を見たり。

再び取り上げて書類の中より一片の重きもの其手をすべりて地に落ちぬ。おう寫眞かと獨言ちて手に取り上げ沈と眺めしが其顏色は見る〳〵變りぬ。

平服着て立てるは今我前に死せる此者なり。其前に腰下せる一婦人、此者が妻にやあらむ淸楚なる一人の婦人。

中尉は寫眞を取り落しぬ。

彼女なり。あゝこれ我彼女にあらずして誰ならん。嗚呼ウラヂミル、忘るべきや。彼女が最愛の夫が名なり。

彼女が面影と共に我惱髓に浸入りて忘れ能はぬ彼女を奪ひし憎き我敵の名なるものぞ。忘るべきや。

四

夢か現か憎き其敵は今無垢の亡骸となりて我前に有り。あゝ今更に何をか云はむ。ウラヂミル、汝は汝の敵の中に我と同じき愛を彼女に注ぐ者ありとは知らざりしならん。我も又彼女の寫眞を携ふる彼女が最愛の夫。我敵の中に有らんとはかけても思ひ設けざりき。汝は知らずして萬死を犯して茲に來り、我も又思はずして茲に來る。あゝ當年雪の夜彼女は淋しき停車場のプラットホームに立ち我を顧みて我友沖よ御身と妾は如何なる緣のあればにや淺き交りに斯くも親しき友とはなりたるか。あゝされども妾は親しき御身と別れて今より遠く露西亞の雪の都の人とならむとす。御身もやがて極東に去らん。八重の潮路は隔つとも忘れ玉ふな。妾をして永く御身が親友たるを許せよ、と。あゝ我は彼女と其處に果敢なき別れを遂しなりき。汝ウラヂミル我は汝の憎かりき。年を閲する僅に一春秋。何の緣ぞ異郷萬里に其汝と相逢はむとは。ウラヂミル彼女は健在なりや。彼を愛し彼を慕ひ死する迄彼が寫影を身につけし汝が優しき其心。我は茲に彼女に替りて汝に謝せん。

日本歷世の武裝（三）



中尉は哀れなる彼が死顔を眺めて泫然として立盡しぬ。遠く六千哩の外に劍とつて敵と戰ふ夫を思ひ、生死も知らず東の空をのみあくがるゝ彼女が上を思ひ至れば、ますら武夫が腸も絕たるゝなり。

小杉伍長は搜索を了り馳足を以つて中尉が前に來り一揖し『小隊長殿殘らず搜索致しました。敵の死體は都合十五御座りました。遺留品も收集致させました。』『御苦勞であつた。茲にも將校の死體が一つある。がこれは此まゝ置いておけ。』『ハイ』

伍長は中尉の投げ出したる雙眼鏡を拾ひ持ち中尉の跡につゞけり。

我後方援護兵終に用なく中尉以下偵察の一隊は無事任務を果して歸營しぬ。

五

中尉は今中隊長の室に入り行けり。

彼は嚴然として直立し『中隊長殿、報告』中隊長は其身を起しぬ。

『本官は午後一時十分下士以下八名を率ゐ前岸中洲に渡り綿密に偵察を遂げました。敵は我射擊により其後方援護兵と共に殘らず右岸に退却せるものゝ如く全島一兵をも止めません。土人の言によれば敵は我軍偵察の目的を以つて今朝未明中洲に前進し來りたるものゝ如く其後方援護兵は約四十名ありたるものゝ如し。退却に際し遺棄し去りたる死體は十五名、猶土人の言により運搬し去りたる負傷者廿名內外有りしものと認む。死體の中に指揮官と認むる將校が一名御座いました。本官は直に之が埋葬を命じ其携帶書類遺留品は悉皆當營內へ運び歸りました。遺品及死者の服裝によつて見ますれば今日の敵はコサック乘馬步兵第十二聯隊の一部分と認めます。報告終り。』

『了承。』

中尉は一揖して一歩下りぬ。中隊長は腰を下せり。

中尉は一度室を出で、書類遺品を持ち來り中隊長が卓に差出しつ。已も腰を下しぬ。

中隊長は書類を展き初めたり。只見る。はさみありし寫眞は中隊長が其手をすべりて卓上に殘りぬとなり『おう沖君此婦人も早や未亡人となつたのだな。夫の戰死を知るのは何日か。亂雜なる敵軍の中では一尉官の戰死位、所屬の隊長へ迄知れる位ゐの物だらう。可愛相になあ。』

寫眞があるな』ハイ夫は將校の隱袋にありました。其婦人は戰死者の妻と見えます。

中尉が其常に替らぬ聲音の裏には人知らぬ萬解の涙を藏せるを見ずや。

中隊長は悲痛の聲

日本歴世の武裝（四）



六

中隊長は寫眞を眺めて憮然たりしが稍ありて中尉に向ひ『沖君此者の死體も同じ處に埋葬せられたですか』中隊長夫れに附てお願ひがあります。實は此者の死體は持ち歸りました。中隊長殿死者には恨みは御座いません

敵ながら天晴の最後を遂げました此者の爲にどうか相當の禮を拂つて葬ておやり下さい。自分からお願ひ致ますです。」

彼は暗涙を浮べて中隊長を仰げり。

『よろしいです。今日は人の躬の上、翌日は我身の上。軍人は相見互だ。よく死體を持て歸られた。君の言の如く禮を以つて葬てやらう。』中隊長は頭を廻らして室外に向ひ『當番伍長』高なる其聲に應じて當番伍長は闥を排して敷居際に直立せり。中隊長は徐に之を顧みて『敵將校を葬るのぢやから適當と思ふ場所を選定してこい。』此時中尉は口を開き『中隊長殿墓地の選定は僕に御任せ下さい。是非自分に御一任下さい。』『そうですか。夫れでは御苦勞ながら君にお任せしましやう。ぢや貴樣は好からう。』伍長は愼んで『ハイ』

中尉は正に闥を閉さんとする伍長に向ひ『松山、田邊は居るか』『ハイ居ります』『直ぐに出るから用意をして待て居れと云て置け。』

程なく中尉は從卒田邊を從へて營所を立ち出でたり。

彼は彼女が夫の爲眠長へに安かるべき墓域を求めて淋しき岡のほとりをさまよひぬ。

雨に暮るゝ北韓の山野。胡砂向く風は戎衣の袖にはらみ綠江の水は澎湃として足下を逝く。聞け。彼は流れつつ十年の今昔を吾人に語るが如からずや。

あはれ當年雄飛が義烈の靈魂今之を何處にか求めん。仰げば峨々たる滿洲の連山寂として千古默す。

あゝ尊き犠牲。

人の身ならず、國家の爲に。我もやがて。

あゝ汝ウラヂミル。汝と再び逢はむ時。面白かりし今世の物語りせんよ。

評、文の巧拙、趣向の妙否は敢て言はずもがな、其の人を知り其場所を知り、其の境遇境合を知りてよく其の現狀を活躍せしめたるの技倆は到底机上空想家の及ぶべからざる處ろにして眞に精鍊入神の作といふべし、歐洲名家の傑作を採ッて其一節を讀む又此の上には出でずと思はしむ即ち選て一等とす　（選者）

哈爾賓の壯婦（上）

東京　小紅女史

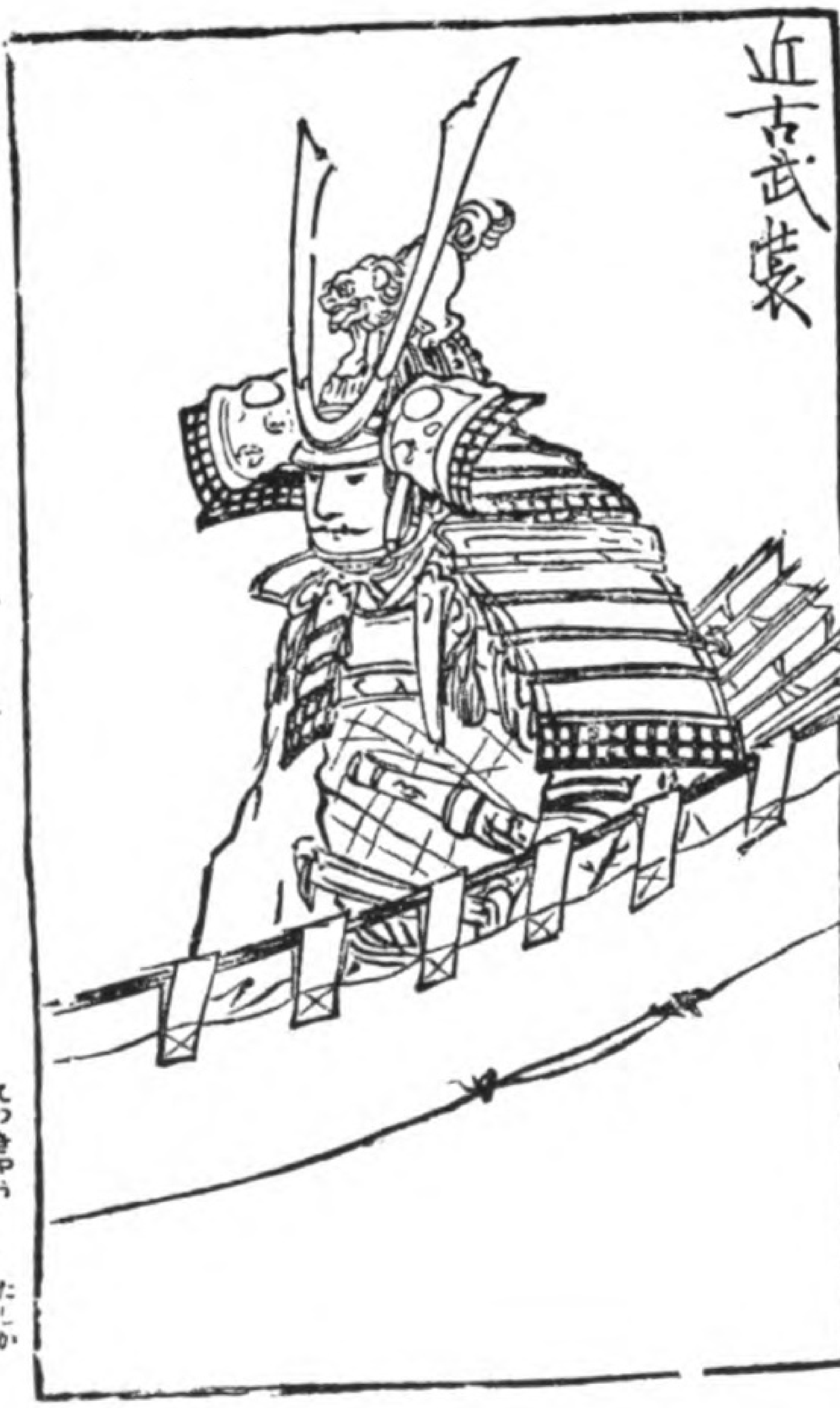
哈爾賓の東北、約一里の所に、一大河流が大蛇の身を捻つて行くが如く走つて居る。

河の幅員約五哩

此處だ！歐洲の或る有名な架橋技士が、幾多の苦心を以て、多年その設計に從ひ、これならば愈と積上げた所で、成程思ひ切つた事を行る露國政府が、直ちにその特色を現はして我が大野心を果す爲には可惜さうな顏もせず、一擧に巨額の工事費を拋つて、滿洲鐵道の通路に當る一大鐵橋を見事に架設したのは、即ち此の河の上である。

この一大鐵橋！一度これを架す可くして、再びこれを行はんことは、いかに常識以外に走る露國政府でも、さう容易くは遣り得まい。——この鐵橋は、確にこれ彼が滿洲鐵道の肺である。何故ならば、この鐵橋は普通のものと其の趣きを異にてし、單に河幅廣く、水の深いばかりで無く、その爲非常に工事の上に於いて手數を要する鐵道の交叉點に成つて居る。即ち滿洲鐵道は此の工事の複雜した鐵橋に依つて、彼が往復の呼吸をして居るのである。

日本歷世の武裝（五）



日露開戰の曉、人あつて若し、この鐵橋の交叉點を或る手段に依つて破壞したならば、これより滿洲の野に於いて、驚天動地の一大活動を演らうと云ふ露軍の上には、何んな有力な打擊を忽ち與へるであらう。彼等も豫め深くその變を憂ふるものと見えて、日夜多數の守備兵を附し、特に嚴重に此の橋を守らせて居る。

いかに北の方とは云ひながら、何時までも何時までも、まあ何んと云ふ寒さの嚴しいことであらう。今年も既に四月中旬と云ふのに、この鐵橋の兩岸には、まだ眞白に凍つた雪が殘つて居る。のみならず今日の日暮方から又チラ〳〵と降つて來た。夜の森と深け行くにつれて、雪は別に太くも成らぬが、寒威は漸々土地の眞價を見はして來て、肌に劍を當てるやうだと云ふ譬を思ひ起させる。

夜は深けても、雪は降つても、橋の兩端に一人づゝ儼然と守備兵が立つて居つたが、折しも又ドッと烈しく遣つて來る吹雪の風に其の姿が見えなく成つた。と同時に蒙古服を來た一人の大男が、地から沸いたやうに橋の附近に見はれて、四邊をぎろりと見廻したが、打點頭いて何やら小脇に引抱へ、この橋の生命とも云ふ可き交叉點に近寄つて、何をか爲さんとする其の時、忽ち袖を引く者あり、「アレ來ました」

同時に一聲、「誰だッ？」と咎める。その聲に電の如く振向いた蒙古服の男の目には、はや近々と一人の守備兵の影が映ッた。

「奴！」と此方は立ちながら懷に手を入れる。

この時遲く彼の時疾く、「えゝい！」青蛇一閃、露兵は撲地。拔く手も見せず其の頸の急所を切つて倒したのは、まだ若さうな一人の支那人。袖を引いて、今、急を告げたのもこれであつた。

彼此言葉を交す間も無く、また向ふから一人の守備兵。

支那人、「こんな夜は却つて嚴重です。又に仕ませう。貴下は早く此の死骸を」

此方は心得河に投込む。その間に右の支那人は、雪に溢れた血汐に敏捷雪を蹴かけ、はや守備兵の近寄るのを見て、右に避けんとする蒙古服の袖を引き、「此方に入らッしやい」橋の袂を左に外れ、導く儘に蒙古服の大男は、この支那人の素性を怪む暇も無く其の後に尾いて吹雪の中を走つた。

（中）

過ぎし日淸戰爭の際、我が陸軍に大崎大尉と云ふがあり。諸所の戰ひに其の驍名を轟かし、人これを呼ぶに「鬼大尉」の名を以てしたのは、爾來十年の歲月を過去つた今日でも、まだ世の人の記憶に生きて居る。右大尉は出征以來、諸所の戰鬪に加はつて、その都度力戰奮鬪し、常に拔群の功名を博したが、最早戰も終局に近い一戰に臨んだ時、自他倶に圖らずも重傷者として本國に送還せられた。この噂は一時我が國民の口から口に走つて、皆太く其の經過の如何を氣遣つたが、大尉の負傷は廣島に於いて入院後、國民一般の切なる希望を他所にして、流石の勇士も急所の痛手に、その後は太く衰弱した。

大尉は當時三十二歲で、夫人松子は十九歲間に二歲の愛兒があつたが、夫人はその報に接すると倶に愛兒を抱いて、東京から廣島に我が名譽の負傷者を訪ふた。何樣重傷だと聞き及んだので、夫人は廣島に急ぐ途上こ「最早その間には會はれまいと思つたが、いよ／＼廣島に着いて、取敢す夫を病院に見舞つて見ると、大尉は寢臺の上に横はり、防腐劑の臭ひに沒つて、成程見違へる程衰弱しては居られるが、まだ／＼兼ての烈しい氣性を面に保つて、妻子を見るより「ハヽヽヽ」と高聲に打笑ひ、坊子來たか」と云ひながら他手も藉らずに寢返した。

夫人は一縷の望みを得て、爾來日夜赤心を捧げ盡くして看護した。大尉の創は其の後少しく癒えぬでも無かつたが、戰は程無く終局を告げて、結果は半島の還附と成つた。血を流してこれを得た軍人社會の激昂は、殆んど熱の絕頂に達した。大尉も確に其の中の一人であつた。或る日寢臺の上に、この張合の無い報知を圖らず耳にした大尉の氣色は忽ちに暴びたが、同時に大尉の容体は、夏の日の曇るが如く變つて來て、その日の夕方から復救ふ可からざる危篤に陷つた。

大尉は既に覺悟の体で、夫人松子を近く呼び、「今に見ろ此處二十年と經たぬ内に必然露西亞と腕押を遣る。今我が此に世を終るに當つて、唯一ッ遺憾の至りに堪へぬのは、その戰鬪に臨んで我れ自ら今一度親しく劍を

執ることの出來ぬのである。賴むは何うかお前この兒を一廉の軍人に仕立て、乃公の遺志を繼がせてくれ。言ひ置く事はこればかりだ」斯く云ひ終つて大尉の英靈は其の夜靜に肉躰を離れた。

夫人松子は泣かなんだ。徒らに歎き悲むは、夫大尉の英靈の斷じて悦ぶ所で無い。これを避けて未だ年若い未亡人は、夫大尉の英靈の必ず禀ける追善の道を取つた。即ち涙一滴溢さずに遺骨を奉じて直ちに歸京し、厚くこれを葬つた後は、夫が形見の幼兒を大切に撫育して、「今にこの兒を軍人に必ず爲やう」と胆に刻んだ。

愛兒は其の後頗る健に、四歳の春まで美しく育つたが、アヽ人生兎角風雨多く、一夜無情の夜嵐は、寢た間も離さぬ未亡人が懷の世に又と無い大切な玉を奪ひ去つた。即ちその愛兒は一夜最も急性な腦膜炎に幼い身体を捕へられて、殆んど醫者も間に合はずに果敢無く成つた。

いかに氣丈な未亡人も、これには心狂せざるを得なかつた。悲哀の極とはこれだらう。母は涙も出なかつた力の落ちたと云ふのも恐らくこれだらう。一寸立つにも當座は兩手を疊に突いた。失望したとはこんな時のことだらう。目は覺め切つても毎朝寢床が身躰を引いた。これから長い樂しい旅を仕やうと云ふ門先で、大尉未亡人は計らず旅費を奪ひ取られた思ひがした。

その新らしい悲みは、更に古い歎きを呼んで、それを思ひ此れを思ひ、「アヽ形ない世の中だ」と、未亡人の兩袖は毎日幾度か其の目に行つた。無慘と云ふはこの事だらう。木枯頃の木を見たやうに、未亡人の身は目に見えて骨立つた。

これが普通の女子ならば、世を果敢なむの極、或ひはその身を淵川に投じたかも知れぬ。さもない所が何時までも、おなじ歎きを繰返して、精神的に自ら生命を縮めたかも知れないが、アヽ流石は武人の妻！梅は決して寒さに色香は失はぬ。

成程彼の女も悲みの、刹那の感には捕はれたが、振解いて其の中に、また新らしい氣の張合を見出した。「よし去らば、亡夫の遺志と、亡兒が此の世に爲す可き筈であつた二ツを此の身一ツに引受け、女ながらも見事に遣つて見せう」と云ふ盛んなる一念が其の手を取つて、更に世の中の明るい所に導いた。

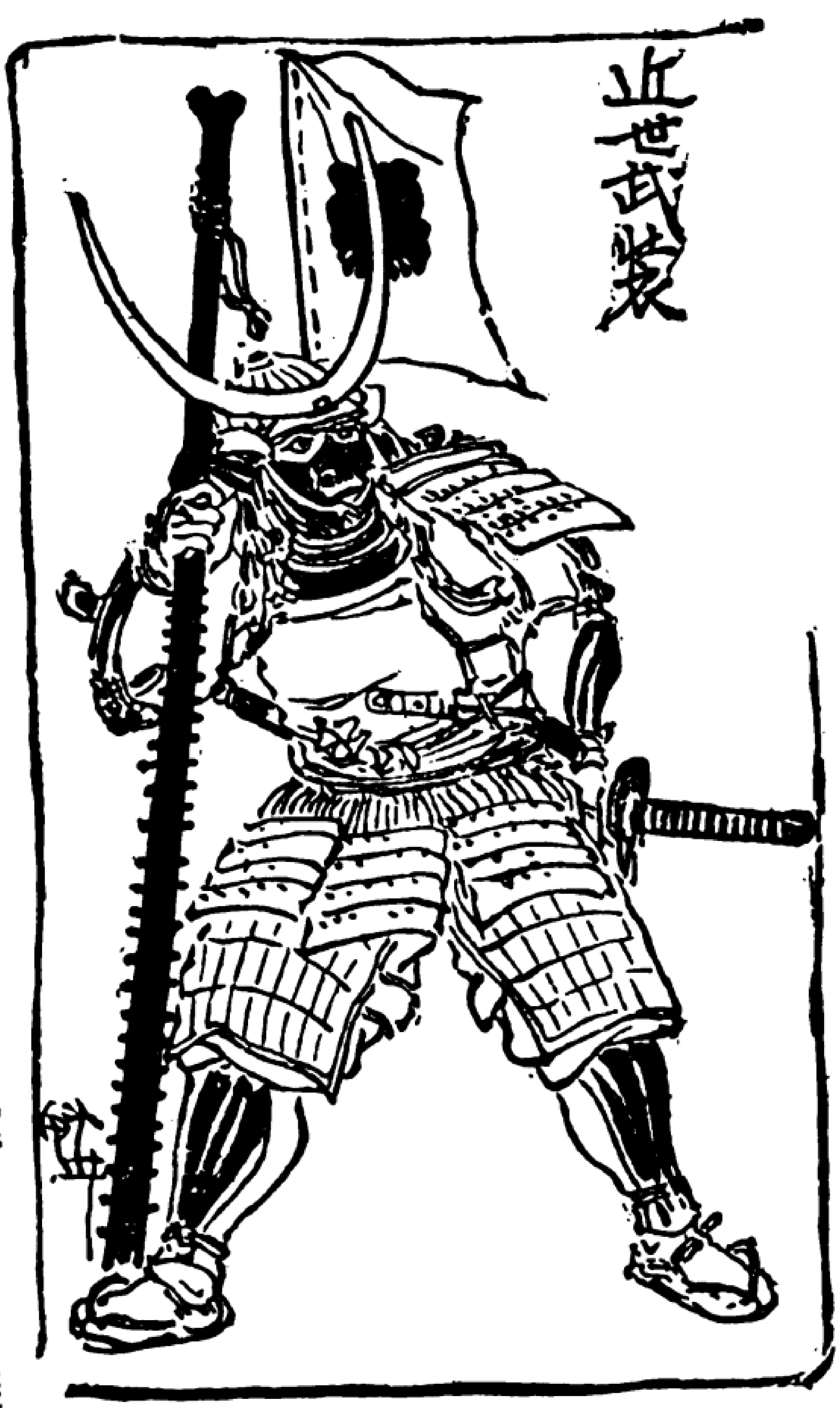
約り宇宙の一大眞理を指し仰いで、或人はこれを耶蘇と呼び、また或人はこれを如來と稱ふるやうに、この人々の目的と云ふは即ち樂みのことで、樂と云ふのはまあ氣の勇みの別名である。

こゝに故大崎大尉の未亡人は、女性ながらも不撓不屈の精神が、四圍の事情の暗澹たる裡に於いて或る目的を見出し、同時に樂みと氣の勇みとを復捕へた。古來男女の別無しに、名こそ違へ以上の一物を暖かく其の胸に保つて居れば、身は何處の際涯に行つても、心は常に愉快である。

これあるかな未亡人は、程無く笑つて東京を去つた。人あり其の行方を問へば、「亡人人の爲に廻國するのでございます」と云つた。「御道理だ！そんなお心にもお成りなさるだらう」と世間は云つた。嘘も方便―事に依つては―罪には成らぬ。何んな手續に依つたものやら、女性ながらも凜として、強い心を美しい皮膚に包んだ未亡人は、その後程無く露領浦鹽斯德に、或る露國武官の幼兒の媬母と成つて見はれた。將來大いに期する所ある媬母のお松は、熱心に露語を學ぶと共に、權勢ある武官の媬母と云ふ身の信用を利用して、和子達の手を引きながら拔目無き注意を以て、彼の地に於ける軍港内の秘密の秘密を備に見た。左樣して當港在留の我が或る人の耳に一々囁いた。

居ること六年、この間に於ける媬母が無形の獲物は、確に其の專門の我が其等の人々の上に出た。のみならず此の間に於ける烈女が同じく無形の獲物は、清韓兩國の國語を合せた。巧く機會を捕へれば、人には無量の

日本歷世の武裝（六）



重みが附く。女のお部屋的は、最う今日では價値が無い。――男子ばかりが我が帝國の民ではない。

その後大尉の未亡人は此の地を去つた。即ち浦港を立退いた。そも彼の女が人知れず日本海を渡つたのは、去んぬる明治三十年、爾來此の地に在ること凡そ六年にして、頃しも去年の秋に成り、東亞の一角雲動くや、烈女は或る日浦港を去つて、行方全く不明に成つたが、又は巧みに辮髪長く男裝して、何處から見ても先ア美しい支那人に、今玆三十路に一ツ不足の身を裝して哈爾賓に見はれた。

程無く今度の戰端開けて、故大尉未亡人の活動す可き舞台の幕は、先づ我が機敏なる海軍の行動に依つて開けられた。烈女は其の後哈爾賓を動かずに、その精細なる注意を以て、我が軍の爲に得難い多くの軍事的視察をした。「最う徐々この地を立つて、道に遼陽また奉天、要所〳〵を視察して、身を我が軍に投じやう。これは行きがけの駄賃に」と、或る夜竊に綿火藥を抱き、雪を冒して例の鐵橋に忍び寄ると、計らず前記の始末であつた。

（下）

その姿こそ蒙古服だが、既に同じ目的を齎すからは、問ふまでも無し我が同胞と見て取つた未亡人は、我れ先に立つてこれを導き、その夜鐵橋附近から、最う安全な所まで逃延びた後、足を止めて振返り、「殘念なことを仕ましたね」と言葉をかけた。

蒙古服の男は暗を透して窺ひ、「察するに君は我が同胞だな」

「はい、御安心下さいまし」

男にしては餘りに優しく、加之も艶のある聲である。だが未だ其れとは氣が附かぬ。

「君は何所の何んと云ふ人です」

「貴下さまは」

「我輩は横川と云ふもんだ」

「ちやア、貴下が、彼の」

未亡人の驚いたのも無理は無い。これ我が日本帝國の志士、彼の横川省三君である。君は再び問はずして、最早相手の男子で無いことを其の聲に據つて感附いた。

「やあ、貴方は御婦人ですな」流石の勇士も所柄また時節柄驚かざるを得なかつた。

「はい、私は、故陸軍步兵大尉、大崎武夫の妻でございます」

聞いて勇士は、また更に驚いた。

「ぢや貴方は彼の、——大崎大尉殿の？これは圖らず、ア、辱ない！實に天祐だ。それでは貴方に折入つてお願ひ仕たいことがあります。兎に角私の身を潜めて居る所まで」

折から「あれッ！」と未亡人。

「この野郎！」と、今度は勇士が手を下し、「執念深く尾け居つたな！」言葉の下に一人の露兵を難無く爲止め、

「最う日々に嚴重で、些しの油斷も出來ません」

吹雪はドッと又降つて來た。

死を爭つて容易に讓る色も無い烈婦を漸く說服けて、志士横川氏が其の潜伏所に於いて、我が再度の有益なる報告書を我が軍の手に渡す可く托したのは、實にこの夜の明方であつた。

この後志士横川氏は、不幸終に事敗れ、世界に聞えた悲壯な最期を此の地に遂げたが、未亡人の身に關しては、この後全く其の消息が無かつたが、五月下旬に至つて芝罘電報は突として我れに報じた。曰く、「日本婦人一名、男裝して哈爾賓よりこの地に來たる」

これ！故大崎大尉の未亡人が、即ち此の電文中の主人である。

身は異郷の露と消えても、志士の一念はこの烈婦の力に依つて我が軍に達し、決して徒死には成らなんだ。

同時に、故大崎大尉の英靈も、定めて地下に瞑したであらう（終）

評、文は妙ならずと雖も意はよく達せり、今其の趣向に就て一言せんに未亡人が一念發起して報國の大事を期したるは勇ましといへどもこれに伴ふ性格の特點顯はれざるは遺憾なり、而かも又未亡人の發起を唯其人の死殁に歸するは其因緣薄弱なりといふべし、されど下の二篇に比して稍優る處ろあるを以て二等に選す（選者）

仇夢

東京　おぼろ

今朝は、京菜、にんじん、ふき、夏蜜柑、山と高う積み上て、勢よう、ひき出でたる青物車、早や黄昏の、さばかりの青物、なごりなう、賣れ盡くして、車、かろげに、一心に足許みつめて歸る若者、牛込わたりに、中野のと云へば、其れとうなづかるゝ正直八百屋。惡るい物、賣らぬ代りに、牛文でも引きませぬ、の一點張り、ちと、高いではないか、少しお負けよと、花の娘の雪の樣な手に脊中たたかれても、にこりともせず、いゝや負けぬ、牛文でも、と、眞面目な顔付、お骨祖頭布かぶせて、コート着せたら、男とは、よも、みえまいと思はるゝばかりの良の白さ、身の細さ、まゆも優しく、口も可愛し、華族さまの若樣が成れの果てではあるまいかと、云ふもあれば、さる大家の一人息子、御定まりの放蕩の果が彼れさ、といふもあり、さりとて捨てられぬ憎氣なさ、一刻なれど、亦其處が女仲間に喜ばれて、積で出でたる荷は悉く賣れざるの日なく、奥樣、八百屋は中野のに限ますする、といふて、色の白い、彼れかい。と問ひ返されて、顔あからむる、下女も多しとか。今日も例の皆賣れ盡して財布は重う、車は輕う、引きかへる畑の一筋道、黄なる菜の花、薄紫の大根の花、左に、右に、咲き亂れて、靑き麥、遲咲の八重櫻。分けても、遠き山は、霞に、おぼろなるけしき。其れに心とられてか、ともすれば、恍惚と微笑てながむる若者。心着ては早むる歩調。川を一つ、少さきを、こえて、左に、小さき稻荷の祠に副ひて右に、竹群の前。とある茸家に車とゞめて、父樣や戻たよ。けふは、どうだえ。と常になくさえし聲音も大きう、勇ましげに『受かつたよ。試驗がね。受かつたよ。』と草鞋も、とかで、あがりまちに、薄暗き家の中のぞき込み『今日ね。東京の牛乳屋で官報、見たら愈々よかつたよ、喜んでお呉れ、父樣。もう良い醫者樣にもかけて、好きな御酒も澤山飲まして上げられるせ。』と云へば、赤新聞に危く支へられたる壁が下に二枚折の、其れも破れし屏風にかこはれて、板の樣な蒲團着て寢たる白髮の、此の若者が父な

るべし、目元、口元、老ひしながらも、凛としたるが、重さうに首もたげて『くたぶれたろうや。あゝ、よかつたなあ、明日さから御役人様になれるんか。骨折甲斐があつたなあ。』と嬉しさうに云へば、わらぢも、そこそこにぬいで上りし若者。『此れからは、此んな不自由な目、父様さしておかねえよ。』

『何い巳れはあ、どうでもえゝだ。汝の側にさあ居りや、不自由さあ、一寸も無えだ。其んにしても、松井の孃様はあ、どないによろこばつしやるだろう。雪の朝も霜の夜も、早く試験が受かつて辨護士さあ、なるやうにつて祈つて居て呉れさつしやつたものを、此れきいて、どないに喜こばつしやるだろう。忽体ねえわい。』と瘦せがれた手に拂ふ涙の、あはれ、頻りなり。

日本歴世の武裝（七）



其二

『御父様。今日は何え。』と優しい聲の主は戸口を、そと開けて、匂ふ矢がすりの袂より紙包さし出して『今ね。貰ふたから上げましよと思つて。此りや、東京の淺草とやらの名代の輕燒ですとさ、ふわ〳〵として、御父様にはお口にあはうと思つて。』と優しく云へば、涙うかめて『忽体ねえ。御孃様。旦那様さあ、御覧なさるといけねえ。有難え此の御志だけで、此の老爺は涙がこぼれまさ。もう此んな事さつしやらねえで。途で旦那様さあ逢ひさつしやつたら、そらこそ大變。此の夏だッけなあ、彼の蜜柑とつて來て呉れさつしやつて、孃様えれい目見さしつたゝなあ。』とばかり、眼をしばたゝきて、やがて、何かの光り認めけん如く『孃様、新もいよ〳〵試験さあうかつただ。喜んで呉れさつしやれ。』『エッまあ、よかつたんですッて。』

とばかり、優しきその眼は喜の光にかゞやきつ。

『エッまあうかつたんですつて。まあ嬉しい。其れ聞たいばッかりの百ケ日の跣足參詣。あゝ、鎭守の神樣が御きゝ下さつたか。まあ御父樣じやあ、家の御父樣も先云ふた事もあるんですし、私が此の永い月日此の樣に剛情通して來たんですから、私を、きつと、新さんとこによこして呉れますよ。まあ、嬉しい。何て嬉しいでせう。そうしたら、御父樣も良い御醫者樣にかけて、丈夫に〳〵してあげて、父子三人でホ……。』

其　三

ぢやあ、いよ〳〵征露に行つて來ます。皆樣何分にもよろしく。賴りない病父をどうか御ねがひ申します。とばかり勇ましく出でし人の姿を思ひ浮べて、ほう。とばかり亂るゝ思ひの果なげに、脊戶の折戶によりて、何を其れとなくながむる少女の肩のいたくもやつれたり。朝夕願ひし君が許に昨日にかはる丸髷の、嬉しと見しはたゞ手枕のかりそめなりし。思へば、彼の川。彼の淸い小川に、めだかとりの幼な遊び、れんげに、菫に摘みあきて、彼の小川のめだか、すくふがたゞに面白く、我れを忘れて、果ては足ふみすべらかしておちし彼の川。下手に水車作りて遊びたまへる新樣。其れと認て走りより給ひ我手とりて引き上げられき。をかしや女の手を引いて。と村の腕白どもが言葉も何とも其の時は思はで、唯だ、新樣有難とおもひそめぬ。新樣十五、我れは十二の冬なりし。降りしきる吹雪をわけての學校通ひ我は乳母の脊に肩掛まとひて、雪面白う、乳母に叱らるゝまで脊中の上にて踊つゝ、やゝ半路も來つる頃、道のほとりの松が下に、赤うかぢかみたる手に、はなほきれし下駄もちて佇み給ふは新樣なるべし。とあやまたず認めて、新樣か。鼻緖きり給ひてか。と云へば、はとばかり見あげ給ふ御顏に雪冷たげなり。乳母よ。たてゝ上げよと云へば、切もものつて居ませんや。何に是れしきの事、新公一人で出來まさあ。とつれなし。さりとて、我れに麻等の用意はなし。其んな、むごい事云ふのなら、と緋に牡丹美しう染めぬきたる襦袢の袖。一番、好きのなりしがピッゝと引きさいて、さあ、切があるの。是れですげてあげやと驚く乳母に、しゐて新樣が鼻緖たてさせて、等しう吹雪をわけて學校にゆけば

氣の毒な程、新様いぢめられて、折角、乳母にすげさせし鼻緒、皆の衆して切りつ。何をするぞえ。新様が赤が好きなのではないぞや。切れがなかりし故、私が袖の切れでせしものを、何いぢめるのぞ。先生に云ひつけるぞや。といへど倘ほ何かと云ひかちて、果ては我れ泣かされし事もありしぞかし。其れより新様何となう我れを避けたまふに、何も、我れ、惡しき事もせざるに、とくやしく、ふと出であひたる夏の夕ぐれ。我家の後のあの森のほとり。新様?といへば、花様かとばかり、犇と我が手をにぎり給ひし。あゝ、其の夕暮。其の夕暮より新様なつかしう、此の胸亂れそめしぞかし。早も浮名は村に流れて父に母にいましめられつ。あんな、ろくでもない水呑百姓の女房にお汝はなる氣かえと叱りたまふに、いゝえ、いえ、何を母様、新様は偉人ぞや。たゞの水呑百姓では御座んせぬといへば、おゝそんなに偉い新公なら御役人様にでもなつた曉、おまへを女房にやりませうぞえと憎くさげに云ひたまひし父母君が御詞、斯くと新様に告げ參らせば、うむとばかり腕くみ給ひしが、其れよりは、朝夕必死の御勉強。やがて廿一の年。兵營に入り給ひても、それは〳〵勉强家との評判高く軍隊を出で給ひてよりは晝は都に車ひきての八百屋。それを學資に夜は都の學校に法律とやら學びたまひて過る日の試驗。首尾よう辨護士の免狀うけて村の評判、一時に高く、さばかり頑固の我が父様も三國一の聟ぞやと喜び給ひて、何も四方まろく、げにや嬉しと思ひしも僅か七日。露國とやらと戰が初て動員令とやらが下り、何も彼も捨て給ひて、愉快、國の爲めぞよ。と勇んで出でゆき給ひき。勇んで笑ふて出でたまひしもの、あゝ、あの御胸にはと推しはかりまつりては。露國うらめしう、露國とやらのなかりせば、斯かる怨みはあるまじく四海波平らかに、樂しき昨日今日にあるべきを。あはれ、いふもかへるべき事かは。さはいへ、さりとて僅七日。かくて新様に、もしもの事あらば。あゝなまじこの七日。樂しかりしだけに憂ひも永くおもひでも深し。出で給ふ間際まて、たのみましたぞとあの樣に心にかけ給ひし舅御が御病。一度は快き方にむかひたまひしも、きのふけふ更らに、おとろへませしを、あゝ、我れのみ思ひにふけりて、御病ひつのらせては、何とするぞ。ゆふげの御粥を、たきましよ。といそ〳〵と立ち入る枝折戸、それもやがて夕もやに消えて。

今夜、遠征の勇士がおもひいかにぞや、等しくてらす月はわけてもさえにさえて。

評、筆路暢達、文辭婉暢一葉を摸して僅にその皇を摩す惜い哉想古し三等に選す

女郎花

鶴岡　大芝信子

出羽で庄内、最上で上の山、此處は會津の東山、歌ふ老爺の濁聲も昔しを忍ぶ思ひ草、最上川の急流を稲舟に棹して燻ぶつた手拭を頬被りに筒袖單衣に袖無し半纏、浮世の雲を餘所に見て三界無宿の舟の中、天の美を樂しめる心こそ淸らかに見ゆる。

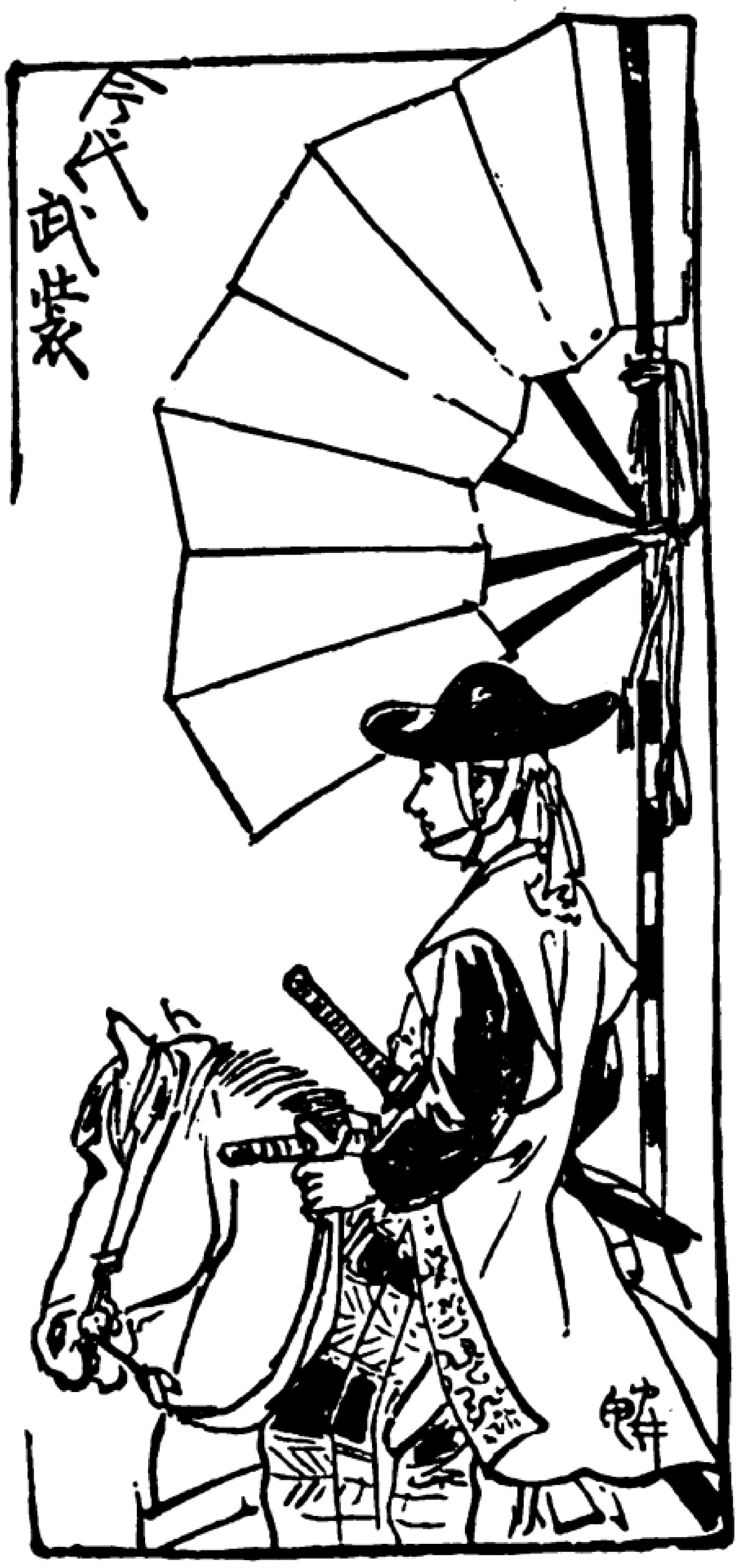
本合海より出發する渡船に乘り合ふた美人の俤、今に目に付いて居る樣だ、クッキリとした色白に切れの長い二重瞼殊に美しい口元の溢るゝ斗りの愛嬌は一種云ふべからざる温情が籠つて居るらしい、其れに光澤のある黑い頭髮を無雜作な束髮にしてお召縮緬の横縞の袷せに紫紺の丸帶をしめて栗皮茶の襦袢の襟の間から美しい乳房を出して綠兒に呑まして居つた、其可愛いさ何ともかとも云へぬ樣で其處に互の沈默が破れたのは抑の緣のはしであらう。唯一ツ異樣に感じたのは其人の沈み勝ちなのと其兒の樣子である、パッチリとした目は綠色を帶びて柔かな絹糸の樣な茶色の頭髮はフワ〳〵として居つた、實に異樣の感に打たれて暫しは言葉とても出ないのである。

少時瞑想に追はれつゝある中に白糸の瀧は上天より落ちて我等が思想を莊嚴にせしめた、川の兩岸は斷崖絶壁にして杜鵑、椿は今を盛りと咲き揃ひ深山隱れのおそ櫻さへ浮世のちりに染まずして床し氣に殘んの色を染めて居る、是ぞ眞に繪にある樣な絶景である、

間もなく蒸氣は着いて淸川と云ふ山中に其の美人と同じ旅店に一夜を結ぶ夢の宿心にかゝるは月の雨。

夜は深々と更け入つて四面音無き時に微かに聞こゆる祈禱の聲「天に在します、神様よ我夫を憐み玉へ、愛情切なる我夫は怒濤の中に敢なき最後を遂げました、アヽ在天の御父よ假令幽明隔つとも靈は妾に伴ひて永遠に妾を愛し此兒を憐み呉れる樣願くは助け給へアーメン」後は聲さへふるへてヨヽと泣いて居る、私は其聲を聞いた時に堪へられぬ程憐れさを感じて突然彼の女の部屋へ這入つた、そして問ひかけた、貴女、貴女、何を其樣に悲しんでいらつしやります、不束な者ではありますけれど、貴女がお嘆きを私にも分けて下さい、さすれば少しはお心のお晴れなさる事もわらうし、萬一お力にもなるかと存じて失禮をも顧ず參つたので御座ります、是も皆神樣のお引き合せ、同じ信者であるからは何卒打明けてお話しなされて下さりませぬか。

日本歴史の武装（八）



美人はしよんぼりと孤燈の下に跪いてさめ〴〵と泣いて居る、實にや大和の女郎花露に打たれし其風情、見れば見る程美しい如何なる悲しみのあるやらん、思ひやるさへ腸が千切れる樣だ、稍ありて美人は顏を上げ

マア、お話し申も恥しい樣で……此樣な卑い汚らはしい妻に同情を寄せて下さるとは難有、勿体ない……嘸憎い女と思召ましようが、此薄命な身の上を一通りお聞きなされて下さりませ、

容貌を改め從容として、

妾が生れは羽前の鶴岡で、祖父の代迄は殿樣に御奉公申て居りましたが、父は不圖商法に手を出したのは失敗

の元、ほんに不幸に不幸は重るもので、其後母が肺病に罹つて永年床に就いて居りましたが、妾が十二の年に遂々死んで仕舞ました、其時からと云ふものは父が落膽のあまり途方に呉れた末ゑ、種々な考へを起した上げ句、北海道へ地所を買ふて開墾を始めました、元より親一人、子一人の此身他に便る人とてもなければ妾を連れて故郷鶴岡を距る三里、加茂と云ふ港から燕滊に乘つて夜中密かに北海の空へと參りました、兎角する中に妾も年頃となつて相應な商人などに媒介をされましたが如何にせん、生れが生れでお世事を振りまく商人は虫づの走る程厭でドウしても承諾しませんでした、實に世の中と云ふものは無情なものですネー、唯一人の父は母の後を慕ふて黃泉へと旅立ました、妾は孤獨の身となつて異鄕の空に泣いて〳〵、泣き明かして居る樣は野宿の露の憐れと云はうかほんに是以上の不幸はあるまいと思つて、世が詰らなくなつて月を見ても花を見ても恨み悲しみの種となつて寧そ双親の側へ行かうとそゞろ歩きの時などにぼんやりと海の岸に立つんだ事もあります、其時の有樣は丸で砂漠の中の迷兒になつて居りましたが、幸にも其當時函館にニコライ宗の女學校が立ちましたので或る人の勸めによつて浮世に望みなき妾は其學校の寄宿生となつて籠の鳥同樣に窮屈ではあるけれど淸い靜かなる生涯を送つて居りました……それから段々とお話し申さねば分からぬ事、

と美人は膝を進めながら、

あの露國の軍艦が浦鹽から折々函館に參り碇泊致しましたが、其士官の中で未た靑年の大尉で立派な貴公子がありました、そして妾の學校へ艦の着く毎に參觀やら遊ひにやら參つたのであります、來る度に露國の珍らしいお話しを聞かしたり、面白い遊戲をして見せたり、或る時は共に手を取つて舞蹈などを敎はつた事もありました、士官は多分先生からでも聞きましたらう、私が孤獨の身を識つて、切りに妾を慰めて可愛がつて呉れるので、朋輩からは羨まれる事もありました、それからは又人目に觸れない樣に馨しい樣な薔薇の花の簪やら美しい色のリボンやらをソツト妾の袂の中に入れ込んで呉れたりなどさるゝと、妾はモウ丁度砂漠で泉に逢ふた樣な心地で、此世の中に是程親切な人があらうかと父とも兄とも思ふて慕ふて〳〵此身の事情を打明ける迄になりました……、

忘れもしない、夏の休みに學校の先生に連られて、或る所に避暑に參りました、同時に士官も行かれたのです朝の祈禱も共に捧げ三度の食事も共に戴き、夕には淸けき月の其下で互に未來を明かしたりなどして慰め合ふて居りました、すると士官は不意に故國の事を思ひ出して其情を禁じ得ないで、妾の手をシカと握つて「眞に貴孃は可愛いのネー、僕は此淋しい異鄕に來て貴孃の樣な可愛いものがある斗りで、僕は生きながらへて居るのです、貴孃が居なかつたら、僕はモウ疾に死んでしまうたかも知れぬ、何卒ネー、兄妹と思つて行く末永く愛しましようよ」と態と月に背いて熱い淚をほろりと落された時は妾は何とも、かとも云へぬ程その人を可愛く思ひましたので御座ります……それからと云ふものは二人の情は燃ゆる程强くなつて遂に或る露國人の媒介で目出度夫婦となつたのでありまする。

と包まず常年の戀を繰り返して其罪を懺悔する健氣さ、流石は宗敎の信徒たるに恥ぢぬのである。

降しきる五月雨もいつしか晴れて朧にかすむ月光は淸川の山の頂きにあらはれて居る。殘雪まだらなる鳥海山は威風堂々として雲に聳へさながら英雄の俤を忍ばしめて居る。美人は漸く淚を拂つて又も語るやう、

ほんに世の中と云ふものは定めないものでありまする、彼の寒い北海に美しいホームを作つて二人が中に兒迄設けて夢温く連れ添ふたのは三年の間で至極平和な生涯を送つて居りましたが、計らずも本年の二月東亞の戰雲襲ひ來て、夫は遠く本國に歸らねばならぬ事となりました、假令異國の人にても親子の情は變らぬものと見へまして、愈々出立と云ふ前夜夫は此兒を抱き上げて「オヽ坊やよ、坊やよ、其方の樣な不幸な兒はあるまいぞ」と云つた切り、無量の感慨は充ち滿ちて口には一言も出ないので、只頰摺りをしたり、接吻をしたり、眤と寢顏を見て居だが、迚も淚は呑み切れず長い眶を傳はつてほろりと落つる一ト雫に小兒はヨヽと泣出して親子三人諸共に泣いて〳〵、泣き崩れて居りました、そう斯うする中に東雲の空近くなり烏は苦し相に枯枝に呌んで夫の首途を促して居りまする、モウ是切りと拂然淚を吞んで劍を提げて行つて仕舞ました、アヽあの俤は幻となつて目にちらついて居る樣で今に思へばあれは此世の生き別れ、其後何の便りもなく生きて居るやら死んだやら、何處にドウして居るものやら、

サッパリ音沙汰無しで妾は悲しうて〳〵悲み死に死んで仕舞かと心が狂つたりするけれども可愛此兒がある故に死ぬに死なれぬ此身の因果、敵味方とは云ふもの丶情に於ては少しも變りはありませぬ、世間からは憎い汚らはしい女、御國の敵なる露西亞人の女房一ト打ちに殺して仕舞との御命令さへあるべきに今日迄も見脱して置いて下さるお慈悲有難い、勿体ない、何卒、三界無宿の窮鳥を憐れと思ふて下さりませ。

と、ほろりと涙をこぼしたがソツト袂で拭いて側にある鞄から大判なる一葉の寫眞を取り出して。

之は矢張御國の敵なる憎いグローフと申者で妾には最愛の夫であります

と云ひつ丶示した。

實にや金色燦爛たる武裝の勇將、嚴しい中にもフックリとした愛嬌ある面差し、鼻下にはカイゼルの美髯切れ長く見惚れる樣な好男子。ア丶此美人とは如何に情交濃かであつたかを思ひやらる丶樣だ。

美人は愈々不穏の色を顯はしながら、

風の便りに聞きまするに、其後夫は旅順口外に轟沈したる露艦ペトロパウロスクに乘り替へてマカロフ提督と共に見事戰死を遂げたと云ふ事、妾が其れを聞いた時に感極つて、天を仰いで謝しました、眞に我夫は一個の英雄でありまする、至誠を全ふしたと思ひます、我帝國の人樣も左程憎うは思召まい、思へば思ふほど我夫は少しも陰日向のない極々日本贔屓の人でありました、彼のアレキシーフ總督が施した所置や、露國が滿洲を奪ひ取るが爲めに日本と抗戰するなど丶云ふ事に就いては非常に反對して其横行を憤つて居りました、そして又露國政府の腐敗した有樣を明暮れ歎いて居つたので御座ります、だが一朝事起るや理想に反した君命を奉じて戰場に赴いたのでありまする、ア丶彼れは軍人の本分として露帝ニコラス陛下の爲めに一身を犠牲に供したと申ても宜う御座ります、彼れの死は彼れの本望で御座りましたらう。

と語り續けし時、側に寢入りたる綠兒は不圖目を覺して悲し氣に泣き出した、多分士官の亡靈が此兒のほとりにさまよふて居るだらう、其時美人は兒を抱き上げて乳房を含ませながら、終りに臨んで

ほんに袖振り合ひしも他生の緣とやら云ふ通り計らずも貴女にお目にか丶つて一部始終をお聞かせ申て妾が罪

を懺悔したのは此上もない滿足であります。

ほつと溜め息きを漏らして

モウ、夫は二度此世に歸るではなし他郷の春に逢ふ宛もなし、空しく北海の孤島に焦れ死にをするよりも双親の墳墓ある情温い故郷に振り分け髪の昔しを忍んで殘る一生を送らんものとはる〴〵歸つたのでありまする

と語り終つた時殘月一聲ほと〻ぎすは血に啼いて、あはれ世に迷ふ佳人の心を思ひやり、ますらをが終りの恨みを傳へ來て億萬里外の英魂を弔ふかの樣に見えた、

評、筆意暢達、趣向又見るべしされどこれほどの筆意を以て好個の材料を得ながら讀者に何の印象をも與へざるは急作の致す處ろにや、讀み了つて遺憾不堪

留守宅

本所　皐月女史

其一（玉章）

前略出發も愈々明日と相定まり當地よりの書信は今回丈に付特に一筆記して御身に呈せん出立前にもくれぐれ申置きたれど戰地に入る上は元より生還を期せず一死以て邦家に報いんのみ唯余はさる場合に若き御身をして永く寡居せしむるに忍びざるなり一朝不幸の報を耳にするも必落膽するなく御身が才氣と忍耐とを以て再び良夫に見え充分幸福なる生涯をおくり給へ御身が唱ふる如き獨身說は余の敢て喜ばざる處あたら有爲の婦人が徒に遁世せんよりは然べき男子の業務を補けて國家に盡さしむるこそ又社會に對するの義務なる事を忘るゝ勿れ但萬一僥倖にも凱旋することあらば相携へて樂しき既往を繰返すべけれどそはたゞ十に一の

望に過ぎず兎に角それ迄の内老父への孝養偏に賴み入候時候不順折角御自愛あれよ
戰地よりは度々の文信覺束なし別段の報なければ無事と思ひ給へ　亂筆多謝

三月二日午後十一時半　勇一

美代子どの

愛國婦人會京都支部より寄贈されたる赤き印證ある紙に、宿舍の禿筆走らせたる亂暴書の一片は、騎兵中尉武川勇一が内地出發に際して、其最愛の妻美代子夫人の許に送つた告別の一書である。

今し八疊の室の片隅に坐つて、夫の手紙を穴のあく程繰返し眺めて居た美代子夫人は、やがて得堪へぬ如く兩眼からほろ／＼と玉の樣な涙の雨を降らせた。「え、腑甲斐ない」と自ら嘲ける如くに呟いて、袂から薄紅色のハンケチを出してそつと目元を拭ふたが、又もや手紙の面に瞳がうつると等しく、熱き涙は止度なく瞼に溢れてつたはる雫に紙面を潤すので、果は瞑目沈思稍暫は胸に手を當て頻りに堪へ樣と務めるのであつた。

年頃は廿一二歳とも見ゆる細面の、さりとて瘠せ過ぎもせぬ美しい顏立ちに、昨日今日洗ふたばかりの、艶やかな前髮を、ふくらかにとりたるがうつりよく、誰に見せんとてか可愛らしい達磨草を一二輪束髮の根元にさしはさんで居る、銘仙の着物に大島飛白の羽織を着て、蝦茶木綿の西洋前垂を掛た姿は、どう見ても女學生上りであるが、妻といふ名の付いた故か至て上品にしかも大人し氣に見える。

部屋の一方には、未だ新しい簞笥鏡臺針箱などが、所狭き迄並べられ、床の間の一隅には、夫人が玩物の大琴と、夫が遺して行つた指揮刀が、共に袋に入つたまゝ、淋し氣に立て掛けられてあるのだ。

美代子は叮嚀に手紙を巻き納めて、やをら立上つたが横手の違棚に、夫勇一の姿が、美しい寫眞挾に飾られて、今にも物云ひ出んばかりに見下して居たので、今更の樣に懷し氣に其前に差寄つた、通常禮裝を着た逞しそうな偉丈夫の半身、折柄さし込む夕日影に一段の光輝をさへ放つて居る。美代子は怨ずるが如くに見詰めて暫茫然として立往生の姿であつた。

「嫂さん早く來て御覽なさい騎兵が通ります」

庭口から呼ぶ義弟の頓狂聲、夫人は周章て寫眞の前を飛び離れた。

コツ／＼と踏む、馬蹄の音勇ましく、路傍の子供が、萬歳々々と叫ぶ聲さへ聞えて、表の騷々しさは、いつもの閑天地に似ぬ有樣である。

「嫂さんあの二人並んで居るのが、中尉と大尉です、補充の人かして兄なんぞよりは年寄りですね」

美代子は云ひ知らぬ感に襲はれて、士官の後影を見送つた。

「兄さんも今にロスキーの首でも提げて歸つて來ますよ、ナーニコサック兵なんか恐ろしいものですか、日本兵に出喰したら

日本歷世の武俠（九）



堪らないでせう、アーア早く僕も出たいな僕ア海軍だ、」

十に九迄は必ず死ぬぞとの痛快なる書狀を懷にして居る美代子は、無邪氣に勇む弟の橫顏を瞶て、又もや無限の感慨に打沈んだのである。

其二（馬丁の妻）

「うむ……勇一が那麼事を云ふてよこしたかえ、實はな己にも云ひ置いて行つた、騎兵は危いから戰死の積りだが、萬一の塲合美代に能く云ふて、里へ歸してなり此方からなり、相應の處へ片付て下さつて、つまり半歲と一所に居なかつたお前故、不憫に思ふての事だらうし、己も贊成したのだ、女はどうしても夫に嫁いで眞の幸福が得られるので……あの片山の伯母を見な、若後家を守つて指一本さゝれずに立派に今迄通したの

は感心だが、子供はなし今では死ぬより外に望もないと云ふて居る、財産が有つてさへあの通りだ……まあ
まあ那麼話も萬一の塲合だから、氣にするには及ばない死ぬと定つた譯ではなしさ」
五十餘りの白髮の老翁は、讀みさしの新聞を下に置きながら、眼鏡越に美代子の顏を凝と見詰めた。
美代子は面羞げに俯向いて居たが、軈て顏を上け、
「でもお父上樣どうぞこうぞ自分丈人の力によらず暮す道があれば獨身で居たとて惡い事は無いでせうね、
「それは獨身で居たとて決して惡くはないが、必竟不幸な一生を送る譯さ、それも形見の子供でも有つて成人を樂しみにして行くと云ふのなら張合もあるが……まあ早い噺が、己の樣に年寄つてから先へ逝かれたのなどは勿論獨り住みすべきだが、若い身空ではな……」
と老翁は思はず嘆息の聲を洩した。
「私は御出立前にも申上たのです元より覺悟の前で參りました私ですからもしもの事がありましたら立派に自活してたゞもう獻身的に世の中の事に盡し傍らお父上樣の御用のお手傳もしたいと思ひまして……」
老翁は愁然として眼を閉ぢた。
「それなのに又此樣な事を仰有るのですもの」
「へゝゝまあよいはそれが御前の身を思ふての事だ兎に角其時は其時お里の御兩親も有る事だ心配しなさるな……死にもせぬに死んだ相談かへゝゝ」
「本當に縁起でもない」
と美代子も覺えずホゝと打笑ふた。
折柄「お勝手へ馬丁の女房が參りました」といふ女中のしらせである。
「構はない此處へ」と云ふ老翁の言葉に、恐る〳〵這入つて來たのは、卅前後の女房、櫛卷姿の何處となく面やつれした有樣ではあるが、目元の愛らしい口元の締つた總じてきりゝとした小形の女である。
是も又戰地にある夫を戀ふる一人かと美代子は坐に懷しく、

「さ……ずつとお這入りなそこは閾でいけないよ」

「どう致しまして此處で結構……」

と女房は愈々慇懃な挨拶。

主人思ひのわざ〳〵遠い道を脊負ふて來た草團子、老翁は大喜びで其厚意を謝しつゝ、早速実代子と共に賞翫するのであつた。

「じや何かお前は今子供と二人で居るのかえ……そりや淋しからうな」

「有難う御坐います國元には親も御坐ますが、わざ〳〵遠い方へ引込む程でもなし、それに漸く内職の口もぼつぼつ御坐んすし毎月頂きますので暮し丈は充分につきますが……一ツよければ又一ツで……良人の兄さんになる人が呑みぬけで、此頃では大威張で時々借りに來まして大聲立てられるが厭さについ出しては取られます」

日本歴代の武装（十）



「それは氣の毒だな、前々から來たのか」

と老翁は眉を顰めた。

「いゝえ前方は弟でも遠慮して來ませんでした、まア此先も心配で御座いますが、那麽事を云ひ付けた處で心

配させる丈仕方がない故諦めて居ります……良人からも此間手紙をよこして、旦那様のようなよい御方へついて、本當に己は仕合だつて申てきましたから、私もホヽ、金釘を並べて書いてやりました、後々は何としても子供はお前さんの子として、立派に育てるから安心して旦那様へお盡し申して、どうか見苦しい振舞して下さるなつて……はい馬丁でも矢張兵隊さんと同じですから、どうせ還らぬものと覺悟して居ります」

殊勝なる其言葉、かゝる貧しき賤女さへ、確固たる志は有るものをと、美代子は嬉しさに、覺えず一膝前へ乘り出した。

其三（看護婦）

今日も亦篤志看護婦人會の例會とて、美代子は倉皇として家を出掛けた、櫻花散りての後の昨日今日、裾輕き袷仕度に、足のはこびもはかどりて程なく病院の門前にと近寄つたが、とみれば例に變つた天幕張の野戰病院はや三四人の看護婦が、繃帶を持つて、忙しそうに走せ廻つて居たが、美代子を見ると一人の看護婦が飛で來た。

「武川さん先程からお待ち申て居りました、重傷の方が三四名有りまして私共の手に餘つて居つた處です、」

「おやまア戰地から……じや直に參りませう」

兼て修め得た看護の業、盡すは此時ぞと、美代子は急いで駈け出したが、不思議や何時の間にか、白衣淸き筒袖に、赤十字の徽章着きたる帽子さへ戴いて居るのだ。見渡す限り廣漠たる滿州の野中に、稍小高い岡を栖に、數本の木立へ幕を張つた、當座の假病院、先の程から看護卒が運ぶ負傷者は數へきれぬ程なので、其忙しさと混雜とは筆にも言葉にも盡せない、美代子も何をしたか、さん〴〵働いて、ホツと一息しながら、茫然天幕の外へ出ると、出會頭に二人の兵士に助けられて、徐々歩んで來た一將校があつた、頭から胸の邊迄鮮血淋漓として目も當てられぬ風情なので、美代子は眉を顰めて痛ましげに覗き込むとアヽ思ひも寄らぬ我夫の勇一なので、

「おゝ貴郎は……貴郎は……ま、どうしてツ」

と轉ぶが如く寄り縋つてしかと其手を握りしめたのである。

「貴郎まア大變な……否……なにねお怪我は淺い樣ですよしつかり遊ばしませ」

勇一は平然として笑ふた。

「なに心配する程じやない……傷を受けたのは殘念だがしかし愉快だつたよ、我軍大勝利さ」

「まア嬉しい事ね……そして貴郎は何處でお怪我なさいましたのです」

「僕か僕は旅順口の海戰で……マカロフ提督も戰死したらうよ」

「おや〳〵騎兵でも船戰なんぞをなさるのですか」

寐臺もない藁の上に、白布を敷いて、勇一を臥させ、暫く附添つて居ると聽て身動きと共に、パッチリと目を開いた、相變らず破鐘の樣な聲で

「おい美代子夫人、此樣な處迄出掛けて來ては身体に障るぞ、雲岳女史やお臼孃の樣な人なら知らず、君の如き窈窕たる御方樣だと看護に來て看護に預る樣に成るよ僕の事は構はずに早く歸り給へ……ね……奥さん」

「貴郎は御病人のくせに相變らず惡口ばかり……私は何處迄も看護婦で從軍します病氣になんかなりますものかね、……ねよいでせうね……ね」

「よかあないね君などは氣ばかり進んで身体が伴はんから」

「……」

美代子は不平顏。

勇一は凝と其顏を見詰めて居たが、

「しかし乃公の云ふ事は決して惡意ではないよ志丈は感謝するが……此間の手紙も解つたらう……」

一言云ひ度は其事と、美代子は熱心の聲ふるはし、

「いえ貴郎何と仰有つても私は萬一の事があれば看護婦で赤十字の下に死ぬ積りです私の爲を思ふて下さるのは嬉しう御座いますが私の決心は動されません……私の志も少しはお察し……」

感極つて言葉が續かぬ見れば勇一はもう劍を提げて天幕の外へ出掛けて居るので、口惜しさに我を忘れて後を追ふた。

「もし……もし貴郞ウ」

と呼うとした一刹那夜嵐の颯と雨戸を打つ音に、愕然として目覺めたのである。

美代子は暫く頭を擡げてあたりを見廻したが「オヽ夢か」と淋しげに獨笑した。

有明の火影薄暗く、枕時計は正に二時をさした處であつた。

* 　* 　* 　* 　* 　*

「お父樣戰地からお手紙が參りました……一寸花や次郞さんに兄樣からお手紙が來たと申上てお吳れ」

今着いたばかりの薄い書狀を持つて美代子は獨りそは〳〵して居る。

只今或る重き任務を果して歸營した處です萬危を犯し九死一生の場合よく敵に見止められなかつたのは天佑と申すの外ありませんしかし終りの二日二晩は呑まず食はずで駈け廻つたので一兵卒は歸ると直倒れたのを漸く今生かした位我輩だつて筆をとるのも太儀だが幸傾の都合がある故食事しながら認めた道らず一大快報が行くでせう陸侯が惡いから父上樣には別けても御養生專一になすつて下さい彼の二人も食物を謹むべし我輩の元氣は大に食すれば快復する呵々餘は又次便に申上ませう。

四月中旬　　　　勇一

御父上樣

美代樣

次郞君

頭を集めて讀んだ三人は同時に顏を上げた。

「何と云ふ書き樣だいハッハッ……しかしまア目出度い一度でも首尾よく任を盡せば本望だからな」

嬉しそうな老翁の顏を見て美代子も笑みを浮べ、

「本當に危いところを……神のおたすけですね何だか昨夜の夢が氣に成つて困つて居た處でしたよ、けれども此先が……」

と稍心配顔。

義弟は勇しく、

「きつと今に大戦がありますよ……アッ號外號外と聞える何だ陸戦大勝利だ……おい花ッ號外をよべ、え丶早く早く」

と勝手口にうろ／＼してゐる女中を突除けて門外へ走り出たが忽ち大聲をあげて庭口へ廻つて來た。

「お父様——姉さん……陸軍大勝利九連城占領です、」

老翁も美代子も狂氣の如く椽側迄踊り出たのである。

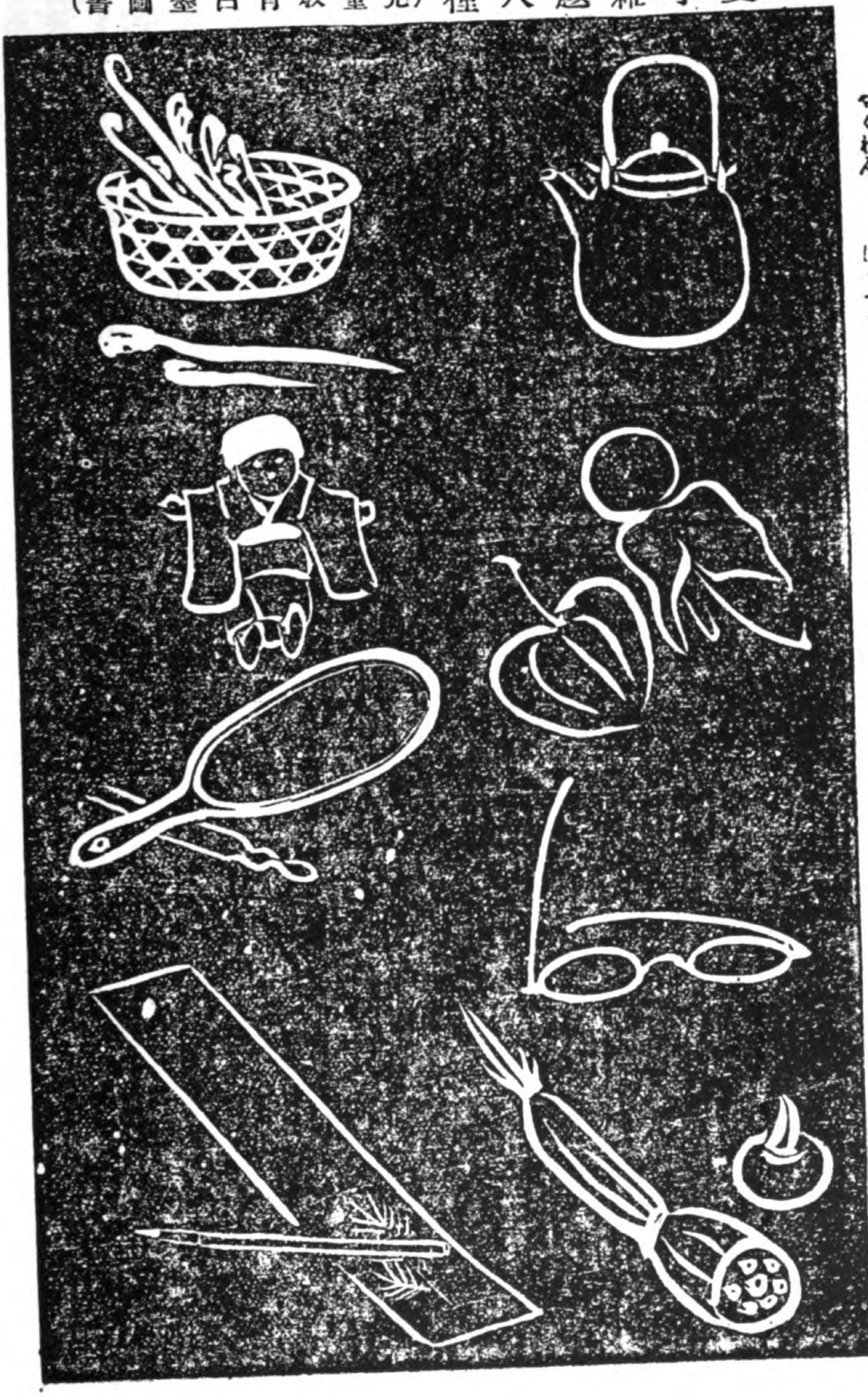
知らず勇一が死生戦功の消息は如何に。

評、時局を描いて人の感を動かしむるに足るべきも惜むらくは文未熟なり　（撰者）

未掲載秀逸の部

山桜花	備中	静月女史
移列車	長崎	五條春子
二人の火夫	近江	涙香女史
伏線	伊勢	河原花蓮
おぼろ夜	相模	葉山茂子
散ゆく花		若葉藤子
留主宅	豊後	太田るい子
若心	秋田	隆子
切髪	名古屋	加藤千代
流笛一聲	羽前	大坪貞子
特志看護婦	伊豫	春恵子
黒髪	金澤	かね子
赤心の光	越後	中川きよ子
敷島の花		ゆかり子
埋木	秋田	浦井松子
愛の片かけ	大阪	三宅良子
萬歳の聲	越後	花葉女史
そのゆくゑ	埼玉	高麻照子
杜鵑一聲	出雲	静江
再度の結婚	京都	北垣貞子
青葉かげ	越後	照子
遺族	大阪	越智落葉
軍國の女學生	仙台	原まつの
國の花	京都	中村はな子

夏季雜題八種（兒童教育白墨圖書）



やくわん

ほうづき

めがね

やさい

わらび

にんげう

かゝみ

たんざく



振天府拜觀記

矢島錦藏

振天御府の御場所は櫻田御門の內で二重橋から向ひて左の方に當る、丁度參謀本部と對ひ合た所であります。此の處には舊幕の頃には德川將軍御物見の在つた所で今も振天府中に陛下の御休息所がありまして、兩陛下には此の處より時々四民の往來する有樣を御覽せらると云ふ御話であります。

此の御府は陛下の御思召により出來たもので、中に陳列してありますものは陛下の御思召を以て御取寄になつた物や又は臣下の獻納です。さて此の御府に就いて聖意のある所を伺ひ奉るに、勿論深い思召は我々共の伺ひ及ぶべき限りでありませぬ、唯雲間遙に顯はれたる龍の尾なり鱗なり、角なり鬣なりを集めて斯うもあらうかと想像致のみであります。恐れながら其の想像を以て申せば即明治二十七八年の日淸戰役の紀念でありますが、其紀念には何が最も骨髓となつて居るでありませうか。彼れは居ながらに戰ひ我は懸軍萬里である、彼れは世界の大國である我は東洋の小國である彼には十分に充實したる軍備がある、其上に歐洲各强國は隱約の間に便利を彼れに與ふるのである、我は軍備も甚だ不十分である、其の上に諸外國は寧ろ輕蔑を以て迎ふるのである。彼れに十の便利ありて我に百の不

利がある。然るに其の戰爭に見事な勝利を得たのは何の爲であるか、此の原因こそ萬々年の後までも遺すべき大紀念物であらうと思ひます。陛下には一天萬乘の玉体を以て遠く大纛を廣島に遷させられ玉ひ、國民亦た此の大御心を体して軍國に盡し殊に身軍役に在るものは辛苦慘澹義を山嶽の高きに比したからであります。即ち此の忠勇精神こそ彼の計數相稱はざる戰爭に勝を致さしめた所以であります。そこで此の大精神の在る所が後々までも實物に就きて表彰せん御紀念物でありませう。

紀念物陳列の御館舍は三棟で其の一々に附屬の庭園があります。其の御館舍なり御庭園なり何れも溢るゝばかりに紀念の御物が陳列してありますが、其の一物一品として幾多の歷史を有し幾石の涙を灑ぐべき種で無いものはありませぬ。

第一の御館には戰利品が陳列してあります。武器の中にて直に目に附く物は青龍刀であります。三國誌の繪にある關羽の青龍刀を始めとして色々な古代の武器があります。これは實戰に用ゐたものではない、只古代の武器として保存してあつたのを戰利品としたのであります。

偖て實際使用の武器に至りては實に驚くべく恐るべきものがあります。先づ第一には大砲の彈丸である其の數は凡そ百種もあつて、何れも最近の鋭利を集めたものである。此の鋭利なる大砲に對する我か國の武器は如何、只其れ野戰砲のみでありました。攻擊力の甚た微弱なる野戰砲を以て文明の最鋭を集めた最新式の砲丸と戰つたのであるから、丸て橫綱大關の大砲に向て小供が取組む樣なものである、而して此の小供か天晴剛力の大砲をなげ出したのは何の爲めでありませう。宜く諸君の想像を煩はす所であります。

次きに目に附きましたのは魚形水雷である。魚形水雷は御承知の如く恰度魚の形をして居るから名附けたもので、今日最も進みたる武器の一である、其れが支那の海軍にあつたとて敢へて怪むには足らぬ、此に最も恐るへきは此れが支那の兵器局の製造になつたことで

ある。此の一事は決して輕々に觀過することはならぬものである、其は威海衛にありしとか、其處で製造したといふことは所謂兵器の獨立で、何よりの賴みである、即ち彼の國は最も進歩したる理學の智識と之れを工業に應用する力と且之れを實戰に驅使する所の技術上の熟練とを持て居りながら、此の戰爭の結果が彼の如く終つたのは何の爲でありませう、此所が最も眼目の所であります。

次ぎに天上聖母と云ふものがある。此れは軍艦の内に祭つた神であるそうで、凡そ五尺か六尺もあらうと云ふ立派な宮形の厨子の中に鎭坐してある。其の厨子には黃金を鏤めて細かに彫刻を施した實に美事な美術品と申しても辱しからぬもので、其の中に天上聖母と云ふ神が祭られて居る。此れは彼の國の軍艦内にあつたもので、彼れ等の船神である、丁度日本で云へは水天宮とか金比羅樣とか、水難を守護する誓のある神であります。此の神の由來は軍事上には些の關係もありませぬが、歷史上の御話で、承りましたまゝをお話致します。偖て此の神の緣起には色々の說がある、元滿洲の婦人で如何なる譯か、夫の爲めに身を深淵に投じて溺死したものがある。此の夫人が自身水に死んだから廣く水難を救はんと云ふ大心願を起した所よりして水に關係する人々殊に船頭水夫のやうな者共は、此れを尊崇すること甚だ厚いと申すことであります。又一說には天上聖母と云ひますから、多分は耶蘇の方より來たものであるだらう。天と云ひ聖と云ふ所より考ふるに或は耶蘇の母の「マリヤ」を祭つた異稱ではないかと云ふ說もある。岡澤中將が曾て此の話をなされた時拜觀人の或る人が、其れに付きて一つの話を致したそうで、それは蒙古襲來弘安の役に彼の國の船に天上聖母と云ふ旗を推し立てゝ來た、そうして其の旗が今以て平戶家に保存してあると云ふ傳があると申したので早速其の方を調べて見られたるに平戶家には其の樣な旗はないが似寄のものが對島の國の或る寺に寶物となつて居ると云ふことで、それから段々御調に成た所其の寺に一の古い旗はあるが、何分字も消えて讀むこと

が出來ぬ、只そう思うて迎へて見れば或は天上聖母とかすかに讀み得らるゝやうである。併しながら其の旗が果して蒙古襲來の時に來た旗かどうか確かに依り所はない、或は其の後彼此れともに元龜天正より元和慶長の頃まで、盛に日本海を交通往來したことがある、其の頃の船で使用したものであるらしい、どうも蒙古襲來の時のものではなからうと云ふ鑑定であると申されました。兎に角支那の軍艦には面白いものがある。それから支那の軍旗であるが、此れにも色々な種類がある。それは旣に所々の學校や、神社佛閣などに頒ち賜はりましたから、大概の人は御承知でありませう。が一般に頗る廣大なるものであるから中々大力强力のものでなければ、此の旗持は勤まらぬ。元來支那には擬勢と云ふことが兵法の一眼目としてある、此の大旗を幾旒となく押し立て押し連ねて旌旗天に滿つと云ひ、其の間より大きな青龍刀を打ち振り旭日の光を之れにきら／＼しく赫やかし、殺氣堂々十里に横はり、軍聲九區を動かすなど云へるが如く、先づ以て敵の氣勢を摧くので、此れが支那の戰術であります、今日の進みたる軍事の智識より見ればまことに幼稚なるもので、云はゞ鬼の面を被ぶりて子供を脅かすやうなものである。しかし實驗は恐しきもので、段々戰爭に經驗が積んで來た後には其の不利益なることを知り、後の遼東半島の戰爭頃には全く廢止したのである。

次ぎは額面の御話に遷りませう。澤山の額面が掛け列ねてある。中々美しき立派なものです、此れは諸官省や學校や其の他役所の門前に掛けてある、看板で此の額面は色々で、石額と云つて石に刻んだもあり、又我が國の金看板のやうに金粉文字のもある。其の中で「斯文在茲」と書いてあるのがある。此れは由緒のある甚だ好きもので、即ち勅額であります。天子より勅許を受けて敎化敎導に從事する學校なり敎會堂なりに掛けて置くのである、しかすれば此に手を觸るゝとが出來ない、もしも兇徒等が此に手を觸れ亂暴を働いたとすれば此れ違勅の朝敵である。故に外國宣敎師なども政府に請求して此の勅額を受け、之を外國宣敎師は其の

金城鐵壁と頼み、其の陰の下に兇徒の襲撃を防ぎ僅に身を全くすることを得るのであるといふことであります。

それから壁間には數多の軍艦の寫眞の額面が掛け並べてあります、此れには戰利に屬する軍艦もあり、又我が國在來の軍艦もありますが、其の額縁が興味ある御話の種であります。此れは彼の國の沈沒軍艦の木材を取つて拵へられたもので　陛下の御意匠に出でたるものであると承ります。始め軍艦の寫眞を掛け列ぬるに付きて何か額縁に善き材料はないかと、御工夫がありまして、沈沒軍艦の木材を以て造れとの御仰せに基いたものであります。まことに其の品柄の上品なる上に戰爭當時の事を追懷するには最も屈強なる紀念であると深く感心致しました。

其れより此の御館の中程に一個の感慨極まる品があります。此の時折惡く私は跡の方の遠方に居りまして、遙に拜見致す所によりますと其の御品物は長さ三尺位の樫の木か何かの至極粗末な木の棒で、此の棒の先きに馬の手綱のやうな皮が二筋着いて居つて、其の皮の先きに馬の鐙が着いて又其の先きの端に銃の口蓋やうのものが付てある。世間未だ曾て見たことも聞いたこともない稀代の品物である。稀代も道理。此れは陛下の大本營にあらせられて、日夜軍國の政に御多忙であらせらるゝ中にも少しく御餘裕のあらせらるゝ折の或る日御近臣に仰せらるゝには、何か花を挿して見たいものであるが、花活けは無いかとの仰でありました。本より御本營中に花活の御用意のある譯がありませぬから、そこで一時の興に御工風になりまして右の品を花活に御造りになり時の花を御慰みになりましたそうであります。而して其の材料は步騎砲工の四種の兵器より御取り合せになりました、即ち木の棒は工兵の鍬の柄で、二條の皮紐は砲兵の手綱で、鈴は騎兵で花壺は步兵の銃の口蓋で在たかの樣に覺えて居りますしかしながら大本營中の御不自由なることは申すも恐き次第であるのみならず、時に取りては御慰も軍國の政を離れ給はぬ大御心は有難しとも辱なしとも申し

選ぶべき言語はありませぬ。此の御品物の如きはことに最大紀念品の一であります。戰爭當時に於きまして新聞や何かで御精勵の御模様は時々漏れ承りました所でありますが、現在眼の當りに斯様なる御物を拜見して、今更のやうに感動に撃れて五十有餘人のもの共一同肅然として形を改め、感涙に咽ばぬ者は無かつたのであります。其れより此の御館の中には臺灣の諸武器類も數多く、其の外にも色々なものがありましたが、時刻の遷りまする故に順次拜觀し終りて一同附屬の御園に出でました。

此の御園が又頗る御工夫のある所で、先づ御園の取り付き、一坪半か或は三間四方も有らうと思はるゝ廣さに太き鐵の鎖の園がありまして、其の中に大きな錨が立て掛けて在り、其の側に丸い瓢簞の口を切つたやうな物が五六個陳べてあつて地盤は一面の石疊であります。此の石疊は例の石額で、錨は昔し支那の海軍に使用したものを今は古物として保存しあつたものであります偕て其の丸い瓢簞のやうな物は例の地雷火で、鐵で以て出來て居ります。私は地雷火の名は能く聞いて居りましたが、實物を見たのは始めてゞあります。まとに變な物で、此れが支那人得意の武器かと思へば何んだかをかしな感じが起りました。次ぎに周圍の鐵鎖は頗る張の大いもので直徑は三分位もありませうか、元來威海衞の港口の防禦材に用ひたものであるさうで此の防禦材は戰爭の當時威海衞の灣口に鎖を張り詰めて我が海軍の進入を防いだ、其れが爲めに我が海軍は大に苦心したと云ふことは、今以て人々の記臆に剩まるゝ所でありますが、此の鎖が即ち其の鎖である、而して其の鎖が今は御園の景色を添ふる所の材料の一つとなつて居るとは有爲轉變とは申しながら、誠に感慨に堪へぬ次第であります。

次ぎの御話は櫻桃樹である。此れは六尺計の枝の細やかに廣がつた灌木で、詩文に有名な彼の西王母の桃で其の實を食すれば三千年の生命を保ち得べしと言ひ傳へた、其の桃で、彼の國では大に珍重するものだそうです。日本で櫻桃樹と云へば北海道にある「サクラン

ポウレ」でありますが「サクランボウレ」とは全く種類の異つた一種の植物であります。彼の小說的の傳話よりして彼の國では甚だ珍重するによつて、我が國にも試に移し植へたのであるが、其の有名なにも似ず、花は白く單調な至つて見栄のしないものであると申されました、此の植木の側に東屋の御涼臺がありまして、之れに用ふる石材は例の石額で、木材は沈沒軍艦の船材で、其の外のものも一として由來のないものはありませぬ。其の東屋の兩傍に一對の石の彫刻の狛犬が相ひ向ひ合つて居ります。其の顔は餘程瓢輕な愛嬌のある顔で、時代は一千年以上も經つて居ると云ふので、古物家は頗る喜ぶものであるとの御話でありました。

其れより御堀の上、土手の見晴らしの善い所に廻つて來ますると正に濠を隔てゝ參謀本部の巍然たる高閣と相對して居ります。此所の眺望の善い所に陛下の御休憩所があります。庭園内の休憩所は何れも隨分數奇を盡くした建築であるが、此の御休憩所は僅に疊八疊敷の小さな一の御座敷であります。御濠の方に開いて二方に御椽か廻つて居つて城外の道路を國民の往來する有樣が手に取る樣に見えるのであります。其の中の御木材や御造作や御飾り附けは至つて御質素であります殊に御床柱に御粗末なる八角時計か掛つて居る、御上の御物を御粗末と申し上げては甚だ恐れ入る次第でありますが、まことに御粗末と申さねはならぬ、而して其の粗末なることが即 陛下の御恩德の優れて渡らせらるゝ所であります。此の御時計は大本營に御在で遊ばされた時に御座敷に掛つて居た御道具であるそうであります。度々申す事でありますが大御本營中の御不自由は恐れ多き次第で斯樣な御粗末の品を以て二六時中軍國の政を御覽せられました。されば事終つた後も長へに其の忠勤を捨つるに忍びずとて、此の御休息所の正面に掛けて保有し給はるの御思召であります無情の時計も其の御恩に感ずるでありませう、靜に時刻を報じながら陛下の御成を待つて居る樣に拜見されました。

此の御休息所は 即 元の德川將軍の御物見の在つた所

で、正面に參謀本部の巍乎たる高閣と相對し、左手に當りては日比谷の原の諸官省より虎の門、貴衆兩院から築地芝の方まで見晴らし、右手に當りては麴町半藏門より永田町の邊まで見えまして、四民の往來は織るか如くである、肥馬に鞭ちて黑塗の馬車を馳らすものもあれば、汗水を流して重き車を引き行くもあり、小兒を負ひながら其の車の後押しをする可愛の妻女もあり、まことに高き卑き國民の有樣を漏らすことなく御覽になることか出來ます。偖て兩陛下に於せられては時々此の御休憩所に御成になりまして、一方には振天御府に收められたいとも尊き紀念物を御覽せられ、一方には織るか如くに往來するいとも可愛ゆき四民の有樣を御覽せられ御龍顏を向けさせられて深き御感に沈ませ給ふことか屢々であると申されました。侍從武官長の中將殿も斯く語り終りて自身にも深き感激に撃たれ給へる樣に御見受した。我々輩には陛下の深き御思召の程は推察し難いとでありますが、紀念の御物は陛下の御辛苦は申すまでもなく、幾多忠烈の臣民が血を流し骨を爆らし、國の爲め君の爲めに致したる紀念物でありますから之を御覽せらるゝ陛下の御感慨は申すも畏し、況して目の下には四民の太平を歌ひながらも日々の營業に憔悴して汗は泉の如く骨は石の如く重きを擔ひ遠きを行き、しかも陛下をば親の如くに慕ひ神の如くに敬ひ奉る、可愛の蒼生の往き來ふ有樣を親しく御覽せらるゝことなれは、此れと彼れと相照らして深き御感に沈ませ給ふ大御心の萬分一を推察し奉ることが出來まして堯舜文武の世にも例なきことと唯感涙に咽ぶ外はありませぬ。

序ながら御話し致しますが、此れは曾て外より聞た話でありますが、何時の頃にか恰度此の御物見の下を一人の武官が馬上優かに馳せ來りて或一ツの官衙に入りました、暫くすると其の馬丁は主人の馬を曳き連れて其の官衙の門より出て來ましたが、門を出づるや、やがて主人の馬に飛び乘りて走せ去つたことがある、然るに其の後賢き邊よりして軍人の馬丁が主人の馬に乘ることは嚴しき御沙汰に相成つたと申します。まこと

に有難いことで従僕として主人の馬、殊に一旦事あるときは主人を騎せて弾丸硝煙の間を走せ主人に奇功を奏せしめやうと云ふ、大事な乗馬に馬丁風情が身を以て濫りに乗り試むるとは甚だ沙汰の限りであります。偖て一同は此の御庭に於て御烟草を頂戴致しました。此の御烟草も又御話の種で、我々に取りでは結構なる品でありますが、今日贅澤なる世間の有様に比べて見ますれば甚だ御質素なものでありました。

世界 赤十字の活動

藤木夕颸

戦時に於ける婦人の事業と云へば什麼ものであろうか、後鉢巻玉襷薙刀小脇に搔込んで、昔見たやうな女子隊を編成し満洲の野に繰出す如きことは、既に今日許されもしなければ其必要もなし、先づ其の重なるものを茲に挙げて見ると、一は看護事業、一は軍人遺族の扶助等である、其他いろ〳〵な仕事もあろうけれど、それ等は多く戦争に直接の関係を持つてゐない、で、茲には單に其直接の関係を有する仕事の例丈を述ぶることゝした。

▲軍隊看護の濫觴

一般に軍隊外の有志者慈善者が戦争の負傷者病者を救護する事業は、西暦千八百五十三年、則ち我が嘉永六年、例の有名なる露國「クリミヤ」の戦争當時に、彼の博愛の天使慈善の女神と仰がるゝ英國の婦人「ナイチンゲール」嬢が多くの同志婦人を率ゐ、蹶つて戦場に赴き、傷病者の救護に盡瘁せしより端緒を啓いた、けれども未だ其時迄は社會一般の人心を左程感動する丈に至らなかつたが、次で千八百五十九年、則ち我が安政元年、伊太利國「ソルフェリノ」の大戦争とて、墺佛伊三國數十萬の大軍隊が連日連夜北伊の野に苦戦した際、ハインリッヒ、デュナンと云ふ瑞西國の人が、親しく其の戦場に立入つて負傷者困苦惨憺の状を視、甚く其いたましい有様に感動して直に一書を著はし、汎く社會の注意を促し世人の同情を得たので、早くも瑞

西「デュナーヴ」のモアニエーなど云ふ有志の人々が同地に一社を起し、デュナーヴ公益協會と名けて戰地傷病者救護の手段方法を議することゝなつた、是れこそ目下歐洲諸國に盛んなる赤十字社の濫觴で、其後千八百六十三年、即ち我が文久三年、廣く諸國の同志者を招き集め、萬國會議を開きたる末、戰場に於ける負傷者救護の事は各自分裂の働きよりも衆力合一の大利益ある事を認定して、文明諸國に同旨趣の團結を起さしめ、遂には各國の政府をして軍隊衛生隊の中立を認むる萬國公約を結ばしむるに至つた、即ち赤十字條約なるものは是れである。

我國での濫觴は則ち明治十年西南戰爭の際で、其奮戰の激烈なる死傷の數も甚だ多く、其の慘狀見るに忍びなかつた處より、三條岩倉の兩公主として同族間を斡旋勸奬し、佐野常民大給恒の兩議官は進んで博愛社なるものを創立し、彼我傷病者の看護救療に從事した、其後明治十九年我が政府は赤十字條約に加盟し、博愛社は亦大に感ずる所あつて政府の認可を受け日本赤十字社と名を改め、「デュナーヴ」なる萬國赤十字中央社とも交通を開くことゝなつた、而して段々我國人の同意協賛を得て遂に今日の如く盛大なる事業となつたのである。

▲ナイチンゲールの活動

千八百五十二年英佛同盟して土耳其を助け露國と戰端を啓いた、英の大軍黑海及びクリミヤ半嶋の北方に出征して、仝五十四年に露軍と數合の激戰があつた、英兵は寒熱共に酷烈な地方に曝されて、加ふるに軍隊衛生の不整頓醫務の怠慢の爲め、負傷者戰死者よりも寧ろ病者病死者の數數倍して、其の慘狀目も當てられぬ有樣であつた、係る大軍の病傷者を收容する爲に別に設られた場所もなければ、收容所に何一つ需めに應ずべき普通の準備さへない、幾週間の久しい間千を越ゆる患者の寢床もなくて横つてゐることもある、何ヶ月と云ふ間洗濯所一つないこともある、だから日日發生する多數の患者はあまざらしの、而も板が腐つて蛆が湧いてゐる木牀の上の藁蒲團の上に轉々反側し

て、あらゆる有害有毒物の間に塡充されてゐた、甚しきは病院の職員が虎列剌病室に患者が居なくなつたのを利用して、恰も其節本國より到着した新らしい毛布や蒲團類の貯藏所に充てたこともある、又其の食料品の如き迚も食はれるやうなものは一つもない、それで赤痢や瘍腫の患者が毎日幾十百となく發生して、其むごたらしい有樣は殆ど形容しつくされぬ程であつた、で、此事が本國に報せらるゝや、英國民全般愛國恤兵の念焔の如く燃え上り、救び助けよの叫び全國到る處に湧起つた、それが爲に倫敦タイムスは此等傷病兵士の爲に必需品と慰籍物とを購入すべく救護資金の募集を始る、此時に際してフロレンス、ナイチンゲールなる一婦人出現して、渺たる巾幗の身を挺して此の大任に充り、遂に好く大任を全ふして光榮ある名を全世界に輝かした、是ぞ「クリミヤ」戰爭記の一節に最も光彩を加へしもの、而して今日萬國赤十字事業の端緒であるのだ。

同女子は千八百二十年「イタリア」の「フロレンス」市に生れた、則ち英國の大地主なるナイチンゲールの娘である、性溫良恭謙慈善惻隱の心に富み、年若うして獨逸のカイセルウエルテ則ち看護婦貧民補助者の練習所に學び、又パリの慈惠姉妹院に在つて親しく看護に關する修練を積んだが、此のクリミヤ戰爭に際し、戰地傷病者の慘狀を耳にし、自ら一書をしたゝめ、時の陸軍大臣シドニー、ハーバードに宛てゝ戰塲の傷病者救護に力を献げたき旨を申込んだ、陸軍大臣も亦一書を孃に送り、篤志看護の勤務に從事するの意なきや否やを問ふた、丁度双方の手紙が行違ひになつて互の手に落ちたので、全く其意志が合一して、ナイチングールは決然其衝に當ることゝなつたのである、それより同女史は苦心奔走して漸く同志の貴婦人四十二人を得、自ら其の看護隊の長となり、其朋友なるブレースブリッヂ氏夫妻に伴はれて、戰地に赴いた、その時他に亦五十名の看護婦が同女史に從つて行つた。

此の一行は先づ陸軍病院の所在地なるセンタリに到着したが、其翌日は「クリミヤ」戰爭中最も激烈を極めた

日で、既に夫迄二千三百人の患者があり、その後十七日の間に四千の病者を生じ、數ヶ月にして一萬の患者を右の一行へ委托せらるゝことゝなつた、で、其の巡回する寢床を一列にするときは二英里半の長さに達したと云ふことである、女史は此の悲慘極まる間に、殊に紛亂無能嫉妬に圍繞せられてあらゆる困難苦境を犯し、看護に關する一切の設備を完成し、威嚴と優情と勤勉とを以て其の神聖なる任務を盡し、遂に天使と迄渴仰さるゝに至つた、戰爭が終つて英國民は公にナイチンゲール女史の歸國を歡迎せんとしたが、女史は殊更ら人に秘して倫敦を通り過ぎ、故鄉の田舍に退隱した、けれどもヴイクトリヤ女皇はダイヤモンドを鏤めた十字の莊嚴なる勳章を賜はり、且つ親筆の御謝狀を贈り給ひ、又其上に女史は皇室の賓客として招待せられ永くバルモラル宮に留ることゝなつた。

女史は當時八十歲以上の高齡であるが、猶は看護事業に心を傾け、先年英杜戰爭の時の如きも退隱地より救護費の寄附金をなし、又不絕軍隊衞生の研究を爲し、政府の諮問に答へしことも幾度だか知れなかつた。

▲英杜戰爭　米西戰爭

其後英杜戰爭米西戰爭等、世界に有名な大戰爭がありましたが、此ごろは既に萬國赤十字事業起り、且つ到處文明諸國には赤十字社が出來、赤十字社其者の活動となつて多くの婦人が從事することゝなりました。

南亞戰爭の當時米國婦人協會はメーン號と稱する一艘の汽船を病院船に艤裝し、英國軍の手で以て南亞戰爭の救護事業に使用する爲め英國へ廻送されました。

英杜戰爭の後、英國政府が同戰爭を紀念する爲に作られた銀製記章を英本國の將校及び印度、殖民地の軍隊の總てに與へたるのみならず、又實際南阿戰爭に勤務した凡ての看護婦姉妹にも之を與へました。

又佛蘭西の假病院で有名な看護婦マダーム、フエリエーは。ヨハチスブルク市占領の當時英軍の負傷兵を救護した功勞に依つて、南阿征討總督より赤十字勳章を與へられた。

▲南阿戰爭に於ける英國の看護婦

南阿戰爭發端に際し、我が日清戰役の際看護婦使用に反對者が多かつたと同じく、非常に困難を感じました例へばラングマン私立病院が始て南阿に到着した時、其重任衛生士官が看護婦の使用を其筋に出願した處が、其願書は直に却下せられた、其後此の病院が「プロエム、フオンタイン」に到着した時にとう〱看護婦を配屬せらるゝに至りましたが、看護婦使用に反對するものゝ謬見は漸く此時に當つて打破されて了つた、それは看護婦等が非常の熱心を以て奮勵し、職務の爲に斃れたるものさへ尠らずして、又其の戰爭中看護婦に對しては殆ど一人の不平を洩したものもなく、兵士等は反て彼等看護婦の勤務を重んじ、看病人から看護せらるゝよりは寧ろ看護婦の看護を受けるのを希望するやうになりました、それ故最初看護婦を使用されても實地に患者に就て看護をすることは許されないで、唯看病人を監督する爲め使用せられたもので、其數の如きも一總病院に看護姉妹八名と限られて居つた其後此の制限は撤回され、千九百年一月中旬以來は漸く看護婦二十名づゝを附することゝなつた。

此戰爭に於て英國看護婦は、流石はヴイクトリヤ十字章を得たる丈天晴れの行動を爲し、其の職務に熱誠にして獻身的なる、如何なる危險困厄の裡にも神色自若として首を廻らすやうなことはなかつた、野戰病院の前進急行する際の如き、看護婦は天蓋もない鐵道貨車に打乘り、白晝焦げるが如き太陽の酷熱に曝され、夜は無情なる狂風に吹かれ、或は闇夜に激しい風雨と戰ひ、時には黑闇々たる異域の險坂嶮路を僅に一閃の雷光を便つて辿るなど、男子さへ猶は耐ざるの危難を冒し、食物は食する能はざる粗物を以つて聊か不平厭倦の色なく、又或る看護婦の如きは天蓋なき二輪車に乘つてクローンスタットを出立ち、敵の戰鬪線を横斷した、而して只ガフィール人のボーイ一人を護衛として連れて居つたばかりでした、故に南阿の各地に此等忠愛熱誠なる看護婦が其職務に殪れた墳墓の跡が澤山殘つてをります。

▲英國皇后の御盡力

故英國女皇、ヴイクトリヤ陛下が看護事業に御熱心なりしことは有名な話であつて、現にナイチンゲール女史の如き、深く女皇の愛敬知遇を忝ふし、女史のあらゆる計畫に一方ならず御思召を添えられましたが、今の皇后陛下も同じく非常に御熱心であつて、ウエールス親王妃として世に知られ給ひしアレキサンドラ殿下、則ち先年王后の位に陞らせ給ひしお方で、其の今日迄にいろ／＼の場合いろ／＼の方法に依り看護婦に保護奬勵を與へ給ひし事蹟は擧げて數ふるに遑がないくらゐである。

南阿戰爭中、其頃王后は未だウエールス親王妃であつたが、御親から高等の教育を受けた廿人の看護婦を撰んで戰地に送り給ふた、此看護婦一行こそ即ち戰地でプリンセス、オブウエールス、(ウエールス親王妃の看護婦)と呼ばれて有名であつたもの、其の出發の際は王后殊更彼等を御引見遊ばして、御自身から徽章を彼等に賜はり、且つ銘々に優渥なる御言葉があつた、それから又王后は傷病兵救護の爲に一隻の病院船を供へ之を儀裝された、是が即ち病院船プリンセス、オブ、ウエールス號である、而して王后は此船の着港毎に必ず之を訪ひ給ひ親しく乘組の看護婦に御言葉を交へられまた患者の經過など御下問あらせられた、その後王后は同船の監督姉妹に紀念として金十字章を賜ひ又救護費を寄附したる各看護婦に感謝狀を贈られた。

王后がさま／＼な看護事業に御盡力遊ばされた中にも、兵士水夫救濟會の重要なる附屬物アレキサンドラ看護婦養成所など主なるもので、殊に世人が王后の大事業として稱し合へることはローヤル、ナショナル、ペニション、フニド、フオア、ナアセス、即ち看護婦養老保險會と云ふやうなものであります、千八百九十年七月四日、其時分のウエールス親王の妃は實際の御會頭、又名譽會頭であつて、最初の入會看護婦一千人をマールボロー、ハウスに御延見あり、之に證書を授け給はツた、これは看護婦の歷史上に特筆大書すべき出來事であります。

▲獨逸皇后の御熱心

アウグスタ皇后は日耳曼皇帝ウイリヤム第一世の皇后で皇帝と琴瑟相和せざる處より一生を不幸落寞の裡に了られましたが、看護事業には非常に功勞がある御方で、千八百六十三年のセネバ會議に依り其翌年遂に赤十字條約締結され、アウグスタ皇后は一方ならず此の赤十字社なるもの丶事業に御力を添えられました、猶ほ其外にあらゆる公共事業慈善事業にも御熱心でありました。

千八百六十四年普魯西戰爭の始まるや、皇后は率先して救護事業に御着手遊ばされ、これが爲に軍隊傷病者の特志看護費用に當つ可き寄附金を集め、又皇后の御指揮の下に赤十字の救護費として働く可き日耳曼婦人の同盟團体を造る爲に、國中到る處の都市に委員を設けられました、而して皇后は御自身から都市の各陸軍病院を御慰問あり、伯林に於ける傷病者の方へ恰も我家同樣に屢々親しく訪はせられ、其後赤十字事業に就き御保護奬勵せられしことは筆紙に盡されぬ程で、現に最初伯林へ看護婦學校の設立せられたことも單に皇后の御力に依つてゞありました。

先年崩御あらせられた獨逸皇太后は獨逸現皇帝の御母君で、英國現皇帝の御姉君に渡らせられる丶、即ち故英國女皇は其御母君で、從て御性質も御似通ひ申したる所があり、御同樣に看護事業に御盡力遊ばされしことは一通りではありませんかつた。千八百六十七年の戰爭の際、救護員の供給準備充分でなかつた爲め、皇太后は直に看護婦養成所設立の計畫を案じ給ひ、後メツ丶の圍みが解けた時分特に義勇看護婦リース孃を引見して陸軍豫備病院の看護婦監督に任せられましたが、千八百八十一年になつて仝リース孃と御相談の上前の計畫を御實行になつてヴイクトリヤ、ハウス及看護婦學校を建てられました、それから二年程經つて皇太子及び妃兩殿下の銀婚式があつて、其時伯林では看護婦養成費に充てる爲にと云つて若干の献金をなし、同時に又慈善事業に御使用ありたいと云つて國民からの献金があつて、其額合せて百萬マーク以上になりましたが、皇太后に多く此の献金を以てヴイクトリヤ、

ハウス又は看護學校の事業擴張費に充て給はつたと云ふことであります。

▲篤志看護婦人會

日本赤十字社篤志看護婦人會の創立は、即ち明治二十年六月である、發起者は、皇族の御息所殿下を御始とし、華族の貴夫人二十九名で、看護の學術を奬勵し戰時傷病軍人の患苦を救療慰安するを目的として起された。

其時分赤十字社々員は全國を通じて僅に一千人足らず、實に微々たるものであつて、從つて婦人社員の如きは殆ど一人もないと云ふて好い有樣であつた、處で此の篤志看護婦人會が出來てから段々婦人社會も增えていつて、現今では三万三千人以上の數となつてゐる、さうすると本會の發起者は啻に看護事業の率先者たるばかりでなく、亦日本赤十字社婦人社員の先導者と謂はねばならぬ、同時に我國の戰時に關する婦人事業の率先者、即ち看護事業の創始者であるのだ。

平案此會では每月一回本社若くは病院に會合して看護學の講義を聽き、又兼て繃帶術を學び、其傍ら醵金蓄積して不虞の救護費に備ふる等、なか〳〵用意周到である。

▲看護婦の養成

日本赤十字社で看護婦養成を創めたのは、明治二十三年四月で、篤志看護婦人會の創設より遲るゝこと丁度三年、其際世間の人は未だ看護婦の何者たるかを解しない爲に、生徒を募集するのに非常の困難を感じた、幸に篤志看護婦人會なるものがあつて躬ら其の標本を示し、暗々裡に勸誘を努めたので漸く其の要員を充したけれど、それは唯東京府下丈で、地方では是迄の慣習から依然之を賤業視して、募集に應ずるもの少く、其偶々志願するものは多く無敎育者で試驗に及第するものは稀であつた。この他日本に於ける日十字の事業は日清役に於ける看護婦の活動、北清事變に於ける活動、並に現時の活動狀態に就て記す事があるけれども、これは他日を期して完結する事と致しませう。（完）

觀察

漂客 露國觀光記

女學記者

▲西比利亞の風土
▲義爾克斯の風俗
▲彼督堡の繁昌

水は文明の母なりといふ。我が日本は四面環海の國なり、この故に日本の文明は海より開けたり、遠く三韓交通の事蹟は今改めていふを須たず、中世支那大陸との交通より、下つて南洋諸國の交通、下ッて近世紀の始めは歐洲文明の化を受けたる南蠻の交通によッて物質的文明を齎らし來りぬ。德川氏の上世より、嘉永安政の頃に至るまで二百七十年間鎖國を宣して公然外國との交通を遮斷したるも、天然に水を以て包まれたる日本は又自然の因緣よりして端なく外國との交通を開くに至れり、そは即ち商船の異國漂流にして、幾多の外國的智識はこの漂流によッて齎らし來られしこそ自然の結果といふべし。

今や極東の一帝國なる我が日本は、亞細亞大陸三千里の荒野を隔てたる西洋の露西亞と戰を開いて、遼東の野に彼我の砲火を見る、是れ元來如何なる因緣ぞ、西比利亞三千里の大漠を隔てたる露西亞と日本か今日斯くまでに利害接近して戰を開くまでに至らんとは、三十年のむかし日本國民の夢にも思ひ浮ばざりし處なるべし。文明の勢ひは實に恐るべきものなり、去りながら四面環海の日本は今を距ること百年のむかしに於て既に露西亞の注目する處ろとなり明鏡の如き眼を以て我が日本を見、巨蟒の如き口を開いて日本を呑まんとしつゝありし一大事實を發見するに至るべし。

一大事實の發見とは何ぞ、漂流人の露國觀光記是れなり。

四面海を以て圍まれたる日本はむかしより內國商船の交通は隨分頻繁なりし。而して是等の商船が航海中暴風に遭ふて遠國他國へ吹き流さるゝことも又度々なりき。殊に太平洋沿岸を航海する船舶の南洋諸島へ吹き着けらるゝは普通の事なりしが、時に潮流の關係よりして多くは遠江灘より北海道、千島の沖を流れて露領カムサヤツカ半島へ漂着すること又自然の作用なりき。德川氏の中世より近代に至る間、奥州、東海道の沿岸を航行せし商船の暴風に遭ふて露領へ漂着せしもの幾艘といふを知らず、中に就て伊勢の船乘、大黑屋幸太夫なる者の一行、幷に仙臺の船乘、寒風澤の津太夫なる者の一行は難船の因緣よりして思ひ掛なき西比利亞の荒土數千里の山野を遍歷して遠く歐羅巴の境に入り露京セントペートルスボルグへ到着したる事なれば、其の頃の西比利亞の狀態は更なり、歐州大陸の文明の有樣をも委しく實見して歸朝するに至りし事、其當時に在ッては誠に不思議の記錄にして、見聞の事柄一として世間の耳目を驚ろかすの種ならざるはなかりき。

而して其事柄たる、元より目に一丁字なき賤民船乘の見聞、雜話にして淺見、鄙陋の憶想に過ぎずと雖も、十二年間の久しき其の間絕体的に風俗生活の殊なる異境に在りしことゝて、目に觸るゝもの、心に感ずるもの悉く不思議のものならざるはなく、是れを以て遙かに賤民の腦髓にも驚ろくべき異大の印象を與へたること爭ふべからずして、寧ろ今日開明の智識學問廣く、外國的見聞思想に富みたる人の尋常一樣の漫遊によッて得たるものよりも更に一層の趣味と實益とを與ふることならん。殊に今を距ること殆んど百年以前の事なれば、其時代の西比利亞の狀況、其時代の露西亞本國の狀況の果して如何なりしかを今日の地理と風俗とに對照して見るの興味は又一段の快事にして、學者の爲めには趣味ある參考となるべく、不學者の爲めにも好奇心を動かすべき話の料となるべく、日露戰爭の活劇を讀むの傍ら、やがては日本の領土となるべき西比利亞土人の

寂漠たる生活をも探ね、百年以前今の露西亞が如何なる狀態にてありしかを知らば、戰爭を見るの目も又一しほの興味を加ふるに至らんかと。是れ又記者の老婆心なり。

其一　西比利亞の氷島

寬政五年十一月下旬、奧州石卷を出帆したる仙臺藩の用船若宮丸は米千三百俵を積みて江戸に向へり、途中颶風に遭ふて難船し海中に漂ふこと殆んど七ヶ月に及べり、元より航海に悉しからぬ昔しの船乘なれば、日本の土地を幾百里離れて、如何なる處ろに在るやを知らねど、星の有樣と海の摸樣とにて大凡北海に漂ひ居ること丈は明らかにして、氣候は季節に比べて恐ろしく寒く、且つ海中凄まじき氷塊の流れ來るによりて蝦夷の沖合ならんとは想像したりき、然るに翌る年五月十日といふに始めて白雪を頂ける一座の高山を見しかば、船中の者、多分は蝦夷の島ならんと思ひ、まづ、本船に碇を卸し、端舟に少し許りの粮米を積み込み、十六人これに飛乘り岸の方へ近づきて見れば、一帶絶壁にして雪は波打際まで積り、近邊に草木もなく、人家もなく、全く無人の氷島なりしかば斯る荒土に上陸せしとて所詮命を全ふする事も叶ひ難しとて上陸を見合せ、兎角して數日の間島の周圍を廻ぐりしに六月十日に至り、島の彼方に烟を見しかばそれを目當に近寄れば端なく三人ばかりの人影を認めたり、扨ては全くの無人島にもあらざりけりとて、岸の方へ小舟を漕ぎつけ、篤と容子を窺ひ見るに其人の風躰は散髮にして髭長く面貌は黑くして恐ろし氣に見へ、鳥の羽、或は獸皮にて作りたる衣服を身に纒へり、總体異形にして日本人の外に人を知らざりし彼等の眼には鬼とも見へしかば、近寄らんも氣遣はしくて暫時上陸を扣へ居りしが、彼方より何か詞をかけ、手招きする樣子なれば、氣味惡かりしも、まづ上陸と覺悟を極めて、舟を近付けたり。島の夷人共はそれと見て漂流の者と悟りけん程なく二三十人顯はれ來り、種々手傳ひて舟を引寄せ難なく一行を上陸せしめたるは思ひ掛なき仕合

せなりき。斯くて男子は魚を持參し、女子は桶或は皮袋に水を入れて持ち來り舟にある鍋を指しこれにて煮て給べよと仕形にて敎へ懇情を盡せしかば、一同大に安堵し、舟より米を運び、焚物を取寄せ、炊ぎて食したり、島人等は又一行の者の憩ふべき家のなきを不便におもひてや、枯艸を持ち運びて一同に敷かせそこに臥せよと勞り慰めたり。

扨てつくゞゝと島人の樣子を見るに、元來穴居の風習と見へ何所を見渡しても家といふものはなく、唯濱の近邊に土窖あり、これは平地へ深く穴を穿ち蔭室の如くにせしものなるが、穴の上は海岸より拾ひ集めし流木を以て屋根の骨とし、萱のごとき草を葺きかけ、その上に土を掛けたるものなり、出入口は眞中に二尺四五寸四方の口をあけ恰も屋上の烟窓に似たり、そこより梯を傳ひて下れば下は相應に廣く、扨て窖の内は人數の多少によりて廣狹はあれど槪して六疊敷ほどの廣さなりき。是れ烈寒、風雪を凌ぐに屈強の仕居なれども、要するに此の土地樹木なきを以て木を積みて家を造ること能はざるが爲めなりと知られたり。次に島人の風俗は男女とも徒跣にして男は面色黑く荒くれたれど、婦人は遙かに柔和にしてよく見れば日本にもあるべき女の面なり、されど異樣なるは口の廻りへ入墨を施こし又鼻の障子骨に穴を穿ちて棒を貫き、これへ魚の骨にて細工したる連環を下げたり、又衣服の飾りとしてオクチヨと稱する鳥の嘴を集めて曲玉の如くに綴りこれを襟にかけたり、髮は黑くして長きを島田髷の如くに結び耳に硝子の玉を掛けたり。

▲始めて露人に遭ふ

斯くて一行は島夷の親切にて其處へ駐まること數日、或る日の事鹿の皮の筒袖を着たる一個異樣の人物、島夷十名ばかりを引從へ皮にて作りたる船にて此の島へ上陸したるものあり、自らは船の棍棒を杖に突き、扈從の島夷に鐵砲、鉞などの武器を持たせ其樣子如何にも猛々しく且つ威權強く恐ろし氣に見へ島夷とは其面体全く異りたる者なりき一行の者は元より此の人物の何物なりしかを知る由もなかりしが、後にて察すれ

ば是れ露國の駐在所に詰たる邊境の鎮守にして、豫て島夷より漂流人上陸せし由の注進を得て、吟味の爲めに出張したるものなりき。

露國の代官は漂流人等に向ひ、何事か種々尋問する所ろありしも元より言語不通の事なれば、双方意を解せず當惑の躰なりしが、樣々に仕形話して稍くの事にて日本の漂流人なる事丈を先方に通ずる事を得たり。此時代

將來の西比利亞(一)



黑龍江畔の日本村

官は携へ來りし鳥の卵數個を取り出して一行の者へ配ち與へ、翌日、小舟を卸させて、一行の者を是に乗り移らせ、自分に指圖して東北の方へさし向け、漕ぎ出して其晩、只ある港へ着船せしめたり。

▲氷島の風俗

この湊は即ち駐在所のある所ろにして其地名をナアッカといふ由、港口に三四百石も積むべき可なりの商船一艘碇泊なし居り、且つ陸には三

四十名の島夷もあり、又露の代官所は漂流の丸太木を井桁の如くに組みあげて造り、代官こゝにありて三年毎に交代の由、漂流人等は着船後飯臺にて煮たる魚を振舞はれ、こゝに暫らく滯在する事となりしが滯在中は濱邊へ出で流木を拾ひあぐる手傳などして一ヶ年ほど徒らに日を送りしが、寒氣强かりし爲め働らきは自由ならざりし。當時彼等が記臆によりて作られたる風土の記錄を見るに、

▲五月十日初て發見致したる島へ上陸仕候へども人里無之場所故、又舟を乘廻し、六月五日に至り漸々島人に出會ひ、世話を受け、其所に滯留九日目にて此ナアツカへ參り候、此所に足をとゝめ候事凡一ヶ年に相成候、此島はオロシヤ本領地方よりは東の方に當りたる北アメリカに屬し申候。

▲島の内樹木更に無之、故に薪にも萱の如き草を用ひ申候、尤も敷物に用ひ候、此草山に生し候萱よりは柔らかなるものに候。

▲本文に申候皮袋は海獸の胃袋のよし、水並に油の類を入れて運び申候。

▲食物は魚類を喰べ申候、これは汐水にて煮あげ、簀の上にのせ置、手にてむしり食ひ申候、又生にても喰べ申候、喰捨候まゝにて其魚の骨は居所にも臥所にもさし置、取片付も致さず甚だ穢らはしき体に候、且つ地に生じ候ものとては更に無く候故、漁獵の魚ばかり喰べ候事と見へ候。

▲鱈は年中御座候、形は此方の品と同樣にて名を「チレツカ」と申候、年中の食物重に此品を用ひ申候、一本を三つに切、彼の萱に包み、汐水に鹽を加へ煮てその包をときむしりて喰べ申候、又汐水にて煮上げ候後、肉を搗きて蒲鉾の如くにし、鯨の脂又は「アザラシ」の脂肪を内に入れ申候、至つて味もよろしく候。

▲土人海獸を獵し候に長さ五六尺、その鋒先に黑き火打石の樣なる石を尖らしてつけ、是を投げ突に使ひて捕り申候此道具を使ふ事島人至つて手練いたし、幼稚の時より習はせ候事とて子供等まで中

々よく使ひ申候、先年オロシヤ人此島を征服の始め、島人大勢海際へ打寄り船に向ひ此道具數千本を雨の降るごとく投かけ、中々寄附難くロシヤ人數多怪我致し候由、殊に此黒石毒ありて肉中へ入れば其所腐れ込み候、それ故療治致し候には肉を削ぎ申候よし。詰合のオロシヤ人ま〻此器を投習ひ候者有よしに候へども、中々手に入申さず候。

▲島人其魚の皮にて張候ところの舟に乗り獵に出候、その舟の兩側にこの投槍を結ひ付參り候。

▲此島殊の外寒地にて六月に候へども谷川の中程は氷解け流れ候へども岸には凍つめ居り候。

▲女はすべて縫ひ物、さし物致し候、見事なる手際にて候、針はオロシヤより渡り候よし、尤も獵の手傳もいたし候。

▲着物の襟の處へはゴーデキの毛皮を付候。

▲ナアツカ在留のオロシヤ人の居所は平地の上に材木を横竪に圍み、上に枯草を並べ、土を掛て覆ひたるものに候。

▲島人の獵に用ひ候皮舟は上より見れば形龜の甲の如くにて中に穴をあけ候これは人の乘候口なり。

▲「セイウチ」は海獸に候、牛馬より餘程大なるものにて毛薄赤く頭は馬より短かし上髭兩側に白く生じ又長き牙二本上あごより生へ外へ垂れ下り象牙のごとく形ち丸く長さ二三尺程も御座候。此獸折々陸へ上り申候、元より海獸の事とて自由に行き兼候處を棒又は鉞にて打殺し申候。

其二　西比利亞の邊土

漂流人等は斯る窮北の氷嶋に滞在すること約一年、日日流木を拾ひ集め、露人の手助けをして兎も角も日を送り居りしが、元より他界との交通絶無の處なれば、行末如何にして本國へ歸らんとの見込もなく、種々に心を碎くとも更らに其手便あらざれば、まづは命のあらん限り、此の島に堪へ忍びて天運回り來らば歸らるる節もあるべきかと墓なくその日〳〵を送り居たるぞ憐れなり。然るに此の島に一隻の回船あり、これは露

西亞本國より物品交易の爲めに回航せし帆前船にて、艦長はイワノイチガラロフと呼び極めて親切なる者なりしが、其者のいふ樣、汝等今の如く日々魚類のみ食し居りては身体の健康上如何とも氣遣し、是より西、海上千里に當ッてオコーツクといふ處あり、此所はロシャとの地つゞきにて二年目毎に本國より交代する役人の駐在所もありて萬事につけ便利なれば、我れ近日の中汝等を同所に伴ひ行かんと思ふなり、用意如何との事に一同大に喜び早速出立の事に取極めたり、依て一行十五人の者代官所より銘々に革の着物を貰ひ受けそれを着用して翌年四月三日といふに此のナーツカの港を出帆せり。抑もこのナーツカと、いふは北緯六十五度、ベーリング海峽の一角なるガルフ灣内にある島嶼中の一島にして實に西比利亞最東端の一氷島なりき。

船主イワノイチガラロフは六十餘歳の老人なれども妻子を伴ふて四年以前にロシャより此島へ回航し三十餘人の舟子を指圖して中々矍鑠たるものなりけるがよくも漂流人等の世話をなしたり、さて出帆したる船は途中サンパショーといふ島へ立寄り此島にて臘虎、海豹の皮を數多積み込み、それより幾回この海中の諸島を經廻り、次第に南方へ向ひカムシャツカ半島の一港へも着船してこゝにても又多くの獸皮を積み取り、廻り廻つて海程千餘里稍くにしてオコーツクの港へ着船したるは其年六月廿八日なりき。

▲オコーツクにて見聞したる事

去る程にこの船の着するや、差配人イワノイチ船長より早速一行の漂流せし始末をロシャの代官所へ屆出で十六人の介抱を賴むよし口添せしかば、代官所の役人尤もの事なりとて一行を官宅へ引取り救助の便りを盡したりき、其の與へられし家は表間口六間餘り、奥行七八間もあるべく材木を積み重ねて作りたる四角なる家にて内部は床を張り、椅子を置き、安座に供へ、飯臺にて食事もせしが、朝夕魚の外には麥の粉を餅の如く拵へたるもの、即ち黒麵包を給せられたり。されば彼等がナーツカに滯在中は全く蠻夷の生活にて毎日魚

類のみ食して心地惡しく、加ふるに北邊の窮地に漂ひ交通絶無の氷島に在りし事とて前途の望み覺束なく見へたりしに端なく、イワノイチガラフ恩人の惠みにより て此の地へ渡りしは天の未だ我等を捨て玉はざりしものたらんとて、喜び限りなく粗末なる麥餅といへども食に穀あるは以前の境遇に比して山海の珍味にも勝り床ある家は又金殿玉樓とも見しなるべし。

將來の西比利亞（二）



エニセー河の段釣

一行は此處に居る事五十日餘、八月下旬に至り駐在官より交代の序を以て漂流人の中三人丈け同道出立すべしとの事申し來れり、行く先はヤコーツクとてこの地方に於ける都會の由なるが行く〳〵はイルコーツクといへる西比利亞第一の都會へ送らるべき筈なりといふ依て一同鬮引にて人選しけるに儀平、善六、辰藏の三人當選したれば早速

用意を整へ、駐在官并に其の屬官附添ひ人數二十人許り勢を作り、右の三人と一緒に馬にて出發せり。

其三　氷雪途上の光景

地圖を案ずるにオコーツク府は北緯六十度にして、薩哈連島の正北約百五十里に在り。西比利亞極東の鎭所にして沿海州の一港なり。此所よりヤコーツク府に至る凡そ二百里、道路甚だ險なり又ヤコーツク府は有名の大河レナ河の中程に位せり、これより、南方イルコーツク府に至る約六百里の間は專らレナ河の流域に沿ふて交通するを以て行路は比較的平爽なり。又イルコーツク府はバイカル湖附近の鎭守にして緯度も低く土地も膏腴に在り、隨ッて人口も割合に多く、當時に在ッては、此處殆んど西比利亞中央の都會たるの觀ありき。これより西方は露西亞の政治的勢力尤も普及して種々便宜もありしが、以東は土地荒寒にして今日とても猶人口甚だ稀れにして、五里に一村、十里に一部落を成すといふの有樣なれば、まして百年以前に在ッては土地の荒涼、風氣の寂寞、眞に無人の境と謂つべく、只一面廣漠たる氷雪の野に過ぎざりければ、オコーツクよりヤコーツクに至る二百里間、ヤコーツクよりイルコーツクに至る六百里間の漂流人等の旅程の辛酸は到底我等想像の及ぶべき所にあらざるなり。而かも猶よく是れを無難に成し遂げて遙る／＼我が日本へ歸り來りしこそ奇談中の奇談といふべし。されば彼等がこの旅中に於て見聞せし觀光談の如き片言隻句も又金玉の價あるものと謂はざるべからず。即ち左にその概要を記さん。

▲西比利亞土人生活の狀態

オコーツクよりヤコーツクへ向け出發せし旅用の衣服として一行の準備せし物はいづれも毛皮にて作りたる着物なり、これは毛の方を內にして前後を縫ひつめ頸の處ろに穴をあけ、裾の方より冠りて着るやうに作られたり、襟の所には頭巾を縫ひつけ置きてこれを頭より冠る又兩手は左右の筒袖へ通し、足はずぼんに包み、手袋をはめ、鹿の皮の沓をはき、全身悉く包み

て唯眼ばかり出したるものなり、要するに此地寒氣甚だしく其防禦を忽諸にせば忽ち寒に傷められ身体を損じて癈疾となるもの多きが故に土人に倣ひ此の如くどく〱しき服裝をなしたるなり。

次に此の道中に於ける山野風土の一班を述ぶればオコーツクよりヤコーツク二百里の間は一帯に高山多く所々に山坂の險しき所あり時は八月より十月までの間にして日本ならば盛夏僅かに去つて稍く秋涼身に適するの頃なれども此の地は寒風凛烈にして雪既に深く所によりては馬の下腹部まで氷雪の屆くところあり、且つ道は元より定まりたる道路といふものなく、荒漠たる氷雪の間を僅かに土人の案内によりて進み行く事なれば多人數の旅行にあらざれば叶ひ難し。

次に道中困難なる事情の一班を述ぶればオコーツク出發の際馬匹五十頭にて發程せしも途中雪の爲め道にて斃るゝもの數十頭に及び荷物を運ぶこと能はざりしかば中程の一驛にて更に二十頭徴集して之を補ひ、又土人十人を別に雇ひ、之に鳥類豚等を鹽漬にして持たせ、又麥粉にて乾麪包を製し斯くして凡そ三十日間の食糧を準備したりき、されど道中は存外暇取りて豫定の時日に到着せざりしかば、數日の間は漸く一杯の麥の粉を湯にかき立て食したる事もありき。然るに此の邊一帯地面凍結して途中に水を得る事難かりしほどに詮方なく雪を鍋に入れて沸かし僅かに飲料に供せし事もありき。殊に此の邊土人の食物とする處ろは專ら野牛、豚の類にて野菜といふもの更に生育せず、僅かに飲料として野牛の乳を飲むに過ぎず、其不便思ふべし

次に住民風物の一班を記さんに此の邊に住する土人はヤコーテと稱する西比利亞北部の一種族にして專ら漁獵を事とし、稀れには牧畜を營むものもあれど、耕作は總て無し、人口元より寂寥にして二百里の行程中、驛とするものゝ二三個所に過ぎず、それとても僅かに十戸二十戸の集りに過ぎざれば、土人の村の如き行人の眼に觸るゝ物殆んどなしといふべく、彼等の家は例の土窖にして屋根並に四方とも土にて厚く塗り一方の側面に出入口を付け、而して入口は內外二重に作ら

れ外の入口より入つて、更に又内の入口より居室へ入る樣に出來たるものなり、是れ寒氣甚だしきを以て外の戸口のみにては表の方より風吹き込みて堪へ難く、之を避くる爲めなり、室に入れば土間には草を敷きて暖かくし床を設けて眠る樣に作りあり。この如き土窖内の生活なれば室内陰暗にして鬱陶しきものならんと思はるれど實際は之に反して窖内の明るき事は意想外なり是は天井に窓を明けて明りを取るの工風あるを以てなり、其窓には厚き氷を川より切り拔き來り是を其の窓の上に置き、周圍に雪を詰めて水を流せば氷は窓に凍りつきて天然の硝子窓となること不思議なり、其の爲め室内は中々明るく實に珍らしき工風といふべし。

次に風俗は如何といふに、此邊有夫の婦は髮を三つに組みて後ろへ下げ、後ろより二つにわけて前へ出し額にて結びたり、處女は三つに組みて後ろに下げたるまでなり、すべて女子の冠り物は羅紗、天鵞絨其外毛氈の類にてくゝり頭巾の形のごとくにし中々華美を極めたり、衣服の緣は鼬鼠、貂、などの毛を用ひて飾り牛角又は水牛の牙にて作りたる櫛をさしたり。

▲レナ河上流の風土

斯くて一行は十月十三日辛ふじてヤコーツク府へ到着せり、嚴寒の事故豫定の時日より二週間も後れ前後五十日餘にして始めて行李を休めたり、此府は西比利亞東部の首府にして當時既に人口二千餘あり、多くは丸木の材木を積みあげたる木造なれど、官衙と寺院のみは石造なり。流石宗教を尊ぶ國だけに寺院は市内に九ヶ所ありて天主教の佛體神々しく高僧も在すと聞けり、一行はこの所にて凡四十日間も滯在せしが寒中の事とて、多くは引籠り勝にて詳しき事は見聞に及ばざりき同行中の者にて途中寒氣に傷められしもの數人ありしかば此所にて外科醫の手にかけ療養せしが、凍傷にて肉腐り、骨朽ちたるものは鋸にて切斷し手當を加へて療治せり。漂流人等がこの如き荒療治を見たるは始めてなれば皆々舌を卷いて驚きたり。

十一月廿四日ヤコーツクを出發し道を南方に取りて進み行けり、今回は以前と違ひ途中の宿驛人家多く、

一驛には必らず一個の寺院ありて町も開けたるやうに見へたり、旅行は多く雪車にて之を馬に曳かせ、四疋乃至六疋位づゝ驛次の遠近に隨ひて增減せり、且つ道中は大川多く野も中々廣く見へしが、川は皆厚氷張つめし事故雪車を氷上に曳かせて一目散に走りたり、其の走ること至つて迅く且つ氷上なれば、一面平滑にして更らに道を遮ぎるものなかりし、尤も川の中などは氷重りて岳の如く時々通行を妨ぐる處ありたり、是の川といへるは有名なる西比利亞四大河の一なるレナ河の上流なりき。今旅中の光景を彼等の記臆によつて記したるを見るに。

▲道中馬繼(宿驛の事)は彼國の里數にて十里、十二里、十八里、二十里、二十五里位づゝにて候。

▲宿々驛場の名は一々には覺へ不申候、家作りはヤコーツカ同樣に覺へ候、オリヨマフと申所は家數三百軒ほどにて代官も在、番寺も相見え候。

▲道中は發足より雪車に乘りて馬に曳かせ申候。馬は繼場の遠近により、四疋又は六疋附申候。

▲此道中イルコーツカまで大川引つゞき、川筋多く此節は氷厚く張りつめ候故右の雪車を馬に曳かせ氷の上を通行仕候、尤もすべり申ぬ樣に馬へは「カンヂキを四足にはめて走らせ候、元より氷の上は陸地よりも平かなる故、殊の外道捗ゆき申候。但し繼馬の驛に至り候へば其所ばかり上陸仕候、又川の中所により氷かさなりて岳の如く通行も致し兼候。

▲道中左右山々も有之候へ共高山とては相見へ申さず道々雪降り積り候故土をば見不申候。

▲一體陸路オコーツカ以北よりもよろしく、馬へは鈴をつけ置候故數疋の馬の鈴鳴り候音、遠方まで聞へ候故其聲にて先の驛にては繼馬を待受け遲滯なき樣に仕候。

其四　バイカル湖畔の都會

斯くて一行は翌年正月廿五日イルコーツク府へ到着せり、爰は西比利亞總督府の所在地にて、人家三千餘軒もあり、町の体裁頗る整ひ、萬事便宜の叶ふ土地なり

しかば、漂流人等は早速役所より手厚き救助を受け、衣食には不自由なくいと滿足に滯留したりけり。始め漂流者十五名の者オローツクを前後三回に出發すべき定めなりしかば、第一回は儀平等の一行三人、第二回は左大夫の一行五人、第三回は津太夫等一行七人にて或は五ヶ月の後、或は七ヶ月の後と相前後して十五名の者悉く到着せしは翌年の十二月なりし。而して第一回に到着したる者、役所へ出頭せし時爰に日本語をよくする一人の通詞ありて彼我の情況始めて通じ萬事便宜を得たるは漂流人等に取ッて意外の幸福なりき。

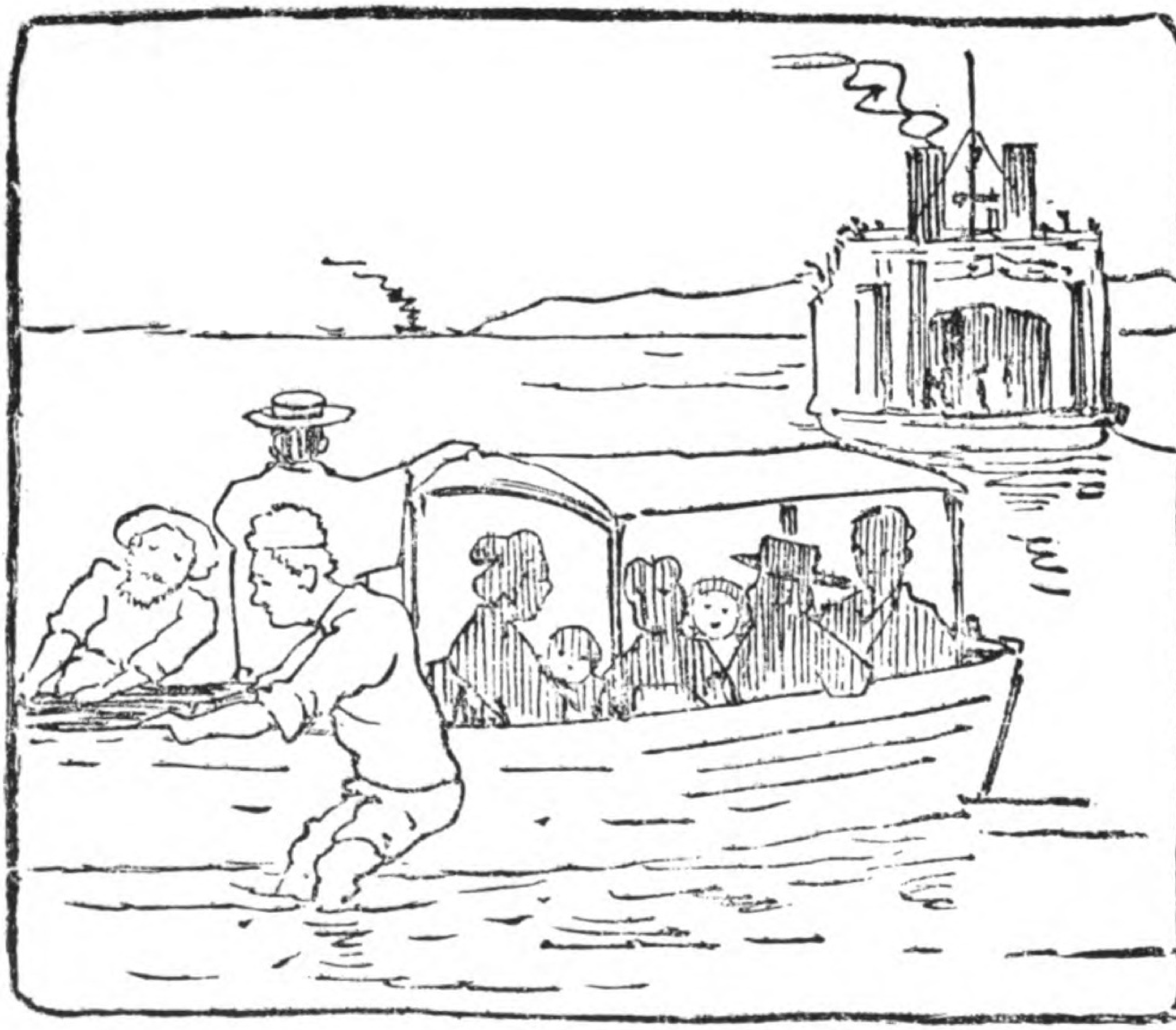
扨この通詞如何にして日本と海陸數千里を隔てたるとの絶遠の地方にありて我が國語をよくせしやといふにこれぞ大に仔細ある事にて其當時を距る六十年のむかし日本南部の住人竹内德兵衛なる者漂流して此地に來りし事あり、德兵衛の仲間に佐井村久助といふ者ありてイルコーツクに居住する事三十年に及ぶ、時に露人にして一少年あり、此の久助に就て日本語を學び居たりしが。十二年前伊勢國幸太夫なる者の一行漂流して又此地に到りし事あり、其時久助と共に日本通詞役申付られ、幸太夫同道にて日本へも渡航したる事あり、今回も亦漂流人の通詞として招かれたるものにぞある此者名をイワノイチ、トコロコフといふ由、猶又此の外に一行の漂流者をして天涯の異境に奇遇の感を懷かしめたる一人の珍客ありき。それは伊勢の國の新藏といふ者にて十二年前幸太夫と共に此地に來り。其儘土着の民となりし者なるが、漂流人等の邂逅し時には風俗は全く露人なりしも唯脊低く、眼の色黑くして全体の容子、其地の人とも思はれざれば不審におもひて素性を尋ねたるに全く前記の人物なる事判然し一同の喜び譬ふるに物なかりき。新藏今は露國に歸化して妻子もあり、姓名も露西亞風に代へてニコライ、ハイトルイチ、コロゲテノと稱し、日本語の敎師として總督官廳へ通勤し、莫大の給料を得て裕かに生活を成し居たりき。

▲イルコーツク市中の光景

當時イルコーツクの戸數三千軒、街路縱横正しく通じ

て道幅甚だ廣く、車輛三個を列ねて通ずるもさして狹きを感ぜざりしといふ。家屋は石造、木造の兩樣にして木造尤も多けれど二階造にして軒高く自然に都の風を備へたり、住家の裏には菜園ありて菜菔、蕪菁、煙草等の植へられたるを見き又市中の人家に交りて寺院十三個所ありいづれも石造にて外觀堂々たり。亦魚市場ありこれは一區劃を成して魚類のみを

將來の西比利亞（三）



バイカル湖の遊船

鬻ぐ、その魚は附近の湖水、大河（湖はバイカル、河はエニセイの上流なり）より漁する鯉、鱒、鰻等多く大概五六尺以上の大魚なり、又豚羊の類を鬻ぐ店多く牛肉を販賣する店も盛なりき、コサックの兵營・病院、造兵廠などは町より十七八丁隔りたる處ろにありて建築は皆宏壯なり。市中各戸、倉廩の外に穴藏あり、これは多く食物を貯藏する

ものにして、夏は涼しく冬は暖かく極めて便利のものなり。殊に夏季に至れば河岸より氷を運び來りてこれを穴藏の内部に入れ置き肉類又は野菜の腐敗を防ぐの用意極めて整へり、而のみならず、家の内には煉瓦にて造りたる煖爐ありて、冬季に至れば絶へず、烈火を焚き室内を暖むる故、極寒の時と雖も、襦袢一枚になりて働らく事を得るなり、漂流人等は斯る風習に馴れざりしかば、屢々上氣して目を眩はしたる事もありきといふ。

家居の様にて奇態なるは風呂場なり、イルコーツクの風呂は所謂蒸風呂にて其の構造は内部に石を積み置其下より火を焚き、其石の燒たる時冷水を灑ぎかくるなり、斯くする時は蒸氣熾に立騰りて塲内に充滿す、此時風呂塲入口の戸を閉づれは蒸氣は内に籠りて外へ出ることなし、塲内には幾重にも架棚ありて入浴の人裸になりて其湯氣に體を蒸すなり。斯くすればよく垢もよれ、疲勞も癒ゆるなり。此時柳の枝を幕のごとく束ねたるを持て肢體を打てば、垢は立どころに落つるなり、尤も蒸氣充滿して呼吸苦しくなれば冷水を顔に灑ぐなり。但しこの湯は日本などの如く毎日たつるにあらで一月に四回位、多くは式日の前夜などにて家内中身を淨める爲めにするなりと。

▲イルコーツク府民の生活

イルコーツク府露人の食事は日本と同じく日に三度なり、朝は小麥にて作りたる饅頭少許食ひて茶を飲むのみ、晝は裸麥の蒸餅(麪包)と牛肉の羮たるを用ゆ、麥餅はケレブと稱し燕麥の粉を水にて溶かし捏ちて餅となし、蒸燒にしたるものなり、大概一週間分を一度に製し置きて日々用ゆ、又牛肉は此地方土人の常食にして飼養の數極めて夥しく、村落に至れば一家にして五六百より千頭位蓄養し、日々四五十頭位づゝ此の市中へ持ち出し屠殺して牛店へ賣渡す、肉の外牛乳を食用す、種々食品に和し鹽梅して用ゆる故その分量極めて夥し、露人の外、土人(ヤコーツ人、ブラーツク人、及トングース人等)は馬乳、鹿乳を飲み、又羊乳にて造りたる酒類を飲用せり。

野菜にはカホーシフと稱する菘あり、これを細かに刻みて麥粉を拌せ加へ、鹽を和して大樽に貯へ置く時は少しく酸味を生すれども美味にして清爽なり、家々皆之を作らざるなし、牛肉を煮る時之を用ひ、汁を多くして肉羹となし麥餅に添へて食す。

露人の習慣神に仕ふるに精進潔齋といふ事あり、精進の時は四足獸を食ふ事を禁ず、されど魚類は不淨物となさず、故に祭日には魚を食す、多くは蒸燒にしたる物なり、其法小麥粉の衣をかけて、油にて燒く故存外甘美なり。

鳥類には雁、鴨、鷄、鷲の類尤も多し、家々に飼ひ置て食料に供す、富裕の家に至れば種々の鳥類五六百羽以上千羽に及ぶものあり、貧しき家にても鷄十羽以上貯へざるはなし。

常食の外盛饌の時には精米あり、粥に炊きて牛乳を和し用ゆ、小兒又は病人のありし時之を用ゆる事もあるなり又酒はすべて麥酒なり、多くは遠方より輸入したるものなり、中には葡萄酒、火酒もあり、火酒は殊に酷烈なり。

次に食事の仕方を述べん、食事にはまづ食盤を据へ器に盛たる食物を盤の中央に置き扨て盤の周圍に人數に應じて椅子あり、各之に倚て盤に向ひ盤上銘々の前に皿を置き之に中央の食物を取りて食ふ、食ふには小刀肉叉、食匙の三種あり肉は刀にて叉を添へて切り、叉にさして食ひ、又汁氣の物は匙にてすくひ吸ふなり、食に若し酒あればこつぷ硝子盃等其傍に備ふ、又食盤の上に白布を敷き、且つ銘々白き幅廣の巾を襟へかけて食事す是れ食物の濡れて衣を汚すを防ぐ爲なりと見ゆ。

次に衣服は多く毛織物を用ゆ、トロツポカと稱し綿入の如きものあり、皮裘あり、毛を内にして着る上着なり、邊鄙の詞にて之をセウパといふ又夏季に用ゆる麻の單衣あり、商人等多く之を着用せり。

▲彼等の見たる西比利亞觀

津太夫曰くイルコーックに人家三千軒ほどあり、奉行(總督)在勤にて二三人ありと聞ゆ、本國より三四年

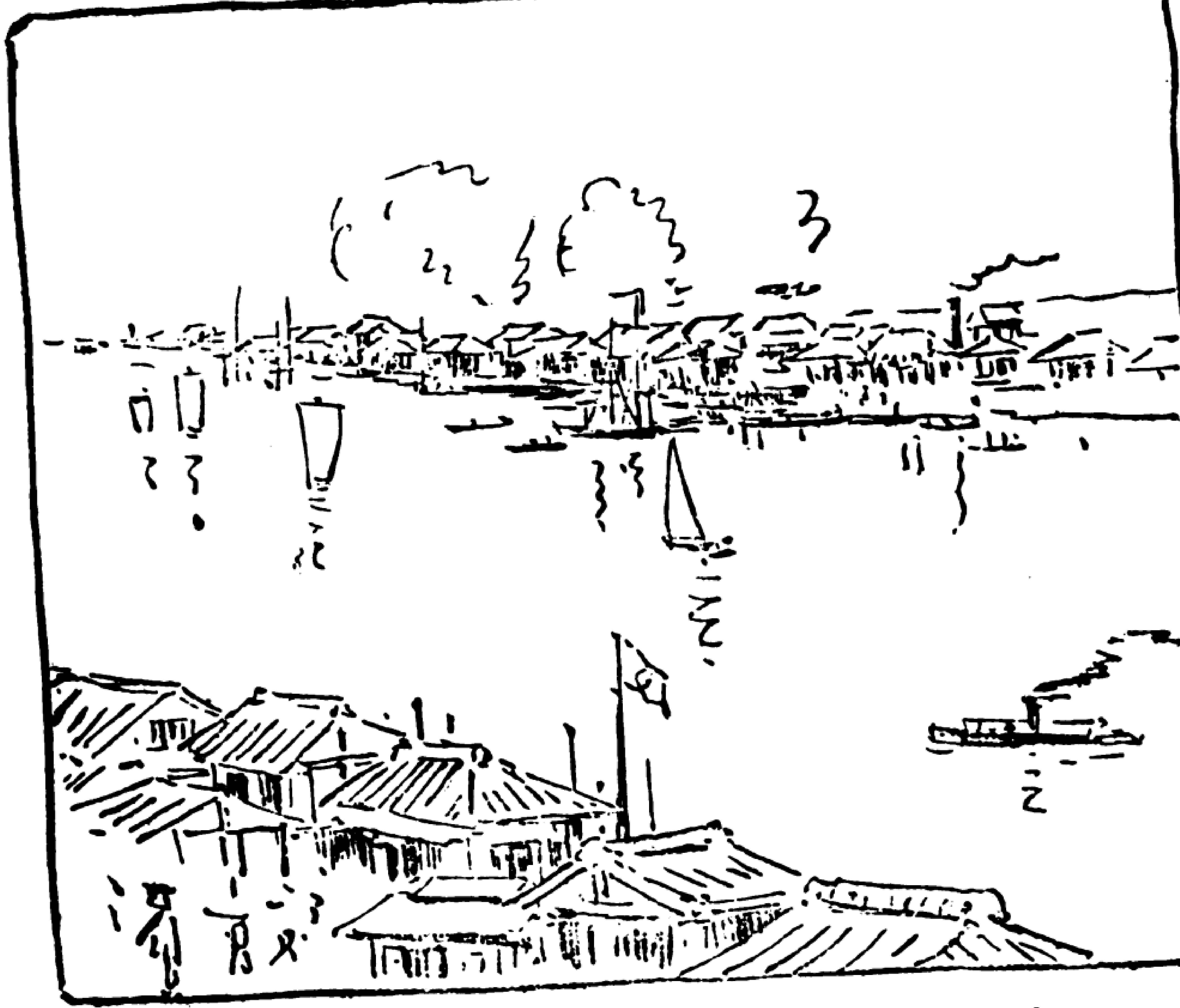
更交代す、下役の者幷に足輕（兵卒）千八百人程あり、町年寄（市長）といふべきもの一人あり寺は十三ヶ寺有、すべて家造りは石造なり東南に向ッて山あり（ヤブロノイ山敷）西より北へ當ッて大河あり（レナ河）川幅廣く、ヤコーツクの方へ流る此川極寒の時は氷の厚さ二三尺にも至るなり、三月初より氷解けかゝる時分には水蒸氣立ちて人の面も見へ分かぬほどなり。此所より新都まで七千里、唐山界（寳買城）まで五百里、カミシヤーツカまで六千五百里、總名をシビリと申候扨當所近在の郷中數千里の地をブラーケと申候これはオロシヤ本領とは相成ぬ以前より土着の種族にて候此人々は眼の色黑く身體も低く、オロシヤ人物とは大に違ひ申候、オロシヤ人追々此邊土へ來り取締り付候後は町々在々ともオロシヤ種の人多く相成候、土着の者はブラーケと呼び申候ブラーケは甚だ野鄙に御座候、いやしめられ候、尤も近來はオロシヤ詞も通ひ、衣類は羅紗を用ひ候、尤も宗旨はオロシヤ一統の宗派にては御座なく候。

其五　露帝の恩命

漂流人津太夫以下十三人の者西比利亞の首府イルコーツクへ滯在すること凡八ヶ年に及べり、斯くして何の時歸朝すべしとの目的もなく、空しく月日を重ね居たりしが、日本曆の享和三年春三月、圖らずも皇帝より御用有之に付一行の者に露都彼得堡府へ上京すべしとの勅命をイルコーツクの總督府より市長を經て申し來りしかば、漂人等は國王よりの御召にて、都に上り、日本へ歸國の事國王へ願ひ出なば或は許可を得る事もあるべく、是れ積年の望みを遂すべき僥倖の機運なるべしとて、一同大に喜び、早速旨を畏りて出立の準備をなし、同行には都より王命を傳へ來りし飛脚と通詞兼世話方として彼のニコライ新藏附添ひ都合十五人にてイルコーツクを出發せしは三月上旬なりき。其節の旅用意には、羅紗の着服、十三人揃ひの服裝にて總督府より給せられたる七臺の馬車に乘りて出發せり、との行程凡そ三千里、途中トンスケ、（トムスク府）べ

リア、(エカテリンブルク)カザン(加山)モスコーの各府を經て露京へ着せしは四月廿六日なりき、其間の日數約五十日餘氷上を一直線に走らせ、時としては晝夜兼行に急ぎし事もありて身體の疲勞甚だしく中には眩暈するものもありて途中療養の爲め下車せしもの數人ありき、この如き有様なれば、中途の觀光を縱にすること能はず、大概は雲煙過雁の間に過

將來の西比利亞(四)



ウスリー河畔の日本町

ぎ去りたり中に就て加山、莫斯科の二大市府はやゝ委しく見る事を得たり。

加山は昔時韃靼の舊城のありし處とて今や繁榮の城市なり、城廓堅固にして宏壯雄偉の觀ありき。城に臨みて河あり、其幅一里、洋々として海のごとし、これ露西亞三大河の一なるオルガ河の上流なり、土地極めて膏腴にして畦圃には春の麥秀たり。

又モスコーは露の舊

都にして街道廣く、道路には石を敷き、車馬の通行絡繹として織るがごとし、人家は皆石造にして、これまで西比利亞にて見たる木造少くいづれも華麗宏壯を極めざるなし、殊に一行の泊りし旅宿の結搆は善美を盡したるものにて器物、飲食の品、山海の珍を供へられしかと思ふばかりなりき。

▲露京滯在中の見聞

一行彼得堡に着するや、當時露國朝廷の有力者なりける外務大臣ニコライ、パイトルイチ、リユーマンツフ公爵と呼べる方殊に懇篤の意を以て一行を迎へ、邸內の一館舍を當分の旅亭として宛行はれ、漂流者一同其所に滯在する事となりたり、公爵の館は頗る廣きものにて屋敷の周圍凡二三町あらん、これに三重の門あり、第一の大門を入れば、內に第二門ありて此所に銃劍を持たる番兵二人ありて警衞し、更に第三門ありて石を疊み、恰も寺院の唐門の如し此處にも又番兵ありて劍を佩び出入を警固せり。到着の夜、公爵へ謁見の事あり、數名の官人附添ひにて堂上へ昇る、室內の裝飾幷に應接の模樣左のごとし

一間階段を昇りて三階の上に至れば堂上四壁には硝子の額、硝子張の畵額鳥獸草木、人物等の額、數々掛けならべ、座敷はすべて板敷にてそれ〴〵仕切あり、いづれも我國の疊にて二百疊以上の廣さに見ゆ、皆々並居し處、これへと指圖ありし席へ出づれば、公爵は正面にありて、威儀を正され其叔母君なりといふ婦人も側にありて共に漂流人を見られたり、陪從者四五人其左右に並べり、公爵一同へ挨拶ありて且つ問はるゝ樣汝等日本へ歸り度や、又此地に留り度きや、何れ共望み次第にすべしとの帝の御思召なり、我帝王は外國の人を殊に珍らしく思召され格別に憐愍を加へさせ給ふ事なればいづれとも遠慮なく申しあげよといと懇ろに仰されたり。

此時公爵の服裝は上に金銀にて緣取りたる無地色羅紗の外套を着せられ、叔母君といへるは藍天鵞絨の上着に銀絲の縫ある胸飾をせられたり。

一行滯留中の賄は、是までの賄と違ひ極めて手を盡

したるものにて毎日三度、朝は一と通りの淡泊なる朝茶の子なりしが晝と晩には料理一人前に凡九通づつ取代へて出されたり、食盤數脚を据へ、其上に食品を並べ列ね、給仕人も附添ひたり、又勝手元には料理人ありて順々に仕出す樣子なりき。又蒸餅に添ふ羹汁は鹽水に牛肉、鷄肉、米等少し入れて煮たるものなり。其餘豚肉、野羊、並に魚類等種々ありたり。

扨又公爵の館內は至て廣く、邸內には常に七百人ほどの人數ありて種々事に役せり、思ふに是れはその領地より召寄せられしものと見へたり。又公爵外出の時は六頭立の馬車なり。從者二人附添ふ。館內家宅の內に草花を養ふ處あり眞中は花壇にて種種の植物あり、其周圍は硝子張にて園丁附添ひ、暖混、冷熱の加減をなし、花を開かせ實を結ばしむる事自在なりといふ。

滯在中國王へ拜謁の時日本服着用すべしとの事なれども彼等久しく西比利亞の地に滯泊せし事にて和服の着古しを持たず、依て官立の裁縫所にて十人前の衣服の寸法を取り鳥繻子にて着物並に羽織、帶等を仕立てたり。

一行外出の時は常に馬車に駕せられたり、四人乘にて、車の彩色、飾り、華麗にして內には毛氈をしき周圍は美しき織物にて貼り四方に硝子窓をつけたるものなり。

▲露帝拜謁の景況

一行は外務大臣リウマンソフ公爵の邸內に滯在すること十五日、五月十六日に至り、いよ／＼帝王へ謁見被仰付らるべしとの事なれば豫て仕立置かれたる新調の日本服を着用し、日本流に前頂を剃り、月代頭となりて馬車に乘り王宮さして乘り込みたり。王宮は町の內にありて別段城廓の構へはなかりしが、一方は川に沿ひ、他の三面は壕を廻らしたり宮內の地形は高からねど、廣さは二丁四方もあるべし、門外には番兵らしきもの兩側に二人づゝ銃を持ちて警衞し、又外廓とも見ゆる處には四面石造の館舍高く建てつゝきたり

扨宮殿は、五階造りの石造にて一階毎に硝子窓あり、外部より之を望見るに恰も角石を積みたるがごとし、正面に在る大門の廣さは馬車五輛列ねて通行さるべきほどに廣かりき、といへば、凡そ十間ばかりはありしならんと思はる。

扨て漂流者一同は案内の役人に導かれて殿中へ伺候せしが、外廊より内殿に通ずる數間の間、石橋を架して車馬を通ず、これより一階二階と昇ること幾階にして玉座に到る、殿中は間毎〱に番士ありて嚴しく警衛せり、内殿に入れば四壁の修飾金銀を鏤はめ、錦繍を貼りつめ、結構の善美實に眼を驚かすに足るべし

一行は内殿に入りて待つこと暫時、この間に附添の役人謁見の禮式、作法は斯くあるべしとて種々注意する處ろありしが、ほどなく、外務大臣ゾウマンツフ公爵の先導にて帝王御一族の方々出御ありたり、帝王、まづ母后の御手を牽き給ひ次に皇后、皇弟と順々に出御ありて玉座に就かせ給ふ、一行は恐る〱其の相貌を拜見し奉るに、天顏恭々しく〱して威嚴あり、誠に堂〱として大國萬乘の德を備へ給ふ、されば一同は座を下りて首を下げ平伏せんとしたりしかば、傍らに附添ひたる官人會釋していふ樣、抑も此の國の禮儀は日本と異り、立ちて見ゆるが誠の禮敬ぞかし、必らず平座する事勿れと注意けたりしかば、何れも立ちて禮を改めたり、此時母后歩を進め玉ひ、並み居る漂客共を見そなはし、自ら指示して、彼方は主上なり、此方は王弟なり、こなたは皇后にましますぞとひとり〱に告げ知らせ給ふ、尋で帝も又近寄り玉ひて玉音朗らかに、汝等當國へ漂流して年久しく嘸や不便に思ふべし本國に歸り度く思ふなるべしと問ひ給ふ、一同畏りて容易に御答へも申上兼ねたるを外務大臣傍らより詞を添へ、唯今主上より御言ありしごとく、汝等本國へ歸り度く思ふなるべし如何にや、歸るも止るも汝等の心の儘なり、無理にとは仰せられずとありければ、一行中幾次郎以下六人の者は當國へ止るよし言上し、津太夫以下四人の者は日本國へ歸朝したき願ひなりと申し上げたれば、帝王領づかせ給ひ、成程歸りたく思ふ

は尤もの事なりとて四人の者の肩へ玉手を懸けられたり。是にて謁見の式は首尾よく濟み帝王始めいづれも入御あらせられたり。

當日帝王の服裝は藍天鵝絨の羅紗（？）と見ゆ、左りの肩下に銀絲の星つきたるものなり、御歳は二十七歳アレキサンドル、バロウヰッチと御名遊ばさる由、又皇帝は二十三歳、御名はコシノキノ、バウロイチと申され、皇后、母后共に耳朶に美麗なる珠玉を垂れ、襟へ金玉を貫きたる飾りを爲し給へり（漂流人謁見の席にて四邊の金光燦爛たるに眼を眩まし、帝王の尊嚴に胸を打たれて仰ぎ見る事も能はざりし程なりければ其時の光景を語るには隨分誤りも多かりし樣なり。一例をいへば皇后、母后其他附添の女官の頭に白ろき紛をふりかけたりとあり、されど斯は白粉にはあらで白紗なりし事明らかなり、漂流人等是を知らず、遠くより見て恰も白き粉のふりかゝりたる樣に思はれしが故ならん其他是に類する事柄も隨分多き樣なり。）

其六　百年前の彼督堡

抑もこの外務大臣リウマンツフ公爵といへるは遠眼達識の人なりしと思はる、今回日本の漂流人を西比利亞のイルコーツクより招び寄せて、國帝に謁見せしめたるは實に公爵の進言に出でたるものなり、公爵思へらく、我が露國はペートル大帝の遺訓に基づき、將來大に版圖を擴張すべきものなり。而してその擴張の手はまづ東洋に向ッて伸ぶべし。此の故に西比利亞の廣土は既に我が手に歸せり、行々は支那に向ひ、朝鮮に向ひ、又日本に向かはざるべからず、日本は實に美國なり實に天與の一樂土なり、是と和親を結びて以て將來我が勢力の範圍に收むべきものなり、然れども其國は元來鎖國にして其民は又頑固狹隘なり、先年使節を使はすと雖も容易に我が請を容るゝ處ろなし、是れ其の國禁の然らしむる處ろなりとはいへ、一には外國の事情に盲くして世界の大勢を知らざるの致す處ろに外ならず、今回偶々漂流人の我版圖に流寓せしこそ幸

なれ、彼等をしてよく我が國情國俗を知らしめ、彼等を厚く賄ひて以て我が朝廷の懇篤優渥なるを知らしめば、行く〳〵將さに開けんとする彼我の國交の上に至大の益ある事疑なしと。是に於てか、漂流人は國都へ招び寄せられたり、ヮウマンツフ公爵は下賤の漂流人を遇すに殆んど國賓同樣の歡待を以てせり、朝夕八殽珍味の饗應より、帝王へ對して破格の謁見を許し、出入に馬車の送迎をなすなど善美を盡して懇遇せり。是れ實に公爵が其職務上に熱心なる外交的手段の致す處ろにして、又實に漂流人等の思ひ掛なき幸福となりしものなり。斯の如く公爵は漂流人を遇する頗る懇篤を極めたりしが、彼は又その上に是等漂流人に向つて露西亞帝國の首府たる彼督堡の規模の宏大なると、世界に於ける露西亞の地位の優勢なるとを知らしめ以て彼等が他日歸朝の際、土産話の材料を得せしめんとの深意よりして、露京滯在中帝都のあらゆる美觀を見物せしめたり。彼等はまづ皇帝謁見の式を畢ると共に、ネヷ河の中流に於て珍らして風船の上騰する處を見物せしめられたり。彼等は是を見て人間界不思議の造巧と驚きたり。而して其翌日は公爵家人の案内にて世界各國の產物、器什、風俗の標本を蒐集したる博物館を見物せり。彼等はアルコールに漬けたる禽獸、魚介の其儘なるを見て、人間不思議の發明と驚きたり、斯くて又其翌日彼等は天文臺の見物を許されたり。彼等は地球の循環する理、天體の廻轉する狀を見て其の無學幼稚なる智識に解釋する事能はずして唯不思議なる仕掛と思ひ呆れ惑ふたり。尋で又其翌日は足輕屋敷と名稱したる兵營を一見せり。彼等は此所にて諸兵操練の樣を見て其の運動の敏捷なるに驚ろきたり。其翌日は又離宮の植物園に案内せられ、硝子張の箱の中に熱帶國の花草の咲きたるを見て其の造巧に吃驚せり、尋で又其の翌日は宮廷内の劇場に招請せられ、花に戯むる胡蝶美人の舞樂を見て魂を天外に飛ばせり、其翌日は又捨兒を養ふといふ育兒院を見、官給の乳母に抱かるる無心の幼兒を見て餘所ながら涙を濺せり。次で又病人養生所といへる病院を見、醫藥療養の設備整頓せる

を見て、政府の手の廣く行き渡りしに感じ入りたり、其翌日は又寺院に案内されたり、彼等は金銀もて飾られたる光明赫耀たる佛像を見て、十字如來の靈驗のいやちこなるを感じたり、其翌日は又濱陣屋と呼なせるクロンスタットの軍港を見、大石火矢と呼びなせる巨大なる大砲を見て腰を拔かさんばかりに驚ろきたり。是等を重なるものとして其他軍艦の巨大なる、兵營の宏壯なる、公園の廣き、學校の夥だしき、市中建築の結構壯麗なる一として眼を驚かし、魂を飛ばすの料たらざるなく、彼督堡數十日の滯在中見聞せしもの應接に遑あらずして一日遊觀に出で丶歸れば茫然として身はさながら夢のごとく、更らに人間界の事とは思はざりけり。今彼等が是等壯觀を見て觀じたる一斑を記さんに

離宮を見たる記事に『此所は都下より二十八里、道筋川端に大造なる鐵の柵あり此構の内へ入れば大泉池あり箱根の湖水程もあるべきか其内に軍船の雛形を浮べり、三階造にて石火矢窓もあり、僅かに五六人を繫すべし綺麗なる造り方なり又内に長屋の如く建並べたる家あり、これ鉢植の室なり戸を開けば千種萬種の鉢植を並べあり寒凉至れば皆内へ入る屋根は硝子障子にて日影を受る樣にしたり。内に殿閣あり中の容子悉しく見ず又芝居座あり舞臺十間程もあるべし内を暗くして夥しく蠟燭を點し、宛然畫のごとし國王の見物所は正面にあり結構なる飾物なり廣庭の内に長さ一丁ばかりの棚を架しこれに纒ひはびこりし異木ありいくつも〳〵枝垂れて根となりし樣子なり、花は紫にて藤豆のごとし此外見馴れざる千草萬木あり、其庭中左右に通行の路次た丶き土にて推くし金砂のごときものを交へ塗りたり』と見ゆ。

又育兒院を見たる記事に『都府中設くる所ろの幼院大造の構なり、國中の貧窮なる者、子を生みても養ひ育つ術なく困厄する者多し國王兩全の方便を以て是を建つ、表通に窓あり、捨兒せんと欲する者夜中そこに至り窓を叩き音へば内より引出しの如き箱を出す其内へ其兒を入其子の生れ年月を記したる札を

入れて歸るなり内には之を受取て乳母にて育て生長に從ひ館内に諸藝の師匠あつて夫々の稽古をならはしめ成長して後日公用に使役するなり。

又劇場を見物せし記事に『市中の大芝居を見物せし事あり家は石造り家根丸く内も總体まろく作りたるものなり、見物所は土間棧敷といふべき三面段々下りに、棚をかけたるも

將來の西



湘鹽の日露小

のなり、千人程も入らるべき構へなり、これ亦四方を塞き暗黒にして蠟燭を點ず、家の眞中に硝子の大燈籠を下し内に數挺の蠟燭を點じ、誠に明朗たる事晝にまされり、程遠く見物する者は遠目鏡、蟲目鏡にて見物し居れり。

▲百年前の軍港　漂流人等は露京滯在數十日の間に帝都のあらゆる珍事奇物を見聞して其目を愕か

し、その魂を忘るるばかりなりしが、其年六月十五日、外務大臣より改めて申し渡されしはこの度レサノットといへる大官日本へ使節として派遣さるゝに就き豫て歸朝を希望せし漂流人四人、右使節と同船にて送り届くべし、依て匆々出發の準備あるべしとの事なりき、一同是を聞いて、さては彌々歸國の望み叶ひたるかと多年の宿望を遂げ得たる思ひにて皆

比利亞（五）



學校の運動場

く涙を流して喜び合ひ早速使節レサノット氏の私宅へ趣きければ船中の用意も早く既に整ひ航海用の諸品衣服等それ〴〵配ち與へられたり、斯くて四人はその翌十二日露京を出發する事となりしが當時の光景を描くに就て端なく百年以前露國軍港の實况歴々として吾人の眼邊に映じ來るこそ珍らしくも又面白けれ。

　六月十二日津太夫儀平等此の所を出

立す、居殘り六人の者共へ暇乞をなし、尤旅館中是まで厚く世話受けし人々へも夫〻一禮して別を告げ、晝過る頃、即ちガラフ(外務大臣)の屋敷前なるネヾ河より直ちに小舟に乘り、荷物積み入れ、ガラフの役人三人幷に新藏(通詞)も同船し北より南へ向て川筋を下れり、川幅は次第に廣くなり二十五里行きてカナスダといふ所へ着けり(カナスダは今のクロンスタットにして露國第一の軍港有力なるバルチック艦隊の根據地として知られたり)此所はペトルブルカの都へ出入の港口にして要害堅固の地なりとぞ、此邊に至りては海の如く見ゆ、同十五日まで此所に船がゝりす、此港地方より一二里の間切石にて海へ突き出し、(波止場なり)又其先へ長さ三里、横一里半石垣にて築廻し圍ふ、其圍みの内潮入にて前と左右とに船の入口五六個所あり、其内へ船數艘を繋ぐ最もこの内軍船もあり、此圍みをなす石垣の上面には石火矢(大砲の事)數挺すへ置く其側に玉(砲丸)も夥しく重ねある番所(鎭守府)も設けたり。

此所は他國より都の方へ船の出入口故要害の爲めに備へたるものと見ゆ。

又此所より向ふに當り切石にて疊みあげたる小島を造る一里四方もあるべし、眞中に陣屋樣の物を建て三面に石火矢を並べ据へ要愼至つて堅固なり(是れ海中へ築きたる砲臺にして敵艦の來襲に備へたるものなり)其左右を大船通行す、船番所ともいふべき趣なり、此港人家二千餘軒(百年後の今日は人家二萬弱にして人口七萬餘人に上れり)もある樣に見ゆ、冲の方を望むに諸國の商船三本檣のもの數萬艘見ゆ、大小の船の帆柱の立ち並べるは恰も雜木林のごとし、其内には本國の番船もありといふ、是れ外國より襲ひ來る軍船もあるかと窺ふ爲なりと千五百人乘の自國の軍船もこゝに繋るといふ、此船は帆柱五本たちて遠見は山の如く、かゝる軍船の大いなるもの此國にて始めて造れるなりと、此船にて曙と昏と兩度空鉄砲を放つ、これ軍船の大法なりとぞ本船中には菜園もあり牛馬の厩もあとぞ。

右は漂流人等が見たる百年以前のバルチック艦隊の根據地なるが、簡單にして其要を盡せり、千五百人乘の軍船は今の一等戰鬪艦の舊式なるものにて彼等の眼に山の如くに見へたるは其筈なり、又期夕の二時に禮砲を放ちて行を壯にしたるは使節出發に就て皇帝陛下が殊に御見送りありしが爲なるべし。歐洲に於て露西亞は左程强國にあらずといへども物質的の進歩は存外夙く開け、百年以前日本國民が夢にも知らざる大戰鬪艦を要塞に浮べて以て國防禦衛の設備を完ふしたるがごとし、軍艦、要塞の設備既に此の如し、これに伴ふ總ての設計も既に成就して百年以前早く文明强大國の規模を形造れり。我が日本今日に於て此の强大國と戰を交へ、今將さに旅順の艦隊を全滅せんとしつゝあり。是れを昔へに考へ漂流人觀光の當時に思ひ較べて其感如何、眞に不思儀の現象にして又實に奇態の因緣といふべし。

斯くて漂客等は使節レサノツトに伴はれ、クロンスタツトを出帆し、バルチック海より北海に出で、英佛海峽を横ぎり、太西洋に乘り出し、亞弗利加の西海岸より南米ブラジル冲を通過して南緯六十度の岬角を廻り太平洋に出でそれより再び赤道を通過してカムチヤツカ半島へ寄港し遂に日本長崎港へ着せしは翌年の八月下旬にして海上實に一年と二ヶ月を費やし、航程二萬數千哩、芽出度歸朝せしは實に前代未聞の奇事といふべし。

因にいふ此の津太夫等の前後日本商船の露國へ漂流せしもの都合四回あり、その第一は奥州南部竹内德兵衛の一行にして十六人、是れは寶曆三年、津太夫一行の時を距る四十年のむかしなり、彼等はカムチヤツカより陸路イルコーツクへ到りしが元より未開の荒土交通不便の事とて歸國の望なく遂に其地に永住したり。

第二は伊勢の幸太夫一行にして同勢十七人是れは天明二年、津太夫の時を距る十二年前なり。彼等はカムチヤツカよりオコーツク、ヤコーツク、イルコーツク等西比利亞新開の都府を經て遙々露京に達し、

時の帝皇カザリン二世に面謁して懇篤なる待遇を受け、アダムラックスマンに伴はれ陸路再び西比利亞を通過しカムチヤツカより北海道根室へ送り届けられたり。漂流日數十二年。

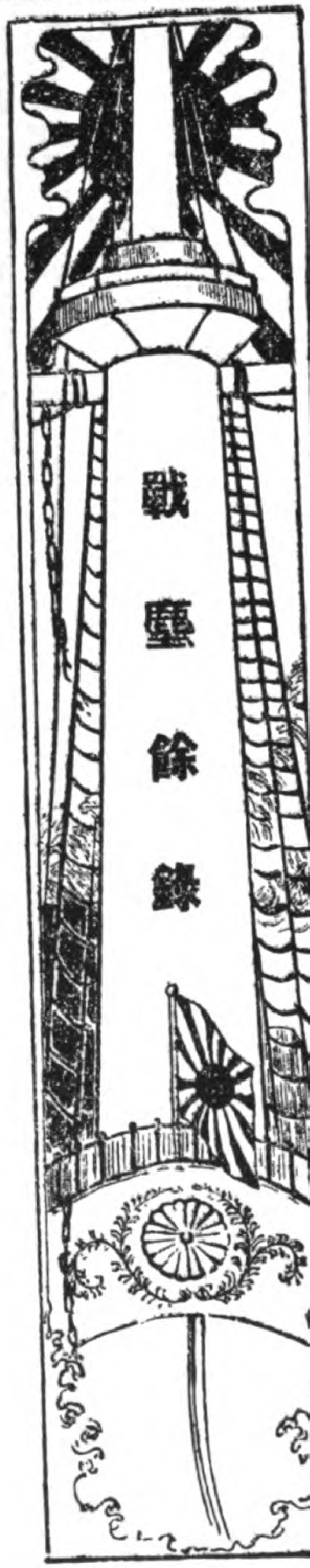
第三は即ち仙臺の津太夫一行にして同行十五人寛政五年、彼等は白令海峽中の一島に漂着して幸太夫一行と粗々同樣の順路にて西比利亞を通過し露京へ到着歸路太西洋、太平洋を同航して長崎へ到着この漂流日數十二ヶ年。

第四は薩摩の喜三右衛門一行にして文化九年津太夫の一行の時より二十年の後なり、彼等はカムチヤツカより、オコーツクの間を往復して千島エトロフへ歸れりこの日數約四ヶ年。

右の内尤も久しく彼の地へ滯在して風俗人情の委細を悉したるは津太夫の一行なり。（畢）

露國の陣亡畫伯

ベレスチヤギンは露國今代の畫伯にして戰爭畫專門の大家なり、日露戰爭の開くるや彼れはマカロフ提督と共に筆を載せて旗艦ペトロパウロスクに在りしが、過般其の轟沈と共に旅順口頭波間の煙と消へ失へしより誠實なる世界の哀悼は彼れに向ッて濺がれたり、彼れは一八四二年ノヴゴロット州の一邑に生れ、アフガン征服の時はカウフマン將軍の營にあり又バルカン戰爭の時にも畫筆を携へて從軍したり、後亞細亞を歴遊して多くの風物を寫し、露土戰爭の時に至つて前皇帝の賓客として、露西亞軍の陣營に從ひ、非常の熱誠を以て美術の製作を勗め、屢々身を陣頭に現ほして、實戰の狀態を寫生したり、彼は明敏の思想家なると共に、また明敏の觀察者也、而して其思惟觀得したる所をカンバスの上に形顯するや、能く其目的を顯彰し得て、强烈の感動を人心に傳へたりき、彼の作畫の嘗つて彼得堡の美術館に現はれたる時、亞歷山三世呼んで曰く此畫家は革命黨也と、畫題の眞實を發揮して、能く感動を傳へ得たる事、知るべし彼に對する美術評家の見解は頗る多樣にして一定せず、彼の聲譽と成効とは全く戰爭の實景を忠實に描破したるに在り、就中露土戰爭及ナポレオン入寇の當時を描ける歷史畫は最も傑出せりと稱せらる、彼の作畫は實に凄愴慘痛の極度を示せる者にして、一見人をして戰慄措かざらしむ。彼れ今や亡し彼の死は世界の爲めに惜むべし。



▲鴨綠江畔の壯觀

近衛步兵某聯隊福島特務曹長が鴨綠江より發せし家信に曰く我軍は大攻擊の準備に着手し四月卅日先づ山後に步兵を集合せしめ、砲兵は砲百餘門にて午前十時砲擊を開始す、此日山上に在り望遠鏡にて高見の見物、我百餘門と敵の四砲壘より打出せる數十門の砲聲とは、轟々として天地に震撼し、其壯觀たる譬るに物なかりし、午後五時頃砲聲全く止む是に於て此日の夜食と翌日の食事を分配せられ、出發の準備成るや、六時より中隊附の中隊長代理河田中尉、佐藤中尉の諸氏外六名と山腹に座を占め告別の酒宴を催す、日本酒三合ウ井スキー四合、肴としてはスルメ二枚堅麵麭十枚、牛鑵詰二個にて酒僅少肴不味なるも、其味は東都の紅葉館や帝國ホテルの料理の比に非ず困苦欠乏の今日此珍味容易に味べからずと互に杯を酌み交せり。同日午後七時我が聯隊は出發の命に接し同八時出發の途に就きたるが、夜陰暗憺として只星光の燦然たるを眺めつゝ、隊伍整然步武堂々として氣旣に敵を呑む、二個の軍橋を涉り虎山を登りて靉河の支流に沿ひ五月一日漸く豫定の地點に到着し配置を終りて天明を待ち居たり。頓て午前五時三十分頃天漸く明く、望遠鏡にて敵方を望見すれば我軍の前進する前方には靉河の本流あり、敵に有利、我に不利の地形なりしも進軍の命下りたれ

ば衆皆勇躍して前進す、敵を去る六百米突の所にて敵の一部は退却を始む、我は急射撃後前進して鴨河の本流を渡渉す、敵壘までは二百米突、先鋒のもの逸早くも國旗を樹つ、余も亦國旗を翻しつゝ、敵彈を冒して前進す、流急にして衆稍や疲勞の體なりしも更に勇氣を鼓舞して渡河す、余は先頭二三番なりしも後方のもの急流の爲め押流されて深水に落ち溺死せんとするもの二名あり余先づ進んで先登の功名を揚げんか將た止まりて二者を救はんかと躊躇したりしが遂に意を決し上等兵二名に命じて之を救はしめ後事を託して敵壘に突貫し、余の國旗を樹てたるは先頭五六番なりき。

同午後二時前進して九連城より迂回したるに我死傷者の運搬、醫官の治療にて多忙を極め居たり輕傷者は血塗なる繃帶にて徒歩し外套に覆はれて苦吟せるは重傷者ならん滿目悲慘の狀ならざるはなし、死傷せる勇士諸氏の赤誠は鮮血に染出されて皇國の武威を擧げる基礎たらん苦痛を忍んで安意せよ諸士の仇敵は吾々生存者之を報せんと獨語し去り、敵の死傷者散亂たる光景を目擊しつゝ、同五時頃露營地に到着せり、此地は我追撃隊の激戰したりし所にて敵の敗兵此不意打ちに最後の戰をなせしものゝ如く、道路と云はず山野と云はず死屍累々たり爲めに露營附近は重傷者の呻き聲にて酸鼻の極なりき。

▲南山丘下の第一師團

南山激戰の際我が第一師團の某將校がその在京の友人に寄せたる私信に曰く、五月十六日金州城東北高地の戰鬪は隨分激烈に有之、小生は殿下（伏見宮）の御傍にて軍の參謀某少佐と午食中敵の砲彈頭上咫尺の處に六發破裂、中々危險に御座候、殿下には數日來從者の携へ居りし一壜の麥酒を一杯傾けられ、殘りを小生等二人に與へられ、此好下物あり一杯を傾けよと仰られ候、然るに參謀長馬を飛ばせ來り、殿下の御座所を今少し安全の地點に移せと申され候間、小生は所々偵察致候へ共、危險なき處にては全軍隊の御指揮に差

支あり、御指揮に適切の地は敵彈を避くる能はず、曠漠たる戰場に殿下を安じ奉る地なきに窮し候、殿下にはどこでも宜しと仰せられ候へ共、萬一の事ありては全軍の志氣に大關係有之候間、奔走して纔に敵の射線を避くるの地點を求め、御移座を乞ふ次第に有之、之にて敵彈雨下の狀況御推察を乞ふ尙日々風強く塵挨甚しく、衣髮共に眞白く御顏を拜し奉りては、勿體なさに落涙仕候、晝は如斯に夜に入ては見るもいぶせき支那家屋に入らせられ候より、例令床虫は尊體を憚らず御首と御手を胃し奉り候も、平然として御笑ひに相成、益々御勇



工兵の作業

健に渉らせられ候、戰鬪の夜の如きは大行李着せず、否着せざるにあらず時期は大行李を招致するときに非ざる故行李なき御宿營如何に御不自由にあらせらるゝかは、戰地に臨まざる人の到底想像の及處に無之、所謂着のみ着のまゝきびからの上に御外套一枚の御假寢に御座候、殿下かゝる艱苦を厭はせられざる故士卒は益々勇躍致候、步兵第二聯隊の小木谷大尉が腹部を打貫かれながら、最後の敵の陣地を奪ふまで其隊を指揮せし如き同聯隊の伍長鈴木五十二が胸部を打貫かるゝや万歳を三唱して斃れし如き、其他かゝる勇者少からず候。

▲戰線の軍歌

歩兵第廿四聯隊第十一中隊伍長梶原安次氏の談に云ふ我軍五月一日の拂曉靉河を徒涉し、直に前面の敵を擊ち散らし、石城附近にて晝食を濟ませたる上、午後零時半頃より、第廿四聯隊の第三大隊を前衛の尖兵とし第十、第十一、第十二の順序にて大樓房附近より道路の右手の山を前進せり、此處は大な山の裾にて、小さなウネリが連互し、一山越せば前には敵あり、之を擊退して進めば又其向に山があつて敵が居るので、又之を擊退し、幾つも山を越え、幾度も敵を擊退して終に蛤蟆塘の上に出たり、此所に出ると向ふの低地に四門の砲が据はつて居て、我兵を見るや頻りに發砲したり我れは千二百米突の距離に接近し居るを以て、此處で大に敵の砲兵を苦め遣らんと、頗ぶる猛烈に射擊したるに敵は間も無く砲を棄て丶後ろの山に逃げ上りし故ソノ後を見掛けてドン／＼擊ち出せる爲め、敵は殆んど生存者なきまでに全滅せり『愉快々々四門の砲は全滅したぞ』と云ふ間もなく、此砲兵の後ろの高地にゐりし歩兵と機關砲七門とは我が散兵線に向つて一齊に攻擊を開始せり、其時の彈丸は宛から篠突くばかりにて、殆んど彈丸を蒙らざる所はなかりし、其內我が中隊の二個小隊は大隊長の命令にて元山、片岡の二少尉之を率ゐ、一谷左翼にある第五中隊の右の方に增加の爲めに突出したり、殘りの一個小隊は末松中尉が指揮し居られしが、其中第八中隊が我が右翼に增加して來て共に苦戰を續けたり、敵は七門の機關砲を以て頻りに射擊するため我々の前後左右に彈丸の飛び來ると夥しく、殆ど目も口も開けられざりしが、今此陣地を退却しては敵の爲めに退路を開くに等しければ『死守せよ／＼』との號令で鞏固に構へて居りしが、悲しいかな携帶の彈丸は一發も殘らず擊ち盡したれば、死者傷者の彈丸を取り集めたれど、是れまた僅かの間に擊ち盡し、補充を受けんにも餘り彈丸の來やうが劇しきに一寸も身動ならず、後ろの方を見ると第四中隊が後方の高地より是れも頻りと射擊し居り、我が中隊の線ま

で出んとしても、餘り彈丸の劇しきに進れず、其内曹長も遣られる特務曹長も遣られる、殆んど進退維れ谷まりて唯だ呆然たる折しも、忽ち左の方から勇ましい軍歌の聲起れり、すると之れに倣つて全隊のものが皆一齊に軍歌を唱へ始めたり、實に盛んなものなりき、彈丸雨飛の間に銃を前に置き芝原に寢轉びながら大聲に軍歌を唱へ居れり、其内敵は我軍の攻擊に堪えずして終に沈默するに至れり、されば戰ひ果てたる後ち、第十一中隊の戰線軍歌と云つて、軍隊中の一つ話になりたりと。


捕虜の後送

▲修羅場裏の同情

鴨綠江激戰の翌日安東縣より發せる米國新聞記者の觀察こそおもしろけれ曰く日本國旗は今や鴨綠江より北方六十哩に翻り、黑木將軍の騎兵は露軍の金城たる遼陽に向つて潮を切つて進軍し、幾多の師團は海上より到着し一時間は一時間より露軍敗績の間然する所ろ無りしを證す、捕虜露兵の長列は斷ず戰場より安東縣に向つゝあり、彼等は體軀偉大にして青色のコートを着し、之を矮小なる日本兵に比ては著しき照應をなすなり、容貌より之を察するに彼等は孰

も多大の困苦を嘗たる者の如く、九連城の病院は負傷露兵を以て充滿す、日本商人は既に店舖を開かんとす、滿洲到る所、支那人の歡迎する所となり、朝鮮は今や全く戰線外に在り、九連城の戰場は人をして病を起さしむる底の光景を呈し、日本兵の顏を天に向けて戰死せるあり、血に塗れたるシャツは水を注ぎて初めて其隊名、人名を知るを得可し、彼等はストイック的勇氣を以て困苦を忍びたるものなり、然かも露兵は然らず、死するに先ち百回に餘りて呻吟したるポーランド人あり、軍醫に負傷したる足を捉へられて齒を喰ひしばりて呻きたる將校あり、苦痛の餘り手を擧げて天に祈りし髯むくつけきコサックあり、日本軍は捕虜に對し最も親切を極め、軍醫亦日本人を後にして先づ露人を介抱せり。

▲嗚呼初瀨艦

吾人は吉野の悲報に接すると共に戰鬪艦初瀨の悲報に接するの不幸に遭遇せり、軍艦の沈沒は元より戰時の常とは言ながら二艦の運命返す〴〵も惜き事なりかし初瀨は五月十五日午前十時五十分旅順港外十浬の沖を運動中、突然其左舷に於て第一の機械水雷に罹り、艦體左に傾斜したれば、有森副艦長は直ちに部下を指揮して孔穴を塡塞し、侵水を止得たるを以て最早大丈夫と思意し、艦橋にありて梨羽司令官中尾艦長等に此事を報告し、直ちに某艦をして之を曳行しめたるに、折惡しく波濤高き爲め意の如くならず、且つ曳綱切斷せらるゝに至れり、此時艦長及び副長等は更に念の爲め水雷に罹りし損所を檢分しつゝありし際、午後零時三十分又もや左舷に於て第二の機械水雷に係り、副長は其瞬間に戰死したり、同艦が第二の水雷に觸れたる箇所は火藥庫の下部なりしを以て、其爆發の音響は千雷萬雷の一時に落下するが如く、濛々たる黑煙天に捲き上り、火焔盛んに起り、帆檣は折れ、煙筒は倒れ、且つ慘憺たる光景名狀す可からず、僅かに一分一秒時間を以て沈沒せり、同艦が第一の水雷に罹りてより第二

の水雷に罹り沈沒したる迄一時四十分許にして、沈沒の際は何分咄嗟の出來事故、人員救助の方法を講ずる遑なかりしが、當時同艦の附近にありし敷島其他の艦は初瀬の遭難を見るより急馳して乘組員の救助收容に盡力し、漸く三百餘名を救助したる次第なり、又同艦に座乘せし梨羽司令官は幸にも龍田に救はれて之に乘移りたり、同艦沈沒の際は中尾艦長有森副長以下各員必死の働を爲したるが中にも田中少尉の働は大に傳ふべきものあり同少尉は事の危急なるを見るや眞先に艦内に安置し奉れる御眞影を外して艦長室の次室に移し、又火藥庫の上部にありし分隊箱（總艦員の履歷等を記したる書類を收むる大切なる箱）を上甲板に運びたる等、萬事に付け勇敢敏捷に働きたるは司令官艦長等の稱嘆して措かざる所なりし、而して同少尉が働き居りし場所は水雷の命中せし火藥庫の上部なりしを以て、其爆發と同時に壯烈なる戰死を遂げたり、又副嶋二等兵曹は第一の水雷に罹りし際上官よりボート下しの命令を受けたれば、必死となりて部下に其命令を傳へ、二艇は早くも下されたるも後は一艇だも下し得る模樣なかりしかば、同兵曹は自から下甲板に至り此處にても同じく盡力しつゝありしに、第二の水雷に罹り而かも火藥庫の側にありしを以て轟然たる破裂の響と共に同兵曹の形骸を失へり。

同艦沈沒の際敵の驅逐艦十六隻は、舳艫相啣みて港口に現れ、我艦を目蒐けて疾驅し來れり、蓋し初瀬の人員救助に盡力しつゝありし我艦の救助運動を妨げ、若しくは此期に乘じて我救助艦を襲擊せん爲めなりし事明なり、是に於て龍田は艦首を敵の驅逐艦に向け猛烈なる勢を以て進擊したれば敵艦は此勢に恐れて能く我に近く能はず最初の威勢何處へやら、忽ち艦首を一轉し港内さして遁走するを、卑怯なる敵の擧動かなと龍田は快速力を以て之を追擊せんとしたるも、梨羽司令官は此場合敵の港内深く進入する時は敵の十字砲火線に入るのみならず、再び機械水雷に罹るの虞なきに非ざればとて追擊中止を命じ、無事本隊の在る所に引き上げたるが、其際龍田が必死の働き振りは最も

目覺しかりき。初瀨の沈沒は返す〲も無念なり。

▲滿州露軍の混雜（佛國從軍者の觀察）

西比利亞と後貝加爾地方の朔風凛冽たる冬の時候は、興安嶺通過後一變して少しく春の心地もせられしが、又再び雪となりて風さへ加はり、風雪山野に咆哮して凄まじき天候となりぬ、余等の哈爾賓に到着せるは風雪の甚だしき日なりしが、列車の停車場に着するや否や、車中の人々は列車を飛出して我も〱と物置小屋然たる兵營に走れり。其處には露人



騎兵の渡渉

も居れば、支那人も居りて、身動きも出來ぬ程の騷ぎなり、守備兵とコザック兵と混交し、憲兵と驛夫と一所になり、海軍士官も文官も一切混雜を極めて人々の見分けも附かぬ程なれば何事を話し何事を叫くにや更らに分らず喃々たる叫聲さては板戸を開閉する響の音など耳騷がしなんど言ふばかり無し車中より溢れ出でたる人々は皆飢渇に苦み居る事とて急ぎて食事場に走り、右往左往に馳け廻り、路に在る物など一切頓着なく泥靴にて踏躪りて徘徊せり。今や哈爾賓は滿洲の最活氣ある中心となれり、當地には諸方より軍隊の縦列、輜重車等陸續輻輳し來り、此地

にて更に縱列を編成して前方に進むなり、此地の石造の兵營は未だ落成せざる儘に兵舍に用ひられ、多くの兵卒を宿舍せしめたり、勿論數千の西比利亞狙擊隊の兵のみにても此兵營に入る丶能はざれば、凡て苟も兵卒を宿泊せしめ得る家は、何れも兵士を以て充滿せり、兵舍に充用せられしは唯り哈爾賓の町家のみならず、附近村落の家屋も一切兵舍の用に供せられたり、此近傍觀る限り積雪に埋れ居り哈爾賓の市街は斷えず各種軍隊の縱列砲車輜重車等通過し、道路の破壞されたる處ろ泥濘の狼藉たる樣言語に絕す士官などの乘馬は一般は毛を長くせり、コザック兵と守備兵は傳令の用などにや、諸方に奔走せり、停車場は電話の呼鈴、電信の打聲、機關車の汽笛、人馬の音、雜然鬧然として耳を聾せんばかりなり。



決死隊の別盃

▲マカロフ中將の家庭

敵ながらも惜しきは旅順の提督マカロフ中將なり中將の夫人ガビトリーナ、ニコラエウナは先頃格倫斯達士の軍港にありし邸より彼督堡のオリギンスカヤ街に移轉せり、其居宅は薄暗して僅に窓掛を透して光線を受るに過ざる一室に夫人幷にその子あり、其下の各室は窓を開き折々傭人等の私語せる聲を

聞たるが、孰も意外の變事に驚かざるものなし、故中將は傭人等を愛憐し、其の旅順口に赴任したる際には一同に夫々の惠與を爲せりとか。又中將の子は女子一人男子一人にて、男子は當年十一歳なり、家族が中將の變死に就て聖彼得堡より電話にて報知を受けしは四月十三日午前八時にて、當時夫人は病氣にて臥床せしが尚ほ其事を確める爲め十二時に聖彼得堡に赴き、六時に歸宅せり、而して夫人に隨行したるは故中將の弟にして近衞聯隊の士官なりし、扨て中將は四月十二日各通報艦より敵艦隊の遠方に現出せることを聞き、其の將旗を艦戰ペトロパウロウスク號に掲揚し港外に出でたり、蓋し中將の目的は自身に敵の勢力を視察せんとするに在りしならん、同艦にはキリール、ウラヂーミロウヰチ大公も坐乘せられ、其の乘員九百人に達せりと而して敵艦隊の優勢なるを認め退却するに及び敵の伏せたる水雷に觸れ、中將の旗艦は瞬間に沈没し殆んど全部乘員を海底の藻屑たらしめたりしなり。

▲戰地の酒保

戰地に於ける狀況に就ては世間新聞紙上に散見する處ろなるが今朝日新聞に從軍商人の實話と題して這般の消息を掲げたり其文中に曰く今回の戰爭は二十七八年役以來の實驗に依り經理の整備し居るは驚く許りにて從軍商人は儲けどころか損せぬ連中は上の部類なり其上困難なるは宿は無し食物は無しツマラヌ民家に一泊を請ふも約二圓を要するに付行商人等は孰れも米、鍋、湯沸、罐詰、醬油、毛布等を携帶し日暮るれば黍殼藁などを引出し其上に毛布を敷きて漸く眠を取り自ら飯を炊ぎ火を焚き僅に暖を取るなどの困難は實地に臨まぬ人は想像し得ざる位なり。

駐軍中物價の高價なるは無暗に考へも無く格外の運賃を支拂持込たる爲にして之に引かへ軍隊出發後は些の買手のあらざるに各地共衙物大堆積にて右の如き大差を見るに至れるも去りとて他地方へ運搬するには再び多額の運賃を要し如何とも爲し難く捨物同樣の姿なり

鎭南浦駐軍中幸に解氷を初め鹽鰤の入船あり最初は一貫目三圓二十錢の買上げありしに續々入船あり忽ちにして一圓となれり其兵站部の機敏なる掛引は商人も及ばざる程にて其正確に油斷無きは戰地とは思はれぬ程なり。

平壤の如きは各地方より商品を持來れる者多く藏敷料に差支る者あり俄に數十箇所に露店を出し孰れも洋服にて菓子、せんべい煙草、靴下、仕入洋服、手袋等を並べて投げ賣を始めるあり美髯洋服の汁粉屋、餅賣など中々奇觀を極めしことあり如何に商人の困難せしかを見るべし、又義州に於ては白砂糖（百二十斤入）一俵四十五圓に賣れたるも運搬の至難なりし爲め格外の利益無かりし而かして韓國は勿論安東縣の如きも露軍去り日本軍來るといへば到る處歡迎し新に穴藏などを造りて隱蔽置たる商品を取出し俄に看板を張出すなど大に我軍隊の便利となると共に我々商人には却て競爭者たるの觀ありしなり。

軍隊と商人とは總て等差ありて朝鮮人夫の雇賃は一日一人軍隊は六十五錢商人は八十五錢駄賃持は（八貫目）一里二十錢韓人の通辯は食料雇主持にて一箇月三十圓以上五十圓以下なりしに安東縣以北則ち支那に入ては通辯人頗る乏しく且高給にて迚も商人に於て雇入を爲し難く爰に至つては商人一統大困難を感じさりとて通辯人無しでは一歩も踏み込む事能はずして十中の八九は孰れも從軍を斷念して引返し僅に一部の商人のみ進行したり。

支那人夫は一日軍隊五十錢、商人六十五錢の規定となり安東縣兵站部前には毎朝支那馬車（驢馬三頭以上七頭牽迄のみにても、）七百臺位集り猫車といふ）一人は押し一人は引くもの數百臺及び數へ切れざる程人夫集り來れり同所は立派なる市街にて一丁四方もあらんかと思はるゝ大家數軒もあれども食物は矢張きび唐もろこし等にて到る所宿舍無く米無きには實に困難せり云々。

遺芳餘烈

勝間舟人

▲立派な最后

濃霧渤海灣頭を閉鎖して端なくも衝突の奇禍を招ける我が吉野艦は、艦長大佐佐伯閑氏、副長少佐廣渡頤一氏を始め幾多忠勇なる將卒を載せて波津海の底深く沈み行きぬ、其の最后の悲壯なる光景を想像すれば人をして涙を呑ましむるものあり、あゝ何等の慘事ぞや、此の訃報一たび未亡人すみ子の許に達するや、芝區西久保葺手町なる大佐の家庭には新戚故舊の弔問客踵を接して至り、殊に大佐と共に戰死したる部下將卒の未亡人達は朝な夕なに此の邸に會合して、迭みに在りし昔を語り、無き今を慰め合ふにやあらん、悄然として入り又た愁然として出で行く中には、未だうら若き身を以て切髮姿のいぢらしきもあるに、之を見る四隣の人々はそゞろに物の哀に打たれて同情の涙に咽びたりとぞ、一日大佐夫人には訪問の未亡人を一間に集めて徐ろに語り出づるやう「お互に軍人の妻で御在ますもの、敵艦と戰つて花々しく名譽の戰死を遂げたのなら何で悲しみませう、それなら本に嬉しう御在ます……が、今度の樣なのは丸で犬死で……平生から立派に死にたいと言て居つた良人の心を察しますと殘念で堪りません、私には子供が無いものですから、御承知でも御在ませうが、一昨年獨乙で客死りました海軍大佐津田三郎の甥の孝二（十二）と申すのを養子に貰ひました所、あの子がまた實の子にも及ばない孝行者でして、海軍省から戰死の通知が參つた時など、最初は私と同樣、唯だモウ泣入て居りましたのですが、頓て感心にも氣を取直して、母さんもうお泣きなさるな、お父さん御國の爲め敵港封鎖の大任を果した上、倚ほ重ねて天變と戰つて討死なされたのですから、矢張り勇士です、立派な最期です、と言つて私を勵まして呉れた時は本に賴しう存じました、彼れも實父に死なれ今又た養父に別れて孤兒と成つたのですから誠に不運な者で

して、私はこれから石にかぶり付ても彼を立派な人間に仕立てゝ佐伯家を繁昌させる覺悟で御在ます、」と言ひ終つて決然たる色は見えながら有繋に差俯向き玉ふなりける。

▲往時夢のごとし

同じ席に三十才前后の切髮姿の一婦人あり、是なん佐伯大佐と共に戰沒したる廣波少佐の夫人こま子刀自なりけり、大佐夫人の語り終るを待つて扨て言ふやう、「今度の變事は郷里佐賀に居ります良人の兩親達に取敢へず電報で知らせましたから、嘸ぞ今頃は驚いて居るで御在ませう、戰死は元より覺悟で御在ますか、同じ戰死するなら廣瀨中佐の樣に立派な男らしい死に方をして貰ひたいと祈つて居つたのですのに……何うもねえ、子供は二人御在まして長男は顯雄と申して七歲長女はのぶ子(三ツ)と言ひますが、二人共一向頑是なしでして兄の方など唯だ御見舞の方が澤山お出になるものですから譯も分らずに喜んで居ります、それでも父の事が餘程氣に成たものと見えまして此の一月で御在ました、菓子を買つて遣りました所、その中から金色の惠比須と大黑が出ましたので大層喜んでこれは緣起が吉いから佐世保のお父樣に送るのだと申して郵便で出させたので御在ます、すると良人も亦た大喜びで伜に禮をいつて寄越しました、それから又先達は伜と娘に飄輕な寫眞を撮らせヤット出來上りましたから、早く送つて大笑をさせやうと思つて居ました甲斐もなく、こんな譯に成たものですから、今では靈前に供へてあります」と、語るも淚、聞くも淚、一座寂として城山丘上の青嵐に鬼氣の迫るを想はしめぬ。

▲眞情流露

軍艦初瀨が旅順港外に於て沈沒するや艦と共に殉死を遂げたる海軍船匠長田中治三郎氏の留守宅は府下南品川町二百五十二番地に在り、未亡人をとめ子(卅八)といひ、長男治太郎(十五)を頭に五人の子女あり、戰死の當時未亡人とめ子が弔問の客に對し語りし所は

能く軍人の妻女としての眞情を盡して人をして暗涙に咽ばしむるものあり、因て悲痛の話を左に

「先達戰地に味附海苔と乾海苔と鰹節とでんぶとそれから晒木綿を送りました所が、大層喜んだ手紙が參りましたから、今一度何か送らうと存じて子供達に何にしたものだらうと相談しますと皆が「お父さんは蕗の佃煮がお好だから其がよからう」と言ひますので、私も其の氣になり、八百屋を呼んで柔か相な蕗を十把程買ッて夕方から皆を相手に蕗の皮剝を始めたのです、何しろ澤山の蕗ですから夜の十時頃までも掛つて漸々剝終つたのでして、私は明日其を煮上る積で子供達を寢せましてから床に這入ッたのですが、何うしたものですか其晩に限り少しも寢られないぢやありませんか思ひは子供の事から知らず識らず戰地の上になりまして良人が頻りに艦の上で働いて居る樣子などがッと目の先に見えるやうで、元より戰死したなぞといふ事は知らう筈もありませんから、……すると午前二時頃でも御在ましたらう、不意に表の門を破れる樣に敲く音が聞えるのです、時が時ですから若しか強盜か何ぞではあるまいかと頻りに考て居りますと、治太郞と治雄の二人が目敏く飛起まして「母さんあの音は何者でせう、二人で行て見て來ませう」と申して止めるのも聽かずに表へ出て行きましたが、頓て受取て參たのは一通の電報なのです……私は其を伜共の手から渡されました時はモウ何だかハッと胸を打ッて手が慄へ出したのでした、……急いで開いて見ると案の通り貴君、海軍省からの戰死の通知なのでせう、……御察し下さいまし、幾ら平生から覺悟をして居たからとて女の弱い心で何うマア我慢が出來ませう、お耻しながら私は子供の手前も忘れて電報を握たまゝ其處に打臥したきり暫くは口が利けなかつたので御在ます、伜共は左右から「母さん何うしたんだよ、何の電報だよ」とセガミ付ますので、何時までも言はずに置くことは出來ませんから、漸く心を取直して――ソレデハお前達に何もかもお話するから端とお座りなさい、決して驚いたり泣いたりしては不可ません――と言付てそれから電

報を見せて戰死の次第を話しますと長男の方は「是はいけない、お父さん水雷などに罹つて死んだのかい、彈丸なら善かつたのにねえ、お父さんさぞ口惜しかつたらうねえ……」ッて流石に目を沾ませて電報を諦視ながら申したのです、次男の方は又た何うしたものですか電報を見て了ふと目をつぶり口を結んだ儘暫く無言で居りましたがツイと立つたかと思ふと、奥の佛壇の前に畏り、燈明を上げ線香を立てゝ夜の明けるまで二三時間といふもの一心不亂に拜んで居るでは御在ませんか、此のいぢらしい有樣を見る私の苦しさ、是から先此の可哀相な子供を控へて何うしやうと、唯だ最う途方に暮れるより外は無いので御在ます……がお蔭樣で私は深い日蓮宗の信者で平生有難いお經文も戴きお說敎も聽聞して居りますものですから、ジット斯う考へて居る内にお祖師樣が良人を光明世界へお導き下さる光景があり〱と見えるのです、人間は何の道一度は死ぬもの殊に御國の爲めに覺悟の戰死をしたのですから未來は乾度極樂世界へ行かれるに極つて居ります、それに私は此の末良人に成り代つて伜や娘を立派な者にしなければならぬ重い責任を持て居るのです、その私から先へ弱い量見を出しましたら賴りない子供達は尚更賴なく心細くなるだらうぢやありませんか……ですもの何うして幾ら悲しくつも泣いてなど居られる場合でないと存じて私は強いて氣を取直して居るので御在ます」と、實に此の未亡人の如きは軍國婦人の眞情を遺憾なく吐露したるもの、而も一點の虛飾なく、決然たる大信念を持して泣くに彌增す沈痛の情思を抑ゆる雄々しさ、誠に悲壯の極なる哉。

▲青春の怨

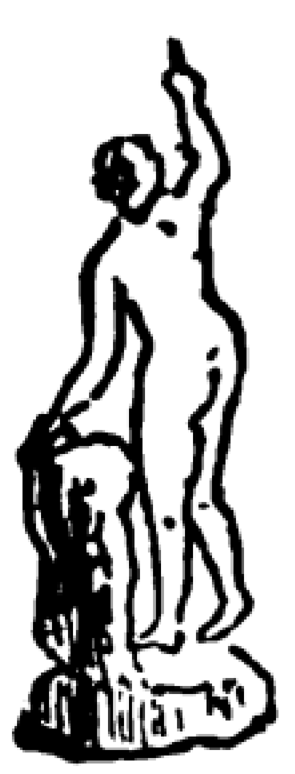
吉野艦と共に綿津海の鬼となりたる分隊長心得中機關士利府齊氏の未亡人織津子は、下谷區西町辨護士植嶋幹氏の令孃にして、芳紀やうやく二十三の花盛り、一昨年の冬此の不運なる中機關士の許に輿入してよりは夫婦の間濃かに人の羨やむ仲らひなりしも、良人多く海上勤務の任に在すため、逢ふ瀨はたまさか、月に

二日か三日の家居の折々、良人の機嫌を迎ふるばかり夫と呼び妻と呼ばれて相對す坐席も未だ温かならざるに、東亞の風雲急を告げて良人出征ましましけるがこれやこの生別やがて死別となりて、長へに逢ふ期なく、比翼と契りし片羽は折れて空しき怨を殘し畢んぬ、去る程に綠津子は悲嘆の涙に掻きくれて、一生を托せし人に先だゝれたる今、己一人存へたりとて何かせんと、その花の如き姿を刄に伏して良人の靈を追はんと一度は決心したるも、生家の兩親が懇ろの說諭否み難く、一死を思ひ止り、其の代り一生を留つて他し夫に見えまじ、これのみは許してたべ、我が決心は斯くこそあれと丈にも餘る綠の黑髮をわれから卸して一生を桑門塵遠きほとりに埋め、冥府に在す亡夫の菩提を弔ふ事とはなりぬ、されば白木の位牌の側には生前寫したる夫妻の肖像を立掛け、其の前には曾て島田とも丸髷とも將た束髮とも成つて青春の美しさを誇りし床しの黑髮、今は形のみなる切髷と成つて供へらるゝを見る、實に哀の極ぞかし、かくて佛燈影暗き下に端坐したる未亡人は、弔問の客に對し次の如く語り玉へり。

この二月佐世保で別れました時、――思へばアレが長の別れで御在ました、――良人は常にもない嚴かな調子で私に向ひまして「俺は再び生きては歸らんぞ、お前は今から其の決心をして置かなければいけない、イザといふ時取亂して笑れるやうな事をして呉れるな」とキッパリ申されまして、私はその時「御安心遊ばせ、私は何んな場合にも日本軍人の妻であるといふことを忘れはいたしませんから」と答へたので御在ます、今度の事は艦長さんや副長さん始め士官方は大概戰死なさいました、殊に良人は機關士の任務を帶びて居るのですから、衝突などの場合には責任の上からも眞先かけて死ぬのが當り前で御在ます、……憖じ生殘てイヤナ名でも受けますよりは……もう私は悲しみは致しません、良人に留つた言葉に對しても面目ないので御在ますもの…其の聲は低けれども底には重き力あり、其の顏は曇り勝なれど眸子には固き決心の色あり、而も是迄に思ひ定め玉ひしまでには、幾千の煩悶を重ねたりけんよ、あゝ若き未亡人の御心根、思へばいとゞ哀れ悲しも。

▲一代弔意を表す

軍艦吉野初瀬が不幸にも沈沒の奇禍に罹りしと聞くより、我が國民は擧りて之を悼み哀しみ筆に口に弔意を表せしが中に、いとも奇しき談こそありけれ、聞くが儘を記さんに奈良市奈良新聞に筆を取る安藤松濤子に姉妹の愛孃あり、姉を吉野(十才)といひ、妹を初瀬(八才)と呼び、其の面影の似通へるは菖蒲、杜若子の譬も愚かや、姉を胡蝶に比すれば妹は花のにほやかに生立ちて、年と共に同胞の健康强壯になりまされば、兩親の慈愛は彌が上に重りて、白金も黄金も此の掌中の双玉に較べては何かあらんと思はれたり、抑も此の長女を擧げたるは恰も吉野艦を我海軍にて新造せし時なりしかば、其の行末の榮を希ふて吉野と命名したるに、過ぐる三十年五月に至り次女を擧げたり、時しも英國にて初瀬艦を新造中なりしかば、直ちに艦名を取つて初瀬とこそは名付たれ、察するに兩孃が生ひ行く先の目出度さは我が帝國軍艦の豊阪登る旭日の勢にも肖かれかしとての業なりけめ、然るに其の名親なる吉野初瀬の兩艦は不思議にも日を同うして沈沒の厄に罹りしより、父なる松濤子の感懷は一入にて、兩個の娘の行末をも思ひ遣りて、坐ろに悲嘆の涙の迫り來たるに其と推したる姉の吉野子は悄然として父に向ひ、姉妹の軍艦が亡くなりましたから、何とか御悔を申して上げたいと言ひ出でたるに、父も成程と思ひ、能うぞ其處に氣が付かれました、では父が下書を書いて上げませうとて墨すり流し、弔文の草稿を認め與へしに、吉野子は眞字もて初瀬子は假字もてそを麗しく淸書なし之を東郷司令長官に宛て送りしが、之と同時に兩人とも一代中弔意を表せんため、總ての衣類の左腕に黑色の喪章を附くることにしたる由、あなあはれ、小さき娘達の心の中。



次號記事豫告

七月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢	
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢	
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢	
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢	
内（定刊數……十二冊 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）		
郵稅	一冊	二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年六月十五日發行　第四卷第八號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博文館發行

日露戰爭實記 定期增刊

第參卷

日露戰爭寫眞畫報

六月八日發行

大判（縱八寸五分 横六寸）美本

口繪卅八頁

石版色刷二枚 光澤版四頁 寫眞版及石版三十二頁

本文記事豐富 插入數十

寫眞版

第一軍旅團長（淺田 本越 渡邊 松永 四少將）

第二軍司令官（奥大將 大島第三師團長 小川）

第二軍旅團長（松村 山口 西島 中村 兒玉 安東 六少將）

愛國貴婦人（北白川宮妃殿下）

第一海戰圖（旅順と浦潮斯德及ペトロボーロスク艦の擊沈）

第一軍（參謀長藤井少將及第二第十二師）

第[illegible]師團長 閑院宮殿下 下關 本派本願寺裏方

第二軍（參謀長落合少將及第一第三第四師團參謀長）

韓國（京城全景）

清國文武大官

滿洲名[illegible]

川島大佐 中川 宮地 矢代 丹羽 栃內 奥宮 六中佐 井手 大山 二少佐 ダルニー

旅順要害（市街 瀨川 宮及定州戰）

韓國三開港場閉塞隊將校

廿四聯隊と死傷將校

奇禍に罹りし帝國軍艦 韓國に於ける

祝捷會と招魂祭其他重要なる寫眞三面

正價（毎月八日發行）一冊金二拾錢、六冊一圓十錢、十二冊二圓十五錢、郵税一冊二錢五厘ツヽ

畫報

- 第二軍掩護陸戰隊上陸（着色石版）…… 松岡壽
- 第三回閉塞隊之猛戰 …… 中澤弘光
- 敵の猾策 …… 木村光太郎
- 決死隊敵壘に斬込む …… 山中古洞
- 最近活劇 …… 木村光太郎
- 敵將中猶此人あり …… 武內桂舟
- 蛤蟆塘の激戰 …… 渡邊審也
- 普蘭店停車場破壞 …… 桐谷洗鱗
- 鴨綠江の壯觀 …… 渡邊金秋

記事梗概

- 鴨綠江の渡河戰
- 九連城陷落
- 鳳凰城占領
- 第二軍遼東上陸
- 普蘭店占領
- 旅順口第三回封鎖
- 大窰口掃海

戰爭實記共通前金（一ヶ月）四十七錢（三ヶ月）一圓三十五錢（六ヶ月）二圓六十五錢（一年）五圓二十錢 郵税（一ヶ月）六錢九厘宛

（後付の一）

主筆 竹貫登代多君

中學課程

本講義録は三十七年度新學期より專ら中學々生の參考兼た師範學生らしめ傍ら自修者には生の好伴侶となり唯一の指南車たるべし平易なる言文一致體を以て。代數學は二年、三年、四年、補習の四欄に、幾何學は三年、四年、五年、補習の四欄に、算術と三角は之を合して一年、二年、五年、補習の四欄に分ちあれば各學年の何れ

數學 算術及三角

全十二册

赤堀又次郎先生校訂

心學叢書

（博文館發兌）

近日 第三編 發行

- 御代の恩澤……脇坂義堂
- 銀のなる木の傳授……脇坂義堂
- 和合長久の傳授……脇坂義堂
- 都鄙問答……石田梅巖

第壹編

- 賣卜先生安樂傳授……脇坂義堂
- 賣卜先生糠俵……盧白齋
- 齊家論……石田梅巖
- 里俗教談錢渦新話……伊藤單朴
- 民の繁榮……脇坂義堂

第貳編

- 松翁道話……布施矩道
- 雨やどり……盧白齋
- 孝行になる傳授……脇坂義堂
- 福相になる傳授……脇坂義堂
- 目の前……盧白齋
- 勸善小語……山東指月

全六册

大判和裝
正價一冊四拾錢
三冊壹圓拾五錢
全部二圓廿錢
郵税一冊八錢

獨逸パウルセン氏原著 蟹江文學博士藤井文學士深作文學士合譯（博文館發兌）

倫理學大系

全壹冊洋裝上製
總クロース金字入
正價一圓八十錢
小包料金十五錢

序論 倫理學とは何ぞや
第一編 倫理學史
第一章●希臘人の人生觀及倫理學……
第六章●利己主義及び利他主義……
第七章●德及び幸福……
第八章●道德と宗教との關係……

（後付の二）

講義録

代數學 全十二冊

幾何學 全十二冊

毎月十五日發行　一ヶ年卒業

學生 詳解 賞品

學生にも適用さるべく。各號に揭げたる問題は次號に於ては之が詳解を與へ。以て讀者の便に供し。懸賞問題の答案優等者には賞品を與へ。質問應答欄は名の如く、疑團の氷解所たるべく、猶卷末には研究資料の一欄を附し、知名數學家の腦中より出でたる最新なる論文を揭げて敎材を統合し、又篤志家の意見をも紹介して、毫も遺憾なからんことを期す。

定價　各種共一冊金拾錢宛●三ヶ月分金二十九錢宛●六ヶ月分金五十七錢●一ヶ年分金一圓十錢宛▲外に郵税一冊一錢宛

發兌元　博文館

第二編　倫理原理

第三編　德論及本務論

少年日露戰史

少年世界主筆　巖谷小波山人編

和洋諸大家密畫入

紙數一冊百頁●定價一冊十錢●六冊五十七錢●十二冊一圓十錢●郵税一冊四錢宛

毎月一回十五日發行

六月十五日　第壹編發行

開戰の卷

日露戰爭は千古未曾有の大戰なり、苟も我同胞たる者萬世之を記臆せずして可ならんや、本書は即ち、未來の帝國民たる少年諸君の爲めに此大戰の本末を最も着實に最も正確に最も平易なる歴史体に記述し加ふるに諸君が先輩の義勇奉公の美談逸話を以てす、是れ尋常際物的戰爭記に比して已に月鼈の差ある所以戰勝國家庭の讀本として、學校の賞品として、將た敎科參考書として何物か之に如かんや、噫千古未曾有の大戰は亦千古未曾有の良書を産めり、滿天下の少年諸君！帝國々民たるに耻ぢざらんと欲せば、奮つて本書を繙き給へ！

（博文館發兌）

征露唱歌書

日露開戰軍歌
大和田建樹君作歌上眞行君作曲
正價三錢五厘―郵稅二冊迄二錢

征露新軍歌
久保天隨君作歌上眞行君作曲
正價四錢―郵稅二冊迄二錢

露西亞征伐の歌
佐々木信綱君作歌上眞行君作曲
正價三錢五厘―郵稅二冊迄二錢

露國征伐軍歌
大町桂月君作歌上眞行君作曲
正價四錢―郵稅二冊迄二錢

征露軍歌 旅順の海戰
巖谷小波君作歌山田源一郎君作曲
正價二錢五厘・郵稅八枚迄二錢

征露軍歌 決死隊
巖谷小波君作歌東儀鐵笛君作曲
正價二錢五厘―郵稅八枚迄二錢

山本九馬亭著

竹本攝津大掾　竹本彌太夫贊助

淨瑠璃通解

近日 第六編發行

- 卅三間堂棟由來（平太郎住家の段）
- 攝津合邦辻（合邦住家の段）
- 加賀見山舊錦繪（草履打の段）
- 加賀見山舊錦繪（長局の段）
- 加賀見山舊錦繪（又助住家の段）
- 彥山權現誓助劒（お菊返り討の段）
- 彥山權現誓助劒 瓢簞棚の段
- 彥山權現誓助劒（毛谷村の段）
- 四ッ谷怪談（伊右衛門住家の段）
- 岸姫轡鎖（朝夷奈上使の殿）

第一編 道中双六―伊賀越乘掛合羽―染模樣妹背門松―新版歌祭文
第二編 菅原傳授手習鑑―近頃河原の達引―傾城戀飛脚
第三編 桂川連理柵―源平布引の瀧―蝶花形名歌島臺―本朝二十四孝―關取千兩幟
第四編 近江源氏先陣館―義經腰越狀―鎌倉三代記―日本賢女鑑―八陣守護城―姫小松子の日の遊
第五編 奥州安達ヶ原―金毘羅御利生記―花の上野譽の石碑―蕭樹累物語―增補比翼塚―伽羅千代萩

全部十二冊和裝
正價一冊卅五錢
全部三圓八十錢
郵稅一冊六錢宛
（博文館發兌）

文學士久

東洋通史

近日 第

中古‖漢族繁榮時代
唐の末世
德宗の失政
二王の變
憲宗の治
五代十國の世
梁唐の交爭
後唐莊宗の末運
契丹の勃興

第一卷‖三皇五帝の世―三代の興亡―春秋の世……
第二卷‖國の世―先秦漢の人文―秦の帝業楚漢の角逐……
第三卷‖西漢の世―兩漢の

全部十二冊和裝
正價一冊五十錢
全部五圓
郵稅一冊八錢宛

井上哲次郎君作歌 山田源一郎君作曲
●征露の歌
正價二錢五厘―郵税八枚迄二錢

鹽井雨江君作歌 白井規矩郎君作曲
●女子軍歌
正價十錢―郵税二錢

佐々木、中村、大和田、東宮、四家作歌
●日露戰爭 國民唱歌 第一編
正價八錢―郵税二錢

野口寧齋君著
●征露宣戰歌
正價五錢―郵税二冊迄二錢

佐藤六石君作
●征露大唱歌
正價五錢―郵税二冊迄二錢

國府犀東君作
●伐露樂府 大陸劍歌
正價五錢―郵税二冊迄二錢

發兌元 博文館

保天隨君著
七卷發行

宦官の禍
朱李の兩黨
宣宗の英武
南詔桂州の叛寇
海內の爭亂
朱李二氏の交戰
唐室の滅亡

遼の南侵
劉郭二氏の興亡
周の世宗
（漢唐間の人文）學術 宗教 技藝 社會事態の一斑

過渡……第四卷＝後漢の世―三國及西晉
第五卷＝五胡十五國の世―南北朝
第六卷＝隋唐の盛時―唐の中世及末世―漢唐間の人文

博文館發兌

紅葉全集

一冊壹圓八十錢
全部十圓八十錢
小包料金十五錢

故尾崎紅葉山人著
近日卷の四發行

●隣の女
●不言不語
●鷹料理
●冷熱
●浮木丸
●青葡萄
●八重襷

全部六卷

卷の一●二人比丘尼色懺悔●風雅娘●新花桃扇●巴波川●南無阿彌陀佛●拈華微笑●戀の病●此ぬし●夏痩●關東五郎●新色懺悔●文ながし●猿枕●わかれ蚊帳●七十二文命の安賣●二人むく助●二人女房
卷の二●伽羅枕●二人むき●袖きぬた●夏小袖●戀の闇
卷の三●三人妻●俠黑兒●男ごゝろ●袖時雨●心の闇●紫
卷の五●多情多恨●安知歇貌林●千箱の玉章●寒牡丹
卷の六●煙霞療養●金色夜叉

菊判總クロース表紙 活刷 桂舟清伯筆）毎卷紙數八百五十頁內外紙數五百頁四十三編（博文館發兌）

（後付の五）

東京帝國大學理科大學教授數學講座担任理學博士
高木貞治先生著

新式算術講義

▲全壹冊洋裝上製紙數四百餘頁
▲正價金壹圓、郵税金拾二錢

高木博士曾て我館の百科全書中に「新撰算術」を著はされしに大に江湖の歡迎を得て版を重ぬること數次に及べり、斯く世の好評を得たるものは畢竟博士の學識深遠にして說述周到なるに由ること論を待たずといへども又此種の書が我邦讀書界に缺乏して學生の之を得るもの多きより此需用の現象を示すならん且つ現時我邦に發行せる二三の初等數學雜誌類の內容を見るに數學を自習する人が如何に邦文及英文にて書かれたる適當の書の缺乏せるに苦しめるかを察せらるゝなり、博士は此等學習の人の爲めに現代數學の眞相一班を窺ふことを得せしめん爲め多年此事に留意せられ遂に今回本書を著述し先

受驗問答叢書

文科大學生藤井[illegible]君著

新撰獨逸文典問答

（第二十九編）

全壹冊洋裝袖珍
正價金二十錢
郵税金四錢

獨逸文典は極めて繁雜にして、之を學ぶもの丶大に困しむ所のものなり、凡そ外國語の文典たるの原理によりて學ぶの勝れるに如かずといへども初學者にして之を解するは極めて難し、此書は獨逸文典を中學程度に基きて問題を假設し、之に簡明なる解答を附せり。されば受驗者は勿論大　之を參考して其要點を會得し得べく初めて獨逸文典を學ばんとするものにても此書によれば、容易に獨逸文典の一般を窺ふを得べし……………（博文館發兌）

續刊

第二十六編●新撰工業要項問答　加野友次郎君著
第二十七編●新撰家政問答　勝間恒彥君著
第二十八編●新撰生理衛生問答　石原喜久太郎君著

日用百

博文館編輯局編纂

官立私立中學校

改訂就學案內

（第二十七編）

全壹冊洋裝中版
正價金二十五錢
郵税金六錢

笈を負ふて都門に遊學せんとする學生諸君に對し多岐なる學界の手引たらんとする案內書の類少なからざるも學界の趨勢學校

（後付の六）

つ算術の最も卑近なる者より始め漸次其奧義に達せしむるの方針に依り諸學者の講習に資給せり、故に本書は材料を專ら算術の範圍に採り其中最も重大なる問題を撰み問題の解釋は最も少く普通に知られたる方法に依り其說明は通俗平易を主とせり且つ本書の特點は數學專門以外の讀者を得んと務めたるにあり由來數學は兎角世人に喜はれさるが如し是れ數學なる者ゝ眞相か世に誤解されつゝあるに由れり本書は此誤解を正さん爲め極めて一般の健全なる理解力、成熟せる判斷力に訴ふ所頗る多し是れ本書を購讀する人の大に留意すべき所なりとす

理學士藤田外次君著

新撰數學講義

上卷正價卅八錢——郵稅六錢

發兌元 東京本町 博文館

科全書

の規則方針等は時に變化あるを以て往々にして舊時の規則狀況等を錄して誤謬を傳ふるものあり此書は最近學界の趨勢に見て遊學者出京前后の注意、學校の撰擇、入學成功の訣、卒業後處世上の方針、等を懇切に指示し又遍ねく官私の諸學校を歷訪し各校の狀況規則學課等より入學試驗問題に至る迄盡く最近のものを收錄したれば現下の遊學者に取りて無上の案內書たり……（博文館發兌）

前田默鳳道人著

吟香居士、學海居士、鴻齋居士、藍田老僊、鐵軒居士、各先生 批評

東亞新字

全壹冊洋裝大判
正價金三十錢
郵稅金六錢

歐洲の文物東漸以來東亞の文學益多事にして殊に二十世紀に至りては世人皆東亞文學の一大進運を企望して息まざる所なり默鳳道人は今世の一奇人にして其金石學に精通し書法に熟達せらるゝは世人の普く認むる所なり然れ共道人は只能書のみを以て足れりにする者にあらず其志たる從來東亞に行はるゝ所の數萬の漢字を悉く改省して其作法を簡易にし以て東洋文學の一大進運を企圖せらるゝにあり是を以て十數年間默默して專ら其改造に從事し今や其稿粗ぼ成る本館請ふて之を世に公にす我東亞の文學に志ある士人は勿論苟も公私の實務に從事せらるゝ諸君は此書に依て作字の方法を講究せらるれば東亞文學の一大進步を圖るに於て其益する所鮮少ならざるのみならず實務を敏捷ならしむる上に於て其裨益あるも大なるべし此を二十世紀の一大著書と謂ふも敢て過言にあらざるべし……（博文館發兌）

戰時の讀物

押川春浪君著 海國冒險奇談 **新造軍艦** 三版出來 正價金三拾錢 郵税六錢

押川春浪君著 海嶋冒險奇談 **海底軍艦** 七版出來 正價金三拾錢 郵税六錢

押川春浪君著 英雄小說 **武俠之日本** 四版出來 正價金四拾錢 郵税六錢

押川春浪君著 海嶋探險奇談 **塔中之怪** 五版出來 正價金廿五錢 郵税四錢

押川春浪君著 傳奇小說 **銀山王** 正價金三拾錢 郵税四錢

水田南陽君譯 傳奇小說 **魔法醫者** 二版出來 賣價金拾二錢 郵税四錢

櫻井鷗村君譯

世界冒險譚

金堀少年
遠征奇談
二勇少年
續遠征奇談
決志少年
漂流少年

殖民少年
航海少年
不撓少年
朽木之舟
俠勇少年
絕嶋奇談

以上全部拾二冊既成
毎編讀切◉各冊増刷

壹冊正價 **三拾錢** 郵税六錢

櫻井鷗村君譯

勇少年冒險譚 初航海

十版 正價金廿五錢 郵税四錢

諸名大家共著 近世 **世界十偉人** 二版出來 正價金五拾錢 郵税八錢

文學大家共著 **東西廿四傑** 五版出來 正價金卅五錢 郵税六錢

文學士煙山專太郎君著 英雄末路 **ナポレオン** 正價金三拾錢 郵税六錢

嚴谷小波外二君共譯 少年小說 **乞食王子** 二版出來 賣價金廿五錢 郵税六錢

櫻井鷗村君譯 少女小說 **少看護婦** 拾二版出來 正價金拾五錢 郵税四錢

鈴木光次郎君著 **明治豪傑譚** 正價金廿五錢 郵税四錢

發兌元 東京日本橋區本町 **博文館** 東京神田表神保町 **東京堂**

(後付の八)

女學世界定期增刊 婦人壯烈譚
（每月一回五日發行）
明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可　第四卷第八號　明治三十七年六月十五日發行

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉘
明治37年6月（第4巻第7号、第4巻第8号）

2007年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3144-0　C3321